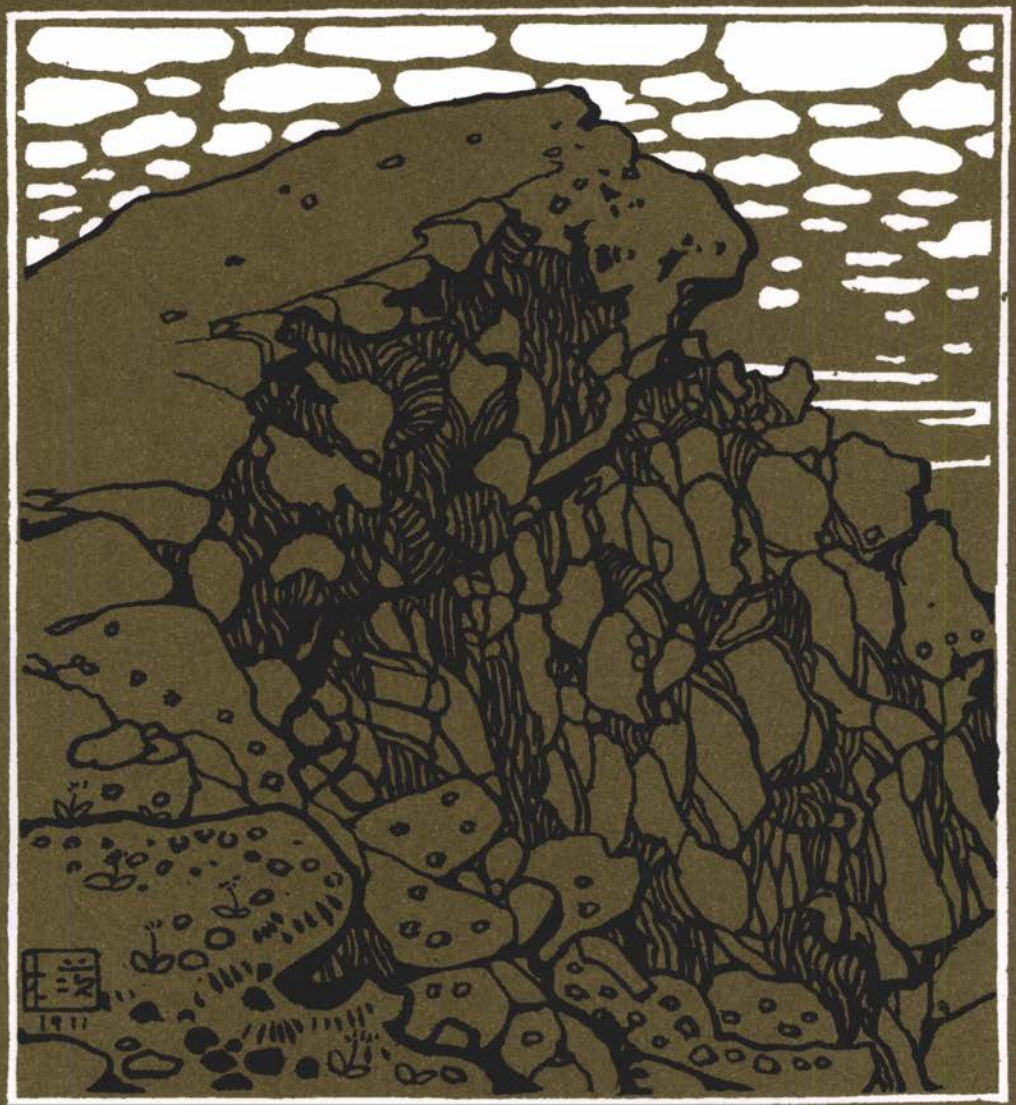
第六年

# 山岳

第三號



（南）　　（西）




白馬岳の展望（白馬岳山頂の小屋前より）　　高野鷹蔵氏撮影


山岳
第六年
第三號
I. I BARAKI
1911

# 目次

（禁轉載著作權所有）

表紙……茨木猪之吉氏意匠
タイトルページ……同上

## 挿畫

白馬岳の展望（白馬頂上の小屋前）　工學士　高野鷹藏氏撮影
仙丈岳のカアール　辻本滿丸氏撮影
春の穗高山　辻村伊助氏撮影
信州方面より見たる立山○Die Hafnergruppe vom Hochalmkees gesehen　辻村太郎氏筆
鋸岳絶頂（第二最高點より）　星忠芳氏撮影
烏帽子岳より鋸岳を望む　工學士　辻本滿丸氏撮影
冬枯の霞岳　辻村伊助氏撮影
德本峠雪の穗高山　同上
歐洲アルプス山サアカスの群彙
氷河截斷面○氷河の層理○氷河の擦痕ある岩石
故大下藤次郎氏

飛驒山系に於ける氷河地形分布略圖　辻村太郎氏作

## 本欄


日本アルプスと旣往の氷河　辻村太郎……一
白馬岳より祖母谷温泉へ　高野鷹藏……二
鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を經て駒ヶ岳に登る記　星　忠芳……三
祖谷山入　吉永虎馬……四
祖國山川森林の荒廢　南方熊楠……五
火山の地形　大橋良一……九
日本アルプスと萬年雪の關係　小島烏水……一六


## 雜錄

○野呂、田代分水嶺問題（高頭式）○山岳語彙編纂に就て（笠井藍水）○四國の山岳語彙（笠井藍水）○雨飾山、燒山、赤倉山に關する資料（たゞの）○木曾山脈の風越山に就ての疑問（永田盛三）○「錫杖ヶ岳に就て」を讀で（永田）○白馬ヶ岳の名（蝶鄕）○本年白馬岳の登山人數（T生）○滑稽なる山名の轉化（永田）○長野縣の高山植物保護（蝶鄕）○雲のアルプス（笠井藍水）○墨西哥火山の傳說（由水生）○アルプスの最高峯モンブラン高熟の爲めに低うせらる○昨年歐洲アルプス登山者死亡數（エヴニングメール）○登攀山岳最高點の競爭紛議（ニューヨークトリビューン）○全世界最高の停車場（ニューヨーク、タイムス）○山物語（山内淳一）○机上談山（洋怪生）○日本北アルプス一部臆測圖正誤（中村）○本號挿圖「白馬岳の展望」に就て（蝶鄕）

○旅日記より（辻村伊助）

## ◎山岳圖書批評

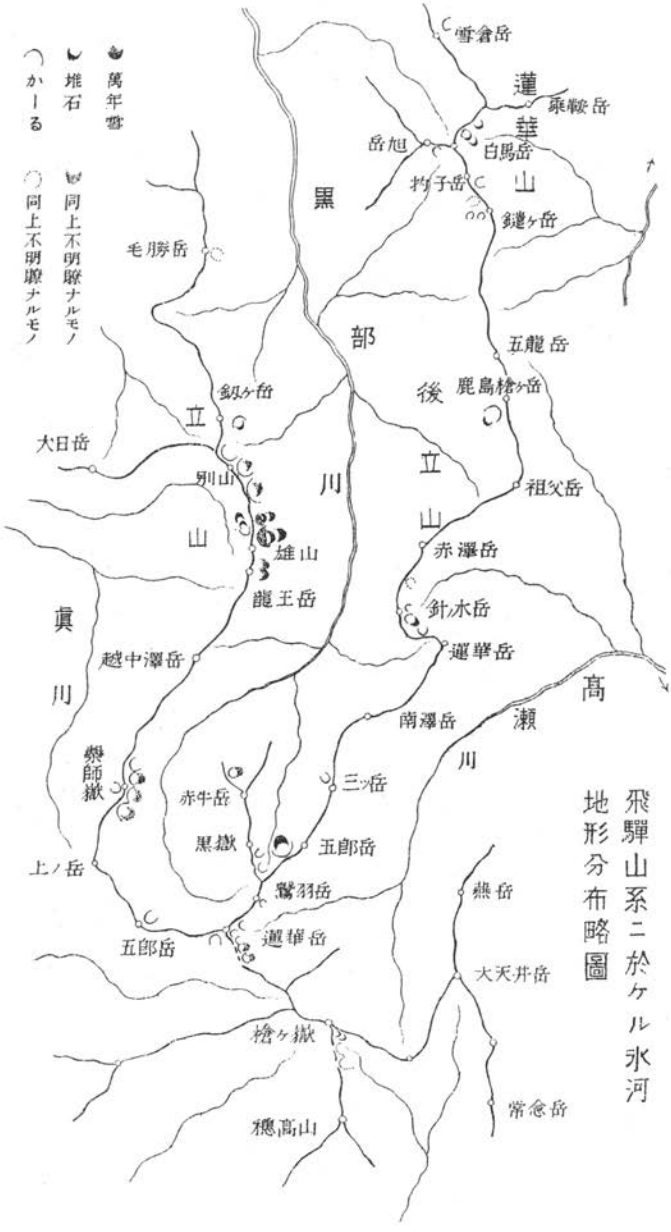
○早田博士の英文富士植物帶論を讀む（烏水生）○高山植物圖譜（笹魚生）○水彩寫生旅行（烏水生）

# 雜報

○淺間山噴火大慘事○燒岳噴煙記○淺間山郵便局○淺間會組織○淺間御岳の郵便○赤石登山は危險○土用中に降雪○愛山會員御嶽登山○武石嶺に雪降る○諸高山の晩雪と融雪○日本アルプス研究○諸高山の初雪

# 會報

○名譽會員ウオルタア、ウエストン氏來る○名譽會員ウオルタア、ウエストン氏講演會豫告○來年開會のオリムピア競技會よりの招待○日本山岳會山岳寫眞展覽會○高山深谷第三輯發行の計劃○會員諸君に御通知○會員登山報○第八回有志晩餐會記事○大阪有志晩餐會○信濃山岳研究會の記○名古屋の愛山會○新入會者氏名○退會及び改名○寄贈書目




飛騨山系ニ於ケル氷河地形分布略圖

# 日本アルプスと既往の氷河

辻村太郎

## （一）

大蓮華の嶽頂に佇立して、近くは旭嶽を繋ぐ雪の山稜を超へて、窈冥なる祖母谷の深谷注ぐ所、斜に荒蕩たる黒部の大峽谷十數里に亘る非人寰區を距て、惡魔の如くに睥睨せる劒ケ嶽に隣りて立山の、紺青の膚に「常夏に消ずて渉れる」白雪を纏ひて長揖したる崇高觀に對せし刹那は、身の此島國にあるを忘れ、飄乎としてアルプス山中―其は早くより我等が腦中を占領したる―を徨ふの思ひをなす、されば是等のアルプス的容貌は、夙に本邦を紹介せる外人の注意を惹きしこと少なからざりしと見えて、我國の地理書は冷々淡々として、一言を費すことも敢てせざりし間に、早くも日本に於ける氷雪の現象は、海外に報告せられたりしが如く、Berghaus, Physikalischer Atlas. 1892 中、氷河の分布圖をみるに、一つは本邦中部飛驒山系と思しき邊に、他は北端を北緯四十度に接して、氷河及雪野を示せる青色圈の描かれたるを見る。（但四十度附近の地には、岩木、鳥海等の二三山あるにすぎず、我等が知れる限り、左迄著しき雪野と稱すべき程のもの在るをきかず）之を他の圖版氷河のみを記入せるものを比較して、この青色圈は、正に雪野を意味せるを知るべし。

Supan, Grundzüge der Physischer Erdkunde 第四版（一、九〇八年出版）氷河の分布の章には、「小なる萬年雪野は北部朝鮮及日本の立山（三十六度三十五分、二千九百メートル）の東面に在りと報ぜらる」と立派に記載せられたり。同書の舊版には、卷末の圖版中、日本の北部をば全體淡青色を以て塗沫し、その曾て氷河せられし地域なるを示せる由なれど、第四版には訂正（？）せられたり。（山崎理學士地質學雜誌第百九、百十號、氷河果して本邦に存在せざりしか、）氷河分布圖上の淡青色は、果して我日本アルプスに一抹を留めずして止むべきか。

◎日本アルプスと既往の氷河　辻村

◎日本アルプスと既往の氷河　辻村

明治卅五年、山崎理學士の蓮華連峰に於ける氷河の擦痕、堆石（モレーン）、カール、及條痕ある石礫等の發見、次いで針木峠近邊、黒嶽附近、藥師ケ嶽及立山に於けるカール、堆石の發見は、我が地理學界の一快事として、愛山家諸氏のすでに遍く知悉せらるゝ所なるべし。（地質學雜誌百九號百十號、地學論叢第三輯氷河の話　地學雜誌百九十三號又は日本山岳志高山の特色（地學雜誌にはスケッチ寫眞あり））この一大創見ありて以來、十年に垂んとして、山嶽研究は日に月に其歩を進めたりしが、吾人が氷河の遺跡に就て教へられし所は、寧ろ多からざりき。而してこの新發見が、學界に快き承認を得たりしや否やさへ、憂なき能はず。―一昨年地理學の大家ペンク博士を俟つて、解決をえたる如くに見ゆと云へども―余が今微力を測らず、此の一文を草する所以は他なし、一には山崎理學士の創見に基きて、多少の實例を供給せば足り、二つには登山家諸氏に、益々注意を氷河の遺跡―其は我が日本アルプスの誇なり―に向け給はむことを希望するなり。

（二）

渾圓球上、各地方に散在して、恒雪線上に聳立し、所謂亞爾伯型（アルバインタイプ）の氷河（グレシアー）を具有したる山嶽の間に、四時を別たず降り積める雪は、萬年雪（Firn. (vorjähriger Schnee 即最年の雪といふやうなる意味の由なり)又は névé の名を以て呼ばる）野として盆狀の凹所を占め、雪野の下端は漸次に舌狀の氷河と化し、「餌物を覘ふ蛇の如く」に、谷底を求め、徐々として降下す。谷氷河之なり。飛騨山系を占領したりし氷河に此種の大規模なるは絶無なりしなるべく、山崎理學士の記事より察するに、白馬嶽に於てその存在を想像し得るが如く、思ふにこの連峰と立山とを措いては、他に求め得ざるべきか。カールの中に蟠り、或は同樣の凹窪を充して、大なる發達をなさず、氷舌（アイスツンゲ）と見とむべき部分の判然たらざる小氷河を崖氷河（ヘンゲグレッチャー）と云ふ。そのカール中を占むること多きより、Corry glacier の名あるも宜なりと云ふべし。氷雪の量夥多ならざる山地、例へば北米シェラネヴァダの如き峰間に、氷河の片影を見せたるものは主として此の類なりと云ふ。本邦に存在したりし氷

河は殆ど皆カールの中に巣くへるヘンゲクレッチァーなりしと推察せらる。立山主峰及劍ヶ嶽頂下の雪野の如き、一歩を進めば、現時肅然として横はれる白雪は、漣狀の氷塊となりて、自がまにまに徐に移動するに至るやも、量りがたし。

氷河存在の證として數ふべき所の地形は、今更此處に事々しく述ぶるまでも無けれど、順序として列擧すれば、氷河は周圍に壁立せる巖面より、驟雨の如くに墜落する岩塊を運搬して、其末端に端堆石(End-od stirnmorän)として堆積せしむ。端堆石は、氷雪消滅したる後までも嚴存して、山腹の凹地に、所謂涎掛狀をなして横り、氷河の退却するに當り、毎時一段の堆石を殘すべし。飛驒山系に於ける端堆石は、或は一段或は二段をなして横はり、氣溫の上昇による氷河の縮少が再度に渉りて行はれたるを知る。氷河を挾める兩岸より落下せる岩塊の兩側に殘留せられたるものは、側堆石(Seitemorän, uferморän)として、眞の氷河には、常に工學者の手に築かれしが如き規則正しき稜狀をなして、兩側に走れり。山崎理學士が白馬大うと澤(この邊にては狹き谷を「ウト」と呼ぶ、「ウト」は「ウツロ」の意なりと地名辭書駿州有渡郡の條に見えたり)の三十町に亘る大雪溪の左岸に、側堆石と思はるゝものを見られたる他は、本邦甚だ其例に乏しきに似たるは、氷河の性質上已むをえざるならむか。

蘇格蘭や瑞西に在りし山氷河が、融解するに際しては、彈丸の如き大小の移石(ブーレダー)を、谿間、崖下、至る所に轉々せしめ、欺くべからざる紀念物を置くと雖も、氷河現象の著しからざりし我國に於ては、ルツェルン氷河公園(グレシアルパーク)の奇觀を見ること能はず。

氷河が其偉大なる壓力を以て軋る際に、兩岸及下底の岩石に、鑢の如くに作用し、之を磨きて圓滑にし、時に其人工になりしかを疑はしめ、その擦痕は平行して氷河進行の方向を指示す。所謂 Roche's moutonee(ロッシュ・ムートニー)の、「游泳せる海豚」の背を露せるが如き地形は、之等、氷河の浸蝕作用に依るものなりと云ふ。山崎理學士が、白馬嶽に於て氷河の擦痕を發見せられしは、遍く人の知る所なり。この擦痕に

◎日本アルプスと既往の氷河　辻村

つきては、其後多少の論なきにあらざりしが如く、小島氏によれば（「學生」「高山の雪」）富士に於ける熔岩上に雪崩によりて全く同様なるものを生せりと云ふ。

されど、その地方が氷河を懸くべき、又は雪崩の屢々起るべき地形なりや否やを念頭に置かば、此の二つは、自ら別箇の問題なるべし。

氷雪の作用を蒙りし各地山嶽に散在せるカールの内部は、そこに敷かれたる小氷河のために、平滑に磨かれたるを見ると云ふ。我が日本アルプス山中に、カール甚だ多く堆石を殿存せるもの、亦尠からず。而も未だカールの内部の、十分に踏査せられたるを聞かず、誰か這箇自然のアムフヒセアター中の、秘を捜るものぞ。

（三）

地理的分布の狀況より、氷河の浸蝕と何等かの關係あらむと見做され、而も其成立の説明に至りては、多少の疑義なき能はざりしものをカールとなす。（カールはアルプス東邊の語なる由にて、英米の書物は大概 cirque と見ゆ、其環狀の岩壁を、めぐらせるより、名づけられしならむ）

カールに就きては、會員諸氏夙に熟知せらるゝ所なるべしと雖も、少しくこゝに引用せしめよ。例を蘇格蘭山地（スコッチハイランド）に於けるカールー corry or corrie の名を以て稱せらるゝに藉りて、ゲーキー氏「蘇國風景論」（A. Geikie, The Scenery of Scotland）の記事を覽るに、前略「高峻なる山峰の頂部は、削られてコーリーなる急崖的凹所（レセス）を造れり。その開鑿は、主として集中（コンヴァージェント）せる小流の浸蝕と之を助くるに、斯る高度に於ては强力に働く霜の、作用を以てせらるべく、雪及氷も亦與かりて力あるべし。ハイランドに於ける、如何なる景象も、この地方の特性を發揮せること、コーリーに優るものなく、又何所にも地質構造の、より以上に明示せられたるなし。通例コーリーの上端は、偃月狀の裸出せる巖石よりなり、風化によりて生ぜる破片は、下底に向つて山積せり。總て異れる岩石は、上端の斷崖の微細なる點よ

り、碎片の性質に至るまで、其獨特の型（タイプ）を具へたり。中略 總ての蘇格蘭に於けるコーリーは、曾て氷河を存したるものなり。故に其底部は一般に好く、氷によりて磨（アイスクオーン）削せられ、且堆石の撒布せられたるを見る。堆石に堰塞せられし小湖が、其底を滿てたることも稀ならず。我等は、曾ては全國土を蔽ひたりし氷河の最終（ラスト）の遺物（レリック）をば、斯かる地方に於て、最もよく觀察するを得るなり」。

（四）

リヒテル氏は、カールを以て、最初の凹地の氷河によれる變形なりと論定せられたりしと云ふ。（地學雜誌百九十三號高山の特色參照）大氣の營力烈甚なる高峰にありては、巖面の曝露せる限、風化（ウエザリング）は繼續し、破碎せられたる岩片が、その性質に相應せる傾斜を造つて、其表面を被ふに至り、一時の休止をみる。穗高嶽の巖峰と、常念大天井の圓頂とを比較するに、略この二つの時期を對照せしめたるが如し。

上の如くなるが故に、氷河の上部に峙てる岩壁の崩壞は、急速なるべく、漸次に氷雪を繞る環狀壁となる。如何となれば、岩片は常に氷雪によりて運び去られ、從つて岩面はデブリーの衣を以て蔽はれず。同時に直下の氷雪は、其強大なる壓力を以て、底に伴へる岩塊をば金剛砂の如くに使用し、山骨を鉋りて平坦なるカール底（ボーデン）を形る。如斯、カールは直接間接に氷河を俟て、始めて構成せられしものと云ふべし。中夜日輪を覩るシュピッツベルゲンの、浮氷礁の如くに漂ひ、大なる氷河は曠野の如くに海に迫れる邊、尖々たる丘陵の其頂下に美しきカールを列ねたるは、たとへば多くの藍瓶の如く、各、中に小なる氷河を包み、末端には新月狀の堆石を張れり。即我等は斯くの如き滿目白雪の地に、我日本アルプスの在りし姿に遭遇す。各地に於ける多くのカールは、現今氷河（ヘンゲグレッチアー）を存し、或は不年雪（フイルンフエルト）野を包藏し、或物は雪を絕てり。本邦に於て小氷河を有するは、先づ絕無、立山の東面の如き、絕歲白皚々たる小雪野を抱き、他は晩秋僅に殘存すべき白雪を存し、或は盛夏に至りて一點の雪を留めず。

◎日本アルプスと既往の氷河　辻村

以下日本アルプスに於ける氷河地形を捉へ、これを先輩諸氏に質し、聊か自ら觀し所のものを併せて、列擧するに先だち、これ等の地形の依て生ぜし所の、氷雪の現狀を略述せむとす。かつて夏の夕暮、高瀬河畔に立ち、暮れゆく蛋白石色の空を負ひて、連亘せる、南は祖父嶽より、北は蓮華連峯にいたる、飛騨山脈の壯觀に駭然たりしことありき。この時、その巍峨たる山峰を縫へる灰白色の殘雪の、僅々數里の間に於て表示せる、著しき相違は、特に我等の眼を惹かざることなかりき。即祖父嶽鹿島槍附近にては、單に山頂の凹所若くは谿間に白條を入れたる雪は、五龍以北白馬嶽の邊に至りて、滿山悉く白皚々として、凄然たる樣なり。南北十數里に亘る飛騨山系を通觀するに穗高、槍ヶ嶽の連峰は緯度に於て最低なれば、二千九百米突の蓮華連峰と、その雪量已に同日の論にあらず。—但蓮華連峰は寧ろ溪間に壯絶なる殘雪を存する割合に、山頂は裸出せり。適當なる凹所少きによるならむか。立山及藥師嶽は越中領にありて最初に濕風と衝突するを以てか、殘雪甚多く、その「常夏に見れどあかぬ」白雪は、白衣の靈姿によりて、名をえたりし、蓮華山と並んで双絶とす。立山の背後後立山は、恰も喜馬拉爾（ヒマラヤ）に於ける奥喜馬拉爾（トランスヒマラヤ）の如くなれば、殘餘水蒸氣を受くるのみにて、槍ヶ嶽の北方にいたるまで大概相伯仲せる中位の雪量を有す—但此の中やゝ群を異にせる黑嶽は、可成多量の殘雪を有せり。而して是等の殘雪の量は嚮に志村氏の說かれし如く、（「やま」日本アルプスの殘雪）飛騨山系を通じて、東西兩面に劃然たる差違をみる。（例へば立山、薬師山を信州面より見るると、越中側より見るとは、殆ど同一山と思はれぬ程の相違あり。）志村氏の言の如く、この現象は冬季に於ける西北風の卓越するを以て、積雪其東面に多きに、其主因を置くは、疑を容れずと雖も、氏が「朝の日は其の東面を照して其の力弱く、午後の烈光はその西面を射て、雪の溶解すること大なり」と述べられしに就ては、多少の異議なき能はず。一日中に於ける氣温は、午後二時頃に其極大に達するが故に、氣温に於てこそ、概して午前に勝るべけれ、日射の强さには差異あるべき道理なし—雲量の差違をば暫く度外視すとも—主として東西に蟠屈せるアルプスの如き連嶺にありては、日向日蔭によ

りて、恒雪線の高さを異にし、從つて氷河の發達に經庭ありと聞けど、我が日本アルプスの如く、多くは南北に近く山稜を向けたる諸峰に於て、日射の影響を考ふることは、殆ど不必要に屬せむか。

## （五）

日本アルプスの北端親不知の斷崖を南に距る數里ならずして、越後越中の國境に雪倉嶽あり。蓮華溫泉附近に立ちてのぞめば、西北の方、其の翠然たる針葉樹の美林を纏へる、溫乎たる山容を認むべし。山崎理學士は明治卅五年の夏に、初てこの嶽にカールの横はれるを目擊せられ、さてこそ此の附近の高峰に於ける氷河の存在を想像せられたりと云ふ。斯くの如なれば雪倉嶽は歷史的に興味ある山嶽なりと云ふべきか。

次に越中、越後、信州の境をなせる、蓮華連峰に及ばむ。其の豐富なる高山性植物と、氷河の遺趾とを以て、白馬嶽の名嘖々たること久し。山崎理學士は乘鞍嶽（測量部の所謂小蓮華（2769m.）と同一山ならむ）より、白馬嶽（即大蓮華　2933m.）頂に至る間、大日向嶽の峰に近きモレーン狀の地形、及南方の山腹北股の澤（松川の）に臨みて、端堆石の涎掛又は首輪の如き堤防狀をなして二段―やゝ續乎たるものを合せて三段―ばかり存在せるを認められ、氷河は氣溫の上昇の爲に退却して、每時この三段の堆石を殘留せりと斷定せられたり。次に白馬嶽東面葱平（ねぎかたひら）、海拔二千九百メートルの邊に於ける、グレーワッケ質粘板岩の絕壁がルントヘッカーをなして、爬痕を附せられたるをば、かつてその邊に懸りし氷河の擦痕とせられたり。（志村烏嶺氏著「やま」の卷頭寫眞版を參照せられたし）葱平に於ては、其右岸の邊に嘗る大岩も、亦甚しきコロージョンを蒙れるが如く、巨鼈の如き形狀をなせる巖面は、谷の下方に向ふ條痕の、一面に截りつけられたるを見たり。山崎氏は猶降りて大雪溪の左岸に、側堆石と思はるゝもの、二百メートル程も續けるをみられ、翌日南股の澤に於て、海拔千七百メート

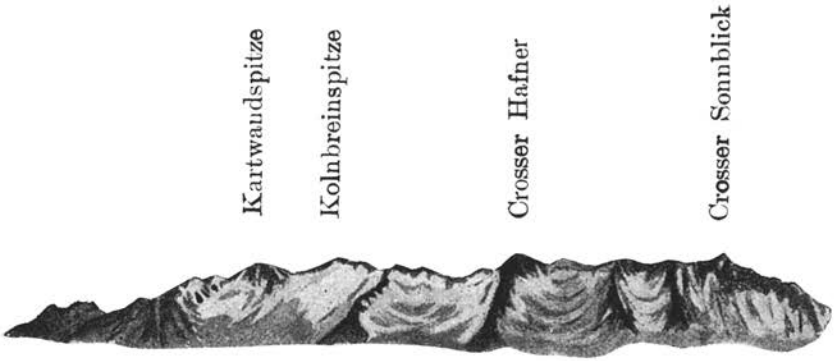
ル程の地に於て、蛇紋岩塊のストリエートせられたるものを發見せられ、氷河の下底より出でし物とせられたり。我等の素人眼によればこの連峰に於けるカールは、立山や藥師ヶ嶽に見るが如く饒多なりと云ふを得ず。山崎理學士に從へば、杓子ヶ嶽に一箇、東澤の上に一箇ありと云ふ。杓子ヶ嶽のカールとは、思ふに鑓が嶽との中間、杓子澤の上谷をなせる凹窪ならむか。この凹谷は周圍に玢岩の絶壁を繞らし—杓子ヶ岳の名は其の內面の此地方に日常使用せらる帆立貝に似たるが故に起れりと聞けり—崖下大殘雪の澁に堆き、顯しきタラスは此の山嶽の、著しき壞敗を示して、痛楚堪え難き感をあたふ。

吉澤氏に依れば、清水嶽（越人の旭嶽）の南面、祖母谷に面してカール狀地形ありと云ふ。（「山岳」第五年第一號越中方面大蓮華登攀錄）其他に鑓ヶ嶽の直下、硫黃澤の源流附近に擂鉢形のカールあるが如く、杓子嶽北面の山腹もやゝあやしむべき地形をなせり。鑓ヶ嶽の（2903m.）西南腹、雪を欺く莫雲玢岩の山體を刻して、雪を含めるカール狀の、小坑あるを見る。白馬嶽の西方に、立山山脈の末端をなして、新川の野に君臨せる瀧倉嶽（實は毛勝岳）の東面直下に、やゝカールらしき地形をみるなり。

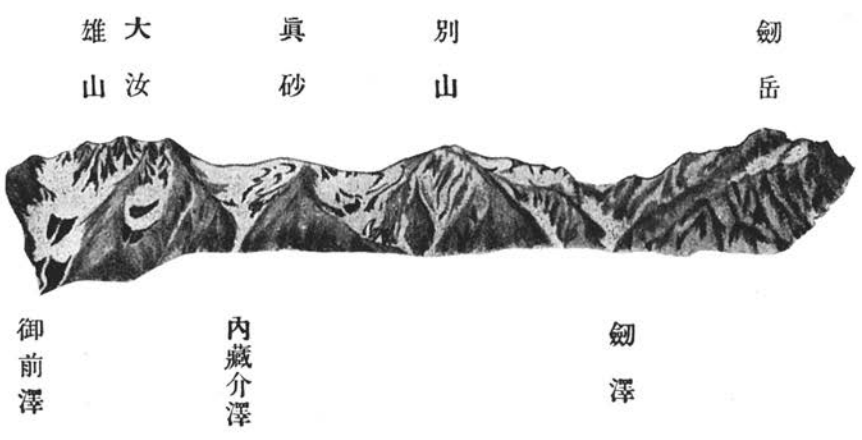
蓮華連峰以南、不歸、五龍嶽をへて、鹿島槍ヶ嶽に至る間は、北城方面の觀察と、石崎氏の劍ヶ嶽頂のパノラマ寫眞に見るも、特に記すべきものなきに似たり。

後立山連峰中の最高峰鹿島槍ヶ岳（2890m.）は、信州大町附近より之を望むに、尖々たる双耳を聳やかし、鹿島の溪間に急斜するのみにて、何等の氷河的地形なきを怪ましめたりしが、本年「山岳」第一號三枝氏撮影の寫眞（コロタイプ岩小屋澤嶽より北望）は、測らずも鹿島槍の西南、棒小屋澤に臨み、大なる安樂椅子狀のカールあることを示せり。その內面は既に風化に屈服して平滑なる表面を示し、口元には、小なる新月狀の堆石あり、流水によりて中斷せられたるをみる。

次に北陸第一の名山立山に於ける氷河の遺跡に及ぶ。山崎理學士は、白馬嶽頂より立山の東面黑部




(Die Hafnergruppe vom Hochalmkees gesehen.)




(信州方面より見たる立山連峰)

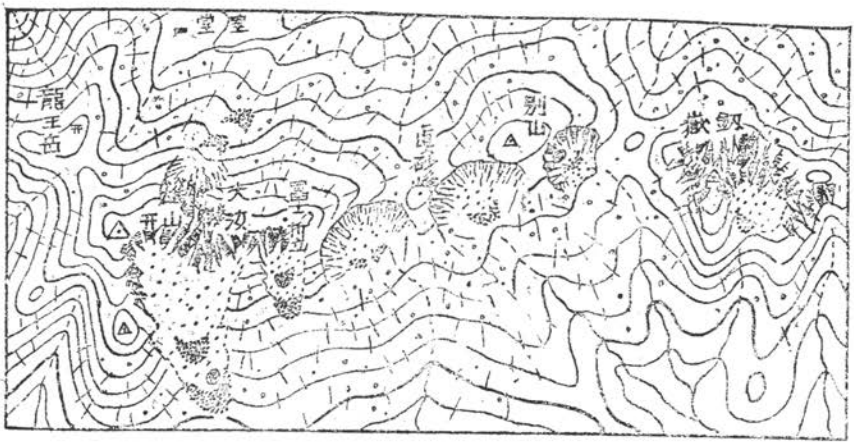


鹿島槍岳のカールと堆石

◎日本アルプスと既往の氷河

辻村

谷に面して、數多のカールの駢列せるを看られ、後來この附近を跋渉する人々の注意を促されたり。（地質學雜誌百十一號）同氏は針木越より立山に登臨せられ、雄山の西面、北に向ひて開口せるカールあり。中に二段の堆石あるを發見せられ、氷河存在の的確なる證據としてスケツチ及寫眞をそへて、當時の地學雜誌（第百九十三號高山の特色）に載せられたり。（此の堆石は昨年八月室堂より看取せる所によれば、淨土川に面せる一凹谷中に横はる、一見小丘の如き隆起にして、表面には綠草灌木繁茂し、之を截斷する四條の小流あり、折からの降雨にて、白絲を亂せる如くに奔馳するをみたり。）此の一文を讀みし以來、其嶙峋は往昔より三名山の一と稱えられて、人口に膾炙したる此の連峰こそは、氷河の跡を尋ぬるに、屈竟無二の大道場なれと思ひしに、果然山嶽會大會に於ける三枝氏の撮影に係る、信州界より見たる立山全景—夫れは從來人界と隔絶したりし黒部方面の立山の秘を發きし、殆ど最初の印畫たる—に於て、明々瞭々に約六個の立派なるカールに加ふるに、若干の罕に見るべき端正なる堆石を發見しえたる歡びは、たとふるに物なかりき。之を最南端より數へむに、其の峨々たる峰頭は、北方劍ヶ嶽の崔嵬に比して、遜色をみざる立山主峰、（約三〇〇〇米突）雄山大汝の直下、御前澤の源にあたり、巖巖の間を穿ちて、壯絶なる萬年雪野を藏せり。雄山祠頭に立ちて、この雪野を下瞰すれば、片麻花崗岩の、



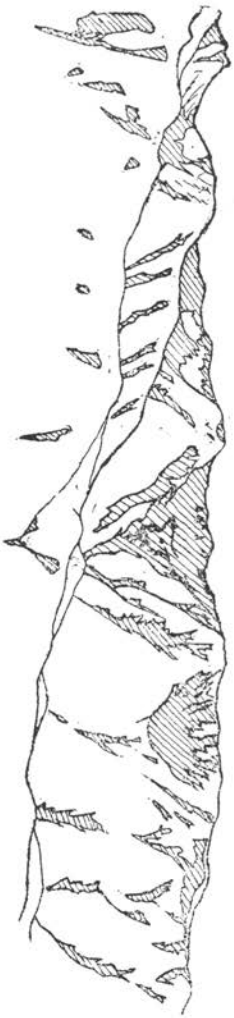

立山連峰地形畧圖

◎ 湖沼　雪　堆石

白刄の如くなるに圍まれたる、萬年雪の表面に、其特有なる小溝は美麗なる平行曲線を劃いて渦き、今にもあれ全雪田は流動せむかと疑はる（石崎氏の寫眞高山深谷第一輯及その説明「山岳」第二年第三號參照）之を無心にして觀ずるに、宛如たる雪の海にして、一種形容しがたき荒寥の感を禁ぜざらしむ。この雪野の末端にあたり、雪上に、此の邊りの巖間に跳梁せる鈴羊の蹄にも似たる、異樣の堆積物あり。更に低く、稍大なる同樣のものを看るべし。是即氷河の遺したる二段の端堆石に他ならず。而して辻本氏等に從へば、信州獵師の所謂猿股なるものなり。（思ふに半環狀の堆石が、流水を堰ぎて、そこに小湖を生じ、水は溢流して堆石の外側に、小溝を穿ちたる結果、この猿股狀を呈するものならむ、後にみらるゝ如く、黑嶽東北の大堆石、針木嶽「まやくぼ」の堆石の如き、皆大同小異の形狀を有せり。）昨年八月十二日、立山主峰の最高點大汝の巖頭にたちて、東面脚下を俯瞰したる時、余をして雀躍せしめしものあり。其は前記雪田の盡くる所、恐く下端の、堆石に抱かれて横はりたる、綠の小湖にして雪解の水の淙々と瀉げるまで、手にとる如くにみえき。これ日本に於て氷河に歸因せる湖沼の、恐く最初のものなるべきか。而して此の水湛へて幾千載、此の日初めて我にその面影をゆるしたる―たとひ熊狩の

の獵師等は、無意味に之をながめしこと有るべしと雖も—立山山神の惠をば、衷心より感謝せざる能はざりき。富士の折立の東面半腹に、前者に髣髴として、やゝ細小なるカールあり。同じく美しき雪野をいだき、又同樣に二段の完備せる堆石を具へ、上なるは半雪中に埋れ、下方なるは雪田の下端にかゝり、共に美麗なる新月狀をなして、極めて好く原狀をたもてるを示せり。上記の地形は、世界各地の高山、到所に看る所のものを拉し來りて　之を我が北越の靈山に移したるが如くにて、この連峰中に、著しき特異の觀を與へたり。大汝より、立山連峰の劃空線（スカイライン）は、俄然低下し、二大弧を描いて別山に連る。この二弧の間に眞砂峰（まさご）（二十萬分一農商務地形圖に依る、蓋しこの邊の岩石風化に抗すること弱く滿山石礫なるが如くなるに適せる名稱なりと考へたれば）を挾みて二つの酒盃狀をなせる濶きカールあり、共に廣大なる殘雪を存せしめたり。南方のものは內藏介谷の源をなすと雖も、極めて細き後成的の小谷によりて、連絡するにすぎず、北方のものは之に反して、深き峽谷を以て、劍澤に絡がれたり。此の二つのカールの口元に、各堆石の殘物らしきもの存れども、甚しく破壞せられしが如くにて、原形を知るによしなし。別山の東北面劍ヶ嶽に向ひて、又淺き椀狀をなせるカールあり、劍澤の源をなせり。岩塊可成に露出せるが如くにて、前二者とやゝ容を異にす。（劍ヶ嶽の南望寫眞「山岳」第五年第一號コロタイプ版）別山頂に周圍三町の藍池ありと云ふ、或はこのカールの一部を滿せるものならむか。

劍ヶ嶽（2998m）の險怪なる、一見カールの存在を容（ゆる）さゞるが如けれど熟ら視るに石崎氏等の所謂長次郎谷—劍ヶ嶽唯一の登路—の上端なる廣き雪田（立山主峰よりは銀盤を懸けたる如く壯絕にみゆ）は、之又一箇のカールなるが如く、所謂熊の岩の、やゝ下方雪中に露れたる堆積物は、其形狀より推すに堆石なるに似たり。（三枝氏新越よりの劍嶽「高山深谷」第二輯及「山岳」前號）長次郎谷の雪溪は、石崎氏の寫眞によるに、雪を挾んで急聳せる崖壁は削るが如くにて、如何にもルント、ヘッカーを現せるが如くに見ゆ。立山主峰の南方、龍王嶽の山塊は、その片麻花崗岩、磷々たる凹凸の狀は、著しく氷雪の働力を思はしめ、雄山澤（室堂より黑部




薬師帽子嶽頂のより望めるカール

平への通路）に面して、堆石狀の地形少なからざるをみる、漸々疑を存す

後立山連峰は、その二三秀點こそは、二千八百米突以上に黒部川を挾むで、立山と肩々相摩せる許りに屹立すれ、全體として、その平均相を失せる爲か、氷河の跡は遍からず、鹿島槍以南に於て擧ぐべきものに針木嶽（2821m）頂の厩窪カールあり。嚮に山崎理學士の針木越に際して發見せられし所にして、氏はこの名稱ありしが爲に「まや」―其形狀うまやの如きより云ふ由―を以てカール狀地形の普通名詞とせられしやう、臆測せらる。この「まやくぼ」は、背後に針木嶽の尖峰を負ひて東面せる、美しき椀狀の凹地にて、殘雪其中を滿すが故に、初夏遠く鹿島槍の邊より、其奇狀を認めうべし。「カール」の下端山腹に横れる稍細長き堆石を見るは、疑もなく往古此處に小氷河を掛けしなるべし。同嶽「まやくぼ」の北方スバリ嶽の東邊に、又小なるカール狀凹地あり。山崎理學士の文中に所謂、針木峠北口カールとは、嶺上、漏斗の如き凹地、之れならむか―峠は頂に於て略南北に通ぜり。猶この連峰中になほ一箇を求




めば、赤澤、岩小屋澤兩嶽の間に、或は之を得むか。

蓮華嶽以南、烏帽子ヶ嶽に至る間は、その峰、乗越共に著しく撓み下れるをみる。これより山勢頓に崛起して黒嶽鷲羽に至る迄、雄偉を極め、氷河は此處に再び適度の發達を遂げたるが如し。烏帽子の南にあたる一峰—三ツ嶽(2845m)の頂下東澤に面して火坑趾狀の缺孔あり。山崎理學士の「東澤を下りたる所にある」カール即之ならむか。五郎嶽(2924m)(柳田氏にしたがへば强羅、郷路などゝ同じく、岩石の磊砢たるを意味するものなりと云ふ。)の南隣に、東澤に西面して、尨大なる釜狀のカール(Kar)あり。之れ山崎理學士が標式的なるものとして示されたる「黒嶽東北の」カールなり。岩壁四周に聳えて、底に青草と殘雪とあり。このカールに發して、東澤の流に達せる絶大なる堆石あり。其狀巨大なる舌の如く、針葉樹林(?)の蓊鬱として、其表面を蔽へるを見る。堆石を兩斷して小溪あり、縦走して東澤に注げり。前年余は友と立山絶巓より、雲烟の間に、之の壯觀を眺め、過去の氷河が斯くまでも、明瞭かつ偉大なる紀念物を留めたるに駭目するの他なかりき。黒嶽につらなりて、黒部大峽谷中に巨體を突き出せる赤牛嶽(2864m)あり。北面口元の垂澤の凄然たる裂口は、立山頂上の大パノラマ中に、一種の壯觀を與へたり。この澤を擁せる西側の山稜、谷にのぞみて小カールあり、杯狀の殘雪の喰ひ込めるを認む。この雪下に現れたるは或は堆石ならむか。

早くより、柘榴石の産出を以て聞えし、越中黒嶽(2978m)は飛騨山系の中央に秀で、東面に夥しき殘雪あり。最近後立山より觀望せられし、

◎日本アルプスと既往の氷河　辻村

辻村氏の談によるに、頂下東澤の上方に二個のカールあり、絶巓に近きものは圓形の雪を滿せる美しきカールにて、其南方に並びて、殘雪班々たる濶き凹地をなせるものありと云ふ。この連峰はその山容、西隣藥師ヶ嶽に酷似して、一見紛はるゝ程なり。以て如何に等しき地理的境遇が、相似たる地形を造るかを察するに足る。

黒部上流を隔てゝ黒嶽連峰と、東西呼應せる藥師（2926m）の大嶽あり。その東面頂下に駢列せる秀美なるカールと、之を滿せる白雪とは、この高峯に卓絶せる美觀を與へたり。辻本氏によるに、藥師の東面に凡そ四のカールあり、西面にみる半環狀の急谷は、亦一のカールならんかと云ふ。（「山岳」第五年第一號越中藥師ヶ嶽及上ノ嶽）之等四つのカールは、略同大にして、標式的なる形狀を備へて、隣接するが故に、此山塊に於て崖壁聳立の所謂 Kammregion 殆ど水平なる Karregion 及急傾斜を以て、主谷に向へる Gehängeregion の三部分は、アルプスに觀るが如く、劃然と區別するを得べし。これらのカールを、孜細に觀るに、各不完全ながら、堆石を殘存せしめたるが如く、其巨椀の中に皚々たる萬年雪を藏して、荒怪なる嶽頂を飾れり。

藥師嶽の南東方、坦々たる上の嶽、赤城山に續いて、立山山脈の涯に、黒部の五郎嶽（2840m）あり。小島氏に從へば、其頂下東北鷲羽嶽に向つて開口せる爆裂火口狀の凹所は、立派なる一つのカールなりと云ふ。凹所の內部には殘雪充滿して、美觀を極む。

黒嶽の南に當り、これと覇を爭つて睥睨せる、鷲羽嶽（2944m）あり。其の三稜頂の、額にあたる邊に東面して、桶形の小なるカールあり。その殘雪は、圓形をなして遠方より識別するを得べし。立山山脈と主脈との結合點、蓮華嶽の穩なる山巓は、カールの群集にして、其の東面するもの五六箇あり。又双六谷に向き南面して一箇あり。稍々淺き杯狀の凹地をなし、殘雪班々たり。最南のものをみるに、其の末端は急峻なる飛瀑狀の小溪口をなせる狀、雪倉嶽のものに似たり。カール底に緩々蜒れる堆積物

は、恐く堆石なるべし。往年燕嶽の邊に立ち、高瀬の深谷を距てゝ槍ヶ嶽背後の連嶺を眺め、初めて接せる日本アルプスの偉觀にうたれたりしが、この赭峰の間を埋めし曲玉狀の大殘雪—今にて思へば、是等のカールの—ありて、深烈なる印象を與へたりしを記憶せり。

双六嶽附近より笠ヶ嶽の秀峰を連ねたる、所謂笠ヶ嶽尾根の南面、左股に臨める山腹の上部に、美麗なる小凹窪の雪を藏せるあり、是亦カールなりと云ふ。

槍ヶ嶽の尖頂より、穗高山に至る間、石英班岩の巖峰平均三千米突の大塊をなし、思ふに其莊嚴の狀は、日本アルプス中第一に據らむ。この高度廣袤とを以てして、假令地域南偏すとも、何等の氷雪作用なかりしと信ずること能はず。大天井、若くは常念嶽附近より、此の連峰を望めば、絶頂劒ヶ峰、大喰(ばみ)嶽及以南の二峰の間に、瓏げながら二三カール狀地形を認むることを得べし。(但要するにこの連峯の地形寫眞に依る所多きが故に、未だ確言する能はず。研究の餘地、頗る大なり。) 辻村伊助氏に聞く所によれば、槍ヶ嶽の登路、殺生小屋の附近、谷中に累積せる岩碎の小嶽、或は堆石ならむかと、云ふ。高野氏の撮影に係る寫眞(山岳會大會紀念繪端書)に看るに、槍の直下谷を横斷して、殘雪上に横るに小丘狀の堆積二三列あり、如何にも堆石らしく思はる(此の堆積物につき「太陽」(二年程前の)に寺崎留吉氏の説明ありしと記憶せり) 因に云ふ、穗高連峰の殘雪は、蓮華、立山に如かざるは、無論なれど、割合には多く、七月下旬、二の俣の小屋より望みたる大喰嶽のあたりは、滿山白雪宛然たる冬景色にて、奥穗高の直下中房獵師の所謂御幣窪(ごへいくぼ)は、當時一面の大殘雪にて、雪消ゆるにしたがつて、現すと云ふ白幣の形を、みる能はざりき。

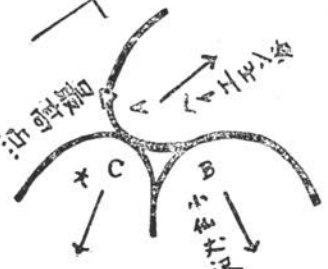
飛驒山系の連山は、神河内より飛驒に通ずる中尾峠の邊にて、一段落をなし、南に遠かりて、乘鞍御嶽の二大熄火山あり。乘鞍の如きは、盛夏非常の殘雪をみると雖も、我等は此二嶽の氷雪地形に就て知る所なし。

南方甲信駿境上の赤石山系は、現時の測量の結果、高邁なる點に於て飛驒山系を凌駕すれども、降

◎日本アルプスと既往の氷河　辻村

雪甚しからざる大平洋岸にあるが故に、氷雪に依れる地形も寥々たるを免れず。赤石山系の北境に屹立せる仙丈ケ嶽（3033m）は、其山容薬師に類似し、頂下に二つの鉢形をなせるカールありと云ふ（この所謂「御鉢」は舊く山崎紫紅氏が「文庫」に載せられし駒ケ嶽登山記に、その記事みゆ、婉如たる火口趾なりと云ふ）。

仙丈ケ嶽のカールに關しては、辻本氏の敍を乞ひしに、其絶頂には、三つのカールあり、絶頂のリヅヂは、實にカールとカールとの交りたる線にて、圖中Bは、不完全なれど、亦一のカールなる由（コロタイプはCのカールを示す、下部に堆石堤防狀をなせるに、注意せらるべし。）。




## （六）

昨年白峰山脈を縦走せられし河田杰氏の談によれば、間の嶽の東方、中腹にカール狀の凹所、上下二段に連りて存在するをみると云ふ。所謂階段狀カール（Stufenkar）の類なるべきか、如斯赤石山系の高嶽も、亦大古の氷雪作用につき、多少の分け前を獲ることなかりき。

日本アルプス諸峰に於ける既往の氷雪作用になれる地形に關し、我等が知れる所のものは、不完全ながら、網羅したりと考ふ。さらば此等の地形を通觀して、再び少しく記述する所あらむ。

最初に引用せる如く、カールの形狀は、その岩質に從ひて著しき特性を發揮すと云ふ。日本アルプスに在て、カールを構成せる岩石は、多趣多様にして、北は玢岩（ポーフィライト）連峰の玢岩、立山の峻拔を片麻質花崗岩（サインシック グラニット）より針木、薬師の石英粗面岩（パライト）あり、飛騨山系の大部を占むる種々なる花崗岩類及び穂高連峰の石英斑岩（クォーツポーフィリー）等の火成岩類よ



工學士　辻本滿丸氏撮影

「ルーアカ」の岳丈仙

り、南は赤石山系諸山を形成せる古生代の水成岩に至るまで、具有せざるなし。是等の岩石間に、穿鑿せられたるカールの形狀が、その岩質の硬軟、節理等に從ひ、種々の形態を表すべきは、論を俟たずと雖も、此の興味ある問題に向つては、不幸にして模糊たる輪廓を與へうるに過ぎず。某嶽頂の凹所に集積せる雪が、小氷河をなして、風化の産物（プロダクト）たる碎片を運び、同時に下底に鉋かけて、カールを形成せる時、その岩質堅硬（風化に對して）ならば、氷雪を圍繞して、聳ゆる斷崖井戸側の如く、甚だ豪壯の觀を呈せり。この好側として、立山主峰下の小雪野をつゝめるカールを推すを得。之に反して岩質柔軟なる地方に於ては、カール壁は主としてなだらかに彎曲せる碎片（デブリー）の斜面よりなり、優美の感を與ふ。立山の別山、主峰間二個のカールをば、其の適例として擧ぐるをうべし。實際立山連峯に於て、主峯と眞砂峰附近に於ける岩質の差は、著しきが如く―たとひ地質圖に於ては同一色を塗抹せられたりと雖も―室堂附近に立ち、仰いで此の連峰の、南は白色燦然として巍峨たる峰頭を列れ、北は岱赭色の砂礫珊々たる山稜の、秀麗なる輪廓を描いて走れるを望めば、誰か奇なる照應に駭かざらむ。東面カールに於ても、又同樣にして、主峰下のカールの澁面と、北方のカールの婉容とは、一種對照の美を感ぜしめざればあらず。

多數のカールは、此の兩極端の中間に位する種々の形式を現し、或は岩壁の所々に、タラスの圓錐面をかけ、或はデブリーの諸所に、岩骨突起するが如きありて、其壞敗の程度に從ひて、千態萬狀なり。例へば藥師東面のカール中、北寄りの二個の如き殆ど全く峨々たる巖壁を繞らし、別山カール、蓮華杓子嶽のカールの如きより、他の藥師カール、五郎東北の大カール、針木「まやくぼ」の如き順次風化作用（ヴェザリング）を蒙れること甚しく、蓮華嶽、鹿島槍ヶ嶽等に至りては、全く崩壞し終りて、殆山骨の露出せるを見ず。又氷雪の削剝歩を進むるに從つて、最初山腹に寄居せるにすぎざりしカール（立山主峰下鷲羽嶽「まやくぼ」の如く）は、次第に擴大せられて山頂を壞ち、劃空線（スカイライン）は凹曲線（コンケーヴ）をえがき、山稜は後方に撓曲せるは藥師ヶ嶽―其山頂波狀をなして幾多の大弧を張れるは、この山嶽の一偉觀―蓮華嶽、立山別山主峯間に見る所なり。（勿論最初の水蝕谷の上端が、すでに多少山稜を缺きし塲合あらむと雖も、其後氷雪によりて、更に著からしめしは疑を容れず）相隣れるカールの削磨益す進むに及びては、中間は刄の如くに鋭き

壁を形くるに至る。立山藥師ヶ嶽を、圖に示せるティロル州、ホーヘンタウエルンの山嶽と比較せば、餘程近似の容貌を、備へしを認め得べし。

既にカールの成立が、氷雪の大なる堆積、從つて生成せる小氷河に、その生因を置くとせば、概して現在に於ける積雪の量に從ひ、若くは豐富若くは貧少なるべし。但し積雪全山を被覆する時は、反つて其發達良好ならず、墺國の中央アルプスや石灰(カルク)プレトーがカールに乏しきは、蓋し此故なるべしと云ふ。此に於て飛騨山系の諸高嶽に於けるカールの存在が、主として其東側—現今に於ける卓越風(殊に冬季(ふゆの))の風下(レーゼイテ)（其れは偃松と殘雪とが物語る）なることは、頗る注目に値す。立山連峰に於て、六個は東側に、一箇は西側に在り。藥師ヶ嶽に於ては、四箇と一箇の割合なるを見れば、思半ばに過ぎん。其他の諸例に就てみるも、主稜(メーンリッヂ)の西側にありとするも、鹿島槍に見るが如く、多少風蔭の位置を占むるに似たり。是等の中、大膽に風上に向つて開口せるものは、雄山北面、三つ嶽の二三者に過ぎざるが如し。カールの生成には最初に萬年雪を貯ふべき凹地(ボーデンアインゼンクング)を要すべく、通常既に存在せる氷蝕谷の上部、漏斗狀(トリヒテルフォルム)をなせるが、その用をなすものなりと云ふ。立山及藥師東面のカールが、主として東北を指せるは、聊かこの間の消息を窺はしむるものに非ずや（黑部川が北流する以上、その支谷も亦北寄りの方向を取るは必然のことなり、この結果はやがて中村氏の一言せられしごとく（前々號雄中アルプス）飛騨山系の諸山の東北面が、莊嚴を極むる所以なるべし。）カールは一見急崖の間に横はるが如けれど、アルプスに在つては、山側の傾斜三十一度を超ゆれば、その生成を免さざるものにて、瑞西諸高峰に其の少數なるも、此の理に依ると聞く。一群の高峰間に於ける多くのカール底は、是を地圖に照應するに、大概同じき等高線上にありて云ふ。未だ陸地測量部地形圖を得ざる我が日本アルプスに於て、果して又然るや否やを、確言するを得ずと雖も、概觀するに、大略二千七八百米突の邊に、其下端を置くが如し。立山、藥師の連峰は、其平均二千九百米突の高許を以て、飛騨山系の西北側に聳立し、朔風雪を啄んで至る時、其矢面に立ちたれば、上述の諸條件を具有して、氷河發達に最も適當なる(フエポラブル)場所を與へしものなるが如

く、同緯度にあれども、比較的高低參差たるに據てゝ加へて、立山の大屏風を立てたる後立山に於ける氷河遺跡は、前者に數籌を輸し、黒嶽附近こそは其數多きカールと、大なる堆石を以て、北鎭蓬華の大嶽と並んで、主脈の爲に氣を吐けるものと云ふべけれ、同一列に屬する槍、穗高の連山は、其高峻なる點に於て、卓出すれど、南方甲斐の諸山と共に、到底同日に論ずべからず。假りに是等の高嶽を拉し去りて、之を日本海の濱に置かば、我等はアルプスや、ロッキーを斯く羨むを要せざりしならむ。惜むべきかな。

氷雪及氷雪に働かれたる地形が、山嶽美を支配する如何は、多くの登山家が、初夏を撰び、飛騨山系に就くを見れば自ら瞭然たるものあらむ。實にラスキンは歎へて曰く「不注意なる畫工が、恬然として、白堊（チョーク）の塊の如くに描き去りし、高根の雪は、人の軀幹に纏はれたる衣裳の如くにて、其が荒怪なる巖巒と、或は續き、或は背く所の、妙なる曲折（カーヴェーチュアー）をば忘るべからず」と。尖山危峰の間に、所謂サークドチヴエの如き雪原を掬みて雄潭なる大波濤を天外に漂らせたるこそ、氷雪山嶽の根本的形態なれ——遠望したるアルバインピーク特殊の形狀は多くの場合穴狀の深刻なるグレシアゝサークに盡く——（插繪寫眞版參照）之の景觀は少くとも、飛騨山系の某々山嶽にあつては、見遁すべからざるキーノートたるを感せしむ。

見られよ。槍ケ嶽の其荒膚に、淡雪にも似たるタラスを飾れる、幾多の危峰を躍らせたる間を埋めし、殘雪のドレーバリーの如くに、卷舒せるを。又思ふ藥師ケ嶽より其の目白押しに駢べるカールと、其處に彙斂せる大殘雪とを取り去らば、其神嚴觀は半を減じ、立山は峰巒たる其の半腹に、海を越へて聞え渡れる小雪野の粧飾ありて、始めに類を絶せるアルプス的景觀をつくりしにあらずやと。堆石の如きは、或は特殊の興味に屬すべきを以て、暫く措くとすとも、なほ其等が遠き時代に於ける氷河の存在を明示し、日本アルプスの隨所に確固不動の極印を押し、其奇怪なる形狀は、夙に信州巓夫の注意

◎日本アルプスと既往の氷河　辻村

をひける立山頂下の猿殿や、五郎嶽南に蜒々として、巨龍の河に飲むが如き大堆石の如き、皆是等の山嶽間に、曾て働かれたる別種の營力ありしを示して、毎にその威嚴數段を加へしことを非定する能はず。アルプス、ロッキーの山中に多しときく、愛すべき氷河（グレーシアル・レーク）湖の、氷河作用の劇甚ならざりし我日本アルプスに、欵如せるは、千載の恨事ならずとせず。こゝに於て立山雄山祠下の、堆石に抱かれし小湖と、恐く別山カール中の、藍池とは、唯一の雛型として、其價碧玉（エメラルド）にまされり。余立山を下りて後、頻りに此の小湖を想ひ、考慮せること屢なりしが、只だ其碧の眼のみ髣髴として、遂に一稱呼を得ざりしを如何せむ。

蘇國（スコットランド）山地の、いみじくも湖畔の詩人をして、

"A little lovely vale,
A lovely vale, yet uplifted high,
Among the mountains;
Urn-like it was in shape, deep as a urn,
With rockes encompassed, sace that to the south
Was one small opening, where a heathe-clad ridge,
supplied a boundary, less abrupt and close."

と謳はしめて溪壑は、其の消滅せし氷河の跡の歷々たる、之を滿すに氷雪を以てするに、多大なる想像力を要せず。人若し冬季是等の地を訪はむか、過去は再び彼が面前に立つべしと云へり。

立山の絶顚に立ちて、脚下に皚々たる雪の海を俯瞰したる時、大古に似たる靜寂は、我等をして座ろに想を數萬年以前の廣寒宮に走せしめたりき。偉大なる氣候の振動につれて、氷は解けて雪を留め、雪は消えて高嶺の花の影を宿し、昔氷雪裡に突兀たりし雄山頂上、朱塗の小祠前、巖頭に立ちて白

髯を天風に靡かせたる老神官を見る。彼を思ひ此を思ひて、我等は烏水氏が「日本山水論」中の一節「高山頂に佇みて寒風に高嘯し、眼下燦星の如き花を踏む、何千萬年の前、氷河時代の氣候の如く、北半球の生物斯の如し、周圍の小圏は我を拉して、永劫に入らしむ、什麼の仙術」を繰返さゞる能はざりき。

# 白馬岳より祖母谷溫泉へ

高野鷹藏

谷は溯るべくして、下るべからず、一度未知の深谷に入らば、迷宮に入ると等しく、時に非常の困苦を味はざる可らず、登山家の思ふべき事大なり。

白馬岳と越中方面とを、連絡すべき、徑路は、祖母谷溫泉及び小川溫泉とを結ぶ、線にして何れも常人の通路に非れば、道とし云ふべきものあるべくもなく、又登山者とても、殆ど絶無の路なれば、踏みし跡さへ明瞭なりと云ふべからず、只僅に通じ得べしと云ふに止るのみ、白馬岳より小川溫泉に出ずべき記事は、既に本誌第二卷第一號に川島祿郎氏の記されたる事あり、又祖母谷溫泉より白馬岳（越中の所謂大蓮華山）に至る文字も亦本誌、第五年一號に吉澤庄作氏載せたり、川島氏は、細野（信州）の人夫丸山直次郎を得て下り、吉澤氏は、音澤村（越中國下新川郡）の杉山仁次郎を導者として白馬に登る、蓋し白馬岳の人夫（細野の人夫）は、小川溫泉に至りしものあれど、未だ祖母谷川を下り祖母谷溫泉に至りしものなし、彼等白馬の人夫は、全く祖母谷川の徑路に就ては、聞知する事さへなし、寧ろ祖母谷に關しては吾人の智識の方遙に優れるなり。余は、斯くの如き未知の人夫を具し

◎白馬岳より祖母谷温泉へ　高野

て、祖母谷を下り、天候と地形の爲め、即ち地理を知らざりし爲め、非常なる困憊を極め、心身の苦痛、追想するだに今尚ほ慄然たり。

八月廿五日　白馬頂上小屋より塩頭の小屋に至る。

八月廿六日　暴風雨にて塩頭滯在。

八月廿七日　塩頭より祖母谷川硫黄澤の出合に至る。

八月廿八日　絶崖を横通りて祖母谷温泉に出づ。

八月廿五日　（明治四十四年）朝晴、午前十時頃より雲霧至る、昨夜河野齢藏氏の一行と白馬山頂の小屋に同宿す、幸にして晴れ、四方展望極めて可なり、今日の豫定は塩頭（當字）の小屋に至るべく里程二里に滿ず、格別の上下あるに非ず、前路を急ぐ必要もなく頂上に登りなどして、緩々として寫眞を撮りなどして費す、此朝河野氏は、天狗、八方を經て大黒、五龍（當字）、鹿島槍ヶ岳に登るべき、途に着かる。

晝餉などして、一時半小屋を發す、直に朝日岳（白馬岳の一部として見るべきものにして、又塩頭尾根―塩頭平と白馬岳とを連絡せる、尾根なれば、余は此名を用ふ―と白馬とを結ぶ節點なりと云ふべし、地は越中國にして、白馬岳に登る人、大雪渓よりネブカビラを徑て離山の側を過ぎ信越國境の尾根に出る時前面に聳る小岳あり、此れ即ち朝日岳なり、「高山深谷」第二輯に其寫眞あり）と白馬岳との極めて短き鞍部に達す、時に殘雪あり、川島氏記文中（「山岳」二の一、一三一頁）「白馬の小屋に對して一丘山あり離山と云ふ、此の山の左側に沿ひ朱殿坊（當字なり）を、谷を隔てゝ左に見て、云々」あり、思ふに此の離山は、余の朝日岳なるべく、離山（又離岩）は、信州界に在りて、ネブカダヒラの上將に國界の尾根に至らんとする所にある大岩巖にして、（本誌一年二號の口繪に志村氏の寫眞あり）、朝日岳とは全く別つべきものなりとす。

此鞍部に右する谷は柳俣の上にして、黒薙川と合して黒部川に入る（小川の上なりと云ふは誤れる由）左するものは硫黄澤の上にして、祖母谷川に合す。中央大山系は全般に通じて、山脈の東面は常に絶壁矗々として聳ゆれど、西面の多くは、傾斜緩にして、爲に山姿、信州方面（東面）に雄壯にして、越中、飛騨方面（西面）に然らず、此れ地質學的に然るべくして、學者の注視すべき所なるべし。

朝日岳の側面、岩石磊々として集積せる所を横切り、一岩角を越ゆれば、朝日岳の裏面に出で（一時四十分）塩頭平見ゆ、朝日岳の側面を揚みて、二時二十五分、朝日岳と次の一隆起との尾根に出づ、殘雪を越、一隆起に達す（二時半）右側面のハヒマツ中に切りあけの跡あり、又一小隆起を越ゆ、右側面は急傾の殘雪あり、左方緩傾斜の草原なり、此邊迂廻えず低下する事なしに、進み來りしも、此所よりして尾根を行かんとすれば、勞多かるべきを知り、遙に下方細徑を認めたれば、左方に下る、（二時四十分）、途中雷鳥を追ふて、二十分を費す、遙に、立山の雄姿を望むべく、越中の平野も亦双眸に入る、黒部川、銀片の如く、黒き山背の間に見ゆ、黒部川の三角洲は、標形的發達をなせるを見る、三時三十五分漸くにして下り、ナンキンコザクラの一大花叢に逢着し、又細徑に達す、遙に降路を顧れば、高距甚しからずと雖も、草中、又ハヒマツ中降るに非常の困難を來せり。

元來余等の通過せる所は、順路と云ふべきに非ずして、余の引きつれたる人夫の全く此方面に無知なりしよりして、至れる事にして、本來なれば、朝日岳より遙に低下し、塩頭出先の三角點に近く塩頭尾根を通ずべきなり、然かすれば、樂に時間少きを得べし、四時五分發す、急傾斜の草中を登る三十分にして、岩角をよぢ、四時三十五分巉岩の下に達す少殘雪あり、前面の下ハヒマツ中に徑跡見ゆ、傾斜面を上下し五時五分、細徑二分す、左すれば、祖母谷と硫黄澤との分れ尾根に至るべく右すれば鹽頭平に至るべし、此邊平らかにして、既に鹽頭平なるを知る、ハヒマツの内に徑あり進む事一二丁にして、ハヒマツの小屋あり、小屋は、鹽頭の三角點、（三角點二あり右は農商務省の建設にして左

◎白馬岳より祖母谷温泉へ　高野

◎白馬岳より祖母谷溫泉へ　高野

は、陸地測量部の三等三角點なり）より二町餘手前のハヒマッ中にあり、注視せざれば見出し難し、思ふに川島氏も此所に雨露を防ぎしなるべく、諸々古鑵の赤錆たるものあるも、亦懷し、小屋は一坪に足らず、燃料も農富に水も亦北方の傾面を下る數間にして得らるべし、露營地としては、稍々風當り強き如きも、良好なる場所たるを失ず、ハヒマッ小屋の修繕に、桐油紙をかけ、又天幕を張りなどする內に雨至り、風加る、漸くにして、用意なる頃は薄暮、雨益々甚しく風愈激し。

鹽頭（ショウズ）は、清水（ショウズ）（吉澤庄作氏）又鐘釣（ショウヅ）（川島祿郎氏）に作る、鹽頭の文字は、武田久吉、山川默氏の用ゐたるものにして、（本誌第一年第二號）、地質調査所富山圖幅には清水畝に作る、思ふに吉澤氏の清水平なる文字は、其起因茲にあるべし、然かして畝はウネの訓を有す、思ふにヲネを誤聞して畝の字を當てたるにあらずや、鐘釣は、黑部川畔に鐘釣（カヂツル）山あり、此文字を轉用したるものなるべし、鹽頭に至りては、武田氏の使用せし人夫に丸山廣太郎あり（余も亦今年使用せり）、武田氏ショウズの文字を聞く、曰く「なめる鹽ずらアー」と遂に鹽頭の字を當つ、今年余親しく、丸山廣太郎に聞くに、「なめる鹽」何等の意あるに非ずと云へり、ショウズの語義明ならず、何れの文字を當つべきや、直ちに斷言すべからざるなり。

八月廿六日　暴風雨の爲め滯在。

八月廿七日　强風にして雨止む、雲霧の往來繁し、天候稍々快復せるもの丶如くなれば、出發の準備をなす、白馬三山を顧れば、暗雲覆ひて見えず、八時五分愈々未知の途につく、吾等の唯一の伴侶は、吉澤氏の紀行文と晉圖にして、地質調査所二十萬分一圖も、殆んど何等の用に供する能ず、恰も亞細亞大陸未知の地に、行くが如き心地せらる。

西に向つて尾根上を行く、細徑あり、八時十七分、陸地測量部三等三角點に達す、鹽頭平は白馬岳より分岐せる一尾根の末端にして、眺望絕佳、蓋し北日本アルプスの殆んど全容を、双眸に收め得べ

しと云ふも過言に非るべし、白馬三山より以南五龍岳、鹿島槍ヶ岳、後立山々脈の連峰より、遠く槍、穂高岳を望むべく、立山、劔岳は手を伸して觸れるが如く、黒岳、赤牛岳は黒部川の溪谷の奥に嚴容を示す、北方雪倉岳、上駒ヶ岳の、群峰は柳俣の谷を隔てゝ聳ゆ、遠く越中の平原を望むべく、黒部川は銀帶の如く、天氣晴朗なりせば、遠く日本海を航走する帆舟を認むべし、且つ地は細砂平らかにコマクサ麗姿を競ひ、草原の內小池あり、赤き、紫、黄なる花、咲亂れ、天女の舞ふ花の舞臺や、斯るものなるべしと想はしむ、人の來る事少く、地貌の荒さるゝなし、白馬に登る士一日を費して清遊するの價値あり。

三角點下に立つて、觀るに祖父谷川は、其源を、此平に發す、眼下に雪溪あり、即ち祖母谷川の源なり、吉澤氏の紀文は、熟讀する事數回、殆んど暗誦せんばかりなり、氏の紀行に由れば、眼下に西に向つて派出せる、尾根を登りて、三角點下に達したるものゝ如く、吾人は、即ち其尾根に下らんとす、三角點より少しく手前より下る、ハヒマツの內細徑あり、十二分にして、ハヒマツの急傾斜を下る、前面に瀧倉岳を見る、小なるなぎを横切る、八時卅七分尾根上の盆形の地に達す、殘雪あり、ハクサンイチゲ滿開なり、鑓ヶ岳、天狗、五龍岳、鹿島槍ヶ岳近くに聳ゆ、後立山、立山は雨に霞めて見えず、此邊絶えず細徑あり、九時十分ツガ現る枯枝白骨の如く唐松岳の頂き左に見ゆ、九時十七分一小平地に達す、殘雪あり小池あり右後方に黒部川の末流を望むべし。

此尾根細徑多く、遠く下方に迄達す、谷に下るべき途あるに非ず、爲めに、知らざるものは、此判然たる細徑の爲めに誤れて、遠く降るものゝ如く、余等も亦、誤られて、遙下方に降りしなり、思ふに此邊より左方祖母谷川の上流に下るを順路となすなるべし。

余等は尙ほ此尾根を下り遂にツガの森林に入り次で十一時三十分行手の前面一峰の上に三角點あり、此邊迄絶えず、細徑ありて、時に新しき枯葉の捨てられたるあり、又及の痕生新しきありて最近

◎白馬岳より祖母谷溫泉へ　高野

◎白馬岳より祖母谷温泉へ　高野

に人の通りたる形跡あり、爲めに誤られて降りしなり、遂に澤に入るべき徑を得ず止むなく或一溪を下らんとして、樹林の下、草丈けなす崖を下り、水なき小溪に入る（一時〇五分）下る事四十分にして瀧に達す、繩にて降る、二時二十分此空澤の水澤（祖母谷川に入るべき）と合する地點に達すれば、斷崖數十尺、直立して空瀧をなす、降り得べくもなし、幸にして、稍々回避して下るを得べし、廣太郎、市三郎の兩人をして、試みに下りて、前途に瀧なきや、否やを檢せしむ、遙に降り行く、人夫の姿を見るに、寸を以て計るべきが如き觀を呈す、以て此空瀧の高きを知るべし、前途尚ほ二瀑あるを知り、止むなく、此空澤より崖に攀じ、斧及入らざる森林の急斜を登る、（三時十分）低く横臥せる枝條の間を縫充するは、ネマガリサヾにして、此等を掻き分け、掻き除けて、登る辛困は如何ばかりなるべきや、想像に餘りあり、漸くにして尾根上に登り、尾根の背より背と下る、枝條と、笹の鹿柴は前路と變る事なし、遂に祖母谷川の溪聲を聞く、四時三十二分辛じて、祖母谷川に下るを得て、一同喜色面に溢る、時に雨至る、傍に河原あり一平地を得、思ふに吉澤氏の晝飯を喫したる所ならんか。

結束して下る、澤は大岩巨石にして、傾斜從つて急に、全溪、即ち飛瀑と云ふべし、時に雨至り又止む、右に移り左に轉じ時に飛瀑を横切る、諸て崩解せる所、温泉湧出し、硫黄の沈澱あり、漸く雨甚しく、暮色迫る、六時一溪左より來る、巨岩ありて、其上稍々平なり、辛じて下る、行手を見れば雨崖削立して「瀬戸」をなして進むべからず、左岸の絶壁、稍々ヘツル（絶壁を横に身を岩面に着けて、横通るを云ふ山岳語なり）を得べし、右岸より左岸に行かんとすれど、瀬戸をなして、水狹りて、徒渉するを得ず、雨益々甚しく、時々刻々、夜の幕は下り來らんとす、一行直立沈思するのみ、進むに得ず、退くに難く、進退茲に極りて、茫然自失するのみ、雨益々甚しく、全身濡れて、寒さ甚し、何れにして、今や日將に暮れんとして、如何ともすべからず、幸にして、此出合にある一巨岩の上平

らかなれば、其所に露營する事とし、心身困憊を極めたる、人夫を勵して、岩上に天幕を張り、杭を打込むべき土とてはなく、辛くも岩角に結びて、樹立するを得たり、濡れたる衣服を乾し、夕飯を喰んとし、流木を集めて火を焚くと雖も、雨愈々强く、風さへ加りて、濕りたる木は、燃ゆべくもなし、再三、再四の努力も遂に火を得るに至らず、飯を喫すべからず、止むなく、鰹節を嚙み、ミルクフードを舐りなどして、夕食に代ふ、日全く暮れて、雨は暴風雨に變じ、大雨沛然として至り、天幕を打つ音、溪聲と混じて、益々淋しく、水量は急增して、水底を轉々する岩石は、一種云ふべからざる音をして水に激し、雷鳴時に至り、電光、全溪を射て、銀箭の全谷を埋むる如し、雨愈々甚しく、溪水激增して、今にも此岩上を侵すかの感あり、前途は黑暗にして、何等の知悉するなく、今吾等は、何處の地點に來れるやら、更に知るを得ず、前路を思へば、心細き感なき能ず、携ふる所の米二日を餘すのみにして、來路を歸らんか二日にして、人家に出づべからす、前進せんか、ヒシ（岩石の絕壁を云ふ山岳語）に隔てられて、行く能ず、雨益々甚しく、雷鳴全谷に響きて、今にも溪水溢滿して、此岩上一掃されんとするの感あり、悲觀せざるを得べけんや、市三郎は前途の不明を以て、來路を歸らんと首唱なせど、余は、吉澤氏の紀行を讀むに「方向は約 N. 10. E かくしては、又河原に出る。溪間を溯ること約一里で本流を左に離れる事となつた、即ち左折して、一支流に就く、方向は殆んど正北となる」（山岳五の一、五〇頁）なる一章あり溪の方向を示す事、精細にして、今此岩頭に踞して、案ずるに、一行の下り來りし谷は正南にして、確實に此記事に適合し、此出合は、吉澤氏の前揭の一句に相當する出合なるを知り、由つて、温泉塲は又、一里を出でずして至るべきを知れり、去れば、余は斷じて歸るを可とせず、僅かに一里の間全くヒシならんも、今日一日に行き得ざる事あらんや、總ての防寒具、器具、器械を、捨てゝ今一日の食料を持ちて輕身となりて、ヒシを搦まば、如何で、一日に到着せざるを得ざらんや、不幸にして、進むを得ずは、生還期すべからず、徒らに來路を歸りて、

◎白馬岳より祖母谷溫泉へ　高野

死滅せんよりは、必死の勇を起して進むべしとなし、悲觀せる人夫を奮勵して、衆議を決す、夜雷雨甚しく、明日を思ひ眠むるを得ず、漸くにして一睡すれば、夜は明けなんとす。

八月廿八日　雨止む、火を燃すを得ざるを以て、復喫飯するを得ず、鰹節、ミルクフード、角砂糖に僅かに餓を防ぐ、氣力のなき事推して知るべきなり、六時結束して立つ、天幕の內に毛布、衣服、寫眞器等を其儘とし、幸にして生還（蓋し前途測り知るべからざる余等には生死の程知るべからず）するを得ば、取りに來らすべしとなし傍らの崖（右岸）に攀づ、夜來の雨は、止みて、雲切れて、日光輝く、日の光を得て勇氣一倍、愈々益々樹枝を掻き別けて登る、約一時間にして、ヒシの上端に達するを得て、愈々横通る、樹根を踏みしめ、枝を力として、崖を横通る其困苦は一度試みざるものには、想像するだに難るべし。

全身の精力は四肢と眼底に集る、一擧手一投足と雖も死力を盡せりと云ふべし、幾度か轉倒し、心膽爲めに寒し、一度誤つて落下せんか、身は、數十丈のヒシを落下し、祖母谷川の鬼とならざるを得ず、雨に濡れたる枝は、越へんとすれば滑り跨げば、跳ね返りて越ゆるに難し、一本の枝一莖の笹に、吾が心命を托すかと思へば、恐怖なき能ず、昨夜よりして、飯を喰ざる二度、然して心身共に過重なる勞働をなす、益々精力の缺乏する事言を待ず、三時間餘にして一度河原に下る、思ふに此河原は、吉澤氏一行が、右岸より左岸に徒渉したる地點なるべし、河畔の灌木喬木の密林に入る、下の笹の切りし痕ありて人の通りたる事を知る、恰も穹門の如く密林の下沮洳の地あり、巨岩あり迷路に入るが如し、即ち吉澤氏の「絶崖を攀ずると、灌木、喬木の綠葉から成れる穹門を潛る迷路を辿る樣である。切りたる根を跨ぎ、横る頑石を踏み越して行くこと五六町で河原に出る。右に水を渉つて」云々の地點即ち此所なるべし。

右より來る一溪を横切り崖に上る、此邊又の痕多く、絶壁の縁、最近に見通しの爲めに作りし、跡

あり、行手復々ヒシとなりて行くべくもなし、然れども其中邊に道らしきものあり、余は道にあらざるなきやを云ひしかど、遂に再び、此ヒシの上をヘツルべく決定し、又森林を登る、余の道と云ひしものは後に道なりし事を知れり、即ち吉澤氏の「崖は嶮しく、溪は狹く、花崗岩を抉つて奔る激流は一際白い」云々は此れなり此所ヒシ逼りて瀨戸をなす。

日午を過ぎ未だ食事をなす能ず、僅に携る所の、氷砂糖、ボン〳〵に氣力を快復す、ヒシの上を横通り一溪の上を横通る、此所にて北澤氏滑落し、あわや丈餘の瀧より落下せんとし、幸くも廣太郎の差出す、杖に九死に一生を得たり、一行爲めに意氣益々振はず、漸くにして二時過ぎ河原に下る、丈なす、ヨモギ、スヽキ一面に繁茂す、余は茲は即ち吉澤氏の「もう是れからは殆んど路は無い、丈に餘る蓬、山アザミ、垂れかゝる薄、萩、置き餘る露を掻き拂うて岨崖を辿る」。なる地點なりと推定し最早ヒシもなかるべく、林道に出づべきは近きにありと思考したれば、昨夜來の饑飢を醫さんと、携へたる飯蓋（鍋は重量大なれば捨て置きたり）にて米を煮て、三飯を一度に喫す、鹽味としては、只燒鹽の少許あるのみなり、其味の美にして、一椀の飯は大牢の珍味も及ぶべからず、一行茲に元氣を得て發す。

ヨモギ、スヽキの間を押し別けて、進む事一二町にして林中に入る、此れより先き遙に此林を望む樹枝の切り拂はれたる所あり、思ふに林道あるべしと思へり、今林に入つて、直に林道を發見す、直に其瞬時に於ける、吾人一行の、喜悅は、手の舞足の踊る所なしと云ふも過言に非ず、思ず萬歳を叫べり。

林中、苔蒸す岩をふみしめて、行く事七八町にして、右より來る一溪に下つて横切る、尚ほ數町にして桶の如き岩間を落下する瀧の下流を渡る、蓋し祖母谷川の偉觀なり、此瀧の川と合する所祖母谷川狹りて、巾數間の瀨戸となる、噴氣孔と共に此溪中の奇觀たり、祖母谷温泉に遊ぶの士、是非一覽すべき價値あり、此崖道を行く事數町にして、巾廣き林道を行く、所々河原に噴氣孔多く、沸湯沸々たり、

◎白馬岳より祖母谷温泉へ　高野

◎白馬岳より祖母谷温泉へ　高野

初めて林道に入しより約半里にして祖母谷温泉の對岸に出で、釣橋を渡りて、温泉に着せしは四時十五分繰先に腰を下したる時の心持は、余等の外味ふべからず。

温泉に滞在する事二日、人を雇して、導者を得て、河中に捨てたる荷を取る、往復約八時間にして歸る、余等は、此片道を殆んど十時間を要し、非常の勞力を費したり、祖母谷温泉にをる仁次郎（吉澤氏の導者）曰く、如何にしてあのヒシを通じたるかと、如何に惡絶を極めたるかを知るべし。

八月中旬、會員寇松次郎氏は、廣太郎を導者として、祖母谷川を下り、前回の失敗に顧て、朝五時鹽頭を出發し三時に祖母谷温泉に着せりと云ふ、即ち、順路を經て下りしものにして、時期よりしても、既に減水して徒渉に便なるのみならず、前回の失敗はよく成功の母となりしものなり。去れば、今や白馬の人夫（細野）も祖母谷川を案内し得る事となれり、余は何等苦しき經驗の外得る所なしと雖も、余等の失敗は、第二次の成功の基となり、信州と越中とを連絡するの動機となりし事を、せめてもの成果として喜ぶものなり。

元來余一行の通路は、順路と云ふべきに非ず、去れば此一文を以て將來の參考に資すべくもなし、讀者其心して見られよ。

黒部川溪谷は、浸刻さるゝ事深く、谷の惡絶なる事は、人の皆な知る所なり、實に北日本アルプスの全水を集めて下ると云ふも過言に非るべく、去れば、余等の通じたる候は最も雪溶けの盛時にして八月中旬に至れば、溪水殆んど半減すと云ふ、溪を歩むべき人、心すべき事なり。

黒部溪谷の偉觀は、祖母谷温泉より鐘釣（カナツル）温泉との間なりとす、兩崖直立する事數丈、道は絶壁の中腹をU字を横へたる如き形狀をなして、つけたり、脚下には碧水淵をなして渦く、魔の住むか、龍躍るかと、心爲めに塞し、大自然の偉力に壓せらて、平心歩むに難し。

祖母谷温泉は、黒部本流より約一里祖母谷川を溯りたる所に在り、此黒部本流と、祖母谷川との出合より尚ほ三里、ケヤサ平（欅平？）迄林道ありと云ふ、大絶壁の連續する事長く、黒部本流は溯るべからず、祖母谷温泉方面より二泊にして、立山に登るべく、又平の小屋に出で大町に至るべしと聞けり、何れも、黒部別山と、立山との間、内藏之助平（仙人平）に出でゝ至るなるべし。

東京より祖母温泉に至るべき道としては、越中平原よりならば、三日市停車場に下車すべく、三日市より一日にして行くべし、（三日市より愛本（アイモト）迄馬車、徒歩八里にして祖母谷温泉なり）信州よりせば、北安曇郡北城村（白馬岳登り口）より平川を上り、大黒岳を越へ大黒鑛山飯場一宿（今年は或事情よりして採堀中止せり）翌日温泉に至るべし。

余等は、細野村の丸山廣太郎（二二）丸山市三郎（二五）丸山善次（二七）丸山美知彌（二五）の四人を用ゐたり、特に廣太郎、市三郎の兩人は、祖母谷下りとして推薦するを得べし。

# 鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を經て駒ケ岳に登る記

星　忠芳

## 一、臺ケ原

豫て望みし甲斐駒、仙丈等に登らんと思ひ、七月十六日、富士登山の歸途、同行を約せる辻本氏を臺ケ原に迎ふ、連日の天氣續きは、黄塵を漲らし、灼くが如き照返しに、汗頻に頬を傳ふ。一日も早く幽邃の處に、燃火を擁して、山容を語らんと思ひ、直ちに用意に取りかゝれり。

◎鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を經て駒ケ岳に登る記　星

◎鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を經て駒ヶ岳に登る記　星

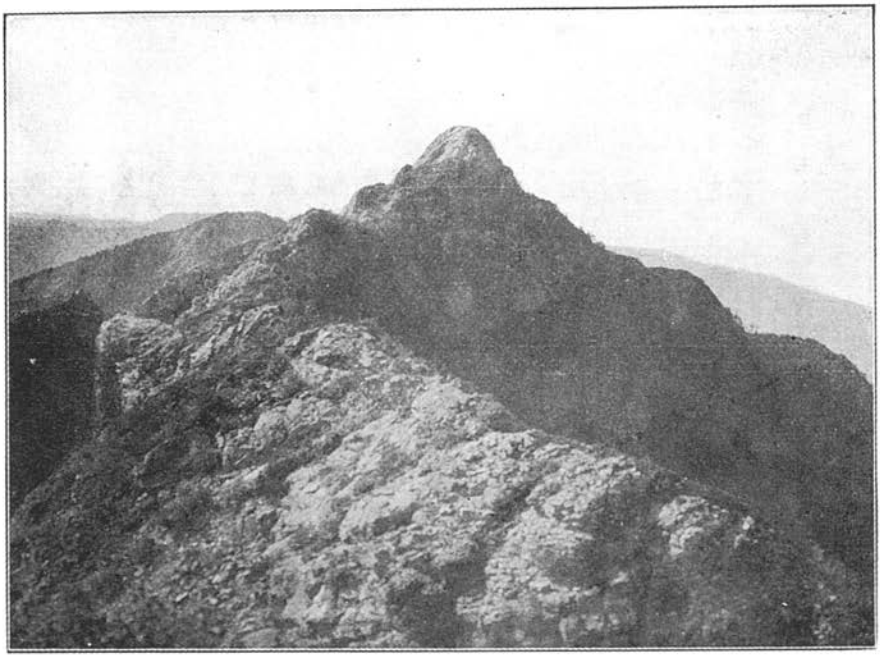
案内は、柳澤村の水石春吉（四十一歳）、臺ヶ原の山岸喜作の兩名にて、別に食料の負夫として、二名の人夫を伴はんと思ひ、其の撰定を兩人に命せり。春吉は先年鳳凰登山の節、伴ひし案内、牛田五郎作の一族にして、山獵を業とし、陸地測量部員に從ひ、三角標建設に從事せしを以て、三角點の位置幷に山勢に明かにして、困苦缺乏に堪え、勞苦を厭はず、着實に務めを盡したり。本日は、食料及裝具の用意にて日を暮しぬ。

十七日、雨　起床四時半、晴雨如何にと氣遣ひしに、雨雲天に滿ち、甚だ心元なし、暫時見合はす内に雨蕭々として降り出し、密雲駒ヶ嶽一帶を閉ぢ、僅かに青空を東に見るのみなれど、大したる事も無からんと思ひしに、刻々雨烈しく、遂に雨雲四山を籠めしかば、今日の出發覺束なく、滯在に決す。午後より雨止みたれば、横手の前宮に至り、宮守に就き駒ヶ嶽の話しなどを聞き、歸途中山に登り、大武川と石空川との合流點を確めたり。夜に入りて、山梨縣林業技手内田、大澤の二氏、鳳來の山より下山し、隣室に投せられしかば、訪ひて山勢と水流を質せしに、携行せられし圖を示し、懇々實境を話されしかば、大に便宜を得たり。十時、明日の樂しき活動を夢みつゝ眠りに入りぬ。

## 二、日向山及駒岩

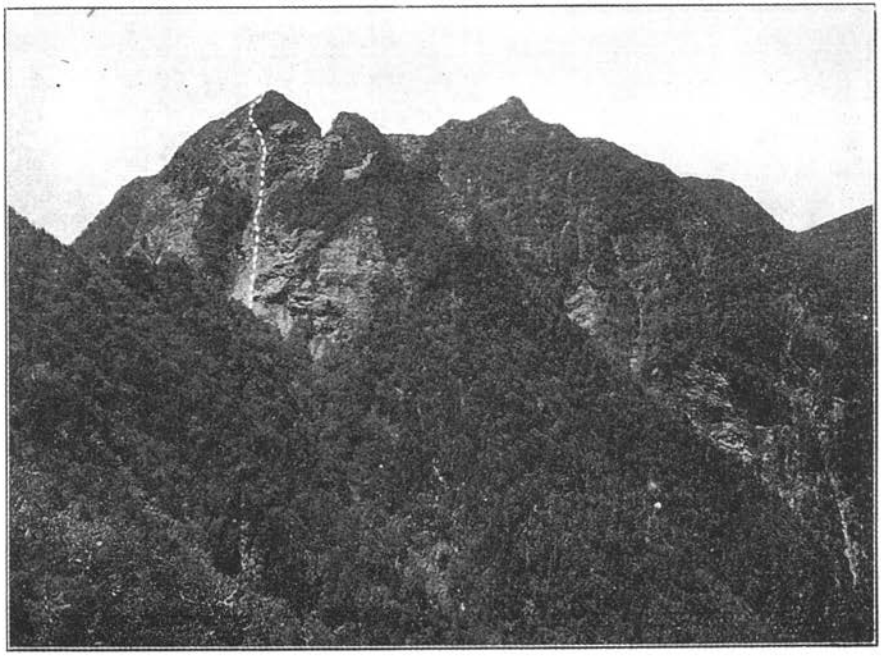
十八日、晴　起床四時半、庭に出づれば、嬉れしや一天拭ふが如き朝晴れなれば、直ちに行李を整へ、割當をなし、人夫四名に分擔せしに、山岸喜作昨夜より、脚脛部痛み烈しく、腫物の疑あれば、前途甚だ覺束なしとて、突然同行を拒みしが、百方之を慰撫せしも應せざれば、遂に代人入戸野作藏に擔はしめ、臺ヶ原竹屋を出づ、爲めに出發遲れ六時四十分となれり。

殿町を通り横手道に出で、町外れより分れて、竹生に向ふ間道を行く。尾白川を左方に取り、七時十分、竹生の山村に入る、村内に大なる石の門柱あり、字を彫みあれど明かならず、此の邊一帶花崗



星忠芳氏撮影

鋸岳絶頂（第二最高点より）



辻本満丸氏撮影

鳥帽子岳より鋸岳を望む（点線は星氏登路）

岩の砂白く、水清し、雨後の水量は著しく増し、淙々として、道傍の小溝に氾濫せり。村を離れて右手に天満宮の森あり、之れを過ぐれば道左に曲り、再び尾白川を見つゝ進む、やがて右に尾根顯れ、竹生の前宮に着す。荷物を道傍に置き、二丁許りある前宮に參詣す、境内に一軒の常住らしき農家ありて、宮の監視をなす、横手前宮に比し少しく大なり、司官は臺ヶ原に在りて不在なりき、外人一人二名の案内を伴ひ、尾白澤の釣橋を渡り、順路駒ヶ岳に登るに遭ふ、茲にて水の補充をなす、之れより後は水乏しく本日の途中只一ヶ所あるのみ。

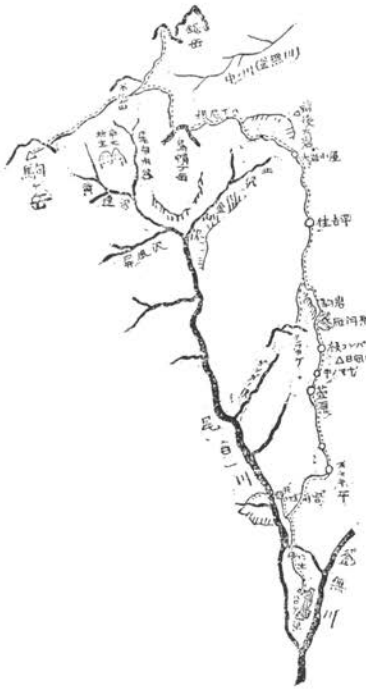
荷物を置きし處に引返し、八時三十五分右手の山腹急傾斜面を攀づ、約二十分にして竹生より來る小徑に合す、途中山鳥の人聲に驚き、羽音高く飛び去るもの多し、尾白澤を左方に瞰下しつゝ、日向山の尾根を傳ひ登る、刻々傾斜加はり、雜木低く雲なき空に日は遠慮もなく照り付け、流汗眼に入り、頰を傳ふ、三町に休み、二町に息ひ、喘々として進まざる事蝸牛の如し、人夫等は早く山巓に至り、凉風に浴せんを願へり。間もなく青草茂る小さき平に出づ、薄平（スヽキダイラ）（？）と云ふ、之を過ぎて間もなく、熊笹の繁茂せる平あり、春吉に其名を尋ねしも、知らざりき。

人夫一名弱り初む、呼べど碌々答へず、今にも逃ぐるが如く見えければ、勉めて之を勵まし慰め、水などを分ち與へつゝ、漸く伴ひたり、此者は最初より、食料の輕減するに從ひて、途中より歸村せしむる考へにて、人選を案内等に命せしものなれど、人物も大人しく、敎育も先づ人夫等の内にてはある方なりしが、あまりの苦しさに理性を失ひたる樣、見受られぬ。十一時五十五分落葉松の所々に聳立せる平に出づ、萱原（カヤハラ）と云ふ、日向山の山腹にして澤を隔てゝ前鞍掛山の巖壁に對す、脚下の澤はガンガノ澤なり、駒ヶ岳は高く南方に聳え、南北坊主の邊り岩壁殊に嶮し、鞍掛山は前鞍掛の上より、其の鞍部を顯はせり。北方日向山の裏に當りて、一縷の薄煙（たなび）き、樵夫居る樣子なり。

徑は日向山の裏に沿ひ、西に進む、少しく下りたる所に窪あり、牛のマヤと云ふ、日向山三角點（千

◎鞍掛山烏帽子岳鋸岳を經て駒ヶ岳に登る記　星

六百六十米突）の直下なり、猶少しく下りたる處に、平あり、一軒の茅屋ありて、炭を燒く小さき家族住めり、此處を板コンバと云ふ（家を訪ひ水を求むるを得れど、水源は聞かざりき）五六歳の小供獨り樂しげに遊び居たり、人夫等は水を得て衰へたる活力を回復せり、之れより西方に下る事三丁許りにてガンガノ澤の上部に出づ、此處一面風化せる花崗の崩岩にして、小徑崩壁の中腹を通じ、一歩毎に滑走せんとす、日向山頂上の北部にある名高き雁ヶ原（ガンハラ）の續きなり、崩壁の上部は、刀及を横へしが如き岩石なり、此處より崩壞面を傳ふて濁川に下り得と、春吉は語れり。青梁の中腹を通り、下る事少許にして、十二時五十五分、オトシノ下（シタ）に着す、途を左に下り、シダ、五葉（ゴハ）等繁茂せる內に水あり、岩層の間より僅かに流れ出づ。今日の行路他に水なければ、此處にて水の補充をなし、中食を喫す。暫時休息の後一時二十分出發し、前路を急ぐ、徑は登りとなり、四五町進めば此處にも徑側に水ありしが、晴天續けば疑はし、附近露營に適する平地あり、燃料も豊富に見受けられぬ。先に中食を認めし處の眞上なり、途は一歩〳〵急峻となり、濶葉樹漸く減じ、針葉樹次第に其數を增す、一時四十五分急なる尾根に休息す、之れより先は難路にして、倒木多く、或は登り、又は潜りつゝ進む、二時十五分笹多き平に出づ、暫時



鞍掛山方面駒ヶ岳登路概念圖

平坦にして、又登る事少時二時三十七分駒岩に達す、岩は風化せる花崗岩にして、露出せる處皆風化し、碎くるもの多し、黒戸山を越えて遙に鳳凰山塊を望む。猶進む事十五分針葉樹林盡くる處、一つの平あり、青草氈を敷きたるが如く、中央一段高き處、三四本の針葉樹ありて、塚の如き處に出づ、之を住吉平と云ふ。西南を望めば、左に駒ヶ嶽は南北坊主を擁して高く聳え、烏帽子の峻峰之れに連り、八丁尾根、前後の大岩其右に連り、恰も一雙の屏風を立てたるが如く、八丁尾根の背面より奇怪なる鋸岳の連峰を望む、山秀麗にして谷愈々幽なり、尾白本澤、黄蓮澤、金山澤、北澤等、深谷に集りて尾白川の水源を作れり。

## 三、鞍掛山

荷物を此處に置き、弱れる人夫一名を殘し、餘は空身となりて鞍掛山に向ふ。

鞍掛山は尾白の溪谷に突出せる一支峰にて、其三方は澤に包まれ、北方僅かに一山背を以て、駒岳方面に連れり、東方に前鞍掛を從へ、三方共に嶮峻にして、登攀するを得ず、只北方一縷の連脈をたどり、登るを得べし、頂上は二つに分れ、鞍部をなし、絶頂は北方駒岩に近し、金山澤、カルト澤等之を圍繞す、頂上に小さき社あり、參詣の爲め、登山するものあるが如し。登山路は駒岩附近より、左手に取る岐路あれど、草樹の間に沒し、見落したれば、住吉平に出で、逆行して進む、再び舊路を取るは如何にも大儀に感ずれば、平より直ちに山側を絡み、鞍掛山の北方に向ひ、熊笹、小ビソの密生せる林を分けつゝ下る、間もなく熊笹盡きたれど、小ビソの密林は益々濃く、倒木多くして路とてもなく、只無二無三進路を索めつゝ、急峻なる傾斜を下る、苔蒸したる、倒木に滑り、或は小ビソに打たれ、暫時眼を開き得ず、人夫等は空荷の身輕さを賴みて、先行して姿見えず、下る事十五分許りにして、北方駒岩より來る徑らしきに會ふ猶下る事少許にして、左方大巖あり、上に三笠山神社と記せる

◎鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を經て駒ヶ岳に登る記　星

◎鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を經て駒ヶ岳に登る記　星

小碑あり、岩根の穿たれ凹處をなす處に木を掛け、枝を組み、簡單なる小屋あり、嘗て山仕の野宿せる跡ならん、猶も下れば熊笹多き小さき鞍部に出づ、鞍掛山は此の小さき尾根蔓（ツル）を以て、僅かに駒岩方面に連るなり、嘗て山仕の野宿の跡あれば、附近に水あるならんと思ひ、所々を捜せしも得ず、歸途には一層水を求めん爲め、人夫を南方の澤に下らしめしも、發見するに至らざりき、徑は此處より只直上り、幾多の苔蒸す倒木を踏み越へ、潜りなどして登る、北峰の東方を過ぎ、西手に出で、下りて鞍部に至る、此邊倒木殊に夥しく、立木のまゝ枯死せるものもあり、ヒソ、栂の大木、腐るに任せて累々たり、半ば朽ちたる小さき鳥居の如きものを過ぎ、南峰に登り、左に廻はれば前面に、白色の巖壁見ゆ、其の頂上に小さき社あり、蠶神を祭る、祭神は女神にして、蠶繭若干と白米を紙に封じて、供へあり、又た祠内に山林巡査の名刺あり。住吉平を出でしより四十分を費せり、此處展望開け、東北方は前鞍掛を經て日向山に對す、足下の絶崖は愈々嶮しく、尾白澤の本流は深く、烏帽子岳の峻峰を穿ちて、深酷なる幽谷を造れり、休む事十分許りにて、舊路を下り、三笠山神社の邊より、殊勝にも順路を尋ねつゝ進みしが、何時しか又小ヒソ林に分け入り、四時四十分住吉平に歸りぬ。

睡れる人夫を促し、直ちに出發前路を急ぎ、笹多き急坂を登る、此邊先年火を失したりと思はしく、立木の處々に焦枯せるまゝ、殘れるもの多し、此の急坂を登る事少時にして、針葉樹林に入る、徑は先づ平坦なれど、相不變倒木途を遮り、坂路頗に難を加ふ、一時間許りにして、午後六時大岩の小舍（一名中小屋と云ふ由）に着し、野宿の用意に着手す。

小舍は大岩三角點（二千三百十九米突）の東北方、尾白川北澤の直上にあり、右は釜無川の支谷、黒川の溪にして、左方直下に北澤を見る、小舍の附近に石多し、小舍は陸地測量部員の造りしものにて、白ビソ、白樺等を、針金にて結び、木皮を葺ける五坪許りなれど、過ぐる大嵐の爲めに、盡く倒れ居たれば、直ちに修理に取りかゝり、一方水を求めしむ、水は黒川の溪より運び、途三丁許りあり

し由、一時間許りにして、小舍の修理成りたれば、之れに入り、夕食を初め、九時頃終れり、本日は快晴にして、灼くが如き烈日と戰ひ、水乏しく坂路の急と、倒木多き爲め、甚だ進捗を妨げたり、臺ヶ原より十二時間強。水甚だ乏しければ、登山者は、水の用意大に必要なり。

## 四、前後（ゼンゴ）の大岩及烏帽子岳

十九日、晴　起床四時、水遠くして甚だ貴重なり、僅かに一杯の水に、不愉快なる洗面をなし、無暗に燻る燃火に咽びつゝ、前途を考ふれば、難路惡坂は兎も角、今日も又水無きに苦まざる可からず、終日峯傳なれば一日、三合餘の水筒によるの外なし、間もなく朝食は出來ぬ、嘗ては馴れし飯盒飯（はんがふめし）も、今日は堅くして咽喉には通らねど、前途の苦を思ひ、强て流し込みしが、辻本氏は此不熟の飯には、大に困まり居られたり、やがて行李を收め、記念の標本を殘し、立ち出づ、水遠くして今日も出發遲れ、七時半となれり、折りしも霧四方を鎖し、幽邃限りなく、肌には冷氣を覺え、秋の如し、されど少時にして霧晴れたり、大岩山の中腹を、北澤に沿ひ、巖壁を行く、路峻しく樹枝に身を托しつゝ、漸く進むに直立五六十間とも思はるゝ前後大岩の巖屏風の麓に出づ、途嶮惡を極め、巖壁を傳ひ、進むに水溜あり、岩の孔隙より湧き出づれど、其量甚だ少なし、進む事一丁許りにして、巖壁終る處より、右手に峻嶺を攀ぢ初む、顧みて大岩を望めば、巖壁長く連りて、北澤を壓し、巖然として濫に人を近けしめず、超然として連山に一劃をなす、巖壁半にして一輪の鬼百合、やさしき笑みを含み、甚だ優美の情を添ふ、幼年の頃御伽噺しに讀みし山賊の山塞も、かゝる處やと思はれ、霧を喰ひ霧を呑む仙人の住家も、此の如く思はれぬ。

急坂盡くれば八丁尾根にして、西方中の川の溪を隔てゝ、兀々たる鋸岳の巖壁を見る、此の方面より見たる鋸岳は、意外にも綠樹の衣厚く、容姿いと溫厚なれど、頂上の赭巖及び處々に現はる巖壁は、

其の嶮を漏らし、袍衣に針を包めるの感あり、雪多き木曾御嶽は、鋸岳を隔てゝ、西南方の天に聳ゆ、北アルプスの連山は、樹枝に遮られ、明かならず、僅かに槍、穂高の峻峰を見るのみ、此邊一帶石楠木の大木多く、林をなし、高さ三間に餘るもの少なからず、所々に花を保ちて甚だ美し、小ビソ、栂等の大木石楠木と枝を交へて密生す、八丁尾根を山脊に沿ひて、進む事約四十分にして、峰將に終らんとせる處に、偃松茂る一峰あり、烏帽子岳に連る。

十時五十五分烏帽子岳の傾斜にかゝる、烏帽子岳は白樺多く、頂上に近き處偃松多し、登る事一時間許りにして、絶頂に達す、頂上は八丁尾根に連る傾斜面は、さのみ烈しからざれど、尾白澤本谷に面する處、甚だ急峻にして、絶壁をなす、頂上は二段になり、前峰は低く、後峰は僅に高し、西方稍や廣くして、俱に巖より成り、偃松及白樺之を包む、絶頂に藥師如來の小社、及烏帽子岳大神と記せる碑あり、今日も天氣晴朗、雲なく、眺望甚だ佳なり、尾白澤を隔てゝ、駒ヶ岳は南北坊主を擁して、手に取る如く聳え、西には鋸岳巍然として、巨人の如く、南方仙丈の雄峰は北面のカールに雪を湛へて、甚だ美はし、仙丈岳、鋸岳の間には、惠那山遠く鯨背の如き姿を表はし、鋸岳の齒間には、木曾駒の雪峰を見る、仙丈の左方には白峰北岳の鋭峰、及間の岳、甲見岳の諸峰、甚だ明かに眺むを得、頂上にて中食を喫し、水筒の底を掃ふ。

零時五十五分絶頂を發し、駒ヶ岳に向ふ、暫時烏帽子の巖頭を偃松に、すがりつゝ進み、ヒソ林に入る、左手は尾白本谷にして、右の澤は釜無の上流、中の川の澤なり、尾根傳ひに行く事一時間にして尾白澤上流の上部に出づ、此處連脈の三叉點にして、烏帽子岳八丁頭より來る山脊、鋸岳連山より連る山梁、及駒ヶ岳連脈等の、合せし處にして、後方の峰は、不動山なり、甲信の國境、其の稜線を縦走す、不動山の南方信州面の澤は赤河原の不動澤なり。

## 五、鋸　岳

鋸岳は不動山の連山にして、途中崩壊せる數多の絶壁ありて、近づく可からずと稱す、是れより先、縱走の序を以て鋸岳に登らんと欲し、種々案内に質せしも皆其の不可なるを唱へて止まず、殊に春吉は出發前父の孫太郎(老獵夫にして、此邊に明なれど、今は老年の故を以て、あまり登山せざる由)に就て尋ねしも、不動山より尾根傳ひは、先づ不能なり、釜無の谷を渡り、北方より登り得れど、最高點に至り得るや否やは、明ならず、全山の縱走は絶對に不能ならんと話せし由、南方赤河原の絶壁は、登攀せし人、未だ無しとの事なれば　余等は大に興を催うし、假令登山不能に終るとも、せめて基底迄至り、其の可否を定めんと思へり。

鋸岳は五ヶの峯より成り、著しき峯は二個あり、全山古生層の岩石より成り、甲州面は頂上を除くの外、一帶樹木茂り、所々に巖壁あれど、信州面は樹木少なく、赭巖長く連り、巖壁の凹凸殊に甚し、頂上兀々たる山骨は、恰も鋸齒を並べたるが如く、東、駒ヶ岳の皚白の崩壁に連り、西北方に進むに從ひ、漸次巖壁皺少なく、高度減じ、山容も又溫和なり、北端に近き山巓には、測量部の三角標(二千六百〇七米突)ある由なれど、見えざりき、黑川(信州面)、釜無の本流及其支流中の川其の麓を流る。

人夫をして、登山路及び水の有無を捜さしむ、時猶早きも、先途水の有無明ならざれば、都合に依り、今宵は此處に露營せんと思ひ、余は獨り白樺の下に息む內、何時しか睡りしと見え、人夫は歸り居りぬ、途明かならねど、今夜は此處に宿し、行き得る處迄で、鋸岳に至り見んとの話しなれば、殘れる人夫に小舍掛を命じ、輕裝し、人夫二名を連れ、偃松を分けつゝ、後方不動山に登る、國境に沿ひ暫時進みしが、忽ち偃松の密生せる中に入る、懸崖を傳ひ、垂下せる梢を下り、絶壁に沿ふて、路なき木立を、無二無三猪進す、不動山及び其西方の山は西南方赤河原に面する處、一帶の峭壁にして、

◎鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を經て駒ヶ岳に登る記　星

鋸岳の一端をなし、仙丈岳より望めば、其の猛烈なる皺壁は、鋸岳に連り、一しほ凄絶の感を強くす、小ピソ、大ピソの欝林は、甲州面の山腹を包み、途とてもなし、間もなく偃松多き絶頂に出づ、之れ鋸岳連山の一部にして、仙丈方面より見て、向て右より二つ目の山頂なり（鋸岳の甲州面は、山腹樹叢あれど、信州面は山骨露出し、巉巖峭立の赭岩長く連り、巖壁は刳れるが如し、峯も甲州面にて、鋸岳に非ずと思はるものも、其の裏面斷崖をなし、鋸岳連山の一つに數へられ、巖壁長く駒ヶ岳裏山に連れり）。忽ち前面に當り、山骨碎くる鋸の一峯あり、其の標高我れより、遙かに高く、褐色の頽巖は山頂より深谷の底迄續き、一塊搖けば全巖百雷の如く萬山を震はし、崩壊するの思あり、連脈は崩巖を以て茲に一旦連續を斷ち、僅かに岩層を以て低く連れり、此の凄絶を見て忽ち胸に浮ぶは、危險！崩壊！冒險！にして彼の頂上一岩一寸搖けば忽ち一大山彦を起し、黃塵を揚げて殺倒し、五尺の此身肉一片を留めざる可し、先年檜ヶ岳の崩巖に遭遇せし事を思ひ起し、肌に粟を生ずるを覺えたり、眼鏡を取り、崩巖の狀を熟視するに、崩壊は甚だ危險なれど、谷底に下り得ざるにもあらねば、兎も角下り、然る上登攀の可否を決せんと、春吉を促し寫眞機を擔はしめ、谷底に下り始む、（辻本氏は前日來少しく健康を損じ居られたれば、他の人夫と共に此處にて前進を止められたり）、忽ち偃松の脊丈けを沒する叢林あり、傾斜急にして、松枝に跨りて滑り行く、春吉は空荷の身輕さに、何處に行きしや姿見えず、只聲を聞くのみ、余は一生懸命夢中になりて、偃松中に藻掻きつゝありしが、突然、岩よ岩よと連呼する聲を聞き、足下を見れば、偃松の下に大絶壁あり、偃松之れに垂下せるに向ひ、滑りつゝありければ、大に驚き、滿身の力を籠め、偃松を登りつゝ、漸く削壁を避くるを得たり、程なく偃松も薄らぎ、白樺多き懸崖の巖頭に出づ、春吉戲れに一岩を搖がせしと見え、忽ち墜石の聲幽谷を震はし、耳を聾する許りにて、殘れる人達に非常なる不安の思あらしめたり、偃松、樺などにすがりて、斷崖の右を下りつゝ、漸くにして崩巖の下に達す、此處鋸岳の崩壊の一部にして、頂上の崩巖は、此

處にて一旦滯積せられ、再び赤河原方面に崩壞せり、顧みて出發點を仰げば、人影かすかにして、人語聞き取り難し、前面鋸の崩巖は、傾斜急なれど、登り得ざるにもあらねど、何時崩岩の頭上に殺倒し來らんを怖るのみ、恐怖去りたれば、攀登せんと傾斜面に入りしに、岩塊頭上に壘積し、頂上を見るを得ず、四肢均しく力を分ちて岩辷を防ぎつゝ攀づ、側壁に據らんと近寄りしも、垂直にして、登るを得ず、巖壁に手を掛くれば、岩片剝離し、甚だ危險なり、絶えず崩岩の落下せんを顧慮し、兩人別路を取り、匍匐して進む、登りし方を望めば、傾斜の爲めにや、距離甚だ近く見ゆれど、實際中々遠かりき、殘れる人達を見るに、其影甚だ小にして、巖上に鳶の止まれるが如し、其の面容元より窺ひ知るを得されど、余等の前途を思ひ、出來事なからんことを祈らるゝものゝ如く、時々眼鏡を手にせらるゝを見る、登る身は元より苦しきも、望見せらる人達の配慮却て切なる思ありしならん。壘岩を甞めん許りにして、進む內に、左方に草生じ、白樺の稚木あり、兩壁は益々極まり、天空狹し、巖壁には年經たる矮小なる落葉松の生ずるもの多し、早く崩岩の危險界を避けんと、種々側壁を求めしも、得ざりしが、八合目邊より、左側滑なる岩壁に、僅の皺隙あるを見て之れに依り、覺束なき足を孔隙に運びつゝ、薄氷を踏む思にて攀づ、後に至り考ふれば、斯る危險を犯さずとも、猶少時堪え、崩岩を何處迄でも登り切りし方、却て安全なりしと思ひたり、壁頭には偃松あり、之を傳ひ左方に廻はれば、赤河原の直上に出づ、枯死せる偃松の間を進むに、大絶壁の上に出づ、俯して足下を見れば、壘々たる赭巖千仞の底に堆高く、刳るが如き懸巖は、巖壁を見るを得ず、直下直ちに赤河原に達す、恰も槍ヶ岳最高點の祉より、右股の谷を俯下せるが如し、此邊寸柏と稱する灌木の生ずるを見たり、右方枯れたる偃松の間を進み、少時にして絶頂に達せり（三時三十分）。

頂上は岩塊多くして狹し、中央に石塊を積み、高さ二尺徑二三尺の石垣ありて、甚だ意外なり、鋸岳は獵夫も未だ登らず、又た登られざる岳と聞きしも、立派なる人跡あるに驚けり、他に草鞋や、木

◎鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を經て駒ヶ岳に登る記　星

片等の遺物あらんと捜せしも見當らざりき、西北方直ちに見ゆる連山は、鋸の最高點なれど、茲に又第二の巖壁深く、山脊を刻み、しかも些の崩巖もなく、眞の絶壁なれば、登攀の望み更になし、只一面赭巖にて蔽はれ、兀々たる山骨は、巨象の遺骸の如し、頂上に三四個の石牌らしきもの、樹立せるを見る此の嶽は北方より登り得るならんと思ひたり、此處よりは途中、絶壁の前に當りて赤河原の覺兵衛の岩と稱する大巖ありて、下る事能はざれど、赤河原より登れば、絶壁の基底に至る事を得れど、登攀するを得ずと、春吉は語れり。

當峰より東北に當り、中の川の溪に突出せる一峰あり、標高我れより低く、甚だ狹き支峰なり、登山の際崩巖の右側壁をなせる峰なり、其山頂を傳ひ、當點に來り得れど、甚だ危險なれば、本嶽に登らんとせば、余の取りし外、先づ途なからんと思はれたり、本岳は鋸岳連山中、最高峰に次での高峰にて、其間の連續は、赤河原の覺兵衛の岩、及絶壁にて、再び絶ゆるを以て、基底にては連絡すれど、頂上にては、別峰の如く分るを以て、何とか之に名稱を附す必要を感ず、例へば富士山上に劒ヶ峰、三島ヶ岳、駒ヶ岳等あるが如く、鋸岳にも各峰を云ひ表はす、名稱あり度く思はれたり。

西北方の眺望は、最高點に遮ぎられ、見るを得ず、西南方遙かに木曾駒、御嶽を望み、天龍川の白砂、其の裾を繞る、仙丈岳は南方手に取る如く、白峰北岳其左に峙ち、東南に駒ヶ岳聳え、東方は烏帽子岳、八丁尾根等を越えて臺ヶ原方面を下瞰す。登りには危險と思ひつゝ、猛進せしが却説て、下山となれば一入危險を增す思ひして、心落ち付かず、一枚の名刺を殘し、四時十五分下山の途に就く、下りは危險一層加はり、巖頭に立ち登りし崩巖を見下せば、心恐れ氣挫け、我知らず脚の慄くを覺えたり、曩に窺きし赤河原の峭壁は、匐はん許りにして過ぎ、步々草をたどり、下り始む、往路に攀ぢし滑なる巖壁は、降下するの危險を思ひて、迂回して崩巖の最頂より、踏占め〳〵下り、右側の岩壁を傳ひ、灌木の下草に身を托しつゝ下る、下りは短き樣見えしも、甚だ長く、數回休息の後漸く無

事赤河原上の山脊の凹部に下るを得、始めて安堵の思あり、顧みて巖上を仰げば、能くも攀ぢたり、降りたるものと、我ながら驚きたり、元來し路を登り、途中偃松を避け、山腹に入り、ヒソの欝林を行く中の川の谷傳ひに、渇と疲れに苦しみつ五時半露營地に歸着す、水も既に没み來りあり、小舍も半は出來居たれば、半日振りに、水を飲みたり、程なく小舍も出來たれば、之に入り、食事を始め、七時終りたり、赤河原上の鋸岳絶壁の基底に至る途は、往路よりも歸路の方路も善く、勞力少なければ、登山者は、此の途に依らるゝを便とす、此の路は今夜の露營地より、山腹に沿ひ、右手に下り、中の川を右手に取りつゝ、常に左方へ行けば、絶壁の上に出づ、之れより偃松に頼り、蹉を下れば、崩巖の基底に達するなり。

此夜天幕の位置惡しく、風上に燃火せしを以て、幕内は温なりしも、煙に咽び、鼻目痛みて堪えず、風除けなどなし騒ぎせり。

## 六、駒ケ岳

二十日、晴　起床四時半、今日も快晴なり、林中の朝は秋の如く冷にして、朝日は森を透して、紫光を發し、炊煙に映じ、甚だ長閑なり、今朝も水遠く、中の川の澤に下りし爲め、炊事大に暇取り、七時十分幕營を引拂ひ駒ケ岳に向ひ發出す、不動山の山腹を進み、不動澤の上に出づ、澤に面する一帶は絶壁にして、赭巖壁立し、下に瀑ありて、不動の瀑と云ふ由なれど、瀑は見えざりき、絶壁に沿ひ國境あり、二丁許り進めば岩層花崗岩となり、處々に崩壊の跡あり、八時信州戸臺より來る駒ケ岳登路に合す、此處に小さき社あり、刀利大權現を祀る、進む事十五分にして花崗岩の砂白き平ある處に出づ、處々に碑あり、途は急傾斜となり樹木少なく、岩多し、偃松は所々にまばらにして、夥多の岩を攀ぢて、十時十七分絶頂に達す、信州の登山路と合してより二時間を費せり、最高點に大己貴命、

◎鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を經て駒ケ岳に登る記　星

◎祖谷山入り　吉永

馬頭觀音の銅像あり、測量部の三角標は何故か切り倒しあり、南には白峰北岳、間の岳、鹽見岳、惡澤岳、魚無河内岳、聖岳等殊に明なり、其他近くは仙丈、遠きは西駒ヶ岳、御嶽、乘鞍岳、白山、燒岳、笠岳、穗高岳、槍ヶ岳、常念岳、大天井岳、燕岳其以北白馬に至る立山及後立山々脈の諸峰雪冠を戴いて、南より北に連立す、雲の峰かと怪まる淺間山の噴煙は、風なきに南に流れ甲州盆地は、一幅の畫圖の如し、駒ヶ岳の裏面、白崩山の稱ある處、肉落ち骨瘦せ、巉岩壘々たるは鋸岳に似たれど、後者の赫巖なるに對し、前者の白色なるは、自ら優美の感をなせり、頂上にて人夫一名を、臺ヶ岳に放還し、中食の後十一時二十分頂上を發し、裏山を國境に沿ひ、仙水峠の岩原に苦しみつゝ、野呂川上流の北澤に下れり。（了）

# 祖谷山入り

吉永虎馬

私は去る明治四十一年の八月、土阿國境に連亘する高山脈を經て劍山に登り、それより德島縣美馬郡東祖谷山村に下り、其の一部を踏みて當高知縣香美郡上韮生村に出でゝ歸りたることがある。本年八月も亦當縣長岡郡東豐永村より東祖谷山村に入り、前年經過したる小川より路を變へて祖谷川に沿ふて下り、又山を越えて西祖谷山村中祖谷に入り、再び祖谷川の流域に出でゝそれより重末と晉橋間の坂路を經て國道に出でゝ歸つた。前後兩回の旅行にて東西兩祖谷山村の大部分を通過し、同地方に關する大體の知識は得た積りではあるが、併し短時日の郵便脚夫的の旅行であるから、勿論精密に種々の事項を取調べたり、又多方面にわたりて、有益なる觀察をするといふ樣な事は出來なかつたのである。同地方は我四國島に於て、四方高山峻嶺に取り圍まれたる、最も僻遠なる土地であるので、未だ餘り多く人に知られず、此の誌上などにも、未だ報告は見つからなかつた樣であるから、誠に不十分なる觀察ではあり、且つは書き方が極めて拙いのであるが、幾分か諸君の御參考にもならんかと

思ふて、少しく綴つて見たのが、次の如きものである。

## (一)東西兩祖谷山村

東西兩祖谷山村は、德島縣美馬郡に屬し、東は海部、那賀、麻植三郡及同郡一宇村に、西は三好郡三名村に隣り、南は高知縣香美、長岡兩郡に界し、北は三好郡三縄、井の內谷、三庄三村並に同郡半田奥山村に接してゐる。而して吉野川の支流祖谷、小祖谷の兩川村內の水を集めて流れ、下流に至りて相合し川崎に於て本流に會ふて居る。東西約十三里、南北七里の廣さを有する大村なれども、村內一の平地なく、民家は其の兩支流並に本流に沿ひたる山側の斜面に點在して多くの集團をなさず、たゞ東祖谷山村大枝は兩村の中心となりて稍大なる集團をつくり官衙、學校等がこゝにある。而して東祖谷山村役場は此の地に、西祖谷山村役場は重末にあるのである。

## (二)四國の高山彙

四國島は、東西に連亘する數條の山脈より、幾多の支脈を分派し、到る處山嶽丘陵の起伏を見ざるはなしといふ、所謂山勝ちの地方ではあるが、高さ二千米突以上に達するが如き高岳はないので、其の最も高きところで、千九百米突位、しかも左樣多くはないので、我山岳會員諸君が登攀して、快哉を呼ぶといふ樣なところは蓋稀れなのである。

私は先づ四國の高山彙を自ら便利の爲め、東西の二群に分つて見たいと思ふ、一は東方にある劍山を盟主としたるもの、一は西方にある石槌山を中心としたるものである、其の成因や構造の事や學術的方面の理論を避けて、當世流の言葉にて、試に此の兩山彙を四國アルプスと稱し、甲を四國東アルプス、乙を四國西アルプスと呼んでは如何かと思ふてゐる。其の四國東アルプスの高峯に取り圍れた

◎祖谷山入り　吉永

◎祖谷山入り　吉水

るのが祖谷山地方で、四國西アルプスの峻嶺に繞られたるのが高知縣土佐郡本川村地方である。今此の兩山彙に屬する高山を高さの順に排列して見ると先づ左の樣になる、これは陸地測量部の五萬分の一地形圖に依りたるものである。

| | |
|---|---|
| 石槌山（天狗岳） | 一九八一 |
| 二の森 | 一九二九、七 |
| 石槌山附近の一峰 | 一九二一、一 |
| 瓶ケ森山 | 一八九六、七 |
| 笹ケ峰 | 一八五九、九 |
| 筒上山 | 一八五九、四 |
| 手箇山 | 一八〇六、五 |
| 劍山 | 一九五五 |
| ジローギュー | 一九二五 |
| 三嶺 | 一八九三、七 |
| 一の森 | 一八七九、五 |
| 矢筈山 | 一八四八、八 |

前に列べたるのが西アルプスに屬し、後のが東アルプスに屬するので、互に比較して見ると西方に少しく優つたものが多いけれども、大體は兄たり難く弟たり難しといつて宜しいと思はれる。今更に兩山彙にて千七百米突以上のものを記して見ると

○四國東アルプス

▲剣　山　一九五五
▲ツローヤユー　一九二五
▲三　嶺　一八九三、七
一の森　一八七九、五
矢筈山　一八四八、八
▲三嶺、天狗塚間の一峰　一八一六
▲天狗塚　一八一三
白髪山　一七六九、九
▲剣山、三嶺間の一峰　一七四一
▲仝　上　一七二四
塔丸　一七一三、三
丸笹山　一七一二
石立山　一七〇八
黒笠山　一七〇三
▲剣山、三嶺間の一峰　一七〇一

○四國西アルプス

▲石槌山(天狗岳)　一九八一
二の森　一九二九
石槌山西側の一峰　一九二一、一
瓶ヶ森山　一八九六、七
笹ヶ峰　一八五九、九
▲筒上山　一八五九、四
▲手箕山　一八〇六、五

◎祖谷山入り　吉永

◎祖谷山入り　吉永

寒風山　一七六五

▲伊豫富士　一七五六、三

▲筒上、石槌間の一峰

伊豫富士、瓶ヶ森間の一峰　一七四六

冠山　一七三六

伊豫富士、瓶ヶ森山間の一峰　一七三二

一七〇一、三

である、而して▲印を附したるものは私のこれまで足跡を印したるところである。

今四國東西兩アルプスを相對照すれば、西アルプスは其の一部特種なる火成岩の爲に構成せらるゝを以て、山容頗る急峻奇拔にして溪谷極めて深く、森林蓊鬱、頂上に至るも尙灌木林の繁茂頗る盛なれども、東アルプスは山容多くは宏大にして森林に乏しく、頂上に至れば草野之を蔽ひ概ね平垣である。これ迄本誌上に於て右兩山彙に關する有益なる報文の表はれたるものは左の如しと記憶してゐる。

○劍山を見さりし記　第三年　第三號　（明治四十一年十月）　塚本樂山君

○石槌登山記　第四年　第一號　（明治四十二年三月）　多田香疇君

○阿波國劍山并に高越山登山記　第四年　第三號　（明治四十二年十一月）　多田香疇君

○劍山の一研究　仝　上　笠井藍水君

○石堂山筑ヶ峰縱走記　第六年　第二號　（明治四十四年七月）　笠井高三郎君

○日本河川志　（其一　四國の吉野川）　第四年　第一號　（明治四十二年三月）　高頭式君

## (三) 吉野川の魚類

吉野川は、源を四國西アルプスに發し、東するに從ふて東アルプス、及其の他の諸水を併せて、太平洋に注ぐところの四國第一の大河である、而して其の所産魚類中の多くが、表四國の南流して、太平洋に注ぐ諸川に産するものと、全く種類を異にし、却つて本土の諸國に産するものと一致するのは特に注意を要する點にして、地理學上より見たる動物分布に就きて、極めて興味ある問題なりと考へるのである。曾て私が其の上流地方に於て採集して田中理學士の鑑定を得たるものゝ內、僅に一山脈を隔てたる高知縣の他の諸川に産せざるものゝ學名は左の如くである。(併し近時甫喜峰に於て疏水工事完成したる爲め、吉野川の水は一部南太平洋に排出せらるゝことゝなつた、故に此等の魚類も漸次南下して舊來の種類と混ずるに至るならんと思ふ)。

1. Pseudogobio esocinus　方言アサガラ
2. Zacco platypus　方言シラハエ
3. Liobagrus reini　方言オコゼ
4. Fluvidraco nudicepus　方言クグ

尙他に小形のヤツメウナギ、マスの一種等もあれども、これ等は未だ鑑定を經ぬので其の學名を記し得ざるは遺憾である。

アユ、ウナギ抔は他と共通に夥しく、産すれども、其の支流山漸く深く水清冽なる地には尙アメノウヲ(アメゴ)(學名未詳)と稱する極めて美麗なるものを多産し、特に祖谷山地方にてはこれが食膳に上る第一美味なるものである。

◎祖谷山入り　吉永

## (四) 祖谷山所生の植物

祖谷山は前に記せしが如く高山に圍まれたる地方にして、土地高く隨て氣候寒けれども其の所産植物は概して我が土佐平地産のもの、並に東京帝國理科大學植物學教室標品室に保存せる二階氏採收阿波國所産平地植物、故奥平氏が伊豫國内に於て採集したるものとを比較するに大差なく、特に注意すべき價値あるものを認めず、されども劍山並に其の附近の高峰には石槌山附近所産のものと共通に生ずる珍種を見るべく、特に劍山植物が豊富にして他に見ざるもの多きは先年登山研究を試みられたる恩師牧野氏の既に證明せられたる所である。

私の專門に研究しつゝある銹菌類並に苔類などには、一も得る所なかりしは試に遺憾とする所である、これ短時日に通過して精密に注意を拂ふ餘地なかりしと、季節の關係もありしならんも、要するに祖谷山地方は植物の好採集地とは決して思はれぬので、專ら之を目的として同地方に旅行せらるゝ方がありとすれば多分失望せらるゝことならんと思ふ。

尙一つ追記し置きたきは、祖谷を去る最後の日、吾橋の民家石垣にてタイトゴメ (Sedum oryzifolium Makino) の多生するを見たことである、本植物は景天科に屬する小植物にて、先年牧野氏が我幡多郡の海岸に於て採集したるものに命名せられたるものにして、其の和名は同地方の方言によりたるものなるが、從來太平洋に沿ひたる諸國の海岸に生ずることは知られて居たが、此の如き四國の脊梁山脈の間に生ずるに至りし分布の經路は稍注意すべき値があると思ふ。

## (五) 祖谷山の農作物

到る處最も多く栽培せられて、收益亦著しき主要農作物は烟草である。全村を通じて殆んど作らぬ

家はなき程の盛況にて、其の栽培によく手の行き届けることや、其の乾燥に專ら力を盡くせることなどを見ば、如何に同地方の生業に重大なる關係を有するかゞよく分るのである。

水田は極めて乏しき故に稻の栽培は甚少けれども、畑作としてはタウモロコシ、アハ、キビ、ヒエ、シコクビエ、ソバ等の類や、ジャガタライモ、サツマイモ、サトイモの一種など可なり盛に作られてゐる、又アヅキ、ダイヅ、ムギ等もよく作られるとの事である、就中シコクビエ (Eleusine coracana Gaertn.) は此地方では其の穗の形狀より「八つ又」と稱せられ、味はまずいけれども團子などに製せられて食はるゝとの事である、土佐伊豫兩國の山間地方などは大概農作物は共通であるが、此の植物だけは作られぬので、初めて私は其の栽培地を見たるとき、其のヲヒジバによく似なる、大なる面白き形態には、一種の興味を喚起せずには、居られなかつたのである。

大根、蕪類や茄子、瓜類等も所在に作られて居るが、併し南瓜は普通に作られて居るのとは異つて、果實の大なる俗稱を百貫といふのが多いのである。三極も又作られて居るが、椿類の栽培と共に我縣の様に多くはないのである、養蠶業は極めて幼稚であるので、桑の栽培は未だ緒に就かぬといつてよいのであるが、追々盛になる見込があるとの事である、私の一知人が土佐から行つて蠶を養つて居るが、極めて成績がよく相當の利益を收めて居る。私は中祖谷の日比原より善德へ越えるマド越にて多くの自然生桑を見たが、彼の近年養蠶業の盛大なる地方に於て大敵と見做されてゐる赤澁菌(Aecidium Mori (Barcl.)Diet.) の被害を認めたのである、これまで隨分諸處にて栽培種には夥しく其の被害を見たが、自然生にては今回が初めてゞである、故に標品として採つてゐるが、將來若し祖谷山にて桑の栽培を盛にせんとすれば、餘程注意しないと大害を被むるに至るならんと考へるのである。

氣候寒き爲めか、柿類を除く外、果樹はよく生ひ立たないとの事である、桃、梨などは結實はすれども昆蟲の爲めに害せらるゝこと甚しく、蜜柑類に至つてはユズの外は全く作れぬとのことである、

◎祖谷山入り　吉永

◎祖谷山入り　吉永

小さき果實を結ぶ李は往々栽培せられて居る、又林檎は割合によく實を結ぶとのことではあるが、未だ改良種を作つて試みられた事はない様である。

## （六）蔓橋

祖谷山に於て最も有名なるものは蔓橋である、祖谷といへば蔓橋を、蔓橋といへば祖谷を聯想する位である、蔓橋は四國では土阿兩國の相接する地方、即ち私の所謂四國東アルプス地方附近のみに存在する、私の縣では香美郡韮生地方にありて今も尚「韮生の蔓橋」なる言葉は、よく私共の耳底に殘つて居る、併し同地方には、可なり大なるものもあつたが、追々に撤去せられて、木橋又は筋金橋に代り、今は同地槇山村百尾（モヽヲ）に僅に一つしか現存して居ないのである、現に本年に至りて、有名なる押（オシ）谷の蔓橋は、取り去られて、筋金橋となり、同地方の一名物を失つたのである、この一つ殘つて居る百尾の橋の運命も、餘り永くはないと思はるゝ。德島縣木頭地方にも、那賀川の上流には、其處此處に架つて居るが、これ等も追々撤去されつゝある。東西兩祖谷山村には現存するものが總て八ある、而して私は蔓橋が何となく、原始的性質を帶び、これが人跡稀れなる幽谷に架せられて居るものを見て、非常に興味を感ずる、所謂蔓橋狂の一人なので、これまで前記の地方で、自渡つて見たのが六、他より架つて居るのを見た丈のが二、先年祖谷旅行の際は八の內、三を渡り、一を他より見て居たのであるが、殘りの四の內には、祖谷川の本流に架りて頗る長く、その構造も甚面白く、眞に蔓橋の本領を發揮したるものがあるとの事を、衆て聞て居たので、是非共渡つて見たく、實は本年の旅行の第一目的はこゝにあつたのである、幸に天氣もよく、豫定の通り旅行を了へたので、今は祖谷山全體の蔓橋中一を上の部落より眺めたのを除くの外、皆渡り試みたので、頗る愉快を感じて居る。私がこれ迄渡つたものを通じて、見ると總計十となる、其の內最長のものは西祖谷山村今久保と善德との間に

架する所謂「善徳の蔓橋」と稱するもので、其の長さが三十三間あるとの事である。次に長くして最も危險を感じたのが東祖谷山村、今井より平へ架するもので、凡そ二十五間位ならんと思ふ、橋幅は普通三四尺位である。いづれも削りたるが如き深谷の兩岸相迫りたる斷崖の邊にて杉、檜、欅等の大樹傳りて生ひ茂りたる地點を撰び、先づ巨大なる蔓二條を架し數條の稍小き蔓五六條を其の間に經とし、兩岸より五六寸位周りある、長さ五尺許の圓木を、約五寸乃至七寸位の間隔をおきて、之を緯として此等の蔓に緊縛しつゝ進むと同時に、別に兩岸に連ねたる欄干となるべき蔓と、主蔓とを上下に絡み、次第に之を密にして、恰も蜘蛛が網を編むが如く、終に中央にて相連絡し、こゝに完成するに至るといふ、而して通常少しく弛れたる橋の中央に於て、水面迄約三丈乃至五丈位ならんと思ふ、(日本名勝地誌などには橋下十八丈とも記してあるがこれは誇張したるものだと思ふ)兩岸の樹枝よりは又數十條の蔓を橋に結び付けて、左右に搖れることを防ぐと同時に、其の重量を支ふること、近來架せらるゝ釣橋と、材料に於てこそ異るところはあれ、其の製式に於ては何等相違する所を見ざるのである。

蔓橋を渡るに、中央に至るに隨ひて少しく搖撼し、兩岸の樹枝之が爲めに動きて已まず、聊か危險を感するのである、併し慣るゝに隨ひては、却て興味を覺え、少しも恐怖の念は起らぬ樣になるのである。私が初めて押谷橋を渡りたる時には、豪ねて聞きたる程の危險も感ぜず、悠々として渡つたのは、同橋の構造が祖谷のそれ等と異り、極めて完全にして、主蔓の外に、檜材を用ひ、尙踏む處は板子にして、其の間隔も甚狹く、且蔓條の欄干頗る密にして、渡る際には恰も蔓の隧道を過ぐるの感ありし故に、決して墜落することなしとの、自信を有せしによる、しかるに祖谷のは前にも述べし如く、全部蔓條のみを用ひ、且つ板子に代ふるに、少しく一面を削りたる又は兩分したる圓木を用ふると、其の間隔甚廣きを以て、其の間隙より窺へば、數丈の下こは濃藍を流したるが如き水を湛へ、或は之

◎祖谷山入り　吉永

◎祖谷山入り　吉永

が岩に激して飛沫雪と散るの狀は、仰山にいへば眞に心臆き目を眩せしむると形容すべき程なれば、私が最初嘗生（スゲおじ）の一橋を渡らんとしたる際の如き、先づ負ひたる荷物を去りて試み、而して後負ひて渡り、それより漸く慣るゝに隨ひて、容易に手ばなしにて渡るに至つたのであるが、今回渡りたる今井、善德等の長橋は決して前の如く、手ばなしにては渡り得ないので、左手にて欄干のそこ、こゝを固く握つて渡つたのである、若し手ばなしにて渡る際、過つて其の横木を踏み外さば、或は其の間隙より直に水中に落ち去るのである、或る人の書きたる蔓橋の記に、土人は此の落つることを防ぐ爲め、豫め腰に長き棒を横に挿して渡り、危險に備ふること記してあるが、これは事實かどうだか明かでない。特に私の閉口したるのは、旅行の數日前、近來稀れなる暴風にあひたる爲め、今井の橋では三、四ヶ處も横木の抜け去りたる處ありて、廣きは二尺程の大穴となりたるところがあつたことがある。私は嘗て其の地方の人々は重量多き荷物を背負ひて、手ばなしにて自若として渡るとの事を聞て居たが、實際私が善德の橋にて見たる數人の男女は、中々細心注意して、私の如く欄干を手繰る様にして渡つたのである、寧ろ私よりも一層注意して、兩手にて一方の欄干を固く握つて渡つたものである。

私は小祖谷の宿で一老人に左の事を聞たのである、橋が長くなれば、それ丈横木の間隔を明けねばならぬといふのは、一は成るべく重量を感じて、蔓條の負擔を輕くするが爲め、横木の數を減じる必要あるのと、一は横木の數が多くて、其の間隔狹ければ多季降雪の場合、こゝに雪を支へて其の重さの爲めに蔓條を損ずる虞があるから、それ等を避くる爲めであるとの事である、又生來身の重きものも、幼少の時より、必要上から練習するによりて渡ることの出來ないものはなく、終生足一部落の外に出でぬといふが如きものはないとの事、又渡橋の際は、いづれも注意を拂ふて居るから、未だ慘事の發生したることはないとの事も、聞いたのである、嗚呼練習、嗚呼注意、今更ながら私は其の價値の大なることを深く感じたのである。

此等の橋は毎年一回（處によりては三年に一回といふ）關係部落民相集りて全部を取り去り、新に集め來りたる材料を用ひて架するさうである、而して短きものは僅に一日にして其の工事を竣るも、長きものは數日を要するといふ、其の主要材料とせらるゝ蔓條はシラクチヅル（サルナシ）獼猴桃（Actinidia arguta Planch.）である。

蔓橋が其の構造不完全ながらも、可なりの重量に堪へ、交通不便極る此等の僻地に於て、從來唯一の交通機關となりて、川を隔てたる兩部落を連絡したるの功績は、實に著大なるものである、然るに近時開明（？）の風、此等の山間にも吹き來り、此の功勞多き趣味に富める原始的遺物が、漸々に撤去せられて、筋金橋などに架へ更へらるゝに至りしは、是非もなきことながら、彼の俗惡極まる搖撼甚しくして危險多きものに代へらるゝのは、實に遺憾千萬に感ずる次第である。幾百年の昔より交通不便を以て外界より絕たれたる此の桃源鄕も、近時郡道の開鑿開始されたれば、數年の後には村の中心大枝までは車行することを得るに至るべく、四方いづれよりするも、一千米突以上の坂路を越えざれば、達することを得ざりし此の地方も、車上悠々として入るを得るに至るの日は、やがて此の趣味多き名物の撤去さるゝ時なることを想はねばならぬ。

祖谷山地方に於ける蔓橋現存地を記して見れば、左の如し。

東祖谷山村
- 菅生（菅生橋）
- 西山（大宮橋）
- 落合（落合橋）
- 若林（浦戸橋）
- 今井（今井橋）

西祖谷山村
- 下名（後田橋）（小祖名（小祖谷橋）
- 善德（善德橋）

尙祖谷山地方は平氏一族の隱れたる地と稱せられ、現に東祖谷山村長阿佐氏の如きは、其の後胤と

◎祖谷山入り　吉永

◎祖谷山入り　吉永

稱し、實物として旗、古文書の類を藏するとのことであるが、未だ一見したることなく、又見ても私には鑑識はつかぬのであるが、兎に角同地方にては風俗、習慣等に就きては、種々面白き事實が發見さるゝ樣である、其の道に明かなる方が、數日留りて取り調べられたなら、多分有益なる事を見出さるゝことであらうと思ふ。私は今回は茲に筆を擱くことゝする。

若し蔓橋を見んが爲めに、同地方へ赴かれんとするならば、土阿國道筋下名より西祖谷山村樫に渡り、吾橋より重末へ越え、善德を經てマド越を越え、中祖谷に入り、それより再び平に越え今井へ渡り、祖谷川を溯りて、順次に見らるゝならば便利ならん、而して劍山に登らるゝならば更に妙ならむ、又劍山を下り、或は小島峠方面よりして、全部を見らるゝ希望ならば、前と反對に路を取らるゝ方よろしからむと思ふ。祖谷山の風景は、山に深林少くして、餘りよろしからず、唯祖谷、松尾川共下流に至りて、稍見るべきものあり、善德、今井の橋のみを見らるゝ丈にても、短時日にては、十分祖谷の大體は窺はるゝことゝ思ふ。大枝には不十分ながらも、宿舍あり、小祖谷、小川、菅生等にも又宿るに足るところはある。

（附言）本稿を草し了りたる後、友人笠井高三郎君より左の如き有益なる通信を得、大に參考となりたるを以て茲に之を附記し、併せて同君より蔓橋の繪葉書を特に寄贈せられたる厚意を深く謝するのである。

「縱より見たる方は恐くは善德橋ならんと存候、小生嘗て綱にて量り候處、善德橋は長さ三十一間、大宮橋は二十間、橋の水際を隔る高さは目測にて候へども、大宮橋最も高く二十間位なるべく、善德は俗に長さ高さ共に三十三尋といへども、高さは十七間位ぐらゐならんと存じ候」

尙阿波名勝案內の記するところ下の如くに御座候

△祖谷川に架するもの

○今井橋　長廿九間、巾五尺

○浦戸橋　長十六間、巾四尺

○大宮橋　長十五間、巾五尺

（湯の瀬橋）　長十二間、巾五尺
　これは今中絶す
○落合橋　長十七間五尺、巾五尺
○菅生橋　長二十間、巾五尺
○善徳橋　長廿七間、巾五尺、水面上十三間餘
△小祖谷川に架するもの
○後田橋　長十間、巾四尺
○小祖谷橋　長十間、巾四尺
△那賀川に架するもの
○海部郡奥木頭村大字北川村字アセチの蔓橋
　長二十間、高八間餘
○同上大字折宇村字菖蒲野の蔓橋
　長十二間、高四間
○同上字下番の蔓橋
　長十一間、高三間
同上字平野の蔓橋
　長十二間、高十二間
　巾は何れも三、四尺なり
　但現時は蔓橋三ヶ處なり
木頭の蔓橋に就ては東京人類學會雜誌第百九十號に一寸記載あれど云々」

◎祖谷山入り　吉永

◎祖國山川森林の荒廢　南方

# 祖國山川森林の荒廢

南方熊楠

紀伊に本邦神祇の多く集ひたまへる土地、歴代聖朝の崇敬淺からず、神社には森林あり、森林は日本には稀有なる熱帶的林相を呈するところあり、貴重なる植物の寶庫となれるところなるに、神社合祀の令一度出でゝより、事理を解せざる俗吏、墮落せる神官、貪慾なる土豪等、相結托して漫に古神社を滅却し、森林を芟除し、稀有なる植物を剪滅し、祖國の山川森林、慘として荒廢せり、所謂天然紀念物を蕩滅するの慘酷なる、本邦未だ嘗て斯くの如く甚だしきはなし、紀州の隱れたる植物學者、南方熊楠氏は、赤手空拳を揮ひてこの無謀の擧に反抗せらるゝ人、備きに荒廢の狀を述べたる長文の書狀を本會々員某氏の手を經て、東京帝國大學の某教授に致されたり、會員某氏は、この書狀を淨寫し、僅かに三十部を印刷されて、記者にも一部を頒たれたるを以て、某氏及び南方氏の承諾を得、二通の中一通を、左に揭載す、文中姦邪の徒を痛擊せるところは、本誌の性質上聊か憚るところあり、姓名はこの頭字（イニシアル）だけを擧げ、或る一二行は止むなく刪除に從へり。

拜啓　先日はがき一枚差上候處、昨朝△△△△△氏より來信有之、當縣植物亂滅之件に付き、小生より自在に意見を、貴下へ申上れば、必ず御讀み被下べき旨、紹介し畧りたる旨、通知有之候、小生は之を機會として、植物のみならず史跡、名所又殊に風俗、里傳等の保存、分ては愛鄉心より推して愛國心を堅固にすることに迄、及ぼせる長き意見書を作り、貴下を經て大學諸士の一覽を煩はさんと存居り候處、舊藩君德川賴倫侯へも一通進じたり、長きもの故一寸寫し畧ること不能、家內に事多く、小兒病氣等の爲め、先はこゝ十日計りかゝり可申、かく申す內にも、諸神社及神社趾の亂潰日々擧行せられ居り（縣郡當局者は之を神社整理と稱ふれども、實は風儀破壞、神社不整理を行ふものなり）一刻も早く、少々なりとも、さし當り意見を陳述すべしと存じ、本狀差上申し候、△△敎授其他と御評議の上、德川侯にも示し合せ、何とか御處置奉願上候、こゝに記す處は、思ひ申ること共を、前後

混雜して記し付申候。第一に那智山濫伐事件は既に「東京朝日」等にも相見え候通り實に危險極まる事にて、新宮町のTと申す勢力家（實は巨盜如き者）、六十歳計り、此者數年前より、那智山神官、及び色川村等山の附近の人民をおだてまくり、種々證據物を集め、行政裁判所へ那智山下附の事を訴へ出し、最初は農商務省の勝訴なりしに更に證據を集め

尙西牟婁郡長Kと申す人より、熊楠は那智山に居ること年久く、證據品尤も多く寫し居るときゝKを經て小生に右一切の證據文書を借出さんことを求めらる、其ときの狀は、今に保存、前年其筋へも出し、又昨年當路の官人にも見せ候、別にかまはぬことながら、政府の公吏たる人が、自ら政府に對し、人民方の利益になる文書を集むる周旋などするは、甚だ如何の事と存申候。

去冬遂に農商務省の敗訴に相成り、山林は那智神社と色川村へ下り、大林區署よりは何時伐木するもかまひなしとの許可ありしとて、斫りにかゝる處を、小生聞込み、東京の新聞へ出せしにて、それより大物議となり、縣知事も兼て神林の大濫伐にて、內外に評判を惡くせる罪滅ぼしに、倉皇自ら行きて現狀を視察し、右山林を保安林に編入せんと苦心するを聞き、奸徒等私訴を起し、下戻入費等十六萬圓に對する右山林差押へ强行公賣を提訟し、其當日急にT外三名計り（內に縣會議員あり）書類を調べられ、本月十五日當監獄未決監に收容、今に面會も許されず、當地よりは檢事書記等十四五日、新宮町へ出張書類を調査せり、小生初め此姦徒より承りしは、證據品百五十點とか、三百點とかありしとのことなり、然るに小生知る所にては、熊野三山の荒廢甚しき今日、新宮には多少足利氏時代の神寶文書あるも、本宮には何んにもなく、那智には神寶三四件をのこすのみ、目錄は多少存するが（それも小生手許にはあるが、那智山には只今ありやなしや分らず）何んたる證據などは無し、然るに百五十點も三百點もあるとは、實に稀代の事と存居候處、今回彼輩入獄の理由は、噂さによれば文書僞造の廉なる由、大抵かゝる古文書は、文體前後を專門の文士に見せたら、早速眞僞は分るものに候、

然るにかゝる胡亂過多の證據品を取り上げ、日本有數の山林を忽ち下附せしこと甚だ怪まれ申候、彼徒の書上中にも三萬圓は運動費（惡く言はゞ賄賂）に使ふたと書きあり、而して色川村のみの下附山林を伐らば、二十萬圓村へ入る、一戸に割り付たら知れたものなり、此内十二萬圓は辯護士に渡す約束の由、つまり他處の人々が濡れ手で粟を攫み、村民はほんの器械につかはれ、實際一人に付き二三錢の益を得るのみ、扨靈山の瀧水を蓄ふる爲の山林は、永く伐盡され瀧は涸れ、山は崩れ、遂に禿山となり、地のものが地に住めぬことゝなるに候。

維新のとき諸藩侯伯の城を取り上げたるなど、止を得ず無理を行ひしこと多し、大阪邊には之が爲め諸藩へ金を貸したるが返らず、今は乞食などする人甚多し、それすら國家大事には致し方なしとあきらめ居るなり、然るに足利幕臣北條又南北朝の頃の證文、たとひ實に有りたりとて、山林を下附せねばならぬ程の效力あるものに非ず。

殊に南北朝の頃の證文には、實際自分の手許になき財產不動產を寄附の文書多し、乃ち勝つて手に入たら、其ときは寄進することゝ間違なしといふことで、熊楠が百萬圓の小切手をふり出すと同じ事なり、新田義宗など、當時身を容るゝに由なく、死んだ年月住處さへ分らず、そんな人の寄進狀が、何の效力あるべきや、十年の役に西鄉が出した紙幣を、正貨に引換へんことを强請するに同じ。

因て思ふにかゝる古文書などを證として、今後も維新前のことを爭ひ出し、山林土地返附を求るを聽さば。其弊に堪へざるべければ、何卒少々の無理はそのまゝ押通し、名勝の地の山林等、已に官有となり、國有となりたるものは、一切いかなる理由有るも、人民に下附せぬ樣願上度事なり。

本宮の大社なりしことは、小生も之を疑はず、然るに是又本宮領なりしとかいふことは、舊神官の末葉鳥居などいふものが訴訟して、拾ひ子谷（東西牟婁郡の間八十町に亘る熊野には、今日古熊野街道の面影を百分の一たりとも、偲ばしめる所は、此所あるのみ、但し古への熊野本宮參詣の正路に

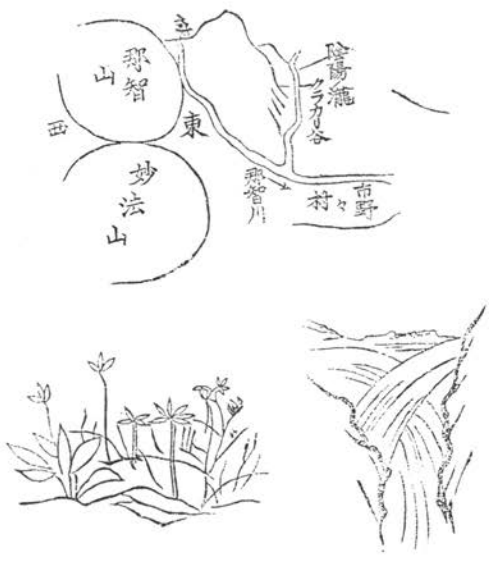
は非ず、大學目錄に野中とあるは此谷のことなり、宇井縫藏が近く見出せしキシウシダ、小生發見の⟨葉なき熊野丁子ごけ、又從來四國で見出し居りしヤハズアヂサイ、結菌中尤も美艷なるCrirraria violacea　其他小生一々おぼへぬが、分布學上珍とするに堪ざるもの甚多く、且つ行歩少しも嶮ならぬ故、相應の保護を加へ、一層繁殖させなんには、最も植物學の實察をなすに好適の地なり、此拾ひ子谷の外に、田邊より本宮に行く間に、今日雜樹林の繁殖せる所とては半町もなし、少々あるは例の杉林にて、杉林の下には、何とて珍しき植物なきは、御存知の通りなり）此拾ひ子谷も、行政裁判所には、已に鳥居等の手に渡りしに、此者此谷が手に入らぬ内から、大放蕩を始め、爲に負債多く、負債の爲に此林を人に押へられんとするを見、同味のものども大に憧て、只今私訴を起し、互ひに攻伐中なり、扨山林中の要部、乃ち杉檜等の林は、本年六月か七月の「日本及日本人」に河東碧梧桐の俳日記に出たる通り、悉く皮を剝し、誰が訴訟に勝つも、必ず死なねばならぬ樣になしあるなり、實に殘酷極まる不仁の所行なり、而して前に申す雜木林、乃ち希珍の植物多き部分はシデ、ミヅウメ（樺の一種）サルタ（ヒメシャラノキ）等あまり利にならぬものゝみ故、今もそのまゝ置きあり、此訴訟違の一人は、小生知人にて。冒險の徒乍ら、小生のことはよく聞く故に、小生は小生家内の病氣少く快くなり次第、自ら行き、何とか一日も濫伐を延期させんとし、其者も已に應諾し居れば、此上其者と小生と二人して、村人關係者に說けば、多分少時間は延引すべきも、小生には有力の後楯なく、云はゞムラッポウに虛言を吐きに行くやうなもの故、甚面白からぬなり。何とかして那智の事は先づ右樣にて一寸濫伐はせぬから

知事自ら色川其他八ヶ村計りの人民總代を自邸に招き、伐木思ひ止まる樣、喩せしも中々聞入れず、色々說いた上、無理に納得させ、保安林にせしなり、之をなすにT等の奸徒世に有りては、中々面倒故、其間だ贅罪を追ひて、入監せしめたる苦衷と相見え候、要はかゝる胡亂な訴訟を、十分審査

せずに、僞文書を採用した行政裁判所の大手落ちに候。

「又新聞紙報ずる所ろに據れば、彼の奸徒輩、那智の神官氏子總代等と共謀し、那智夫須美（フスミ）神社が、Tより拾六萬圓の借金ありと僞證文を作らしめ實際、Tが山林下戻の運動に出したる金は三萬圓なるに、十三萬圓丸儲けし、其返禮に、三萬圓を神官以下に贈與の約束にて、此僞證文を新宮裁判所に提出して、即時山林差押へ强行公費を求め、認可を得る所を、兼て犯罪構成を待ち設け居たる警官に、家宅捜索を受け、T始め神官等も、已に田邊監獄、未決囚中に收容されたるとなり」。

右の拾ひ子谷（一部は西牟婁郡一部は東牟婁郡）の雜木林を、保安林にすべき樣、至急御運動を願ふなり。




又小生自らは已に採集を了へた故、別にさしかまひのなきこと乍ら、那智參詣の次でに、同山中最勝の植物區として觀察すべきクラガリ谷（陰陽の瀧とて如圖二流の小瀑布交錯して下る瀧あり）は、珍植物殊に羊齒類リウビンタイ、スデヒトツバ、エダウチホングウシダ、ヒロハノアツイタ、アミシダ其他甚多し（標品の一部は牧野氏に去年おくれり）たとへば岩窪一尺四方計りの內に落葉落重なれるにルリシャクジャウ、ヒナノシャクジャウ、ワウトウクハとホンゴーソウ又 Xylaria filiforme と覺しき硬囊子菌混生する處あり、秋になれば帽菌夥く生じ、

夜光るものもあり、中々三年やそこらの滯留では、其十分一も圖し上ること不成、實に幽邃夏なほ冷き所なり、然るにUといふ男、或る技手にすゝめられ、此瀧の水を以て、水力電氣を起し、新宮より串本迄十餘里間の町村に電燈を點ずべしとて會社を發起し、その爲に自分が管する天滿銀行の金參萬圓を横領の廉を以て、三年半の所刑を受けしを不當とし、只今上告中なり、凡そ一年も過れば入獄するかも知れず、此會社の爲には、くらがり谷の一側の民有林を已に伐盡にかゝり、くらがり谷より西側の向ふ山官林をも、夥く伐盡するつもりにて、已に其許可を得たりと、右の者の書記で半年處刑せられ、十日計り前に出獄し、拙宅へ來れる者の話しなり、扨いよ〳〵此瀧の近傍を、かく亂伐荒廢させて、所期の水力電氣が出來、長く續き得るかといふに、抑も一の瀧（乃ち八十餘丈といふ大瀧、其れは八十餘丈か知らぬが、百七十年計り前に樹木少くなりし爲め、三分一强埋もれり、御承知の如く一の瀧下にアルプス山で見る Boulders の如き大滑落岩塊多きは、此の出來事の記念で濫伐の好記念なり）先日大阪毎日（今年八月二十日分）に據るに、確かな技師の言には、那智の一の瀧と陰陽瀧との水の全力を用ふるも、八百馬力しか力を生せぬとのことなり、そんなあやふやなことを强行して、此くらがり谷の勝景植物を滅却するは、いかにも惜きのみならず、折角大金かけ岩石開鑿山林滅除した後には、其水力果して乏しく、水源は涸れ、數年ならずして此の電燈會社も、つぶるゝとせば、實に隨候の珠を雀に擲ち失ふやうなことで、つまらぬことゝ存候、那智山〳〵と云へど、已に貴下等二十餘年前見舞はれしときと、打ちかはり、瀧の邊は悉く老杉老樟を伐り去られ、瀧下へ人力車が直に付くやうになり、瀧の上は向ふ山官林（これも年々濫伐の爲め實は數へるほどしか大木無し）。の禿山となり、僅かに今度濫伐せんとする寺山を、のこすほどのこと故。

寺山は大樫の密林なり、古へ瀧水を蓄へ、四時涸落せず、其實は米穀少なき山民の食常とするに任せ、材木の用を爲さぬものなれば、濫伐の憂えなしとて、此樹を撰み植付しと申す、然るに昨今大

樫の木に、價格出で來りし故、之を伐んとて訴訟起せしなり。

何卒此くらがり谷附近は、一切保安林とする樣、御運動を願ひ度きなり、たとひ水力電氣のこと頓挫して官林の濫伐は止るとするも、其近傍の民有林、かくの如く濫伐さるゝときは、色々の弊事を生じ、遂には久しからずして此谷も、濫伐する方がましといふやうに、荒廢するに及ばん。

小生八年計り前此邊でリウビンタイを多く見出し、二本人に餽らんとて、小きものを掘り來り、宿所の庭に植置しに、村民等之を伺ひ知り、色々傳唱して、遂には新宮の新聞に出で、南方はクラガリ谷で、黃金（コガネ）しだを發見（ヒラ）せり、これは黃金と同重量で賣買の價あり、（小生の知人が、當時土佐と田邊の間には、平瀨長者介（ヒラセヤヂヤガイ）を見出し、小生に鑑定を求め來り、小生の指圖で京の平瀨與三郎氏に賣與せしことを、きゝ違へ作り出せしならん）とて、新宮始め七八里の距離の所より、件のリウビンタイを求めに來り、那智の某といふ百姓、庭園中の梅樹下の芋畑を、悉くほりかえし、件のリウビンタイを盛んに作る、然るにいかなることにや、リウビンタイ盛んにはえ出し、近所を害し、其畑は、無用のものとなる、所が一向誰も買ひに來らず、南方は吾輩を誑かしたとて、大に憤り居るを見て、おかしく、汝等は皆な猿智惠で、人のすることを私かにまねし、有りもせぬ風說を信ずるから、こんな災難が起るのぢやと、逆まに嘲弄しやりしことあり、又當田邊より二里半計りに奇絕峽（キゼツキヤウ）とて、甚だ好景の谷一里計りつゞけるがあり、美景は耶馬溪に優れること數等なる上珍植物多し、此邊に染物屋一軒あり、紺をそめて忽ち庭より走り下り、溪水で洗ふなり、その溪の岩上に、アハモリ升麻多し、小生そこへ行しに、村の僧來り、此草の名を訪ふ、小生之はアハモリ草とて、昔しどこの國にも婦人の病に用ひしなりと云しに、七日計りへて行けば、はゝや一本もなし、いかなることゝ伺ひますに、件んの紺屋、自宅の庭同樣の近さにある件の岩岸にある、アハモリ升麻を一切引き抜き、自宅の構內の小便桶を埋めし側らの、芋を引きぬき、その跡へ悉く栽付しに、何條たまら

ん、アハモリ草は悉く枯死しあり、萬事此類で、何にか話すと、忽ちその物を自宅へ持行き、栽え枯すこと、大はやりにてこまつたものなり。

ナチシダの生へた邊は、八九年前より伐木せし故、今は甚少くなれるならん、ユノミヲシダは湯峰に七本しかなく、それも新宮の中學生など、むやみに引きとり、十町も歩まぬ内に捨て去る故に、無論今は絶滅ならん、ホングウシダは本宮の生出で、甚綿密なる小學校長に精査せしめしに、本宮邊に一本もなし、(當地近傍にはあり)ナチシダは小生當郡水上(ミナカミ)と申す處ユノミヲシダは那智の金山(カナヤマ)といふ所には、少々見出せしも、今はありや否不知、ガンセキランと申すものは、小生は圖のみ見た計り、實物は枯葉すら拜見せず、これは古へは熊野に多く、見(ケン)にして、生姜の代りに、祭日の料理に用ひしほど多かりしと申す(見(ケン)とは熊野は魚少なき所故、今もカシウイモを横にきり、蒲鉾の代りにつかひ、目を怡ばしめ、味を助くるその如く、客を懌ばすべきShowなり)紫草は近く迄、此田邊邊の山野が名産なりしが、今は一本もなし、紫草を見たものなし、ホタルカヅラ、ヒメナミキ何れも此田邊邊の出立松原に多くあり、開花の節甚だ行客の眼を怡ばしめたり、然るに四年計り前に小學校建築といふ名目の下に、此出立松原を悉く伐り(村民松を抱えて哭するを、もぎはなして、伐り悉せしなり)し爲め絶滅す、其松は白蟻にかまれ、小學用にならず、今に幾分を腐らせ放捨し置く、扨魚類、田邊灣へ來ること少なくなり、夏日は蔭なく、病客多くなり、大閉口、其學校もかゝるつまらぬ木で、建し故、頽れ落る、此出立松原は、萬葉集にも顯はれ、元祿の頃淺野左衛門佐といふ人、數萬本を植ゑ副しなり、こゝに載する所の紫草ホタルカヅラ等は、他にも産所あれば、はざ〳〵惜むべきものに非ず、然し素人の考えとちがひ、植物の全滅といふことは、一寸した範圍の變更よりして、忽ち一齊に起り、そのときいかにあはてるも容易に恢復し得ぬを、小生まのあたり見て證據に申すなり、萬呂(マロ)村の天王の社には、大葉ヤドリギ多く、中には寄主たるシヒノキよ

◎祖國山川森林の荒廢　南方

りも二倍も長きあり、何れも秋末に紫褐色の異樣の花を開く、小生は山中で此木多少見しも、此處の如く、年々盛に花實あるを見しことなし、然るにこれも俗吏等、むちやくちやに神社の威嚴を持つには、神林を掃除すべしと嚴命し、さなきだに落枝枯葉を盜み、焚料としたき、愚夫共、得たりかしこし、官の御諚なりとて、神林といふ神林へは悉く押しかけ、落葉をかき取り、土を減らし、又小き鋸を持行き、少々づゝ樹木を挽き傷け、秋枯木となりかゝるを、忽ち枯損の徴ありとて、之を伐り去るなり、下芳養村の託言の神社は、甚古き社にて、古へ人籟を享したりとて、近年迄も「髭女郎（ヒンヂヨラウ）」と名け、少女を撰み、人牲に擬してそなへし大なる冬青の樹あり、甚古いものなり、その社の四周に吉祥草とタチクラマゴケ密生し、甚美なり、然るに官命とて掃除計りする故今は一本もなし、別に惜むべきことならねど、つまりは件の老大の冬青樹を枯らすことゝなる、當田邊の鬪鷄權現のくらがり山の神林、亦中々のものにて、當縣で平地には一寸見られぬ密林なり、これも公園〳〵といふて、社を見下し遊宴場を立るとて、樹を枯らし、腐葉土 humus の速成を防ぎし故、年々枯れ行くを、伐りちらし、此山古來有名の冬蟲夏草（西印度の Guepe Vegtale と等く、圖の如き大冬蟲夏草を生ず、此他ミゝズ、ムカデ等にも、それ〴〵別種の冬蟲夏草を生ず）は今日甚少なくなれり。




ヌリトラノヲ、ミヤマウヅラ、ツルカウジ我海邊の低地に珍らしく、此上にありしが、みな絶滅す、ハマクワガタ牧野氏説に希種の由、これも少くなりゆく、三百年計りの老樟甚だ健康なるがあり、凡そ紀州の樟樹は、古くなると必ず圖の如き Ptychogaster の新種を生ず



此新種のブチコガストルは、英國博物館のSmith孃に贈りしに、多忙なりとて今に名付けず、何に致せ、珍らしき新種なり、もし名付けくるゝ人あらば、小生は多量に進上せん、彼孃多忙にして命名に遑あらずとのこと故、他の人に命名しもらふも、かまひなし、小生書籍至て坐右に少なく、書籍を持て採集すると、色々の僻斷 Préjudice を生じ、田中芳男君の所謂、書物の方が正しく、天然物が間違つたやうに見えるもの故、書籍なしに、片ばしから圖を取り居れり、此 Pt. は Pt.-albus Corda と同大形の胞子あれど albus の胞子淡黃赤色なるかはり黃灰色、又 albus のは滑面なるに、これのは刺あり、又は條理あり。

又一種の Peziza を生ず、それより必ず枯損し始める、然るに此老樟には幾年見るもそんなものなし、枝條蓊鬱として其樹株の下より清水斷ず下り、神池に注ぐ、實にくらがり山の名に背かず、官有として置しを、拂ひ下て伐んとするものあり（其者は小生の妻の一族）因て前社司（拙妻の亡父）神林枯滅して、神威を損せんことを憂ひ、いかなる事情の下にも伐木せぬ條件で、神林を拂下げ、社有とせしなり、然るに小生の舅二年前死亡後の神主、忽ち世話人と申し合せ、右の健壯の大樟を、枯損木と稱し、きり盡し、根迄堀り賣り、神泉全く滅す、小生之を知ず、珍らしき健壯大樟の寫眞をとり、保勝會長德川侯へ呈せんと、六月末に行しに、右の次第故、大に呆れ、郡役所へかけあふに、枝の一部に枯損ありし故、枯損木なりといふ、それは鳥が巢を作りたるなり、而して此樹を掘り取るとて、わざと亂暴に四方へあてちらし、他のマキ、冬青等の樹十三本を損傷せしむ、是れ又枯損木を作り伐らん爲なり、因て甚く抗議せしに、郡長止を得ず、件の社の社務所より、世話人を集め語る、其最中に發頭人（前郡長たりし人）口より誕出で動くこと能はず、戸板へのせ宅へ歸り、五日計り樟のことのみ云ひちらし、狂死す、外に今二本の大樟を枯損木と稱し、已に伐採の許可を得たるも、小生見るに少しも枯損の趣なし、これは殘る、又縣廳への書上には、此社の林に樟木二十五本ありとあり、然る

◎祖國山川森林の荒廢　南方

◎祖國山川森林の荒廢　南方

に小生自ら行き見るに、右の三本しかなし、凡て地方今日のこと虛僞のみ行はるゝこと斯如、○又公園々々とむやみに神林を切り開き、裸かになし、博愛場又は密淫處を作る例多し、此熱地で山を裸にすること故、熱さ甚しく、公園とした所が、他所より人が來る所に非ず、材民は樹林なくなると、神威薄くなり、敬神の念いよ〳〵少くなるなり、はがきにて申上しホルトノキ、ミヅキ、クマノミヅキ、オガタマノキ、カラスノサンセウの大木一二丈のもの。自生のタラヨウ一丈餘のものなどは、何の用もなきもの故、僅かに神社の森を Asylum として、今日迄生を聊せしなり、それが突然甚だ少なくなり行くは、是が爲なり、ホルトノキは小生のみならず、當地方で久く顯花植物を集むる人々にきくも、どんなものか知らず、近古迄多かりしは、此邊で蘭法醫が、ホルトガルの油とて、オレーフ油の代りに、此木より油多くとりし記あるにて知らる、漸く三本を見出せしが、一本は忽ち移し去られ、生死不知、一本は例の神林清潔法の爲め枯死、一本あれど道路傍にあること故、今は無論切られたるならん、跡ノウラ浦といふ村に、山田の神社とて、山田の大蛇を祭る古社あり、毎年祭に大蛇の形を、になひあるきし甚勝景の地なり、社殿の傍に唯一本バクチノ木を見出す、只今花も實もあり、又伊勢大神宮等で古式に火を燧キリ出すに用ひしといふヤマビハの木あり、此社も廢社となり、樹木をきらるゝ所なれど、之を切ると此大字中に、こゝにしかなき飲用水の大清泉、一丈四方ほどのものが、濁り涸れるなり、其由を申し立させ、今に伐らずにあり、然し神が廢せられたること故、早晩件の木は亡び、當國に花果ある此等の木は見るを得ざることゝなるべし。

バクチの木を、古へ當國より一本加賀金澤へ持行き植し人あり、花さくといふ、栗山昇平とて熱心な植物學好きの人、廣島幼年學校教師なるが、當地方に、古へ此木を產せしと聞き、色々さがすカに一本もなし、宇井縫藏といふ人、僅に一本見出す、それも神社合祀の爲め今はなし、次に例の神シマ島にて多く見出すも、老木なき故、花果なし、止を得ず花果を見ん爲め、金澤へ旅行せしことあり、

扨小生と伴ひ、右の跡浦で一本始て花果あるを見出しなり、卽ち地方合祀勵行の爲め、土地固有の珍植物が、花果あるもの全く亡びて、他州へ往きて僅かに見得ることゝなりしなり。

西牟婁郡周參見（スサミ）浦の稻積（イナヅミ）島は、樹木欝陶、蚊蚋多くとても、寫眞をとることもならぬほどの樹木多き小島なり、神島と等しく、此島神甚だ樹を惜むと唱へて、誰も四時以後住（トドマ）るものなく、又草木をとらず、小生も此島固有の名產タニワタリ（植物名彙にタニワタシ Asplenium Nidus L.）一本とりにやりしに、杉の幼木一本買ひ、代りに植え返りしなり、珍木アコウノキもあり、習慣として古來タニワタリを少々とるに、必ず同數の幼木を植しめしなり、然るに例の合祀の爲め、此島周參見の汽船の着く所に近きを便利とし、此頃は大阪より植木屋多く入りこみ、何のわけもなく、夥く引ぬき去る由、神社を置かば例の草木鳥獸採るを禁ずる制札の權利があるから、制限自在なるも、神社なき故、惡行勝手次第なり。

御承知の古座浦の黑島も、此稻積と並んでタニワタリの名所なり、小生八年前行き、同島植物片ばしから採りしに、其頃は一本もなく、高芝下里（タカシハシモサト）抔いふ村の旅宿抔に、栽たるもの多少ありしのみ、去年兒玉親輔君行しときは、多少黑島にありしと聞く、然しとてもかく、採集頻りにては、葉の長二尺にも及ぶ大なるものは、なからんと存候、那智の秋海棠、亦此例で、一の瀧の附近に七八年迄は、一二本づゝありしが、七年前にたゞ一本を見る、其一本は小生之を採り保存す、扨其後は一本もなし、もし今あらば、そは寺院等に植たる品が、復原して野生となりしものならん、野生は人家に栽るものに比して、甚大く又殊に多汁なり、花の數少なく且つ美ならず、那智には寺院多かりし故アヤメ、セリバワウレン、キリシマ、ハクチヤウゲ、イワフヂ、シヾミバナ又芭蕉も野生することあり、古老にきくに、何れも今は野なれど、昔し寺院の庭たりし也。

神島のこと、柳田氏を經て尊慮を煩はせしが、これは村長比較的に物の分つた人にて、遂に小生の

◎祖國山川森林の荒廢　南方

意に隨ひ、下た木を三百圓で賣りありし內、七百貫目は已に切りたる故、その代價を引き去り、餘分を見積り、入札人え返却することゝ、四五日前村會で決議、ワンジュは年に只今五升しかとれず、扨古來の習慣で、京都の數珠屋え賣る二百一顆を、數珠一聯として三十錢の卸し賣りなり、これは今日物價貴きに、いかにも不當に賤價なれば、買はねば買ふてもらはずとも可なりとの決心で、先づ一聯九十錢位ゐに賣ることに致させ、其內又橫濱の外人等へ賣り先きを得らるることゝ致候、巡禮など此豆を持たば、旅中蛇蝮にかまれぬとて、買ひに來り、役場にて賣るなり（英國の北部にも Virgin Mary's Nut と稱し、熱地より流れよるシトッブを數珠の親玉とし、巫蠱 Witches 邪視 Evil Eye を避くる風有りとのこと）只今花盛んに開き居り、小生右の村長と近日寫眞とりに行く故、よく出來たら一葉可差上候、市江と申す所、此田邊より五里計りの浦なり、そこにもある由なれど實らず（此市江の社より前日宇井氏キキャウランを發見す、これも只今は栽培品は湯淺町にあれど、自生はとんと少なし、これらは口外すれば忽ち取盡さる、又口外せずとも、已に合祀せる跡故早晩絕滅なり。

此市江といふ所は、不便極まれる海濱の小村にて、尤も近き他村へ、何れえ歩むも二里計あり、郵便配達夫、每度面倒がり、書狀を沙の中え藏しかへり、數日に一度、藏した書狀多くなりて、後配達するので、罪に落るほどのことなり、故に數里はなれた所へ合祀されて、後は小兒の名附け、其他に自分等祖先來の神に詣ること不叶苦み居れり、本縣合祀勵行一村一社の制を强行して、神社亂滅由緖混亂、人民嚮ふ所を失ひ、淫祠邪魅盛んに行はれ、官公吏已に詐道脅迫を以て神樣を奪ひ得る、人民亦何んなりして、官を欺くが宜しといふやうなことで、當縣官公吏の犯罪（村長の）全國第一たり、加るに高野、熊野其の他に山林濫伐、僞證拂下の罪人多く生じ、當該官當局亦之れを悔ること甚しけれども、今度は人民の方一層狡猾になり、小生千辛萬苦して折角數千の私資金を費し、多大の年月を消して作りたるプレバラート（主として黴菌、淡生藻、粘菌は當縣及び十津川にて、已

に百種迄見出し、大英博物館に列品せり）の洩れ損するをも顧みず、去年遂に牢舎につながるゝ迄も、奔走説得して保留せる神社多きも、今では反つて神社を置いた所迄も、神林を伐るもの多く、小生の親戚すら、前金を置きまはり、神林を伐り賣買してコンミッションを獲て營業とするものあり、實に困り切たことに御座候。

日置川筋の神社合祀は、實に甚しく（去年三月二十三日頃、乃ち衆議院閉會前日の官報で御覽被下べき通り、代議士中村啓次郎氏の神社合祀に關する長演説あり、これは小生が起草して、中村氏が整頓したるを、演舌せしものに候、其中にも見ゆ）三十社四十社を、一社にあつめ、悉く其神林を伐りたる所多く、又今も盛んに伐り盡し居り、人民小兒の名付け等に、神社え詣るに、往復五里、甚きは十里を歩まねばならず、染物屋（祭りの幟）果物屋菓子小賣等細民、神社に於て生を營しもの、みな業を失ひ加るにもと官公吏たりし人、他縣より大商巨富を誘ひ來り、訴訟して打ち勝ち、到處山林を濫伐し、規則を顧みず、徑三四寸の木をすら伐り殘さず、多數無賴の人足、村落に充滿し、喧嘩爭鬪、野中村でのみ、去年中に人の妻娘失踪せしもの八人あり、拔木亂伐し畢り、其人々去るあとは、戰爭後の如く、村に木もなく、神森もなく、何んにもなく、只々荒れ果るのみに有之、紀州到る處ろ、山林といふ山林、多くは此傳にて荒され居り候、素より跡へ木を植付る備へもなければ、跡地にスヽキ、チガヤ等を生ずるのみ、牛羊を牧することすら成らず、土石崩壞、年々風災洪水の害聞到らざるなく、實に多事多患の地と相成居申候、此他地方官公吏自分の位置を繼續せんとて、入りもせぬ工事を起し、村民を苦しめ、入らぬ所にトンネルを通じ、車道を作ること止まず、扨其工事成る頃は、已に他にそれよりよき工事出來上る爲め、折角の骨折りも徒勞となり、徒らに植物の絕滅、岩土の崩壞を見るのみ、慨歎の至りに御座候。

山林等は、國家經濟の大體にも關することゝ故、微生等智慧の及ぶ所に非ずとして、第一に植物保存

の點のみより願はしきは、閣下等何とか一日を躊躇せず、合從して德川賴倫侯に話し（此人は貴族ぶらず、甚だ好き人物で、いかにも度量寬弘氣宇闊達の所あり、小生も在英のとき、毎々前え出て酒を飲み、くだをまきたり）差し當り當紀伊國は三好敎授の植學講義にも見る如く、土は本州ながら生物帶は熱帶半熱帶のもの多き、まことに可惜地なれば（英國でコーンウヲール州又ジャーシー、ガーンゼーのみに佛國と同樣のものある如く）學者の一と通りの研究がせめてすむ迄（事務行政上實際何の害なきことなれば）

生物及び古物、勝景、史跡、（殊に近年歐洲には基督敎の爲に、全く屑片しか止めぬをすら、種々盡力して搜索し居る有史前史跡、又一國の民が、一國を愛するは、一鄕一村の民が一鄕一村を愛する心に由るものなれば、其一村一大字一小字に就ての民俗 Volkskunde の調々の、一と通りすむ間だ、なるべく舊慣土風屑譚里傳を保存する樣）土俗、里風を保存する爲めに、已に全縣神社の五分の四を合祀し畢り、全國中には合祀勵行第二位に位する此和歌山縣

本年六月二十五日大阪每日に據れば、神社合祀の尤も勵行されしは、伊勢熊野（日本で尤も神社の本尊たる所）で乃ち

| | 現存 | 滅却 | 殘存ノ社數ヲ合祀前ニ存セシ社數ニ對スル割分 |
|---|---|---|---|
| 三　重 | 942 | 5547 | 1/6.8+ |
| 和歌山 | 790 | 2923 | 1/4.7 exactly |
| 愛　媛 | 2027 | 3349 | 1/2.6+ |
| 埼　玉 | 3508 | 3869 | 1/2.1+ |
| 長　野 | 3834 | 2997 | 1/1.2+ |

長野は全社數の二分一未滿、埼玉は二分一强、愛媛は三分一未滿に減じたるに和歌山縣は殆ど五分の一、三重縣は殆んど七分の一に減少せるなり。

今年のことは知る可らざるも、合祀一向行はれざる縣多く、たとへば秋田縣か青森縣は、昨年六月迄に僅かに四社を減じ、北海道は全道で僅かに十四社を減せりと申す、乃ち此合祀なるもの、各府縣思ひ〳〵に行ひ、或は行はれ、或は行はれず、古跡又珍生物保護の必要少き地にして、反て合祀多きを知るべし、むちやくちやなり。

の神社合祀を、此上全く中止し、又其神社跡は（乃ち神森古墳古建築の社殿等は）當分遙拜所として、神社同前に尊敬し、從來通り鳥獸竹木を採り、建物附屬品を破損するを嚴禁し、塚碑石燈籠手水鉢を移動するを禁じ、徐かに中央政府又大學、學會等より、人を派し、實在を調査するを俟つ事との一事を、至急何とか御勸告被下ずや。

今日とても東西牟婁郡及び日高郡には、小生の說を容れ、多少殘存せる神社あり、又已に合祠はされながら、其あと地跡建築、そのまゝ殘れるもあり、甚しきは人民屈强にして、遂に復舊せるもあり、和歌山縣廳も、最初神社をなるべく多く潰して、高名せんと心がけ、自治政成績展覽會を、一昨年頃高野で催せしとき、神社を滅却せる數多きを、自治成績の一に數へ立て、特に他縣に擢んでて、最初は五百圓なりしを、六千圓迄基本金を上げ、六千圓の基本金なき社を悉く合祀し（實際六千圓を積み得る社は一つもなし）又一村一社の制を設け、直徑五里六里、往復の大村にすら、一社しか殘立を許さず、之が爲め御承知の熊野九十九王子社、乃ち諸帝王が一步三禮し玉へる熊野沿道の諸古社は、三四を除き悉く滅却、神林は公賣にさる、然るに小生中村啓次郎氏に托し、平田大臣に滅却濫伐の慘狀の寫眞を示してより、大臣大に驚き、訓示ありてより、基本金無くとも、維持の見込ある社は、存立を許すことゝなりしも、困り切たことは、當縣知事は何故か、實際に通せぬ人

◎祖國山川森林の荒廢　南方

にて更に一社毎に神職をおくべし、神職無き社は滅却すべしといふ、もし神職を置んとならば、何んとか西洋の寺領稅（パリッシュ、タックス）の如く、漸を以て、毎月毎年、毎戸より積立させて、後に置て可なり。

神職は只今其人無く、何れも無學無頼の者のみなり、別に差上候本日の牟婁新報拙文にて、御覽被下度候、此輩に只今急に俸給をやつた處ろが、何の功もなく、少々跋扈し出すと、例の如くニウヨルク邊の天主教長老同樣、今日の教育が、氣に入らぬとか、丘淺治郎氏の進化論、石川千代松氏の化醇說は、天皇陛下を猿の子孫といふもの、國家に對し不忠など、自分の鄙劣心から、飛でもなきことを言出し、教育改進に障害を及ぼす輩のみなり、今日已に此邊では、神主に俸給をやりながら、何の功もなく、諸社兼務多き故、大祭日の祝典を二日三日延すこと多し、米國にも英國にも、僧無しの熱心なる基督教徒あり、當國にも近來僧入らずの新佛教あり、僧や神主はほんの教を傳ふる方便なり、此邊の民は、千古神を敬し、朝夕最寄りの神へ詣し、禮拜讃唱するを樂みとし、一家安全の基とし居るものなり、從來斯樣にして、何の不足なく、數百十年を經歷し、神社亦何の不足なく維持し來りたればこそ、今日合祀の大難にあひし也、凡そ金錢はいかに多く積るとも、扱ひ樣で忽ちなくなる、至つて危きものなり、樹木も財產也、確固たる信心は、不動產の尤も確かなるものなり、之を賣り之を潰し、少々の金にしたりとて、一ど失へば復た返る可らず、神主共が貧乏に成るは、自分等の不注意也、かゝるものに金を增し與へたりとて、神道が盛んになるに非ず、後年公園〳〵とさはぎて、多大の金錢を投じ、村民逸樂の場を買ひ戻さんとするも、中々出來ることに非ず、又歐洲にも最寄り〳〵の公園には、必ず禮拜堂十字架の設けあるを案して、彌々吾國の神社は、是れ本來の公園に、神聖慰民の具をそなへたる結構至極の設備と思ひ、外國人が毎々羨む通り、さしたる多額を費さずに、村々大字大字に相應の公園あり、寺院あり、加るに科學上の諸珍物を生存せるアサイラムとして、保存され度き事なり、たとひ樹林を伐り、建物を滅するも、徒らに破壞亂伐

の惡氣象を、兒童鈍夫につぎこむのみ、其賣上げ高は、決して樹木、神寶、生物、勝景を、その儘保存し、不識不知の間に良朴愛國剛毅不動の國風を、村夫兒童に敎へこむの、大財產たるに比すべきに非ず。

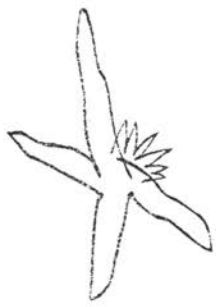
本郡川添村は、神社合祀の模範とも稱すべき大合祀を行ひ、十四村社を合一して一萬餘圓の基本財產あるつもりにて、神林を伐り、社田を賣りしが、實際何の風化もなく、僅か二年後の今日、其本社の屋根洩るゝも修繕する錢なく、神主途方にくれ居り、人民は本社へまいりたきも、往復十里を步まずばならず、全く無神の狀況に在り、風儀惡くなり、樹林一空樹蔭ある樹林を見ることならず、全く禿山住居なること、滿洲邊に同じ、（神林の樹木は、材用の爲殖林せしに非れば、枝幹の下方より生じ、節多く、二足三文、何んの價値なく、多くは焚き物にするのみ。）たとへば今度御心配かけし當田邊灣神島の如きも、千古不入斧の神林にて、灣內へ魚入り來るは、主として此の森存するにある、是れ已に大なる財產に候はずや、然に合祀勵行の爲め、村役場員等成るべく無性（ブショウ）をかまへ、又利益を私にせんと心がけ、なるべく村役場近き社は、たとひ由緖なき祠や、天狗を祭れる小祠なりとも、之を村社と指定し、由緖あり神林多き社も、村役場に遠きをば、擧て合祀させ、之を濫伐せる餘弊、筆舌に盡きざるに候、神島のワンジュは島の一部にのみ生じ、いかにするも他へ生せず、ブラジル邊で見る如き festoon を形成し、圖の如く蜿蜒し、大なるものは幹十インチ以上あり、外國には耳輪（ミミワ）腕環などにかゝる Sea-beans を用ゆること頗る夥しければ、此ものを今少し多く繁殖させなば、中々の營利ともなるべきものなり、然るに合祀の爲め、只今濫伐に及んとし、たとひ濫伐せずとも、神祠已に去たるを以て、人之を憚らず、種々に枯葉枯木をとり去る故、かのカレキス、マツムラエの如き、四ケ年前小生見出せしときは、十四五坪の間に瀰漫せしに、今春末牧野富太郎氏の囑に應じ、往き見たるとき、僅かに十二株しかなき也、故に一株につき、幾分つゝ其株にきずの附かぬ樣、かきとり、牧野氏へ送りしなり、

◎祖國山川森林の荒廢　南方

◎祖國山川森林の荒廢　南方

此島には由來キセルガヒの種類多かりしも、合祀と共に全く絶果たり、序乍ら申す、此島は千古人が蛇神をおそれて、住ざりし所也、自生の棟（センダンキ）あり、又海潮のかゝる所に生ずる鹽生の苔 Scale-moss あり、奇體な島なり。

小生は少しも動物學を知らず、然し小生如き素人から見ても、當國の山林又神森には、まだ〳〵記載を畧ざる動物多き也、ヤマネ dormouse などは、どうしても一種に非ず、又當郡瀨戸松山村には、毎年夏末秋より冬にかけ、海より上り、陸に棲み、甚きは神森の木に上る寄居蟲（ヤドカリ）あり、小生も前年手に入れ、久く養ひしことあり、小笠原島産のものに似たり、全身碧紫にて大きく甚美なり、又松山の溫泉場の前岬の岩井に如圖ヒトデ足に、大小の懸隔甚だ大なるありし、これでは歩行に不便ならんと觀察せしに、廻りあるく gyrate なり、英國へ持行き大英博物館の專門家に見せしにニウジーランドの特産なる由、小生手本に一箇今に殘せり、ほしき人あらば進ずべし、此れ等も役人不注意、人民勝手きまゝの爲め、海中の岩少しもなくなり、右の溫泉へ波烈き毎に、海潮打ち入り、海荒くなりし爲め、今は全滅せり、



前日安堵峯（當熊野第一の難所）へ行きしに、無智の山人の話しをきくにハタフリといふ者あり、話の樣子をきくに、井モリ如きものに、紅き鰓（ギルス）が一生つき居り、動く毎に旗ふる如くなると見ゆ、思ふに例のアキソロトルシレンス樣の者、此邊にあるかと被存候、こんなこと故、學者の記載調査もすまさずに、むやみに山林全伐したり、又たとひ深山に多きものなりとも、大學生など限りある日數と、限りある費用を持て來り、研究せんには、なるべき人里に近く、薪水の便宜ある所で研究する方都合よければ、最寄り〳〵の神林などは、聊かも調査のすまぬ中に、伐らぬやうにせられ度き事なり（之を伐つて實際髮毫の益なく、大患をのこすは、前述の如し）。

小生は、植物大家などと、ちらほら東京大阪の新聞へ出候が、小生は植物學を正則に學んだことはなく、在英のとき、書籍學（ヒブリヨグラフ井ー）を日々の營業とし、そのひまに遊んでも居られぬ故、手當り次第に、書籍の Contents を誦じたり、扨歸國のとき、大英博物館のモレー George Murray を訪しに、日本は隱花植物（菌藻等）の目錄未だ成らぬは遺憾也、何卒ひまあらば、骨折られ度事也とのことにて、歸國後商業はきらひなり、已に十一年此熊野に居り、主として淡水藻と、菌類及び粘菌を集め書し、粘菌は其發生經過等のことを、少々潛心して研究せり、どこにてもあるもの故、何處の森を伐らうが、かまはぬぢやないかと言はれんが、實際は然らず、二十町三十町、地押（ヂオシ）する如く委細に調ぶるとも、全く普通種一種をも出さぬ森あり、又當田邊町を去る三四町計りの糸田の猿神社のタブの老木株の如き、一丈に滿ぬものなるに、從來日本になしと思へる粘菌三十種計り見出し、其一は新種也、されば此所の如く、町に近き便利な地に、三十種も年々粘菌を定て生ずる地を點定し置くと、何んの點定もなく、探したら、あるだらうとて、ぶら〳〵搜しまはるとは、學者の經費上に、非常の徑庭あり、學問の進歩にも大關係あることなり、一所不定と稱せらるゝ下等隱微植物すら、如斯なれば、高等顯花羊齒群植物等、住處に、甚だ癖のあるものは、なるべくは其住處を知り置き、其處其處に保存され度き事に候はずや、（右の糸田の猿神社は、全滅、樹木一本もなく、村の井戸濁り飲むこと成らず）例之カラタチバナと申すものは、前年牧野氏が植物採收に出かけたときは、土佐邊の栽培品に基き、記載されしと存候、小生知る所にては、本州には紀州の外にあまり聞えず、扨九年計り前に、那智には小生三四本見出す、此ものは變態多きものと見え、自生品に已に白斑あるもの二本ありし、その後一向見出さゞりしに、此田邊より三里許りの岡と申す大字の八上王子の深林中に、宇井氏見出す、それより栗山昇平氏、一昨年栗栖川の神社合祠跡で見出す（無論只今は湮滅）寛政七八年頃カラタチバナ大に賞翫され、一本の價千金に及べる有り、從來蘭や牡丹の名花は、百金に及

◎祖國山川森林の荒廢　南方

ぶものあれど、百金を出し例を聞ずと、北窻鎖談に見えたり Hortorum の名を付しも、此栽培品によれるならん、何に致せ當縣では少なきものなり、而して右の八上王子は、山家集に西行熊野へ參りけるに、八上の王子の花面白かりければ社に書付けゝる

待來つる八上の櫻咲にけり荒くおろすな三栖の山風

とて名高き社也、シヒノキ密生して、晝もなほ闇く、小生平田大臣に見せんとて、寫眞とりに行きしに光線入らず、不得止社殿の後より、其一部を寫せしほどのこと也、此邊に柳田國男氏が、本邦風景の特風といへる田中神社あり、勝景絶佳也、又岩田王子乃ち重盛が父の不道をかなしみ、死を祈りし名社あり、此等の大社七ッ許りを例の一村一社の制に基き、松本神社とて大字岩田の御役場の、ちき向ひなる小社、もとは炭燒き男の庭中の鎭守祠たりしものを、炭燒き男の姓を採りて、松本神社と名け、それへ合社し、跡のシヒノ木林を濫伐して、村長村吏等が私利をとらんと計り、岡大字七十八戸許りの內、村長の縁者二戸の外、悉く不同意なるにも關せず、基本金五百圓より追ひ〳〵値上して、二千五百圓迄積上たるを、態と役場で障へ止めて、其筋へ告げず、五千圓迄上りし際、村民に迫り、絶對絶命に合社せしめんとするに、其村に盲人あり、此事をかなしみ、小生方へ二三度云ひ訴へ來る、因て小生此事を諭じて、大に村長をやりこめ、合祀の難をのがれ、今日迄も存立し居る、小生自ら走り行き、役場員が呆れ見る前で寫眞とり、歩行して松本神社の大さを量りしに、僅かに長さ三十二歩幅二十六歩計の小境內也、それえ酒屋の倉の屋根の如きものを移し來り、他の神社九を蜂の子の如くに押し込み、扨其九社の跡の神林を、私利の爲に伐盡さんとせしなり、此村長はMとて模範村長たり、此人お上を欺くに妙を得て、先づ其村の小學校へ校醫と裁縫教師幾名置けりと報告す、其校醫たり裁縫教師たる人に逢てきくに、一向そんな任命はきゝしこともなしといふ、又村の實況を書上よと托されたる教員が、村の一部に博奕するもの、多少ありと、實況を書ければ、忽ち之を放逐す、政府の御用

新聞たる國民子すら、昨年書し如く、今日の模範村長などは、皆な「書き上げ」をよくすることをのみ力め、實は模範村長となりて、鼻糞金三四十圓頂戴する爲めに、村民の迷惑、風俗の壞亂、古物名蹟の亂滅はかなしむに堪たるものに候（此松本神社等の寫眞は、中村啓次郎氏、平田子に示し其不都合を言立たり）。

當縣知事は前日內務省地方長官會議に、一本大臣からまいられ、歸りて訓令を出し、神社合祀は決して勝景を害せずといへり、然れども本邦に神社ほど勝景に關係あるものなきは、歐人も知る所にて、吾國の如き薄弱不耐久の建築にては、いかに偉大なる建築を施すも、到底羅馬アッシリア印度回々敎國の石造煉瓦造のものに及ぶ筈なし、（されば往年チカゴ出版の Monist 紙上に、開化の定義の一として、建築が後代に永く遺り、たとひ其國民亡ぶるも、建築が傳はるべきものに非れば、眞の開化に非ずと言し學者ありしは、至極珍ながら、歐人の氣質を發揮して面白し）然るに近日の「大阪每日」に菊池幽芳氏が書し如く、歐洲の寺院等は、建築のみ宏壯で、樹林池泉の勝景の助くるないから、風致といふこと一向なしといふも、至當の言たり、今僅かに五千圓やそこらの金を、無理算段して神社を立派に立てた所が、濠洲木曜島歸りの出稼ぎ抔、歸り來り、之を見て何んだこれはメルボルン郊外の曲馬小屋にも及ばぬといふに違ひない、現に和歌山の縣廳煉瓦造りで立派に成たと聞て、十年ぶりに去年和歌山へ歸省し、拜見せしに、歐米に半生を厲殺したる吾輩には、新嘉坡のラシャメンの妾宅ほどにも見えなんだ、折角自國固有の傳說通りに、古人が意を込めて經營した神社などつぶし、埒もなき間の子の社殿を立て、ペンキぬりの白鳥居やブリキ葺の屋根など立つるよりは、やはり北條泰時が大廟をほめた如く、素朴簡易にして然も近く可からず、樹林森森として風に琴音を出す方が、有難く覺えらる、希臘羅馬の早世期の神社の風として、今に美術社會に尙ばるゝもの、みな斯の如し、されば千圓や二千圓の木造社殿やブリキ屋根を新設して得たりと誇る

當縣知事などは、實に風流雅尙を解せぬ俗物で、せめては歲時記の一つも買ふて俳句でも稽古させたきことなり、例として封入する(1)西の王子は出立の濱と稱し、脇屋義助、熊野湛增、又征韓の役に杉岩越後守等みな此出立の濱を出船せるなり、御存知通り熊野兵は昔しより、どちらともつかず、たゞ報酬多き方へ傭はれたること、平家物語太平記にて知られる、南北朝頃は薩摩、大隅迄加勢に行き、又戰國には北條氏里見氏迄も援兵にやとはれ候、惡いことのやうなれどハラムの歐洲開化史にも傭兵（マーセナレー）起りてより、戰士本氣に成て働かず、或る戰ひに三日とか數萬の傭兵、佛國で大戰爭し、戰死無慮三名、それも大酩酊の上、馬に乘り行し故、馬より落ちて不慮に死したるなりと知れ、敵も味方も阿房らしくなり、遂に戰爭少なくなれりとありし樣覺え候、然らばちと牽强ながら、慶元の際邦人兵戈に飽き足りしとき、熊野兵のやうなものありし故、いよ〳〵戰爭がつまらなくなり、終に德川三百歲の太平を享るに及べりと故事付け得べく、恐縮ながら赤十字社などや、平和會議の先鞭を着しものゝ史蹟として、保存すべきものなり。

古老に聞くに、關原の役に、杉岩の兵此處より出立ち、德川へは德川方、石田へは大阪方たるべき樣な通牒をなし、そろ〳〵と幾し行くに、和歌山迄十五日かゝる、扨和歌山へ着せしに、家康より狀來り、關ヶ原で大捷故、目出度引取りくれとのことで、熊野兵大に悅び、半日の間に田邊へ安着せりと。

然るに此神社は、無双の勝景で、熊野九十九王子の一たるに、村人二千五百圓迄基本金積しも聞入れず、五千圓を積むか、神社を合祠せよ、然らずんば氏子總代を入牢さすべしと、甘といふ郡書記、脅迫を加へ、止を得ず合祠せしが、今も社費を納めず、合祀先きの本社へ一人も參らず、祭日は此神社跡で、神體無しに行ひ、神主の代りに近傍の坊主を招き、經を讀ませ、神やら佛やら薩張り分らず、因て懲しめの爲め、此社趾の樹林を一切濫伐すべしとの命を下し、村民小生方へ走り來り、小生辯解

して事すみたり、無双の勝地たるのみならず、此樹林を伐らぬさえ大風雨のとき、土崩れ、官道を損じ、人家を潰すなれば、原敬氏内務大臣たりしとき合祀訓令に有りし如く、由緒來歴のみならず、地勢にも顧み、神林はたゞ神なくとも、保存され度事なり、(ウマメカシ、シャ〳〵ンボ、クスドイゲ等の雜木と松のみなれば、伐た所が何の益もなきことなり)又(2)出立玉子は御存知の如く、後鳥羽上皇御幸記に、塩垢離(シホゴリ)をとるとある御舊蹟にて、塩垢離とらせ玉へる岩は、今も存せり、御譲位の後二十八回とか熊野へ御幸あり、諸處王子の社にて御歌會を催ふされ、關東討滅の軍議を催ほさせ玉ひし、殊に此處にて萬乘の尊を以て、親しく潮をあび、祈請せさせ玉ひしなり、其跡を何んの苦もなく破壞し、圖の如くきたなき貧民の衣服をほさせ、又圖中小生の四邊を取圍める惡少年等、日に此處に集まり、下なる民家へ小便をたれこみ、婦女の行水を眺むるなど、惡行醜態言語に絶せり、之を潰して何の益もなく、たゞ丘上の小學校へ通ふ路を、不恰好に大きく取り廣ろげたるのみ、四隣の人民迷惑甚し、扨今も帝德を慕ふのあまり、一人も合祀社へ參らず、祭禮を勝手自前に行ひ居れり、此一條には平田子も閉口し、中村代議士に對し、返答出來ざりし也(小學校へは後鳥羽上皇の尊像を配りしと聞くに、其御遺蹟を惡太郎共の、小便場と化し去るも亦甚し)何んとか御あとえ、遙拜所位は立てそうなものなるに、今に放置しあるなり、無いよりはましといふ心得にや、此邊に狐を拜する道場生じ、只今大はやりときく、(3)三栖中宮、(4)三栖下宮の圖也、これは閣下等が三栖を通りて、御存知の通り、中々立派な宮なり、熊野街道の風景を添ふること夥し、然るにこれをも例の通り、境内の樹木を伐る爲め、上三栖のより劣れる小き社へ合祀し畢りしが、小生の抗議により、今迄は樹を伐らずにあるなり、この村は千圓や二千圓の基本財産にこまる所に非ず、然るを何樣、社を滅却して功名とせんとて五千圓迄基本金を値上せる故、五千圓といふ金は一寸出來ず、止を得ず合祀せしなり、今日史蹟勝景保存會といひて、全く古への風を存せざる飯田町や、不忍池畔へ、馬琴や季吟の碑や像を立つるよりは、

◎祖國山川森林の荒廢　南方

◎祖國山川森林の荒廢　南方

何卒、只今救はゝ救ひ得る此等の熊野諸社の林地を保護し、成らふことなら、復社させやる樣御運動被下度事也。

西洋に林地には必ず禮拜堂あり、又十字架を立る如く、當地方では神威を借るに非んば樹林の守護は出來難き也、既に去々年當地近き新庄（シンジヤウ）といふ村の小學校紀念の爲、兒童をして校地に桃樹桑樹一千許り植しめしに一月立たぬ内に悉く烏有となり了りぬ、又此田邊の濱へ、今年松苗二千株許り樹しに、昨今一本も存せず。

右は小生調べ集めたる材料の中、百分の一許り御覽にかけ候、本宮如きは白井光太郎氏も「日本及日本人」に書し如く、二十二年の水害に、寶物文書流失し、本社も潰れ、古へを忍ぶものとては川中の小島（乃ち舊本社の跡）の古樹林のみにて、其昔し山又山を跨て參詣し玉へる聖帝、又月卿雲客、平重盛、平政子、仁科成遠、何れも此老樹林の下に跪拜せしことを念出して、昔しを忍びし、其老樹を神官の私宅を建る爲にとて、昨年七月迄に悉く伐り倒し、小生等異議を申立しもきゝ入れぬのみか、野暮千萬なことをいふと嘲笑され候、扨其神官は他所の者で、どこの馬骨か知れず、忽ち他へ轉任になり、只今小生等小言いふも相手なく、狐につまゝれし如し、今の本宮に旅順で分捕の大砲など並べあるが、こんなものは器械で出來る、別に右の神樹老木に比して、何の恭敬の念を起さず、石燈籠手水鉢古いものは、みな毀却し、新しきもののみ故、何の史蹟といふ點少しもなし。

手水鉢石燈籠など、昔のは今日見られぬよき花崗石など多く、又友人バーミンガム大學敎授ウエストが云ふ通り、石質により甚しき珍藻あり、たとえば妙法山の大手水鉢中より、小生見出せしテトラストルムの如き、確に新種と被存候、又ラテヲフ井ルムセヲデスムス（微少なる甲介蟲（クラスタセア）を擬せる如し）は歐洲にも稀有のものなるが、當地よ

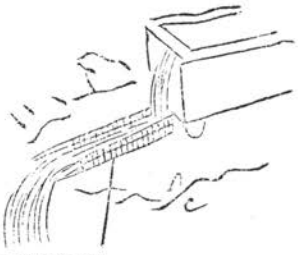




テトラストルム

フラヴエツセンス

り四里許なる富田の道傍の地藏前の石手水鉢より見出す顯花植物中、最微の物たるWolffiaの一種を、和歌浦近き東禪寺の辨天祠前の沙岩、手水鉢より見出せり、殊に奇なるは那智山一の瀧下、舊祠堂廢趾の四角なる手水鉢の傍らなる石筧は、過半希異の赤色硬藻ヒルデブランチア、リヴユラリスで、蓋し素う人が見たら、花砂を含める珪石か、又はアカシダマ石で筧を作しかと思はるゝ美觀也、神社の手水鉢等は、多くは合祠に伴ひ、放置され又破却されしものなり。




新宮では神社合祠を東牟婁郡中に勵行せしに、先づ郡內手弱き麁朴の民多き七川（シチカハ）郷より始め、神社多く合祠、然し添の川といふ所で暴動起り、少々蹶躓、之が爲め高田といふ山村又那智村邊は全く抗議し、今日迄殘存せり、その入れ合せに、小生が昨年の國會へ此事を持出さぬ前にと、大忙ぎで新宮中の神社悉く破却公賣し、新宮神社へ合祠す、其時の勵行は實に烈しく、鳥羽院に隨侍し來りし女官が立たる妙心寺といふ寺迄も、神社と稱し破滅せんとするに至れり、當時新宮第一の學者小野吉彦（これは學問のみならず篤行を以て甚だ人に重んぜらるゝ人）の來狀左に拔出す

強制的神社合祀の事小子等に於ても其理由存する所を審かにする能はず、賢臺（毛利清雅、此者當國で一番に合祀を民の隨意に任すべしといふ論を云ひ出す、牟婁新報の主筆なり）。

小生は從來山猱（ヤマオトコ）如き獨身生活を山中に營なみ居りしものにて、毛利如く政治行政の事に少しも關せず、英國のトマスブラウンは英國大內亂の際一向介意せず、所學を專らに研きしと申すが、小生もそんな風の男なり、毛利は政治家で功過相半ばす、然し世間を相手に主張を貫かんには、

◎祖國山川森林の荒廢　南方

◎祖國山川森林の荒廢　南方

新聞記者などをも味方とせざる可らず、昔しウチカのカトー羅馬の内亂に臨み、シーザルも惡人なりポンペイ亦純善の人に非ず、然しながら二つ取りにせんには、ポンペイの方先は國家に害心少しとて、其味方し、ポンペイ敗死するに及び一寸頭を下ることシセロの如くせば、シーザル喜んで死を赦せし筈なるに、屈せずして死せり、小生もまたこんな事にて、神社合祀反對を立ぬかん爲め、半夏新報で筆禍を得、罰金を命ぜられ、又亂暴して監獄行きとなれり、今日の世には味方無しに何にも出來ず、當時小生は三好氏の保勝會等のことを少しも知らず、訴へんにも訴へ所ろなく、遂に入監に迄及べり。

及び南方先生等の斷然御奮起、偏々其非を御論議被成下居るを傳承仕り、陰乍ら深く感謝申上候、已に當新宮町如き合祀を斷行致し、渡口御前社（神武天皇を奉祠し、尤も民の信行深し）を始め、矢倉神社、八咫烏神社如き由緒舊く、來歷深く、民衆の崇仰特に厚かりし向きをも、一列一併に速玉神社境内大峯平社と飛鳥社とに合祀し了れるのみならず、當時矢倉町なる矢倉神社、船町の石神社、奥山際地なる今神倉神社（祭神熊野開祖高倉下命の御子天村雲命）の如きは、既に公賣に附し畢り、石段は取崩され、樹木は伐採移植せられ、神聖なる祠宇は、群兒惡戲の場と成り、荒凉の狀眞に神を傷ましむる者有之候、近頃郡參事會員某氏の話に、氏の村内某大家の如きは、之を悲む事殊に深く、合祀實行の日は全大字を擧げ、凡て戸を閉て號泣哀痛の意を表し、又自分の大字の氏神の如きも、已む無く他に合祀せられたるも、こは別に遙拜所を設け、祭禮を執行ふ筈と話され居候、神倉神社（史籍に其火災を傳書し古歌に名高き社）も、速玉神社の攝社として遷され候、奥山際なる今の神倉神社の例の大老樟の立挺へる社地はM氏坪九圓計七百圓にて落札せるが、其日の中に千圓にて他へ讓り渡し、奇利三百圓拾得致候由云々（而して新宮の神官Uといふ者は、件の神武天皇社の瀧の水を、自宅へ取りこみ、又社有の藪の筍の子の賣上高を私し、賽錢を祭日に僅に一圓と書上げ、

其他を着服すとの評高し、只今一厘錢はなく、少くも五厘錢にて、新宮は甚だ華奢の地なれば、祭日の賽錢一圓とは虚言も甚し、今回の那智事件も、どうやら神官〇（前に郡書記たり）も入監されるらしく候、神職といふもの、皆此通りのつまらぬ人物なるに、それに厚給を與へ、學校教師と背馳して舊い、ドグマを説かせ、國家の進歩を計らんとするは心得られず、新井白石の讀史餘論には、經忠公が南朝に奔り玉へる條に、公家と僧侶ほど德義心の薄きものなき由いへり、然るにかゝる不條理の合祀行はるゝに及び、蹶然其國體に害あるをいひし神官とては、伊勢四日市諏訪社の神官生川鐵忠氏一人の前後に無りしは、實に吾國の爲に憂ふべきことゝ言はざるを得ず）（參照中村啓次郎氏衆議院の演説中に下の一節有り、日立郡南部（ミナベ）の雨水といふ人の、何の心もなく書きし俳句の小引に、一月七日神社合祀の令嚴にして背く可くもあらず、遂に決して此夜を期とし、大字の神を村社に送る、一戸二三人送らざるなし、神灯長く續きて外觀賑かなりと雖も、人々寂として聲無し、門の外辻の邊、婦女童男莚上に跪きて見送る、惜別の情禁じ兼てか、時に嗚咽を聞く云々）

而して當局者は合祀は敬神の實を擧ぐとか、其眞意は善しとかいふが、眞意はどうで有うが、成蹟は甚惡く、既に當縣の村長が、縣廳を紿き、縣費をちよろまかせし、數二十二に及び、全國第一の名あるあり、又合祀の尤も甚しかりし三重和歌山の交界點たる新宮町に、大逆事件に最多數（六人）の逆徒を出せり、夫れ無智の村民も、召伯の甘棠を伐るに忍びず、緇徒の最惡なるもの、なほ甘茶を釋迦に灌ぐを忘れず、然るに君子人を愛して屋上の鳥に及ぶと云ふに、國祖皇宗神武天皇の社を破壞公賣して、快と稱するは、是れ已に官公吏率先して、大危險思想を擧行するものに非ずや、（此事は「東京朝日新聞」へ小生出し、次で「萬朝」かなんかへも出て、當局大に返答にこまれり）

昔し四教の勃興せし際は、回祖回宗（マホメットカリツフ）自ら皆な一日に若干時の營業をなせり（甚きは籃を編みて道路に賣りしあり）只今其教衰るに及ではムーラ、ハジなど稱し、吾國の法界坊如き遊食の徒夥く、安樂坊

◎祖國山川森林の荒廢　南方

梅八（カメバチ）の如く踊り廻りて錢を乞ふもの甚多きは、松村敎授土耳其に遊びて、實見のことならん、神官が貧乏になれるは彼輩の罪なり、其滿足のものは、何れも役場へ勤め、小學校を助敎し、それ〳〵世益ありしなり、龍動、ニウヨルクの盛といへども、寺院は七日全く拜み通しのものに非ず、僧侶それ〳〵內職に學問を敎え、文學を著述し、小學を敎え、孤兒を誨へて寧日なし、有名なる僧侶にして淡水藻のプレパラート抔を手製し、糊口の資とせし人あり、菌學の父といはるゝ、故バークレー氏なども、糊口の爲グリーク語を誨へ、菌學は僅かに夜間眠時を節して勤められしなり、然るに當國只今の如き逼迫の世に、神道如き不文不典の敎を、強て此無智無學淺見我利我慾の劣陋神機輩に擴張せしめんとし、強て舊史地誌土俗鄕風に大關係ある神社を滅却して迄も、其俸給を增んとするは、心得られず、もし實に民庶文化の開けざるを導かしめ、足らざるを補はしめんとならば、宜しく市町より始めて村と大字に及し、徐かに其人を養成して而して後之を改補し、數社を兼務して、專ら神事を掌どり、遊食片時なるを得ざらしめて可なり、然るに今神主其人を得ず、又其人數に滿たざるに、强て先づ神社から潰してかゝること心得られず、西洋にも一僧にて諸寺管を兼る例多く、其人爲に空手遊食せず、神事亦齊く擧るなり、況んや大市大町と等く三千圓五千圓の金を、一時に積立んことを寒村僻邑に迫り、之を積立ずんば其社を滅却し、古樹老木迄も全滅して、なほ十分の一に足らざるを知りながら、强て之を濫伐せしむるは甚しからずや、もし實に其社の永續を期せられんには、民の自由に任せ、其民神社の存立を願はゝ、二十年なり三十年なり五十年なり、永世を期して一定の社領稅を課し、漸々之を積立しめて可なり。

我邦の人は、由來一種歐人に見得ざる優雅謹愼の風ありとは、小生が二十四五年前米國に留學せし時、每度聞し所なり、其後十年計り前に英國に在て、我國に古く往來せし人士より、荐りに聞しは、吾邦人は年々に此美風を失ひ行くとのことなり、こは我邦由來封建の制にて、君主藩侯なき土地とて

はなく、隨て長上に對して生來敬愼の美風を養生せし遺風多きに居ること勿論なり、今日は昔とかはり、吾等如き素町人の子も、時を得れば才次第で男爵位いには成り得る世なれば、大臣や次官位いを見ても、何とも思はず、已に心底から何とも思はぬものに、上述の如き謹敬欽仰の念起らぬは知れ切たことなり、況んや其長上たる人多くは敗德不名譽の行ひあり、猥に冕冠せしめたるに過ざるに於ておや、然るに唯一つ封建の制より、一層古く邦民一汎に肅敬謹愼の念を銘心せしめ居るものあり、何ぞや、最寄り〳〵の古神社是なり、所謂何事のあるかを知らねど、有難さに涙こぼるゝも是なり、神道は宗教に相違なきも、高語論議を以て人を屈從させる顯教に非ず、言詞杜絕、李白も賦する能はず公孫龍も辨ずる能はざるの間に、心底から吾邦萬古不變の國體を一度に感じ、白石が秋田氏の譜（藩翰譜）にいへる如く（たとひ有史前は、多種の人種混雜せりとするも）有史以後當に皇族の萬世一系たるのみならず、非人穢多に至る迄も、みな本邦の原人より統を引きたるものたることを、不可言不可說の間に感せしむるの道也、故に其教は古へ多大繁雜の齋忌 Taboo system を以て成れる慣習條々（不成文律）を具したるのみ、外に何といふ六かしき道義論心理論なし、時かはり世移りて、其神主といふもの、齋忌どころか、今日此國第一の神官の頭取ＯＩといふ老爺は「和歌山新報」に據るに「たとひ天鈿女の命の如き醜女になりとも三日ほど眞にほれられたい物だ」抔縣廳で放言して、スバ〳〵と烟草を官房で環に吹き、其主張としてはどんな植物が有らうが、無らうが、詮ずる所は金錢なき社は存置の價値なしと公言し、又合祠大主義紀國造Ｋは藝妓を妻にし、樟の木などきりちらし、其錢で遊廓に籠城し、二上り新內などを作り、新聞へ投じて自慢し居る、こんな人物がいかにして說敎したりとて、其感化力はとても小學敎員には及ばず、實は敎育の害物なり、現に從來祭日にのみ神官に接せし諸村民は、神官なしに每朝夕最寄りの神社に詣して、國恩を謝し、一家安寧を祈り、樂に基本金なしに、それ〳〵に醵金して、今日迄立派に維持し來り、神主はそれ〳〵より補助されて、祭典を擧行し、何

◎祖國山川森林の荒廢　南方

に不足なく、自分もそれ〳〵内職に教員なり百姓なり、營み來れること、上述歐洲又古回教國の例の如し、されば神官はほんの扶助物 Accessory にして、國民に愛鄉愛國の念謙讓恭愼の美風を浸潤せしむるは、一に神社その物の存立によることなりプラトンは一寸した希臘の母を犯したり、妹を强姦したり、ガニメデスの肛門を掘たり、アフロヂテに夜這ひしたり、そんな卑猥な傳話ある諸神を、心底から崇めし人に非ず、然れども秘密儀 Mystery を讃して、秘密儀なるかな〳〵といへり、秘密とてむりに物をかくすといふことに非るべく、乃ち何の教にも顯密の二事ありて、言語文章論議もて言ひあらはし、傳へ化し得ぬ所を在來の威儀に因て、不言不筆、忽ちにして頭から足の底迄感化忘る〻能はざらしむるものをいひしなるべし、小山健三氏曾て、尤も精神を爽快ならしむるものは、休暇日に古神社に詣り、社殿の前に立つにありといへりと聞く、斯の如きは今日合祀後の、南無歸命稻荷祇園金毘羅大明權現といふやうな、混雜錯綜せる大入りで、半ん札をも出さにやならぬやうに、ぎつしりつまり、樹林も清泉もなく、落葉飛花見たくてもなく、掃除の爲に土は乾き切り、ペンキで白塗りの鳥居やセメントで礎石を堅めた手水鉢多き俗神社に、望むべきに非るなり。

小生家內事多く、昨夜來眠らず、頗るくたびれ、又明日は英國のリスター女史へ、粘菌送る爲め、これから顯微鏡の壽をかゝざる可からず、それがすむと野中村へ神林の老木伐採を見合はすやう、勸告に往復十七八里を歩まねばならず。

野中近露の王子は、熊野九十九王子中尤名高きものなり、野中に一方（イッポウ）杉とて名高き大杉あり、又近露の上宮には、更に大なる老杉あり、下宮にもあり、上宮のみは伐採せられしが、他は小生抗議してのこりあり何んとか德川侯からでも、忠告してもらはんと、村人に告て先づ當分は伐木せずにあり、然し近日伐木すると云ひ來り、已に高原（タカハラ）の塚松といふ大木は、伐られたから、小生自ら止めにゆくなり、後援なき一個人の事とて、私費多き割に、功力薄きにはこまり入り候、何れも一間から

一丈近き直徑のものに候て、聖帝武將勇士名僧が古へ熊野詣でに、其下を通る毎に仰瞻られたるに候、此木等を伐らんとて、無理に何の木もなき禿山へ、新たに社を立て、それへ神體を移したるなり、これらは名蹟として、何とか復社させられ度事に御座候、此三社の神主は荷持ち人足の成り上りにて、何にも知らぬ「ゴロッキ」如きもの、去年小生其邊へ行しとき、妻と喧嘩し、妻首縊り死せし所なりし、かゝるつまらぬ者の俸給を上ん爲に、かゝる名社を悉く滅し、名木を伐盡すは、いかにもつまらぬ話しと存居候。

大抵、諸他の村々の合祀は、在來の一社を指定して村社となし、他の諸社を之に合併したるものなれども、此近野村の合祀は破天荒の亂暴にて、全く樹林を濫伐せんが爲めに、七八百年來有り來れる村社四、無格社九合て十三社を全滅濫伐し、其代りに、木も無く、地價も皆無なる禿山頂へ、新出來無由緒の金毘羅社てふ曖昧至極の物を立て、それえ諸神體を押し籠め、扨其禿山へ新たに神林を植るてふ名目の下に、周圍二丈五尺以下、一丈三尺の大老杉十餘本を伐らんとする也、合祠の際、仲んのゴロッキ神主、神體を掌に玩び、一々其代價を見積り、公衆前に笑評せり、合祠滅却されし十三社中、野中王子、近露王子、小廣王子、中川王子、比曾原王子、湯川王子の六社は、何れも藤原定家卿の後鳥羽院熊野御幸記に載たる古社古蹟なり。

玄奘三藏の大唐西域記に、昔し雉の王あり、大林に火を失せるを見、清流の水を羽にひたし、幾回となく飛行て之を消んとす、天帝釋之を見て笑ふて曰く、汝何ぞ愚を守り、徒らに羽を勞するや、大火方に起り林野を焚く、豈に汝微軀の能く滅す所ならんやと、雉曰く、汝は天中の天帝たる故、大福力あり、然に此災難を拯ふに意無し、誠に力甲斐なきことなり、多言する勿れ吾れたゞ火を救ふが爲に死して已んのみと、小生已に此三年空く抗議して、事は益々多く、妻子常に悲み、自分は力と財と益々耗り行き、又所集の植物を發表することも出來ず、訴る所も無く困り切り居れり、東京には奮君俟

（賴倫侯の御事）を始め、已に此事を防止すべき有力なる會迄立てありと聞く、從前平瀨作五郎氏に托し、大學へ賴み申上しも達せざりしと見えたり、此頃岡村博士の來縣にあひ、始て貴下の國粹保存御熱心家なる由を承聞し、欽仰に任へず、此長文を筆して、成敗を天に任せ、差上候間、何分にも同志諸士と御議定の上

當縣神社合祀を中止し合祀趾は一切保存し神職の給料は漸を以て積立しむる事。

次に英國の treasure trove（トレジュア トローヴ）の法に倣ひ、土器石器其外土中より掘出す考古上の品は、一切皇室の物とし其筋へ献上し、其筋にて御査定の上、大學又は帝室博物館へ留置れ、左迄にもなき品は、本人に下附して、隨意に賣却せしめ、又社地より出たるものは、之を其社に下附して神寶とし、永世保存せしむる事。

此事は尤も必要なることにて、只今も當地近く、古塚より曲玉インベ管石等夥く出候も、小生は往き視ず、視た所で、たゞ〳〵姦商を惹出し、種々惡策を生せしむるのみなればなり、此邊で出る古器に、珍なもの多きも何のわけもなく、散佚するは惜むべし、何卒政府は此事に關する Bureau を作り、輕便なる方法を以て、かゝるもの出る毎に、役場より一切、一先政府へ送らせ、大學等にて鑑査の上、取り上べきものは皇室の御有として、大學等へ留置れ（英國も然り）不用の分は、本人へ還すやう有り度き事也。

扨漸を以て諸神社蹟、又古塚等を巡廻して發掘させ、一切皇室の御物とされ度き事なり（それ〳〵え御貸し下げは適宜とす）

友人〇〇氏は尤も本件に盡力され候人、小生一面識もなきに此の如きは、何かの宿緣かと被存候、因て此狀〇〇氏の一覽を經て、貴方へ御廻し申上候。

明治四十四年八月二十九日夜九時四十五分書終

南方熊楠拜

○○○○様御侍史

時刻迫り候に付き不再讀誤字澁筆萬々御察讀を乞ふ

南方氏其後の來信にいふ

かゝる珍植物絶滅が、神社合祀に伴なふ例は、和歌山縣に限らず、有名なるホンゴウサウの最初發見地は、神社合祀の爲に既に絶滅し（四日市の川崎光次郎氏通信）イセデンタてふ極珍品の羊齒も、合祀のため、今は產地を失ひ了れり（大學院兒玉親輔氏直話）何れも和歌山縣の、も一層合祀の多く勵行されたる、三重縣下の出來事なり。

# 火山の地形

（本年五月七日本會第四大會講演速記）

大橋良一

火山の地形

原形

一、岩石

（一）碎片噴出物

（二）熔岩

二、構造

◎火山の地形　大橋

◎火山の地形　大橋

（一）岩石の排置
（二）主なる噴出中心の排置
　単心構造（単一単心構造／共心構造）
　多心構造（単一多心構造／偏心構造）
（三）從噴出中心の排置
（四）製肆噴出
い、以前の地形
ろ、噴出せる場所及び氣圏水圏の狀態

次

形
一、破壞作用
（一）爆裂
（二）陷落、扇環
（三）熔岩流の破壞作用
（四）彫刻作用
二、原形の影響
三、岩石の性質及び排置
四、堆積作用
五、時

唯今梅澤君から御紹介がありましたが、私は大橋良一と申します、斯う云ふ晴れの席へ出まして、御話いたすやうな分際ではありませぬ、又斯う云ふ所で御話するやうな材料がある譯でもないのであります、實は幹事の方からの御注文では、自分が調べました所の、或る山岳に付て話して貰ひたいと

云ふ、御注文であつたのでありますが、不幸にして唯今さう云ふ材料がありませぬ、又ありましても、此席で山岳會の諸君に御話するのに適當した性質のものでありませぬから、已むを得ず斯う云ふ「火山の地形」と云ふ題を採ることに致しました、それで此題に付て私は特に委しく研究をした譯でも何でもないのでありまして、實はちよつと思付いたこと、及び今日まで屢々諸先生に依つて、一般に紹介されたやうな、極く有り觸れた御話をするに過ぎないが、さう云ふので宜いかどうか、宜しければ御話しても宜いと云ふことを幹事の方々に申しました、ところが、それで宜いからやつて貰ひたいと云ふことで、實は斯う云ふ所へ出て御話すべき身でもなく、又それに適當な材料がある譯でないに拘らず、此所に出た次第であります、先刻梅澤君から普通有り觸れた火山の話とは違ふと云ふやうな、大變に賞めた御紹介がありましたけれども、實は矢張り有り觸れた話に過ぎない、唯々今日まで地形と云ふことに付て、餘り研究をなされない方に向つては、或は御耳新しいかも知れませぬが、さうでない方に取つては、極めて平々凡々たる、分りきつた話に過ぎないのであります。

此火山の地形と云ふ御話を致します前に、第一地形と云ふことを御話して置かねばならないのであります、地形と云ふことは、御承知の通り地球の表面に現はれて居る所の形である、山とか平原とか云ふ、土地の形でありますが、其地形を、研究するのに、どう云ふ風に研究するか、唯單にどの地方には、どう云ふ大きさの平原がある、どの地方にはどう云ふ山がある、其山はどの位の高さを有つて居ると、云ふやうに、今日の地形を有りの儘に記載するやうなものでは、決してないのであります、地形を研究すると云ふことは、言ひ換れば其地形の歴史を研究するのであります、今日地球の表面には色々の地形があります、今日の地球の表面は一つの麗はしき彫刻物である、地球は一の立派に彫刻された所の美術品であると言つて差支ないのであります、其地球の表面に、巧みに刻まれた彫刻は、どうして起つたものであるか、又それは如何に變遷して、今日の狀態に達したものであるかと云ふこと

◎火山の地形　大橋

◎火山の地形　大橋

を、研究するのが地形を研究する所の學問、即ち地形學と稱するものであるが、單に今日の狀態を知つて、それだけで滿足するものでない、今日の地形に由つて來る所以を知る、即ち地形の歷史を知ると云ふのが、地形學の目的であります、地形を研究しますには、今申した通り、地形の歷史を研究するのであります、此地球の表面の地形は、どう云ふ働きに依つて造られたかと云ふと、地形を造る所の要素と云ふものは第一に地形を造る「働き」であります、それから第二に地球と云ふもの即ち「働きを受ける所の物體」が必要であります、それから第三に其働きをなし、又其働きを受けるに要する所の「時」と云ふものが必要であります、即ち働きと、其働きを受ける所の物體、即ち地殼と云ふものと、それから第三にはそれに要する所の時であります。

例へば先刻申したやうに、地球は一つの彫刻された所の美術品であるとしますれば、それを彫刻する所の彫刻家が無ければならぬ、それから其彫刻を受ける所の、地球と云ふ物體が無ければならぬ、又其彫刻をするに、相當の時を要する、其三つの要素が地形を造るに是非必要であると云ふことは、申すまでもないことであります、それで其地形を造る働きと云ふものは、どう云ふものであるかと云ふと、先づそれは大體二つに分けることが出來る、即ち一つは地球の内部に原因を有つて居る所の働きである、火山のやうなものとか、又は地殼が水平的或は垂直的に、運動を起して山脈を造るやうな働き、さう云ふやうな、地球の内部に原因を有する所の働きである、それ等を「内力」と名づけて居ります、それから第二は地球の外部、即ち地殼と云ふ固體があつて、其外に海洋と云ふ水の圈があつて、今度其上に空氣の圈がある、其空氣の圈及水の圈からして地殼に働く所の力、之を「外力」と申します、此内力と外力とに働きを分けるのであります、それから其働きを受ける所の地球、それに付て考ふべきことは何かと云ふと、働きに對してそれを受け、さうして色々な反應を現はすものは岩石の性質と、それから其岩石が如何に排置されて、地殼を造つて居るかと云ふ構造であります、即ち岩石

の性質及構造と云ふことを考へねばならぬのであります。それから第三に時である、此三つを考へねばならぬ、それで此働きと云ふものを内力外力に分けますが、地形を論ずる場合は、尚ほもう少し違つた分け方にするのが、便利であります、内力と外力の兩者を合して、更に之を二つに分ける、即ち「建設作用」と「破壞作用」との二つに分けます、此内力の方にも、建設作用と破壞作用とがあります、又外力の方にも、建設作用と破壞作用とがあります、建設作用と云ふことは、どう云ふものかと云ふと、山脈を造るやうなものが、内力の建設作用である、即ち地殻が褶曲して、褶曲山脈を作るとか熔岩が地球の内部から噴出して、地球の表面に出て、新に一つの突出した火山を造るのは、内力の建設作用であるけれども、熔岩噴出せず、水蒸氣とか、其他の瓦斯體のみが地球の表面に達する場合は、突然爆裂と云ふ現象が起つて、其結果爆裂火口と云ふやうな、地形を生じます、是は内力の中の破壞作用に入るべきものと思ひます、それから外力に於ける建設作用と申しますのは、即ち堆積作用であります、陸地を侵蝕して、削取つて川の底なり、湖水の底なり、海の底なりに、堆積して、新に土地を建設する所の作用であります、それから外力の方の破壞作用は申すまでもなく、地球の表面を色々に削つて、彫刻して行く作用であります、斯の如く地形を論じますときには建設作用、破壞作用と分けて論ずることが出來ます。

それから今度は作用の方でなく、地形其者に付て申しますと、「原形」と「次形」とに分けて申す方が、便利と思ひます、原形と云ふのは何であるかと云ふと、是は見方に依つて、多少違へねばなりませぬが、先づ一般に申しますと、建設作用で出來た所の地形を原形と稱し、破壞作用で出來た所の地形を、次形と言つて差支ないのであります、尤も火山の地形といふ樣に、或特殊のものに付て、原形次形と云ふことを、申す場合には、少し違ふのであります。

それで今此地形と云ふことに付て、一言申しましたが、此度は火山と云ふものは、何であるかと云

ふことを一言して置かねばなりませぬ、火山と云ふものは、何であるかと云ふと、地球の内部からして、非常に高い熱を以て、熔けて居る所の岩漿と云ふものが、地球の内部の或る力に依つて、地球の表面に押上げられて來る、それが或る場合に、地球の表面にまで噴出します、又噴出せずして途中に止ることが幾らもありますが、其地球の表面にまで達したものを火山と言つて、差支なからうと思ひます、此地球の表面にまで岩漿が達するに、色々方法がありまして、即ち熔岩流となつて、熔けて居る岩石其儘の形で流れ出す場合がありまして、又さうでなくして、其岩漿の中に含まれて居る水蒸氣其他の瓦斯の力が、非常に強かつた爲に、熔岩流として噴出せずに、是が小さな破片質のものになつて、噴出する場合、即ち火山灰とか、火山砂とか、火山礫とか云ふ形になつて、噴出される場合もありますが、是は何れでも構はない、いづれにせよ岩漿其物が、地球の表面に噴出したものであれば、之を火山と言つて差支ないのであります、併し岩漿其物が噴出しないで、岩漿と元と一體であつた所のものであるけれども、水蒸氣其他の瓦斯などが、地球の表面に噴出する所の噴氣口とか温泉とかいふものがありますが、是等を火山と稱することは、少し宜しくなからうと思ひますけれども、茲に火山作用と云ふ言葉を設ければ、火山作用と云ふと總てそれ等の働きを含むのであります、火山作用と言へば地球の内部から、岩漿が地球の表面に向つて上昇して來る働きを、火山作用と云ふのでありまして、必ずしも其全部が地球の表面に達しなくても宜い、一部分表面に達しても宜い、又全部が表面に達しても宜い、或は全部が表面に達せず、途中に止つても、總て區別しないで、それ等を火山作用と名づける、其火山作用を研究する學問を、火山學と稱して居る。

それで火山と云ふものは、今申したやうな譯で地球の内部から、地球の表面まで噴出した所の岩漿であります、それは大抵地球の表面に、山を造つて居るのであります、大きいと小さいとの差はありますが、必ず山を造つて居ります。

今度は其火山の地形と云ふことを考へねばなりませぬ、火山の地形に於ても、矢張り原形と次形とに分けて考へねばなりませぬ、此の場合には、先刻申した原形と次形とは少し意味が變つて來ます、建設作用で出來た地形でも必ずしも火山の原形とは言へない、火山の場合には、どう言はねばならぬかと云ふと、火山の原形と云ふのは、火山作用の中の、建設作用で出來たものに限らなければなりませぬ、例へば先刻申した爆裂の如きものは、火山作用であるけれども、破壞作用でありますからして、それに依つて出來た所の爆裂火口の如き地形を、原形と云ふことは出來ませぬ、又火山の斜面へ持つて行つて、水の働きで堆積作用に依つて、新に建設された所の土地と云ふものは、建設作用であるけれども、それに依つて出來た所の地形は、火山の原形と云ふことは出來ない、是は矢張り火山の次形の方に入れねばなりませぬ、火山の原形及次形と云ふ場合には、即ち火山作用の中の、建設作用で出來た所の地形を、火山の原形と云ひ、其他を次形と言はねばならぬのであります。

それで一體地球の表面の山岳の地形を見まするに、原形を存して居る地形と云ふものは、極めて稀であります、例へば褶曲の山脈であつても、其の褶曲作用は極めて長い年月の間に、徐々に行はれたものであるから、其建設作用が行はれると同時に、又一方に破壞作用が、それと併行して進んで行つて居るからして、原形と云ふものは、充分に存在することは無い、即ち原形次形の相半ばしたものが、初めから出來るものである、ところが火山に於ては、比較的能く原形を存して居ります、即ち火山が出來ますのは、それ等の褶曲作用に比べますと、短時間にして、出來るものと云ふことが出來ますから、火山は出來上るまでに、まだ餘り破壞作用を受けないで、殆ど完全なる原形を殘して居ることは、決して稀ではないのであります。

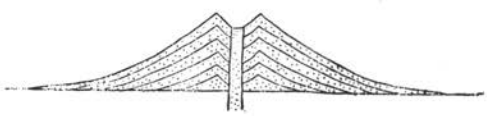
火山の原形と云ふものを論じますに、更にそれを細かく分けて見なければならぬ、火山の原形を定める事情は、どう云ふものであるかと云ふと、これには二つの事情があります、即ちこゝに揭げて置

◎火山の地形　大橋

◎火山の地形　大橋

きました通り、一つは其火山を造る所の、岩石の性質が火山の原形を支配するものである、それから第二は、火山の構造が、其火山の原形に著しい關係を有つて、居るのであります、即ち火山の原形は、其火山の岩石の性質、及其火山の構造に依つて、定まるものと言つて、差支ないのであります、一口に言ひますと、火山なるものゝ地形は、圓錐體であります、即ち富士山のやうな形をして居るのが、火山の特徴であります、富士形の山を見れば、其土地を踏まない前から、是は恐らく火山であらうと云ふ、想像を普通下すのでありますが、併しそれと逆に、然らば圓錐體の形をして居るものは、火山であるかと、申しますと、それは必ずしもさう限るものではないのであります、火山は圓錐體を成して居るけれども、圓錐體の山、必ずしも火山ではないのであります、其最も手近い例を申せば、常陸の筑波山であります、常陸の筑波山は、遠くから見ると殆ど、完全な圓錐體を備へて居りまして、曾て未だ十分に研究されない頃には、あれを遠くから眺めて、火山であると想像した時代もあつたのであります、併し實際行つて調べて見ると、あれは決して火山ではないのであります、火山の圓錐體であると云ふのは、即ち火山の原形でありますけれども、其外の山で、圓錐體を成して居るのは、原形ではなくして、次形の方であります、其性質を全く異にして居るのであります、外觀上、形は似て居りますが、其出來方を全く異にして居ります、火山は一口に言へば圓錐體を成して居る、さうして其圓錐體の下部は、非常に緩慢な傾斜を以て、長く擴つて居るのが普通であります、之を火山の裾野と名づけまして、火山の地形に一つの重要なる要素を成して居るものと、私は思つて居る、一體火山に行きますと、非常に壯快な感じを起すのであります、それは必ずしも淺間の如き活火山に限るのでなく、赤城の如き、極めて平穩にして、高さも低い山に行きましても、實に壯快なる感じを與へます、それは何故であるかと云ふと、即ち火山の裾野が實に雄大なる趣をそへるのであります、極めて平凡のやうに見えますけれども、實は此裾野なるものが、斯樣な感じを與へるものであると私は信じて居

ります、決して火山の頂上の噴火口からして、常に天に冲する噴烟を見て、壯快であると感ずるのではない、極めて永い間休眠の狀態になつて居る火山に於ても、非常に壯快に感ずるのは、即ち其裾野の發達にあるのであります。



第壹圖

稍々委しく火山の原形の事を御話いたしますが、原形を支配する所の岩石、此岩石を大別して二つとします、第一は碎片物質と書いて置きましたが、即ち水蒸氣其外の瓦斯の力の爲に、熔岩が碎かれたものである、第二は熔岩として置きました、是は岩石の熔けた物、それが其儘の形で流れ出したものであります、碎片物質なるものが地球の表面に噴出して、堆積しまするに、普通どう云ふ形を取るか、今簡單に分り易い爲に、碎片物質ばかりの場合を申しますと、碎片物質から成立つて居る火山は、普通斯う云ふ形をして居る。(第一圖)噴出の中心が此所にありまして、此所から碎片が噴出する、其碎片の落つる所は、此噴火口の際にあるのでなくして、稍々離れた所にある、それ故に此噴火口を、稍々離れた所が一番高い點である、其點から外と內の方と、兩方へ傾斜して、斯う云ふ形を取るものであります、それで此場合に、其傾斜の緩であるか急であるかと云ふことは、何に依つて定まるかと云ふと、其碎片物質の粒の粗いとか、細かいとか云ふ、大小に依つて、此傾斜の緩急が定まるのでありまして、粒の粗いものほど、傾斜が急になります、最も急なものに於きましては、三十五度ぐらゐからして、四十度に達する例も、あるのであります。

それから次に、熔岩の方を考へて見まするに、熔岩で以て、火山の地形に影響する性質は、流動性であります、其熔岩は水の如く、容易く流れる所の、性質を有つて居るか、或はもつと流れにくいどろ〳〵した性質を有つて居るかと云ふこと、即ち其流動性が地形を支配するに與つて力があります、

◎火山の地形　大橋

◎火山の地形　大橋

熔岩の流動性の高いもの、即ち極めて流動し易い熔岩から出來て居る地形の好い例は、大平洋の眞中に在る所の、布哇の火山で、大體に於て圓錐形を成して、極めて低い山である、それから熔岩の性質が極めて粘糊の場合には、是が高い、さうして熔岩の端の所は急な傾斜を有つて居る、即ち平な土地から徐々と山に登らず、山と平地との境が急になつて居て次の圖のやうな、地形を呈するのであります、熔岩の流動性は何に依つて定まるかと云ふと、其熔岩の化學成分及溫度であります、化學成分と言ひましても、主として其中に含まれて居る硅酸の量でありまして、硅酸の量に富んだ熔岩は、非常に粘糊であります、即ち第二圖のやうな火山の地形を造るのであります、それから硅酸の量の乏しい熔岩は、極めて流動し易いから、布哇火山に於ける如く、平たい圓錐體を造るのであります、(第三圖)布哇に於きましては、山の斜傾は三度乃至十度ぐらゐの、極めて緩かなものであります。



第　貳　圖

それから第二は構造の方に移ります、構造と云ふものも、亦細かく分けて考へる必要がありまして、唯一口に構造と言ひますけれども、其中には、色々な事情を含んで居るのであります、第一に其火山を造る所の各種の岩石の排置と云ふことが、構造の一つであります、第二に其火山を造つた所の噴出の中心が、一つであるか、又澤山であるか、又其間の關係がどうなつて居るか、即ち主なる噴出中心の排置と云ふことが、構造の第二であります、それから第三に、主に對して從と書いて置きましたが、是は普通寄生火口とか、側火口とか名づけて居るものであります、今茲に主と書いた爲に、あとを從として置きましたが、詰り同じ意味であります、從火口の排置と云ふことが、構造の第三であります、それから次に、明瞭なる噴出中心を有たぬ所の噴出があります、それは裂罅噴出と名づけるものであります、これを第四番目に列べて置きました、火山の構造を言ひますと、是だけのものを考へに入れなければならぬと思ひます。

第一岩石の排置に就て申しますと、只今は簡單な爲に、熔岩から出來て居る火山、及碎片物質から出來て居る火山の地形を、一言申上げましたが、多くの火山、殊に大形の火山に於きましては、決して斯樣な簡單なものでなく、熔岩もあり、碎片物質もある、此兩者が混合して出來て居るのであります、此兩者が混合して居る場合に、其地形は矢張り大體に於て、圓錐形を成して居るけれども、其傾斜の緩急は、碎片物質と熔岩との、分量の割合と云ふものが、餘程影響するものでありまして、熔岩が多いほど傾斜が緩かである、それから碎片物質が多いほど、傾斜が急になると云ふのが、普通の例であります。



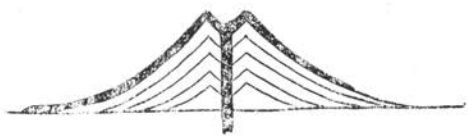
第三圖

それに次ぎましては、其岩石の水平的の分布、及垂直的の分布であります、下部に熔岩があつて、上部に碎片物質があるか、或は下部に碎片物質があつて、上部に熔岩を戴いて居るかといふやうな、垂直的分布、及是等がどう云ふ地域に擴つて居るかと云ふ、水平的分布を考へることであります、普通多數の場合に於きまして、火山と云ふものは、重もに內部が碎片物質から成立つて居り、表面が熔岩から成立つて居ると云ふのが、多くの例であります、富士の如きも、表面は全く熔岩で蔽はれて居るけれども、內部は碎片物質から出來て居るに、相違ないと思はれます、若し左樣でないとすれば、あの急な圓錐體の說明に困しむのです、それであるから火山の極初期の形を定めるのは、第一圖のやうな地形でありますけれども、是だけで終つて居る火山は少い、更に此上に熔岩を戴き、又其上に碎片物質を戴いて居ると云ふ場合が多い、若し上に熔岩を戴いて居る場合には、其熔岩の流動性の如何に依り、又其熔岩の分量の多少等に依つて、異つた地形を造つて居るのであります、熔岩が極めて流動性に富んで居る場合には、此地形は上に熔岩を戴いても、大して地形に影響する所は無いのでありますけれども、（第四圖）其熔岩が、非常に粘稠なものでありますと、其元の碎片物質から成立つて居

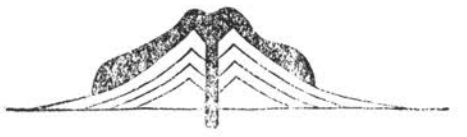
◎火山の地形　大橋

◎火山の地形　大橋

る地形を、餘ほど變へるのである、即ち非常に粘稠の熔岩であると、火口から餘り遠くに流れずして、且つ其熔岩流の末端は、非常に急に傾斜を成して居りますからして、元の圓錐形の上に、更に熔岩から出來た圓錐體を冠せて、(第五圖)の樣な形を成すのであります、注意して御覽になると、能く火山にある所でありまして、裾野から上つて行くにしたがひ、次第〳〵に傾斜の角度が增して來る、而して山の中腹にまで行くと、前面は一つの小山に依つて、遮られると云ふことが屢々あります、其小山と云ふものは熔岩流の末端である場合が多い、其山を登りますと、其上は又更に緩傾斜であつて、次第に頂上まで連なつて居る場合が、少くないのであります、彼の那須火山、草津の白根火山の如きところに、著しい例があります。



第四圖



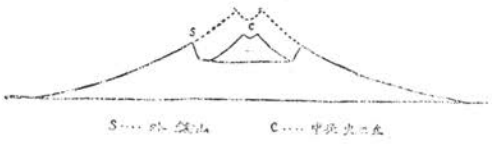
第五圖

それから主なる噴出中心の排置と云ふことに付て考へますに、是は便宜の爲め、茲に委しく分けて書いて置きましたが、主なる噴出中心の一つある場合と、二つ以上ある場合とに分けることが便利であると思ひまして、自分勝手ながら、あゝ云ふ風に分けて置きました、即ち噴出中心が一つである場合、例へば駿河の富士のやうな場合、それから噴出中心が澤山ある場合、是は隨分例があるのであります、乘鞍火山の如き、私は行つて見ませぬが、報告を見まするに、噴出斯樣に之を二つに分けることが出來ます、それで此一つの噴出中心を有つた火山を單心構造の火山、二つ以上の噴出中心を有つて居るのを多心構造の火山として置きました、此單心構造は、更に二つに分けることが出來る、一つは單一單心構造と書いて置きました。此中心が澤山ある火山であります、

名前は果して適當であるかどうか知らないのでありますが、外に好い名前を考出せなかつた爲に、斯う云ふ名前を書いたのであります、第一圖乃至第六圖の如きもので、駿河の富士の如きも、單一單心構造に屬します、第二は共心構造と書きました、是は二重にも三重にもなつて居る火山であります、



第六圖



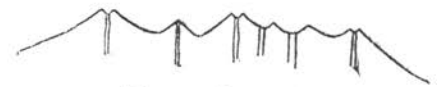
第七圖

此例は澤山あります、外輪山及中央火口丘から成り立つて居る所の火山であります、(第七圖)斯う云ふ風に、二重になつて居る、或は更に此の中に、火山が出來て、三重になつて居るが、皆噴出の中心が元の中心ですから、單心構造であつて、さうして澤山重なつた狀態を成して居るから、共心構造と名づけます、此外部の山が斯うずつと輪のやうな形を成して、中の山を取巻いて居るのを、外輪山と稱し、中の山を中央火口丘と稱し、此間の土地を之を火口原と稱す、斯う云ふ風な名稱を付けて居ります。

それから第二の多心構造との中を、又單一多心構造と、偏心構造との二つに分けます、單一多心構造は、同時に澤山な中心から、噴出した火山を言つたのであります、(第八圖)こんな風に、澤山な噴出中心があつて、それから熔岩が流れて、其火山を造つた場合、之を單一多心構造と名けたので、此場合には中心の間の距離が、大變地形に影響します、第二の偏心構造としたのは、多くの中心から同時に噴出したのでなく、各々中心は時代を異にして、活動した場合であります、即ち外見上は似て居るけれども、斯う云ふ火山があつて、更にこちらの方に中心が出來て噴出したと云ふやうな場合を分けたのであります、(第九圖)乘鞍の如きはこれに屬するのであります、多心構造の場合に、各噴出中

◎火山の地形　大橋

心の間に斯う云ふ低地が出來ます、共心構造の場合に外輪山と中央火口丘との間に、低い土地が出來たと同じやうに、隣合つた所の火山の中間に、低い土地が出來ます、之を裾合谷と名づけます、此場合にも中心距離の長い短いが、大變地形に影響するのであります。



第八圖




第九圖

それから三番目の、主に對して、從火口の排置と云ふのは、是は極く小さな不規則を生ずるばかりでありまして、火口の大體の形に影響するものでありませぬ、此從火口の排置に、色々の場合があります、或は何等の規則なく、存在することがあります、又主なる火口の周圍を取卷いて、共心狀に排列して居る場合があります、又丁度車の軸からして、輻が輻射狀に出て居るやうに、主なる火口を中心とした所の、輻射狀の位置に列んで居る場合もあります、又一つの直線に沿て排列して居る場合もあります是等の如きは其火山の原形を定める從火口の排置であります。

それから第四番目の裂罅噴出と云ふのは、是は日本などには、餘り例はありませぬ、又世界に於ても、澤山ありませぬ、明瞭なる噴出中心を有たずして、長い地殼の割れ目のやうな所から、熔岩が噴出する場合であります、此の場合には、山岳といふよりも、むしろ臺地を作ります。

先づ火山の原形を支配する所の、構造なるもの〻內容を擧げて、御話したのでありますが、更に火山の原形を、支配する所の條件が猶二つあります、それは其火山が出來るより、以前の、其土地の地形であります、火山其物の形ではありませぬ、其火山以前の地形と云ふものが、新に生じた所の、火山

の地形を支配することが、なか〳〵少くないのであります、高い山の頂上に、火山が出來るとか、或は其山の或一方の斜面に出來るとか、色々込入つた複雜な地形の所に出來るか、或は簡單な平原の上に出來るかと云ふやうなことが、非常に影響するものでありまして、富士の如きは、極めて境遇の好い圓滿に發育した火山であります、富士山の形が火山のタイプとして、認められて居るのは、火山其物の働きにも依りませうけれども、其火山の生れた場所が非常に好かつた、人間ならば非常に境遇の好い所に生れた火山であります、即ち富士の北にある御坂山脈以南の地は、極めて緩かな傾斜を以て、駿河灣まで來て居る、殆ど平原のやうな土地であります、多少の不規則はありましても、大體に於て障碍物の無い所の場所に、噴出した爲に、あゝ云ふ圓滿なる發育を遂げたと言つて差支ない、其次に其火山が陸上に出來たか、或は海中に噴出したかと云ふこと、是が矢張り火山の地形を左右するものであります、陸上ならば海に近い所であるか、或は海に遠い所であるか、或は海面からの高さが、高い所であるか、低い所であるか、風の方向や强さは何ふであつたかと云ふことを考へに、入れなければならぬ、それから海中ならば、其海の狀態が淺い海であるか、深い海であるか、又そこの海水はどう云ふやうな運動をして居たかと云ふことを、考へに入れなければならぬ、さうでないと火山の原形を見て、十分に理解することが出來ないのであります、此陸上の有樣、海中の有樣と云ふことは、岩石の排置と云ふことに、非常に影響を及ぼしますから、從つて地形に大なる影響を及ぼします。

それから續いて火山の次形の方に移ります、此次形を生ずる働きと云ふものは破壞作用であります、破壞作用に依つて出來たのが次形であります、火山の場合にはどう云ふ破壞作用があるかと言ひますと、破壞作用の中を、四つに分けて、第一は火山の爆裂、第二は陷落及崩壞、第三は熔岩流が地形を破壞する作用、第四は彫刻作用即ち侵蝕作用であります。

火山の爆裂と云ふことを考へるには、其爆裂の大きさとか、それから爆裂火口の形狀、火山體の、ど

◎火山の地形　大橋

の部分に爆裂したかと云ふこと即ち位置を考へなければ、爆裂に依つて出來た所の、地形を了解することが出來ないのであります、例へば盤梯山の如き場合には、其爆裂火口の大きさとか、形狀とか、あの山の頂より稍々北に向つて生じた所の、位置と云ふやうなことを調べなければならぬ、又爆裂が爆裂のみとして、次形を生ずるばかりでなく、其爆裂が更に他の破壞作用を導くのであります、即ち爆裂と崩壞と云ふものは、必ず相伴つて居ります、盤梯山の如き、非常に大きな爆裂火口が出來ましたが、あれは單に爆裂だけに依つて、出來たと考へることは出來ませぬ、爆裂に依つて、眞に破壞飛散されたのは、あの爆裂火口の一部分に過ぎない、即ち一部分飛散らされれば、今まで支へられて居つた關係を失つて、崩壞と云ふ現象が起る、それが、あの火口を造るに與つて非常に力があつたに相違ない、單に爆裂に依つて出來たのでなく、其爆裂に崩壞が伴つた爲に、あのやうな地形が出來たものである、爆裂と云ふことがあれだけ、大きな區域に、一樣に起つたのでなく、あの大きな區域の中の、極めて小さい或部分だけが、爆裂に依つて、本當に飛散らされたのである、又爆裂と同時に伴ふ崩壞でなく、後に崩壞の起ることを助けるものであります、即ち爆裂で出來た火口の絶壁は、常に崩壞して火口を擴げるものであります、それから又爆裂は此後の方に掲げて置きました所の、彫刻作用を非常に誘ふものであつて、大抵の火山に於て、爆裂火口を見ると、それが川の源を成して居る、爆裂はもと岩漿の中に含まれて居た揮發成分、主として水蒸氣及其の瓦斯の力で、出來たものでありますが、それ等の揮發成分は、爆裂が終つたから、直ちに止るものでなく、爆裂火口の跡には必ず其餘勢を殘して居る、是等は噴氣口を成して居り、或は温泉を成して居る、それが川の源を成して居ると云ふことは常に見る所であります、即ち爆裂は、爆裂其物として地形を生み出すのみならず、崩壞を伴ひ、又侵蝕作用を誘ふのである、さう云ふ風に爆裂火口に、根元を置いて居る川は、普通の川より少し作用を異にして居る場合が、少くないのであります、普通の川は天から降つた所の、雨の水を内容に仰

いで居りますから、割合に純粋の水でありますが、爆裂火口を本にして居る川は、決して純粋の水でなく、殊に硫酸の如きものを含んで居るのが澤山ありますから、それ等は普通の川と異つて、其岩石を分解することが強い、從つて其川の彫刻作用は亦特殊の所があります。

それから第二の、陷落と崩壞とは、どう云ふ區別かと云ふと、一つの火山がありますと、陷落と云ふものは、其火山の頂上の一部分が、中へ落込むのが陷落であります、それから斜面に沿ふて、下の方へ崩れ落る場合を、それを崩壞と名づけるのであります、どちらも主として、重力の作用に依るのでありますが、唯其方法を異にして居ります、陷落の場合も爆裂と同じく、大きさ、形狀、及位置と云ふことを考へて見て、初めて其地形を了解することが出來ます、それから、崩壞の方は、先刻申したやうに、爆裂の誘ふ所となつて起ることがある、それから又川の彫刻作用に依つて、誘はれることが少くないのであります、即ち川が段々山を抉つて行きますと、單に川の水が、それを侵蝕するばかりでなく、其左右の岸からして重力の作用で岩石が崩れ落ちてそれが川の水に依つて運搬し去られると云ふことが多いのであります、即ち彫刻作用と崩壞と常に相伴つて居ります、こゝで此崩壞と云ふものと爆裂と云ふものとちよつと比較して見る必要があります、一時に大きな崩壞が起りますと、其結果は非常に能く爆裂に似て居ります、爆裂の場合に於ては破壞された所の岩石や土砂の如きものが謂はゆる泥流となつて押出します、それから崩壞の場合にも崩れた所の岩石や土砂が爆裂の場合の泥流と能く似た形を以て押出すのであります、さうして其崩れた場所は時に依つて爆裂であるか崩壞であるかと云ふことは單に地形に依つて判斷が出來ない場合が極めて多いのであります、そこで注意せねばならぬことが起るのであります、火山には一見爆裂に依つて起つたやうな地形がある、又爆裂に依つて出來た泥流のやうなものが、其下に分布して居る場合に、火山のことであるからして、之を爆裂であると認めるのは、無理もないことでありますが、併しさう速斷するのは、まだ早いと思ふのであり

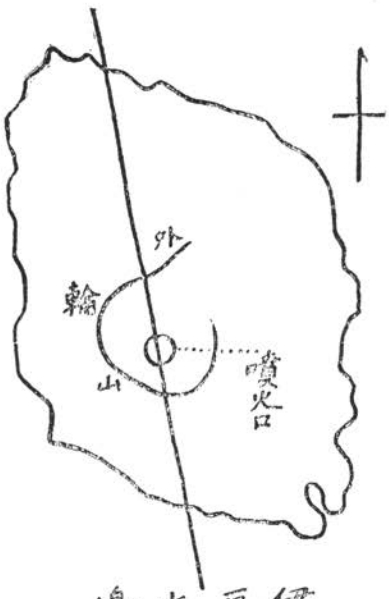
◎火山の地形　大橋

◎火山の地形　大橋

ます、即ち爆裂と崩壊と云ふものは、其結果が非常に能く似て居りますから、爆裂であつて崩壊でないと云ふ證明が出來ない以上は、爆裂であるとすることが、出來ないのであります、或は今まで爆裂と認めて居る火山の中に、實は爆裂でなく、崩壊に依つて出來た地形があるかも知れませぬけれども、私は別にさう云ふ例を知つて居る譯でありませぬ、唯さう云ふことに注意しなければならぬと云ふことを、感じたのであります、それは常陸の筑波山を調べて見て感じました、筑波山の今日の地形は、非常に崩壊作用が與つて力があるので、あれは外形に於て、火山に似て居るけれども、あの岩石を調べて見ると、決して火山ではないのであります、實は火山でないから仕合せであります、若し筑波山が、火山岩で出來て居つたならば、筑波山は其周圍に多くの爆裂火口があると云ふやうに、私に於ても、或は誤つた考へに捉はれたかも知れませぬ、幸にして火山岩でない爲に、爆裂でなく崩壊であると云ふことが分つたのであります、さう云ふ例から考へて見まするど、火山に於て、爆裂火口であると云ふことを、速斷するのは、愼まねばならぬことゝ思ひます。

茲に於て、ちよつと御注意して置きますのは、二重式火山、或は三重式火山の場合に於て、其外輪山はいつでも大きいものであります、箱根の外輪山の如き、直徑が三里ばかりあります、或は阿蘇の外輪山も、非常に長い直徑を有つて居ります、ちよつと考へて見まするど、其外輪山の活動して居つた當時には、三里も五里もあるやうな大きな噴火口を有つて活動して居つたのであるか、どうかと云ふ疑問が起るのであります、疑問が起れば、結構でありますけれども、疑問を起さずに、元の火口は非常に大きかつたと思ふ人があるかも知れませぬが、それは多くの場合に於て、間違ひであらうと思ひます、矢張り此外輪山が、活動して居つた當時には、其火口の大きさは、小さかつたものであります、それが後に破壞作用の爲に擴げられたので、さうして今日三里も五里もある直徑を有つて居るものであります、其外輪山の擴りの原因は、茲に掲げました破壞作用のどれであるかと云ふに、これは

其の場合〳〵に一々當つて見なければ了解することが出來ないけれども、多くの場合に於て、爆裂或は陷落に依つて、擴張せらるゝ場合が多いのであります、こゝで一つ例を御話しなければならぬのでありますが、箱根や阿蘇の如き、是は恐らく火山の頂上の部分が陷落したものであらうと思はれます、確かな證據があるのではありませぬが、それが尤もらしいと認められて居るのであります、それから伊豆の大島の外輪山も、隨分大きなものでありますが、私は恐らく陷落で出來たものであらうと思ふのであります、茲にちよつと例として、大島の圖を出して置きましたが、（第十圖）是は餘り好い例ではありませぬ、例としては不充分なものでありますが、自身が見た例であるから、こゝに例として出して置きました、大島の外輪山を見まするに、中央火口丘は極小さなものである、其周圍に大きな舊火口の跡があります、是が即ち外輪山であつて、此絶壁を見まするに、此所に岩脈などが立派に現はれて居ります、此大島の外輪山は火山の原形でないと云ふ證據があります、何となれば岩脈と云ふものは、火山の内部の弱點を求めて、熔岩が侵入したものであつて、絶壁になつて居る所に、岩脈が出來る譯は無い、それから又外輪山の高さは各部一樣でなく、或は高く或は低く、其差は僅でありますが、高い低いがあります、ところが薄い熔岩流が、高い所も低い所も、一樣に聯絡し



伊豆大島
二十万分ノ一
第十圖

◎火山の地形　大橋

て居る、是も外輪山が原形でないと云ふ證據であります、若し高い低いがあつて、活動して居れば、熔岩が低い所を選んで流るべきであるが、さうでなくして、今日の高い低いに拘はらず流れて居るのは、此外輪山は原形でない證據であります、原形でないとしたならば是は次形でなければならぬ、其次形がどうして起つたかと云ふと、爆裂か陷落か、或は次に述べるやうな働きで起つたかも知れませぬけれども、大島の場合には、爆裂か陷落かと云ふ問題のほか、殆ど考へる必要が無い、彫刻作用で起りたるにあらず、又熔岩流に依つて、火口壁の一部分が破壞された場合とは明かに異つて居りますから、陷落か爆裂かに相違ありませぬが、是は容易に決し難い問題であつて、實は何れとも判然言ふことは出來ないのであります、若し爆裂ならば、非常に大きな爆裂であるからして、多量の破片が出來て居らなければならぬが、さう云ふものは全く見えないので、已むを得ず是は陷落であらうと、想像するのであります、それで大島の外輪山は、どう云ふ風に陷落したかと云ふと、斯ふ云ふ風に（第十一圖）噴火口を中心として、周圍が同じ割合で、陷落したのでなく、之を調べて見ると南の方は非常に傾斜が急である、且つ海拔が高い、それから北の方に行きますと、段々海拔の高さが減じて行き、又外側の傾斜は緩かになつて居る、南の方では三十度位で、是から段々緩かになつて北方では十度ぐらゐの傾斜であります、即ち北の方の側が陷落した部分が多く、南の方の側が陷落した部分が少いと云ふことが、想像が出來ます、此中央火口丘は、南の方に偏して居る、南の方に偏して居るからして、此形勢で考へて見ると、此外輪山當時の噴火口も、矢張り今日の噴火口と、殆ど同樣の位置にあつたと思はれます、故に大島は先刻構造のときに、御話した單心構造の方に屬するのであります、それで二重になつて居るから、共心構造の方であります。



第十一圖

それから三番目の熔岩流に依つて、火口壁の一部が破壞されること、是は餘り澤山例はありませぬ、

日本などで好い例が有るか無いか、私は寡聞で能く存じませぬが、外國には幾らか例があります、是は元來火山體を造つて居る所の岩石が、薄弱の場合にのみ起るのでありまして、さう云ふ火山に於ては、後に噴出した熔岩が、火口壁の一部分を押破つて流れ出すことがあります。

それから第四の彫刻作用、是が極めて大なる問題でありまして、是は火山ばかりでなく、總て地形を造るに彫刻作用が、最も大なる働きをなして居ります、是にも色々あります、即ち流れる所の水の彫刻作用、それから靜に止つて居る湖水とか、海とか云ふもの、彫刻作用、氷や雪の彫刻作用、風の彫刻作用などがありますが、其中で最も主なるものは、流れる所の水、即ち川の彫刻作用であります、川と云ふものは、どう云ふ風に發達して居るかと云ふと、火山と云ふものは、大體に於て圓錐體でありますから、川の發育も、亦其斜面に從つて、輻射狀の位置を取るのであります、それ故火山に於ては、其谷に輻射谷といふ名を與へて居ります、地形學上、彫刻作用の程度に依つて、地形を種々の階級に分けるのであります、即ちまだ彫刻作用を餘り受けない所の地形、是は地形の赤ん坊と稱するのであります、それから段々に彫刻が進んで行くに從つて、少年時代となり、壯年時代となり、老年時代となると云ふやうに、彫刻作用の程度に依つて、地形に幼年壯年老年の區別をして居ります、地形が赤ん坊から出て老年になるまでに、どう云ふ變化をするかと云ふことは、極めて面白い問題であるけれども、それを委しく御話する餘裕はありませぬし、又委しく御話する準備もして居りませぬから、それ等は今日御話いたしませぬが、此幼年から老年に達するまでの一生を、地理學的輪廻と稱する、なせかと云ふと是は一つの循環でありまして、地球が大陽の周圍を三百六十五日で、一週すると同じやうな、一つの循環であります、春が來て、夏が來て、秋が來て、冬が來て、復た春に接續するやうな一つの循環があります、是は最初に地球の内部のある力に依つて、地殻が押上げられて、海面から上に出るのが、抑々初めであります、さうすると海面以上に出すまいとする働き、即ち彫刻作用が、削り削つて、

◎火山の地形　大橋

◎火山の地形　大橋

復た再び海面に戻す、斯様に丁度一週します、海面から出て復た海面に戻るのであります、斯う云ふ風に彫刻作用は、海面に歸する迄行はれます、故に海の面を彫刻作用の基準面と名けます、是は委しく述べますと面白い問題であります、殊に旅行して高山深谷を跋渉なさる御方に取つては、興味のある問題でありますけれども、今日は深く立入りません。

それで火山に付て二三の例を擧げて、見ますと、富士山のやうなものは、まだ大部分原形を備へて居る、是は申すまでもなく、幼年の時代にあります、それから上州白根山の如き、稍々進んで居りますが、まだ決して壯年時代に達して居りませぬ、箱根の如きは、それより多くの彫刻作用を受けて居ります、それから天城の如き、榛名の如きは、餘ほど彫刻作用が進んで居ります、併しまだ決して、老年時代にまで行つて居るのではありませぬ、地形が幼年から老年に達するには、極めて長い時を要しますから、我々一生で、それの變化を目擊することは出來ませぬ、否數百年數千年間に、認める變化と雖も、極めて僅であります、今こゞに旦に生れて夕に死する昆蟲があつて、それが人間を觀察したならば、皺の寄つた杖にすがつた人もあり、又歩けない小さな人間もある、或は大な身體を有し活潑に運動をして居る者もある、旦に生れて夕に死ぬ者から見れば、決して其間に聯絡は付かない、人間は實に千差萬別極りないものと思ふでありませうが、人間が地球の表面を觀察するのも、丁度同じことであつて地球の表面は、千差萬別極り無いやうに見えますが、併し能く考へて見れば、其間に色々の程度があつて、幼年から老年までの、總ての階級を見ることが出來るのであります、斯う云ふことは旅行をなさる方々に取つて、極めて重要なことゝ思ひます。

火山の彫刻作用の發達と云ふものは、山の頂上から輻射狀に始ります、而して是が段々發達して行きますと、富士の如き、極單一の頂上であつたものも、此頂上が段々澤山な峰に分るゝやうになつて、川が次第に發達して來ると共に、斯う云ふ風に澤山に分裂します、尙ほ川の支流や本流の成長するに

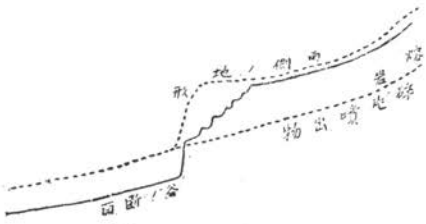
從つて、益々此地形が複雜に彫刻されて、遂に原形を認めることが困難になるのであります、火山の外輪山が、先刻述べました爆裂や、陷落などで擴げられた場合もあるけれども、或場合には、單に彫刻作用ばかりで、火山の頂上が、あゝ云ふ風に分裂して、其後更に新しい活動の爲に、あの眞中に火山が出來ることがあるが、さう云ふ場合には必ず二重火山を生じ、不完全ながら周圍を取卷いて居る外輪山があります、さう云ふ場合にこれを結付けて、是が元の噴火口であると云ふのはおかしい、こう云ふ場合に、此高い點を連ねたからと云つて、元の火口壁を想像することは出來ないのであります、是はこゝで御話するほどの確信は無いのでありますが、榛名の如き、あの外輪山なるものは、非常に複雜でありまして、既に壯年の時代まで彫刻作用を受けて居るものではなからうかと思ひます、それが後に、榛名富士の如き中央火口丘が出來て、舊火口の中に新しい地形を造り、又舊火口の外側に輕石のやうな噴出物に依て、新しい地形を造つて居ります、あの外輪山は、壯年の時代まで彫刻作用を受けたものであらうと想像します、あの外輪山を今連ねて見ました所で、元の火口の形を想像することは、少し無理であらうと思ひます、それで時代の經つに從つて、火山の原形は、段々輻射谷の爲に崩れて仕舞ひまして、遂に其火山の最も心を造つて居る所の熔岩の塊りだけが、突出して殘り、其他の部分は、殆ど平に削られて仕舞ふ樣になります、こう云ふ突出は、即ち岩頸と呼ばれて居るものであります、或は火山の內部に盛んに貫通した岩脈が、屛風狀を成して殘ることがあります、さう云ふ風に種々の彫刻の程度を經て、其儘に繼續すれば、遂に老年の時代になつて、再び平原のやうなものに削られて仕舞ふべき運命を有つて居るのであります。

それから一寸付け加へて置きますことは、先刻述べました熔岩流の末端が、急傾斜を以て居る場合で、川の彫刻作用の最も强いのは、斯う云ふ傾斜の急な部分であります、此川の斷面を見ますと（第十二圖）此邊（上部）は傾斜が緩でありますから、割合に川が淺い、此所に來ると非常に急な、非常

◎火山の地形　大橋

◎火山の地形　大橋

に深い谷を成して流れる、さうして熔岩の末端の所に來ると、大抵瀧になります、即ち熔岩は堅いものであるから、堅いものから、其下の碎片物質の柔い所に移る時は、岩石の抵抗が變る爲に、急に水準の差を生じて、瀧を現出するのであります、又熔岩流末端の急斜面に於ても、水は急斜面を滑かに流れるものでなく、此の部分の谷は、不規則に成つて居て、瀧や急流の連續であります、下から谷に沿て登つて行くと、此所までは宜いが、此所で瀧に會して、到底通過することの出來ない場合が多く、却つて上流になると、極めて淺い平凡な谷になつて、仕舞ふ例は能く見ることであります。



第十二圖

それから次に靜水の作用を申上げます、海中なら、海の表面に波浪が起つて、海中の火山に於ては、其海岸の所に必ず絶壁を有つて居る（第十三圖）斯う云ふ水面がありますと、斯ふ云ふ風に海底から、火山が立て居る、さうして此所と此所は、必ず削られて絶壁を生じて居ります。

それから其次の問題、即ち火山の原形が次形に及ぼす影響を申しますと、是等の破壞作用の中でも殊に彫刻作用の如きは、原形と云ふものに、非常に關係を有つて居る、川などの發達すべき位置は、重もに原形に依つて定まるのであります、元の地形が富士の如き、立派な圓錐體であらば、極めて規則正しく谷が發達しますが、其原形の如何に依つて、其谷の發達すべき塲所が定まるのでありますから、火山の原形が、次形を定めるに、非常に大切な要素であります、それから三番目には、岩石の性質及排置でありますが、是は破壞作用を受けて、種々の反應をあらはす所のものであります、岩石の性質に付て、どう云ふことを考へねばならぬかと云ふと、岩石の堅さ脆さ、或は岩石に一定の割れ目があ

るか、又は不規則の割れ目があるかどうかと云ふ性質、是は節理と稱します、それから岩石の變質程度を考へに入れて見なければならぬ、岩石の排置に付ては、既に構造のところで述べましたから、再び申しません、この岩石の性質及び排置の如何に因て受ける所の破壊作用が同一でも、異つた地形が生ずるのであります。




第十三圖

それから四番目の堆積作用と云ふことは、地形一般から言へば、堆積作用は即ち原形を造るものでありますが、火山の場合に於ては、堆積作用は即ち火山の次形を作る働きであります、例へば海中火山に於て海岸の絶壁の所で削り取られたものを、外の斜面に持つて行つて、ずつと堆積する、(第十三圖)即ち此土地は、堆積作用で出來た土地であるから、火山の次形の方に屬する地形であります、又海の中でなくとも、陸上の川でも、其下流の部分は、色々の堆積物で新しい地形を造ります。

それから次は時であります、此時は彫刻作用の場合に特に大切であります、地形の幼年とか壯年とか老年とか申しましたが、それは時と云ふことを考へたからこそ、さう云ふことが分つて來るので、一瞬間のことを考へては、決してさう云ふ幼年老年と云ふことは分つて來る筈はないのであります。

先づ今までの御話で、火山の地形を大體は御分りになつたと思ひます、火山に於ては、先刻申しましたやうに、原形を存して居る場合が、他の例より多い、そして火山に於ては其火山の活動の盛んな時代には、主として原形を造り、其活動が熄んだ後は、主として破壊作用に委ねられて段々次形の方が發達するのであります、火山の活動時代と雖も、多少次形の發達はありますが、此場合には、原形の方が勝利を占めまして、次形の方が敗北して居ります、此活動が衰へてからは、反對に原形の方が蠶食されるばかりで、次第〳〵に次形の方にな

◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

つて行くのであります、以上は甚だ簡單で、實例なども餘り澤山なくて、面白くありませぬが、唯火山の地形と云ふものを、如何に觀察するかと云ふことの、極めて概念を、御話したのであります、是で御免を蒙ります。

# 日本アルプスと万年雪の關係

## 附　穗高山論

小島烏水

### 第一章

人氣や流行といふものは、役者だの、衣裳の柄や、色合ひだのにあるばかりでなく、自然物體にも、そのはやり廢たりが、及ぼされてゐるところが、おもしろい、外のことは暫らく措いて、山でいふと、歐洲アルプスに、マテルホルン（Matterhorn）といふ槍形の山がある、登山家は、埃及の方針塔（オベリスク）に、その形を喩へてゐるが、日本の山で比較すれば、先づ飛驒山脈の、槍ケ嶽に、どこか一寸似てゐる、このマテルホルンの絶頂に、始めて登り得た人は、エドワード、ワイムパア（Edward Whymper）といふ人である、そのワイムパアの書いた案内記（A Guide to Zermatt and the Matterhorn）にかういふことがある。

この大山嶽は、その地方にて、最高の山嶽といふわけではないが、人が何を措いても、このくらゐに、見たがる山嶽はない、汽車に乘つてゐる旅客は、毎日何の感覺もなく、ワイスホルンを通り

過ぎてしまふ、然るにケルヴィン山（マテルホルンの別名）が見え初めると、彼等は喝采の聲を擧げる。

とあるが、恰度飛驒山脈に宛て欲めると、この山脈での人氣ものは、槍ケ嶽である、マテルホルンより、もつと高いワイスホルン（Weisshorn 千八百六十一年英の科學者チンダル Dr. John Tyndall 始めて登る海拔一四、八〇三呎）が同型で、もつと肩幅の濶い山であるのに、一般登山家の人氣が、とかくつかないのは、槍ケ嶽の傍の穗高山が、槍ケ嶽と略ぼ同型で、同じ連鎖で、しかも輪廓頗る雄大で、槍ケ嶽こそ寧ろその一支峰の觀があるのに拘はらず、世間からあまり騷がれないのと、何處か似てゐる。

まあ人氣などはどうでもいゝ、併し穗高山は全く山らしい山である。

穗高山と槍ケ嶽を連結せる一線は、北アルプスなる飛驒山脈中で、最高の位置を占めてゐる、否、日本アルプス全體を通じても、白峰山脈の白峰と間の岳を除いて、この二連鎖の山に、匹敵する高さは何處にも無い。

さうして槍ケ嶽のやうな所謂「槍」狀の峰（ピーク）は、穗高山にあつて、最も數多くに攢まつてゐる、束ねられてゐる、日本アルプスを最高の祭壇とすれば、槍、穗高の連鎖は、その上に燈された蠟燭である、誰でも、あの邊の山に登つた人は、經驗のあることだが、日本アルプスで、一番先に眼につくのは、槍ケ嶽である、之に列なつて穗高山である、それは何故であるかと言へば、槍ケ嶽は形がおもしろく、穗高山は胸壁が、秀ぐれて高いからである。私は時々人から、日本の山嶽から、一番強い印象を受けたのは、何處だと聞かれる、そのとき私は霞澤嶽から初めて見た穗高山だと答へる、さういふ山の名さへ、聞かず、さういふ山の存在してゐることをすら知らず、突然に、何の豫告も、期待も無くして、頂は桔梗の莟を束ねたやうに尖つた、谷の空氣を一杯吸ひこんだ心臟の、ふくれたやうな、肩骨の黑

◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

黒とした大山が、空を黒くふさげて、眼の前に立つてゐたのだから、私は覺えず聲を擧げた。

ことしの夏、私は「新日本」(七月號)にかう書いた。

私は赤兒のときに、遠い自分の生れ故郷を出たきり、未だ一度も歸つたこともなし、又歸るにしても、家を擧げて出て來てゐるので、身を落ちつけるところもない、それであるから、少年時代から、故郷だの、歸省だのといふ語を聞いても、自分には、何の感興も起らなければ、懷つかしさも覺えない、只だ自分は歸るところが無いのだといふ、寂びしい心もちになるばかりだ、私は名ばかりの故郷へ、忙がしい「旅」をしに、行かうと思ふ氣になれない。

ところが、今では私が一年の内、大概夏に一度は、顏を見なければ氣の濟まない目的物が出來た、それは日本のアルプスと、私たちが言ふ信州や、甲州邊の、三千米突前後の大山脈である、この大山脈は、十年も前から、私には忘れられないものになつて、それ以來、只だの一回でも、毎年見舞ふのを缺かしたことがない、詳しく話をするのは、際涯の無いことだから、見合はすとして、その日本アルプスの中で、最も強く私を動かしてゐるのは、信州上高地峽谷であるから、それを一寸話さう。

三十六年の夏、信州白骨溫泉から、梓川の支流を徒渉して、霞澤岳といふ高山を、西側から登つてさんざん苦しんだあげくに、やつとその絕頂へ出た、絕頂は短かい木が、疎らに生えて、隙間から東側の谷が覗かれる、ひよいと谷を覗くと、私はおどろいた、谷とは言ひながら、長さが一里餘もあらう、濶々とした平地で、花崗岩の爛爛した砂土が、一杯布かつてゐるのだから眞つ白で、江の島邊の貝殼や、精げられた砂土で、坦らかな海岸でも見るやうであつた、その白く晃々と光つた砂の間を、蜿蜒つて、彎曲して流れてゐる谷川の水は、幅は狹いが、碧澄んで、岸を挾んで、青々とした水楊が、蓊を見るやうに行列してゐる、併しそれよりも何よりも、先づ第一に目についたのは、この谷川や高原を俯瞰して、日本にも、かういふやうな山があるかとばかり、驚かれる大山岳が、頭の岩石を、心臟形に尖らして、桔梗の苔を幾つも束ねたやうになつて、聳え立つてゐる、その屛壁の濶く、強く、鋭いことゝ言つたら、富士山や淺間山などばかり見てゐた眼に、あやしくも不可思議な幻像を映じたので、我ながらこれが「日本にある山である」といふ知覺を、明白にしたのは、暫くの間、ボンヤリとしてゐた後であつた。

この山は、今では、多くの日本アルプス旅行者に知られてゐる、穗高山である、この岩壁の縁きに槍ヶ岳が聳えてゐるのである、兩方の山ともに、夏でも殘雪が縱橫に白く、斑を入れてゐるが、槍ヶ岳の方は、霞澤岳からは見えなかつた、私は霞澤

の頂きから、この峡谷――即ち上高地（實は上河内が正しいであらう、土人はカミカウチとも、又訛つてカミゲチとも言つてゐる）へ下りて、熊をとる獵師小屋に一泊して、翌日初めて槍ヶ岳を登つたが、それは今こゝには言はない。私が初めて上高地へ下りたときは、土地の獵師の外は、誰も入つても來ず、又入り得るところでも無かつた、處女の森林は濃やかに綠りに、雪解の純碧の水は、油のやうにつる〳〵と流れてゐた、河畔に溫泉はあつたが、湯壺もなく、蛇の蛻（ぬけがら）が引ッかゝつてゐたほどだ。

その上高地は、今では日本アルプス登山者の間には、有名になつて林道は開ける、清潔な溫泉宿は建つて、年々の夏秋に入り込む旅客は、千人にも達するといふ話である、冬から春は大雪で往來は杜絕されてしまふ、自然に對する驚異の心を持つ人は、是非行つて見る價値がある、この土地の特色を擧げると、第一に海拔五千尺ほどの高原なること、第二に日本無雙の最高山脈、飛驒山脈中の槍ヶ岳（三千一百八十米突）穗高山（三千一百〇三米突）等へ、一日にして登り得らるゝのみならず、穗高山の脚下にあつて、殆んどその全容を仰がれること、第三に梓川の水色は、明淨、清徹、紺碧、その美くしき色に於て、如何なる溪谷の水も、匹敵されないこと、第四に奇麗な溫泉宿が一軒あること、第五に燒岳（別名磧黃岳二千四百五十五米突）は近頃噴煙を開始して、しかもこの山は、日本アルプス中、唯一の活動火山なること、第五に淵（殊に白樺）の美しきこと、第六に燒岳火山より放流の泥流のために河水を堰いて、神苑のやうな神々しい湖水を作れること等で、日本山谷の風光は、日本アルプスに大成し、日本アルプスの風光はこの上高地に、寸珠となつて縮寫されるといつていゝ。

それもその筈である、日本アルプス一帶は、山脈が雲のやうに折り累なつて、大きな壁を築いてゐるが、中にも飛驒山脈は、殆んど同一に近い高度を、ヅラリと並べて、それに複雜な鋭利な彫刻を施してゐる、所謂壯年の地貌（mature topography）を標式的に表現してゐるからである、槍穗高の一帶は、その中でも充分に發達した、成熟し切つた壯年の代表者となつてゐるのである。小藤博士が、覘嶺大山系（コルヂレラ）の一部と言はれた今の中國筋の日本覘嶺は、太古代の末葉に、アルプス式の褶曲山體を形成してゐたことがあるにもせよ、それが今日では、侵蝕作用のため、山體は剝脫離落して、海面近くまで低減され、準平原（ペネプレイン）となつたり、幸うじて九百米突の高臺になつたりしてゐる間に、我が斷層山脈なる日本北アルプスは、本邦山嶽中の勃興者となり、一萬尺以上の高度と、白雪の輝やきと、森林の綠と、

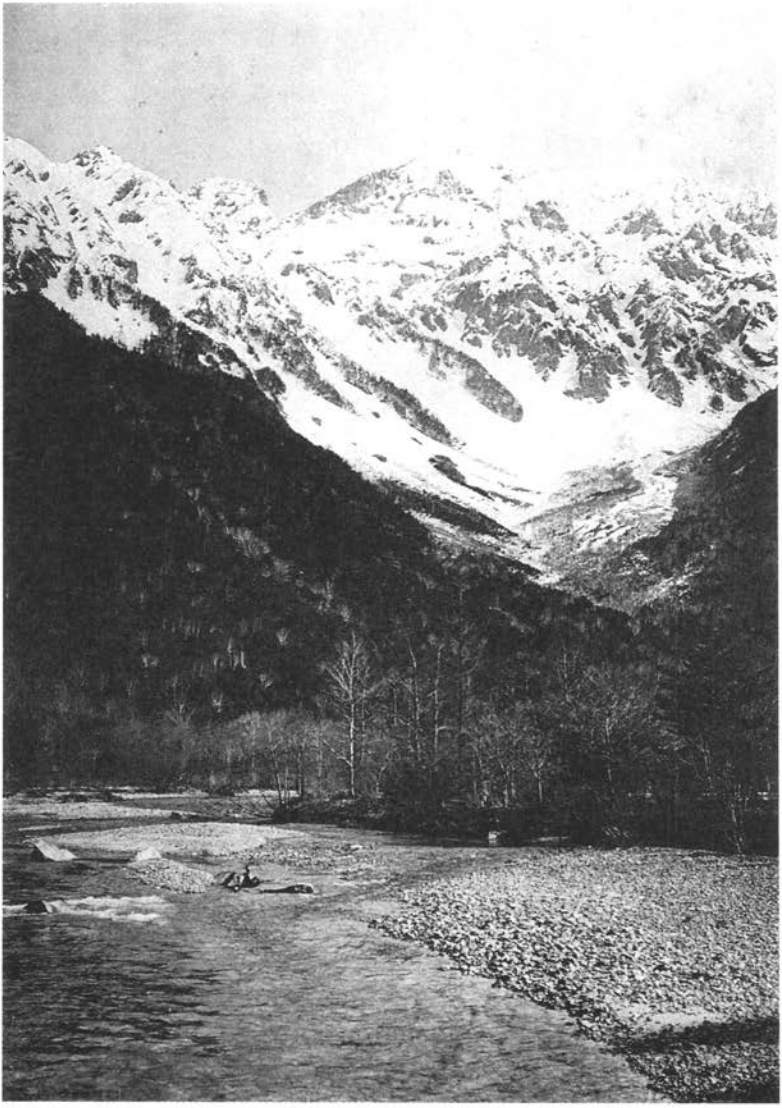
◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

溪流の迅速と、朝暉夕陰の美くしさとは、歐洲アルプスを引いて對照するの止むを得ぬに至つた、否歐洲アルプスを、最も多く知つてゐる外人に依つて、日本アルプスの名を被らされた、一部の地質學者先生が、地質及び山嶽構成の素因に就いて、歐洲アルプスと、何の關係も連絡も無いと言つて、否認してゐるにも拘はらず、さうしたアルプス型の地相上の狀態と表現とは、欺むくことが出來ないものであつた。

槍穗高の連鎖は、このやうに一段高く、日本アルプスの略ぼ中央座に、盛り上がつてゐるので、南の方白峰赤石山脈から見ても、北の方越中立山から見ても、線と線とかち合ひ、絡み合つてゐる中から、尖つた岩石が、すい、すいと秋の穗のやうに拔き上げてゐる「山嶽の舞臺」さう言ふ外に、適當の言辭が無い、その特長は、槍ヶ嶽の細くして尖れること、穗高山の山脊が怖ろしく長くして、その崩壞面が、岩石を赤裸に剝き出してゐるのと、山の東西南北四面が、殆んど斷絶的に懸崖をなしてゐること（事實に於て槍ヶ嶽山脈は、常念山塊や、立山及び後立山々脈に繋がり、穗高山は燒嶽に連なつてゐるから、斷絶してゐるわけではないが、一段高く懸崖を露出して、その連續のツルは、急に低下してゐるから、遠方からは、狹長逼迫の懸崖だけが、目立つて見える）で、傾斜が急だから雪が少なく、雪が少ないから山の皺、即ち黑絨のやうな稜々たる岩骨が分明に見ることが出來る。

私は鷲羽嶽から見た槍と穗高に就いて、かう書いた。

加賀の白山が、茜染の西天に、桔梗色にスーツと刷かれたやうに出た、次いで近くは雙六岳、蓮華岳、背後には黑岳が、ズラリと大虛空に行列した、硫黃岳の煙だけ、絲のやうに細く見えたかと思ふうち、偃松が稀になり、根生元も力が拔けたやうに、疎らになつたので、足の運びもおのづと早くなり、振り返つたときは、冑形の硫黃岳の頭上に、乘鞍岳が大きく出る、その肩に足を踏まへるやうにして、富士式の御岳が、南端を突起した圓錐形に聳えてゐる、前には穗高山の壯大なる岩壁を控へて、槍ヶ岳がスイと突き立つてゐる、高瀨川の硫黃岳は、赭く禿げて、槍ヶ岳を小さくしたやうな尖り方をしてゐるが、低下してゐること約六百米突、こゝから見ると、槍ヶ岳と穗高山の尾根は、驚くべき長大なる石の壁を、屛風立ちに繞ぐらして、殊



辻村伊助氏撮影

春の穂高岳

に槍ヶ岳は、黒板塀を見るやうな大絶壁の上に、桶のやうに丸々した石を束ね、その頭から強烈なる燃衝でも起したやうに、穂先が埃及のオベリスク狀に、拔け上つて、尖つてゐて、脊中には、偃松が隙間もなく、ベツタリと着翳く縫ひつけ、雪が漆喰のやうに、岩と岩との間を白く限取つて、拭つたやうな碧空は、百本杭の上を、音もなく流れて行く水のやうに、漫々として限りもない。（拙著日本アルプス第二卷）

穗高山の位置は、人の知る上河內峽谷に聳えて、乘鞍嶽火山と連絡してゐる、上高地溫泉場の頭上あたりで、信濃飛驒國線上を走れる馬脊狀の連嶺が、密林に蔽はれてゐる、その密林が岩骨稜々たる山稜と、劃然區別されて接してゐる、私はこの山稜を行かなかつたが、おそらく密林の切れ目が、槍ヶ嶽山脈と御嶽火山帶との、切れ目に當つてゐはしまいか、詳言すれば、御嶽火山帶は乘鞍嶽から白谷火山、燒嶽、割谷火山となり、槍ヶ嶽、穗高山は、岳川嶽の障壁を派出して、こゝで握手してゐるのである、何故密林の切れ目を、兩山脈の切れ目と假定したかと言ふと、穗高山一帶の岩石は、堅硬頑固なるだけ、それだけ剝削作用が著るしいために、泥土は附着せず、傾斜は截つ立てたやうに鋭くなつて、石の洪水は流れる、植物に安着を許さないが、他は豐饒なる新火山岩が、植物を寄生させるのに、便利であるところから、そのやうに區別をしたのである。

さうして飛驒山脈中の大火山線、御嶽、乘鞍、燒嶽等の進行を防止するには、穗高山ほどの堅硬なる大山嶽は、是非必要である、殊に穗高山と燒嶽とは、高度に著るしい差はあるが、大山脈蝕滅史の上から見ると、頗るおもしろい對照をしてゐる、燒嶽には地球の內力、即ち火山作用といふ造山力が、地表を衝いて凹缺を高めやうとしてゐる傍らに、穗高山には地球の外力、即ち氣候の支配する侵蝕作用が、強烈で、その高凸を削磨しやうとされてゐるからである。

この間に霞澤山は、白雲母花崗岩の險阻なる岩石を白く露出して、鉢盛嶽に至るまで、日本アルプスの傍系を作つてゐるところは、一寸した觀ものである。

◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

之を要するに、穗高嶽及び槍ヶ嶽は、古期火成岩の最も雄大に迸發したもので、地貌の彫刻剝削は、頗る烈しく、山頂に目まぐるしいまでに、鋸齒狀の凹凸が出來、その一部が槍ヶ嶽を作つてゐるので、槍ヶ嶽の次の「槍の大喰嶽」なども、小槍ヶ嶽の稱呼を與へて然るべきものである、さかして槍ヶ嶽は、山上に置かれたる岩石の堆朶といふ感があるが、穗高嶽に行列する無數の槍（としては、未だ先が尖つてゐないけれど）は、槍そのものが、直ちに絕壁の尖端である、人家に山を象つたやうな屋根が無かつたら、市街が平凡になるであらう如くに、日本アルプス中の大屋根、穗高嶽より槍ヶ嶽に至るまでの長稜が無かつたなら、日本北アルプスも、均齊なる三千米突の、ブラットフォームとなつて、案外に單調であつたかも知れない。

殊に槍穗高の岩石と、白雪の融解水と燒嶽の泥流等が、協力して作つた上河内の峽谷は、最も清潔にして、愉快なるアルプス中の、登山地點となつて、マテルホルンに於けるゼルマットの谷を憶ひ起させるのである、實際上高地谷が發見せられてから、槍穗高の登山者が、著るしく增加したのは、事實である、さかして上河内から穗高山を仰ぐやうに、所謂頭から爪先まで、あのくらゐ近く、明白に、避遁するところなく、大山嶽が仰がれる地點は、日本アルプス中の、他のどこにも、恐らく無いのであらう、さうして穗高嶽の壯容は、私の想像するところでは、北アルプス中で、劍ヶ嶽がひとり匹敵するもので、あらうかと思はれる。

次いで起れる重要の問題は、槍ヶ岳や穗高山には、何故あのやうな槍狀の峰（ピーク）が多いかといふことである、漠然と侵蝕作用なるものに歸してしまへば、それまでゝあるが、その侵蝕作用なるものゝ中で、風霜などの働作と「萬年雪」の仕事とは、どう違うかといふ事は、あの槍で說明されるからそれに就いても、言つて見たい。

# 第一章

穗高山は前にも述べた通り、北アルプスにしては、雪が少ない方であるから、アルプスと萬年雪の關係を說くのに、必ずしも適當な山とは思はれないが、私が本年穗高槍ケ嶽間を、縱斷して少しく雪を見て置いたのと、その殘雪の少ない穗高、槍ですら、如何ばかり萬年雪の彫刻を受けてゐるかといふ事例から、北アルプスと萬年雪の關係を暗示するために、都合がいゝので、これから說き起すことにする。

近來山嶽研究は、次第に盛になつて行くやうであるが、高山の雪といふものに就いては、寡聞の及ぶ限り、僅かに二三の論文を得たのに過ぎない、歐洲アルプスが、氷河研究から世間の大なる注意を惹いたやうに、日本アルプスも、その風景の因つて來るところを尋ねると、萬年雪に負ふところが多大であると、私は先づ結論を提出して置く、併し歐洲アルプスの氷河研究が、學術界の大問題になり、世界の視聽を聳やかすに至つたのは、初めは何もアルプスの氷河、それ自身のためでは無かつたのである、即ちアルプスの氷河研究に依つて、アルプスの前景をなせる山麓地方は素より、北日耳曼平原、英國諸島、北亞米利加の北方等で、よく散見する奇異なる移石（エルラチックブロックス）が、流されて來た原因が、理解が出來ると共に、いつの頃か全地球が、氷で覆はれてゐたといふ事實が解り、それから氷原時代といふ地質上の年代をつける土臺となつたからである、然るに日本の平原では、氷河が運搬した移石なるものを見ることが出來ない、結局眼前に、その證跡が無いのであるから、吾人の直接經驗は、山上の氷雪に依つて、氷河の學說を概括するだけの、努力をすら、要求せぬのである、これが愛山家の間にすら「高山の雪」に、多大の興味を寄されない、主なる理由になつてゐることゝ思ふ。

歐洲アルプス研究の始まつたのすら、至つて近代のことであるから、アルプスから濫觴した氷河學

◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

なるものも、亦最近に起つた學問である、然るに現存の氷河といふものは、有らゆる緯度に見出されるのであるが、その最も大にして重要なる型態（タイプ）は、やはり極地（ポラー）、もしくは亞極地（サブポラア）に簇がつてゐるのである、然るにも拘らず、氷河と言へば、殆んどヒマラヤとか、アルプスとかいふ高山の占有になつてゐるかの如くに考へられてゐる、殊にアルプスの氷河は、形狀に於ても、極く小つぽけなもので、態（タイプ）式も至つて簡單なる一種をしか有してゐないことが解つた、只だ素人となく、學者となく、藝術家となく、アルプスには誰も行く遊覽地であるために、その氷河が、充分に鑑賞され、考究せられ、描寫されてゐるといふ便宜はある——日本アルプスでは、その歐洲アルプスの小氷河をすら、有せぬ、それで白馬嶽で氷河の擦痕ある崖を見つけたとか、漂石に擦痕があるとかいつて、氷河がかつて存在したりしか否かといふ問題に、せめてもの追憶的、回顧的の興味を煽らうとしてゐるのである。

未遊者なる私は、白馬嶽の所謂氷河の遺跡を記述することが出來ないが、併し氷河が現存せず、又遺跡すら定かならぬ今日に於ても「氷河果して本邦に存在せず」と言ひ切ることは出來まいと思ふ、その理由は、氷河に影響する條件の中で、卓越した要素を有するものは、氣温である、氣温の如何に依つて、雪田が氷河に進捗したり、又はそこまで行かずに、退却することは、至つて正直なものである、或る氷河學者は、英國蘇格蘭土の年々の平均氣温が、華氏三度ばかり、高かつたら、西方高原の、或る地點には、小なる氷河を形成することが出來やうと言つてゐるほどである、一體に氷體と言ふものは、年々氣温の變化には、おそろしく神經鋭敏に、感覺するものだから、一度の差でも、氷を解體し、又は解體を氷結させる、去かして何人も日本北アルプス（のみに限らねど）の氣温、地質上の古代より、今日まで同樣なりと信ずるものはあるまい、古は恐らく今より山は高かつたであらう、氣温も低かつたに違ひないから、今日でさへ、立山、劍ヶ嶽邊の氷雪輝やける光景を知るものは、小氷河の存在は、信じ得られるところである、否有り得べきことである、氷河は流下するに從つて、氣温の

高上に遇ひ、それから又原位置まで、退却する、そこに「氷河の輪廻」(Cycle of glaciation) が行はれてゐるのであるから、現今の氣候がかうであるからと言つて、日本アルプスに、嘗て氷河無かりしといふことは出來ない。

併しながら、氷河が嘗て果して存在したりとすれば、そこに何等かの痕跡が殘されてゐなければならぬ、即ち堆石(モレイン)とか、又は氷河の擦痕ある、鏡のやうに滑らかなる氷削崖とかゞ、何處かに存在せねばならぬ筈であるが、それが日本の何處にある、といふ證據品提出の要求が來る、私は答へる、古い氷河の痕跡が、後に說くところのサアカスに殘存し、そのサアカスが又散々に原型態を破損したときは、擦痕や磨削の痕跡の有無を標準にして、氷河の存否を定めることの出來ないことは、例のあることである、我が日本アルプスには、假令氷河があつたとしても、今日の遺跡に依つて判ずると、それは北方に小部分のものであるらしい、その小部分のものすら、斷案とするには、不充分であるやに思はれるのは、日本アルプスには、氷河破損を速やかならしむる、二ツの理由があるからで、その原因は、ヒマラヤにも、アルプスにも、恐らく無いところである。

即ち第一は、火山の噴出が多かつたことである、氷河が火山爆裂の際の高熱で、俄然融解したことは、氷州の Jokulls (平つたい圓頂形の雪帽、即ち氷河の一形式) にその例がある、日本北アルプスで、現今氷河の遺跡 (果して然るや否やは後に說く) と見らるゝサアカスを有するところは、立山、劍ヶ嶽、藥師嶽(おもて)、黑部の五郎嶽、黑嶽、蓮華嶽、等であるが、立山の西邊には、北々東に橫走する火山があつて、主(おも)に安山岩より成り、その走位に從つて、立山及び地獄谷の溫泉、又は噴氣孔を作り、餘脈は北東に延び、姬川谷を橫絕して、越後燒山の火山脈に連續してゐる、黑部五郎嶽や、黑嶽鷲羽嶽は、その附近に硫黃嶽火山あり、高瀨川の湯の俣谷があり、殊に鷲羽嶽の中腹に、火口湖のあることは (拙著日本アルプス第二卷) その頃の火山力の、活動を暗示してゐる、蓮華嶽は笠ヶ嶽 (もし火

山とすれば）に依つて翳されてゐる、乘鞍嶽御嶽二大火山が、その幾つもある噴火孔から、紅蓮を擧げたときの高温度は、思ひやられるのであるから、小なる氷河ぐらゐは、容易に融解する理由になるのである。

第二は地震である、歐洲アルプスなどでは、地辷り（ランドスリップ）から生ずる山崩れ、又は岩石の洪水（Rock flow）から、山體の一部が崩壊される例はあるが、地震でやられたといふ例は聞かない、併し日本北アルプスに、地震が可なり多かつたことは、有史以後にすら、度々見える、慶雲元年（七〇四年）立山の西邊に地災ありといひ、慶雲より前、大寶年間にも、立山西麓御安地獄谷のことを記してある、尤もその地震は、恐らく火山の爆裂に關係を有してゐるものらしく、地震と爆裂とを、引き離していふことは、六ッかしいかも知れぬが、天保十年四月二十九日（一、八三九年）及び安政五年（一、八五八年）にも、爆裂に伴ふ地震があり、後者のときは、立山より十里四方、震動甚だしく、方々に「山抜け」を生じたとある（立山神官嶺寺佐伯正範氏の實驗録に依りて、大塚專一氏の、記するところに依る。地學雜誌第十五號）

地震のために、氷河が全く破碎壞滅した例は、一、八九九年 Muir 氷河に於て、その事例を見られる、日本北アルプス氷河の根據地とも想像されるべき、立山山脈の北部に於て、かういふ破壞作用が、頻繁に行はれてゐたことは、さなきだに發達の微少であつたらしい氷河を、沒却したといふ疑ひも、容れられる、そして今日に殘存してゐる遺跡とては、山崎理學士（直方）が嘗てその論文に擧げられた、白馬嶽及びその附近の數箇所である。

又假令、それ等の障碍物が無かつたとしても、全體山嶽地は、氷河の堆積物を保存するに、適當な博物館にはならないのである、山嶽地には、後に說くところの「サアカス」「U字形の谷」「吊り懸け谷」等を、氷河の侵蝕方面の遺跡として、殘してゐるが、少くとも氷河の堆積物（Glacial Deposits）は、

山嶽地では、原形を大分に、或は全く、毀損せられるのである、その理由は、低地よりも侵蝕作用が激烈に行はれるのと、傾斜の急が、一處に停滯することを許さないこと等で、全く潰亂、混雜、破毀されてしまふからである。

されば氷河の遺跡物が、我が日本アルプスに多く、或は全く見出されないからと言つても、氷河存在を、全然否認するのは、早計であらう。

## 第三章

只だ夫れ日本アルプスに、氷河存在を否定するのは早計である、併しながら、歴然たる遺跡が無くて見ると、肯定するわけにもまゐらぬのである、今のところ、日本アルプスに、氷河の存在は、私はその能有 (Possibility) を主張するが、實有 (Probability) を言明することが出來ない。

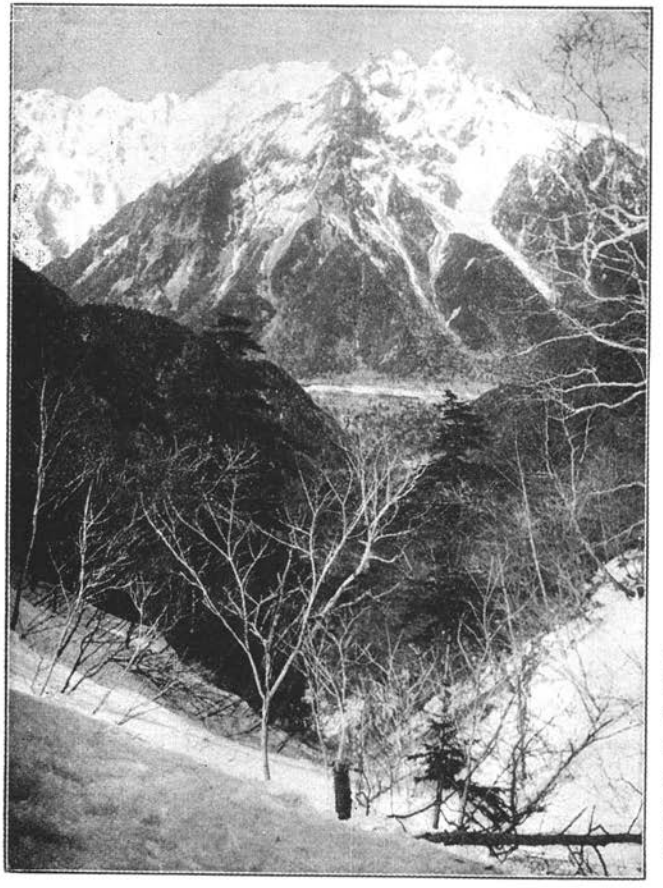
氷河問題は、こゝで仕切つて置く。

これから取り扱ふのは、氷河の前期、若しくは先驅なる萬年雪の問題で、私はこの萬年雪の働作を、準氷河現象と名づけたいのである、そしてそれは、日本アルプスには、殆んど通有する、去かして現存する氣象的產物である。

今樹木の一代記を作るに當つて、種子から發芽し、枝椏を生じ、長幹となり、開花、結實、落葉するまでの經過を、一本の樹木に待つてゐるのは、可なりに長い日月を要さねばならぬが、森林に入れば、それが一目に、一時に解る、水蒸氣が凝結して雪となり、萬年雪となり、氷河となり、その磨削の彫刻を殘すまでの經過（プロセス）は、高山に登れば、一目に解るのである、只だ遺憾ながら、今日は全地球上の、氷河の衰退期であることは、疑ひを容れない、歐洲アルプスでもさうである、日本アルプスは前にも述べたやうに、氷河はあつたとしても、既に滅亡して認められぬが、之の生ひ立ち時代、又は移轉の

時期の萬年雪や、或は氷河の遺跡に疑似を有する所謂サアカスを看取する事が出來る、殊に日本北アルプスは、多量の雪を藏する玉寶殿である、日本北アルプスの森列する巨柱に、象嵌し、その大屋根に模様を施すものは、萬年雪を措いて、他に無い、雪は山のためには顏料(えのぐ)となり、彫刻の利刀ともなり、融けて水となつては、歌謠者となるのである。

雪から萬年雪、それから氷河、その氷河は一口に言へば、結晶岩の累層である（地學上でいふ岩石(ロック)は、凡べて地殼の一部を作るものを言ふのであるから、普通にいふ岩石砂土のみに限られてはゐない）、しかも知られたる結晶岩中で、最も純粹で、簡單なものである、構造が簡單で、分子が稀有に純粹で、氷河の起因や歷史は、それを組織する結晶體の起因や歷史より、幾何も加へるところは無いのである、氷河學者の說明を取り次げば、先づ水が固形體に變ずるときは、常に結晶力の支配を受ける、卽ち大氣中の水蒸氣から凝結し、新らしく雪片となつて落ちるとき、尖つた點や、角度が先づ融解して、中央の塊よりも、早く蒸發する、雪片の緣邊から融けた水は、その中央塊に向つて、集中して來る、そして氣溫が順當に行くと、その儘に凝結する、恰度六花形の金米糖の尖りが、剝(そ)げて、胴體に纏まつてしまふと言つたかたちである、雪片（flake）から雪粒（granule）に變化するそれが第一步である、もし每日組織的に。堆雪の粗粒のある表面を掻き分けて、下から雪を取り出して見ると、次第にそれが、大粒に生長して行くのを見るであらう、この大粒の平均增加は、雪を透徹する大氣の水分よりも來てゐるし、又小粒の分解や、破碎したるものを、一部に併合して行くからでもある、大粒が殖ゑるだけ、それだけ、總體からの粒數は、確かに減つて行くのである、併してこの粒を按へるのは、それぱかりでは無い、壓迫と緊張が附隨してゐる、粒々は接觸して壓迫される、然らざる場合には、緊張する、これが堆雪の下で、絕えず交換されてゐる間に、粒の原形を失つて、不規則な多角形の岩石に生長して行く、さうして榛(はしばみ)や、胡桃實ほどの大きさになる、始めて大粒でゐる間が、所謂萬



辻村伊助氏撮影

徳本峠雪の穂高山



辻村伊助氏撮影

冬枯の霞岳

年雪である、フィルン（Firn）とも、ネヴエ（neve）ともいふ、この萬年雪になると、雪のやうに白くはない、半透明に碧くなつて、安つぼい玻璃繪に見られるやうな色になつて來る、さうして頗る固くて、鶴口も通らず、敲けばカンと音がする程である、友人 W. S. 君に依れば白馬嶽や扇澤などに、この萬年雪は見られるといふ、たとひ碧くならないまでも、下層の雪は輝ける白さを失つたのが多い、即ち雪と氷の中間性のやうなものになつてゐる。

夫から猶下りまするに、谷越には、非常に澤山の雪が殘つて居ります、上の方から下つたものもありませうし、太陽の光線が達せぬ爲めに、融け殘つたものもありませうし、其有樣は、宛もアルプスあたりの、氷河と少しも違はない、乍併雪の構造を見まするに、どうも氷河とは思はれない、其雪は、矢張一粒々々の雪粒から出來て、即ちフヒルンである、其粒々全く相癒合して、一塊の氷となるまでには、未だ立至て居らぬ、其雪の層は、處によると、中々厚くて十乃至十五米、即ち五、七間の厚さに達して居る處もある、ここによると、毎年々々の雪も、重なつて居りませう、其間には、隨分所々に割目があつて、其割れ目を見ると、眞白な部分もありまするし、幾分か半透明の物もある、いろ〳〵の層を爲して居る、此層を爲す工合は、丁度氷河に於て見るのと、同じやうである、然し眞の氷河に於て、見る時のやうに、之が一塊の氷であつて、其層々が、青、淡青、等の帶狀に、排列されて居るやうな、構造は少しも見えない、矢張普通の白い雪である、堅い所を取つて見ても、丸い粒が皆雪の重なつたものであるを、示すに過ぎない。（山崎理學士「氷河果して本邦に存在せざりしか」の一節）

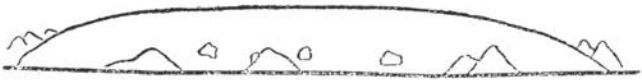
かう言つた形體の雪は、日本アルプスでも、多いといふわけではないが、ともかく萬年雪と稱して然るべきものは、到るところにある、只だ分量の厚薄、面積の廣狹はあるが、一山に少なくとも、二三ケ所、無いといふことは無い、これ等の雪は、必ずしも一年中に融解してしまふとは限ら無いが、併し幾年も融解せずに、一ケ處に凝結してゐるとも思はれない、もしそれが凝結してゐるなら、上へ上へと新雪の層が加はつて、板狀の層理（Layer）が出來る筈である、その層理と層理との間には、崖からの墜石や破片岩などが敷かつてゐて、明白に新古の層理を區劃したところが無ければならぬ、本文附きの圖版（プレート）にある氷河二面の圖は、一は氷河の板狀層理の、特自的、分離的なところを示し、一

◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

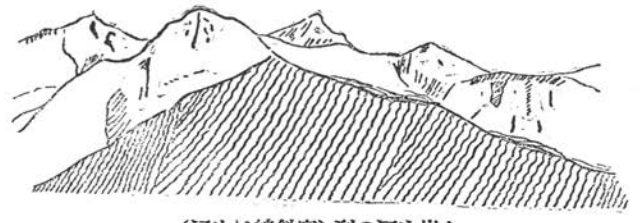
は破片岩（デブリイ）を以て覆はれたる、氷河層理の切截面で、いかばかり破片岩の、分量を含んでゐるかを示してゐる。（シカゴ大學地質敎授チー、シー、チャムバレイン氏の氷河運行原理說附圖に依る）併し私は北アルプス北部を知らぬためか、今まで五米突か十米突位な厚い萬年雪の斷層を見たことはあるが、さういふ板狀層理のあるものは、未だ眼に觸れなかつた、さうして立山々脈や後立山々脈の、北部の或る部分を除いて、日本アルプスの萬年雪は、ネヴエの狀態にも、未だ充分に達して居らぬのでは無いかと思はれる、併し飛驒山脈の北部を究めたならばこの說に追加訂正が出來得るだらうと樂しんでゐる。

第一圖



大陸氷河の型

第二圖



山嶽氷河の型（密斜線は氷河）

この萬年雪は、やはりアルプスの氷河などゝ同じく、日本アルプスでも風下（Leeside）の方に多い、即ち西側から吹く風は、東側の方へ雪を移してしまふ故か、飛驒山脈では、概して東側即ち信州方面に向いた方が多い、それは風が飛驒方面から多く吹くからである。

日本アルプスの雪が、いつまでも萬年雪の狀態でゐるのは、美觀上から言へば、氷性の透明を缺いて、且つ雪の變形上の面白味も乏しいかも知れぬ、併し氷河が無いために、侵蝕の力が、どうしても弱いから、山體が早く衰亡しないといふ利益もある、氷河があつたゝめに、削磨せられながらも、その氷河に保護せられて基盤を支持してゐた崖壁が、氷河の進行と共に、明き地になり、忽ちガックリと弱つて、雪崩などゝ一緒に、震憾すべき地

辷りの起るのは、歐洲アルプスにいくらも實例のあることである、そんな具合になつて、槍ヶ嶽の槍が折れたり、笠ヶ嶽の笠が飛ばされたりしては、日本アルプスの大なる損失である。

萬年雪が平地に積る雪や、極地や大陸あたりの氷河と違ふところは、換言すれば、萬年雪の地相上の特色としては、平地の雪は外觀に於て、その基盤に殆んど關係がなきが如く、平地も高臺と一樣に埋めるが、萬年雪は一定の態式こそ無けれ、その床盤の不規則に從つて、可塑性を有することである、大陸や極地の氷河は、兩端を除いては、その氷河圈以上に高く、土地の高點が露出するといふやうなことは、先づ無いのであるが、萬年雪やアルプス型の氷河は、それと反對に、その圈の最高の水平より、岩石の方が必ず高く挺出してゐる、換言すれば、山の最高點を頭巾のやうに包被してはゐない、寧ろ山胸の前垂のやうになつてゐるのである。

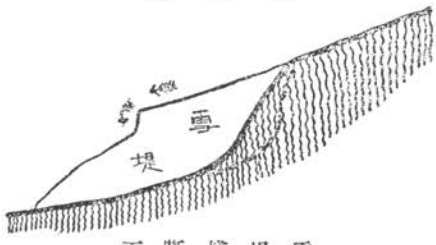
第一圖は大陸や極地形の氷河で、氷河圈が土地を圓く冠せてゐるが、第二圖はアルプス型の氷河、もしくは萬年雪で前に反して土地が氷河圈より高く拔いてゐる、彼是對照すれば、その體式の相違が解るであらう。

氷河を組織するものは、萬年雪の、もつと凝結したものであることは、前に述べたが、その萬年雪が、氷河の前驅をするときには、先づ雪堤（スノウバンク）を作るのである、雪堤は、淺くとも凹地のあるところ、或は地形上、風の吹き止まるところなどへ出來る、氷河の形成に便利なところ、即ちアルプスなどは、劇烈な氷河作用を與し易いので、さういふ前期の研究は、却つて不便であるが、山嶽やゝ低く、且つ氣温少しく高きに過ぐる日本アルプスは、少なくとも、現今（プレゼンシアル）の狀態では、氷河に不適當である代りに、氷河前期時代の研究には、頗る便利となつて、所謂前氷河時代の地面が覗はれ得るのである、即ち一年或は兩三年間だけ、絕えず新雪又は古雪に依つて覆はれてゐる地床は、その堆雪のために、壓迫せられ、侵蝕されて行く、この堆かい萬年雪は、決して氷河のやうな、目立つた運動は起さないのであるにも拘

◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

はらず、地床が穿たれるのは、夏期の間、雪堤は緣の方から融解して、退却する、その雪解け水が、絶えず地床の岩石に透徹する、それが又夜になると、頓に冷却凝結するので、岩石の物質は、破碎せられ、細粉にせられ、雪融水の小流に搬び去られる、かくして萬年雪（nevé）の堆積する雪堤が、地床を鑽つて、凹ますのが原動力になつて、窪地は深められ、少しく傾斜のある崖へ懸ると、崖に「喰ひ缺け」（niche）を生ずるのである、第三圖は緩斜地に堆積せる雪堤の横斷面を示したもので、矢は風の方向を示し、崖の點線は「喰ひ缺け」を生ずる個所である（米國の地相學者 F. E. Matthes 氏原圖に依る）この萬年雪の附近に、往々鳶色の沼土が、堆積してゐるのは、その故である、そして飛驒山脈中の高原に、往々見らるゝところで、その泥土の積んだところには、美くしい柔々しい綠の草が、毛氈のやうに布かれてゐる。

第三圖




雪堤橫斷面

この雪堤（スノウバンク）は、あまり高くならない中に、日本アルプスでは、消えてしまうらしい、又實際あまり高くなると、風に吹き飛ばされるものである、その岩床を凹める作用を、雪窪作用（Nivation）と稱してある、これは氷河の赤ん坊である、少くとも原態（イニシアル、フォーム）になるのである、氷河學者が氷河の態式（タイプ）を分類するに當つて、先づ第一に氷河の生ひ立ちとして擧げるのは、この雪狀氷河（Nival Type）或は新生氷河（Newborn glacier）である、この雪狀氷河は、大抵は形が小さい、日本アルプスに多く見られるものも、さうである、又此雪狀氷河のあるところは、氷河活動の全盛期を過ぎ去つてしまつて、徐々遲々と柔和な氣候に移り換りつゝある、山嶽地方に、最も多く出來るやうである、日本アルプスも亦さうである。

記してこゝに來たとき、電報が東京から來た「父死す大下正男」と、親友大下藤次郎氏逝く、實に思ひもかけぬ突然のこと

なり、小生は愕然、忙然、それからそれへと思ひ惱んだ揚句、頭が混亂して、原稿どころの騒ぎでなくなつた。（十月十日夜九時四十分）

## 第四章

然るに此雪堤を作るべくして、作られないところ、即ち山稜の脊筋に當るところ、又は峰（ピーク）の尖つた點などになると、その支持力が、強くないため、雪は嵩（カス）となつて、凹的に穿鑿する程のことはないが、風の力と日光の力が、他の雪堤を作る地盤よりも、なほ多く強烈に働くために、換言すれば雪衣の保護を受けないために、雪は氷となつて、内部に侵入し、塞さに凝り、暑さに融け、手を換へ品を換へて、岩面を腐蝕するため、こゝに怖るべき岩崩（ロックフォール）を生ずる、岩崩を生ずる程に裸出したところは、植物も安着しないし、偶ま安着しても、動搖崩壞のために、姿を隱くしてしまふ、これが穗高嶽槍ヶ嶽に至つて、岩石は獰惡深刻の相を呈してゐる所以である。

試みに岳川を渡り、穗高嶽の北口から、登るとすれば、そこに長さ恐らく一里に垂（なん）んとするかと思ふ「押し出し」がある、私が知れる限りで、南アルプスの赤石澤には、比べられないが、北アルプスでは、最も長大なる岩崩に屬するものであらう、土人の言ふところに依れば、こゝで水が出るときは、石と石と轉がり合ひ、噛み合ひ、相拍ちて相互に衝突し、摩擦熱を生ずる故か、ピカ〳〵と火を發して、きな臭い臭氣が、里まで放散すると言つた、こゝから仰ぐと、穗高嶽中で、最も槍狀の峰に富んでゐる岳川嶽の山稜は、無數の槍を天空に突き出してゐる、その尾根は殆んど一縱線に長く割谷火山まで走つてゐて、穗高山へ登つて、この岳川嶽を縱走しない限りは、恐らく岩壁の絶大なる形相を、語るのを控へなければなるまいかと思はれる、殊に岳川嶽山塊と、穗高山塊との切れ目を仰いで、穗高へ移らうとするところには、花崗岩の岩漿（マグマ）が、迸入的に、地下の深所より地表まで擡げ上げられ、

◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

そこで凝結してゐたものが、侵蝕作用に、例の岩崩（ロックフォール）が加はつたために、縁邊（マアヂン）を露出し、美事な板狀節理（Platy Joint）を呈してゐるので、玄武岩のやうな柱狀（コルム）のそれとは、亦趣の變つた岩石の美くしい組織が伺はれる、林文學士が、本誌第一年第三號、穗高嶽紀行に於て「堅緻なる玄武岩を以て、築かれたるものにして、その木材の如き、整齊比類なき八角柱が、無數に累積」と記せられたが、私の親しく觀たのは、板狀であつて、決して八角柱狀をなしたものでは無かつた、さうして板狀節理は、殊に薄片に剝離し易く、岩崩を、益す容易ならしめる傾向がある。

是等の山稜は恐らく厚氷を以て覆はれるやうなことは無く、薄い雪を被らせてゐるに過ぎないため、岩石斷裂の機械的作用を起すことは、恰度暖かい濕氣の多い土地で、分解から來る化學的作用が起るやうなもので、特性的のものである。

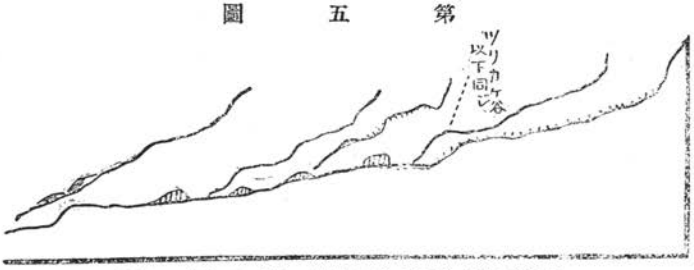
岩石物質の破碎斷裂が、仕遂げられると、そこに重力が岩石の碎片を、低い地線まで轉換させるのに、効果を奏し、岩石も動搖流下するために Rock glacier, Stone River, Rock flow, Rock fall, Rock stream 又は Solifruction など大同小異の岩石を生ずるのである、これ等の稱呼は、土地に依つて違うが、狀態は略ぼ同一であるといつてよい。

日本の山嶽語では「薙」「押し出し」「ざく」「ざら」など言はれてゐる、これ等は決して、下界に見るやうな、單純な風化作用ばかりで起るものではない、岩角は、雪屑の下にある、雪は融解して、夜毎に凝結し、岩石を縫縷のやうに斷裂し、岩石の嵩を、微分（フラクション）にしてしまふのである、勿論岩崩の原因は、凡べてさうであるとは言はないが。

併しかうは言つても、山脊は決して萬年雪を貯藏しないとは言はない、雨水が分水嶺に依つて、兩方へ分れて進行するやうに、萬年雪も分雪嶺（かういふ語が成立し得るとすれば）に依つて、兩方へ分布されるのである、山脊が槍ヶ嶽や穗高嶽のやうな、狹長、逼迫、險阻な貌をなしてゐるときは、

分雪嶺の役目を務めることは、出來ないが、もつと廣くして、平坦で、さうして風の支配を受けることが少ないところになると、山春が中央停車場になつて、兩側へ雪を振り分けるやうになるであらう、笠ヶ嶽や、黑部の五郎嶽の尾根などは、風の方向は知らぬが、さういふ地域を領するに、適當なところでは無いか知らと思ふ。



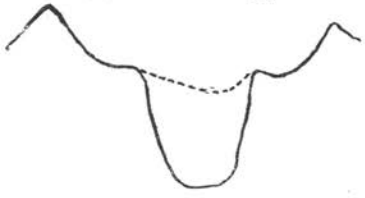




萬年雪が、山貌を作るに與かつて力あるのは、以上の特殊相を呈するのみに止まらない、山嶽の峽間に見らるる溪谷に注ぐ各個の小支流は、水源地の高低如何に拘はらず、普通本谷の水平に落ち合ふ點に於ては、一致してゐるものであるが、氷河や萬年雪で削磨した小谷は、さうでない、氷河や萬年雪で穿たれた、小さな溝、即ち小支流は、大なる幹流や本谷のやうに、活潑に働作をしないから、本谷と水平を一致させるまで、低く深く穿鑿することを能くしない、その氷河なり萬年雪なりが、件の小支流を明け渡しても、その小溝谷は、依然として本谷の一般水平より高く、床を抜き上げてゐる、たとひそれが後には一致するまでに、鑽り下げられる時代と、運命とが來るにしても、當分は本谷の上に、崖を築いてゐる、そこに氷解から來る小さな瀑布が生ぜられたりする、この種の溝谷を稱して、吊り懸け谷（Hanging Valley）と

言ふ。第四圖及び第五圖は普通の支谷及び「吊り懸け谷」と本谷との各關係を示したものである。

こゝに面白いことは、水流が侵蝕作用で床を低めるのは、水の量や深さによるものではなくして、水流は床の傾斜の度、及びその度から生ずる不思議な侵蝕力の、增加に依つて、直接に解析力を有するのであるから、山地の小支流は、本谷と合流點に近くなると、本谷よりは、急な傾斜の度を有することになるが、氷河や萬年雪の地床にあつては、之に反して、傾斜の度は重きをなさない、侵蝕の主要な、役目を務めるものは、雪や氷の量と、深さとである、量と深さとありて、壓力を加へることが、甚だしく、その氷雪が運搬する墜石などに依つて地床を凹め、擦り減らすのである、こゝが區別の要點である、槍ヶ嶽を飛騨方面から、蒲田の右俣谷へ下りると、そこに槍穗高方面から、幾つかの支流や小溝谷が出て來て、本谷（即ち右俣谷）に落ち合ふが中に、萬年雪で充たされてゐる溪谷は、その末端が澤をなしてゐるが、本谷よりも高い崖となり、その截つ立てた崖からは、雪解の水が、瀑布となつて落ちてゐる、右俣谷の出口に近い槍澤などは、この吊り懸け谷の一例で、本年私の通過したとき（七月二十三日）は、白雪の下から濛々とした水烟が舞ひ起つて、吹雨は園々として、谷を白くしてゐた、穗高山の上から見下した支流の中で、あの谷は崖で下りられぬ、瀧で行かれぬなど、言ふのは、この吊り懸け谷である、「谷へ沿うて下れば必ず里へ出られる」といふ箴言も、人間が液體で無い限りは、例外のあることを、承知して貰ひたい。

第六圖




又萬年雲が氷河に轉換しやうとする時代、氷河の初期ごろには、その侵蝕を受けた土地の上部、即ちおもに山嶽地に於て、U字形の溪谷を生じ、その絕壁は急峻である、U字の崖壁は、その間に氷河を挾んでゐたので、凹鞍部は氷河が屯ろしてゐた底の彎曲（カヴヴ）である、第六圖に擧げたのは、歐洲アルプ



歐州アルプス山「サアスカ」の群彙

スのU字谷横斷面の標式圖で、點線のある山肩はアルプ（牧場）になり、U部は氷河が明け渡した跡墟になつてゐる、我が日本アルプスでは、鹿嶋槍ヶ嶽の布引の頭から見た劒ヶ嶽の仙人澤、長次郎谷の頭に當る邊が、U字形の變曲をしてゐて、それがいかにも、氷河もしくは同質の、萬年雪の削磨を受けたものゝやうに、見受けられる。

## 第五章

萬年雪が、氷河となる經過は、現存の日本アルプスでは、遺憾ながら認める事は出來ないが、その氷河が、日本アルプスに嘗て存在したかといふことは、氷河のサアカス（カアル）に類似した痕跡に依つて、疑問になつてゐるのである。

日本アルプスに、散在せるサアカスに就いては、本誌本號に、辻村太郎氏が精査せられた「日本アルプスと既往の氷河」なる一論文に、略ぼ盡くされてゐる、同氏文中に擧まれた、カアル分布圖、及び幾多のスケツチ圖は、山雪研究家のためには、有益なる誘引を試みたものである。

このサアカスは、同じ氷河の中でも、殊に山嶽地に限りて、現出するもので、英米ではサアカス（Cirques）日耳曼ではシルカス（Cirkus）であるが、同じ英國でも、蘇格蘭土ではコーリイ（Corrie）ウェールスではクウム（Cum）スカンヂナヴィア邊ではボトン（Botn）又はケツセル（Kejedel）と區々の稱呼を有してゐるが、それ等は要するに、小區分に行はれてゐる名で、一般は、サアカスとして知られてゐる、併し學術家の間では墺太利亞（オーストリア）バヴアリヤの通用語、カアル（Kahr）を使用してゐるが、サアカスなる語も、勿論併用されてゐる、日本で山嶽地に、この類似の地點を發見せられ、始めてカアルなる稱呼を冠らせたのは、山崎直方氏で、我が日本山岳會が、成立して北アルプス邊が、縱走せられるやうになつてから、辻本滿丸氏等に依つて、カアルの痕跡が紹介せられ、又氏等によりて、その稱呼は、少

なくとも登山家の間には、普遍にせられた趣がある、前記辻村太郎氏の論文に依つて、このカアルは、更に一般の注意を惹くに至るであらうと信ずる、私は嘗て、カアルのことを、ウエストン氏に語つたところが、氏はカアルなる語が解されなかつたから、サアカスのことだと換言したら、直ぐ解つた、英米氷河學者の氷河に關する著作も、又瑞西の山岳年報などの寫眞にも、皆サカアスを以て、通稱としてゐるから、私も比較的普遍なる、サアカスの語に從つてゐるだけで、他に意味はないのである——併し私自身は、カアルと言つた方が感じがいゝ。

サアカスとは如何なるものであるか、早く言へば、氷河が山の一角を喰ひ取つて、椀を半分に割つたやうな形狀をした窪崖である、それは恰度羅馬時代の建築にある圓形劇場の構造（輪形に劃した競馬場のやうな）を見るやうであるために、劇場の名アムフイセアタア(Amphitheatre)の別名がある（アルプス紀行には、この名が多く散見せられる）一體に氷河の働きには、岩面を摩擦する一面と、又岩石そのものを剝ぎ取る一面とがある、摩擦する方は、玉人が金剛砂で、珠玉の刻面を擦するやうに、墜石を拉して、岩面を氷削して行くのである、墜石は金剛砂で、氷河はそれを包む前垂衣のやうなものである、然るに剝ぎ取る方は、路に當つて抵抗する巨大の岩石を、既に風化作用等に依りて生じたる裂面等の弱點に乘じて、喰ひ取つて行くのである、氷河の進行の方面から言ふと、摩擦は氷の因つて來る方、別言すれば風上 (Stoss side) に行はれ、剝ぎ取るのは、氷の向つて進む方、別言すれば風下 (See side) に最も多く行はれるのである、此二つの作用は、低山の氷河、又は大陸地の氷河に於て、普通に行はれてゐるが、高山氷河の特色としては、此二つの作用に加ふるに、更に一つある、それが即ちサアカスに依つてのみ見られる、垂直なる崖である、もしくはその崖を侵蝕して作る幾多槍狀の峰である、この崖はどうして出來るかと言ふと、氷河の侵蝕作用から生ずるのであるが、これを初めて氷河侵蝕の結果に歸して、その炯眼を注いだのは、チンダル先生である（一八六二年「アルプスの生

成に就て」("On the conformation of Alps")なる論文に於て)併しボンネイ T. G. Bonney 教授は之に反對して、氷河活動以前からある地表として論斷せられた(一、八七一年「サアカスの生成に就きて」("On the formation of Cirques")なる論文に於て)此二人の正反して議論に就いては、ゲイキィ教授 (Sir Archibold Geikie) が「サアカス」に必ず附き物の垂直な絶崖が、如何して出來たのか、その原因が不明であると言つたきり、學界に何の反響も無かつたのであるが、伊太利のガスタルヂ教授 (Gastaldi) は、伊太利アルプスに就いて、ヘルランド (A. Helland) は、那威に就いて、「サアカス」は、氷の製作物だと論せられた、更に近くは米國に於て、ラッセル氏 (L. Russel) 英國に於てワレース氏 (A. R. Wallace) 皆「サアカス」の起因は、氷河に基づくといふ意見を發表せられたが、最も新らしい見方を以て、サアカスを研究し、一般の注目を惹いたのは、一、九〇〇年リヒテル (E. Richter) 氏であつた。

一九〇四年米國地質調査所のジョンソン氏(Williard D. Johnson)及び同國の地相學者フランソア、マッシュ氏(Francois E. Matthe)の意見に依つて、愈よ原因が明白になつて來た、リヒテル氏とジョンソン氏の意見の異なる點の一つは、リヒテル氏は、サアカスの穿鑿作用は、萬年雪の表面を境として、その上部に最も多く起るといふに反して、ジョンソン氏は、サアカスの底部は、萬年雪を貯藏し、日中は表面より暖かい空氣の通過を許して、絶えず岩壁に濕分を與へ、その機械的作用を以て、地床をズリ下げ、岩壁を氷削するのであつて、萬年雪の表面以上は、時下の普通の氣候の影響を受けるのに止まる、即ち表面以下が、主要なる活動を演ずるのだと、主張してゐる、實にジョンソン説の通り、萬年雪は、岩角を侵蝕して、之を凹め、凹んだところへ、冬は雪が貯藏される、春を過ぎると、上述の破壞作用を逞しうして、峙つ崖を喰く缺く、又冬になると、新らしい砲丸の雪が加はる、雪の加はる間は、破壞作用を暫く停止して、材料を貯へ、來春の戰闘準備するので、サアカスの凹部底 (Bergschrand) 即ち椀の底に當るところこそ、サアカス構造の最主要のものであると、言つてよいかと思はれる。

◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

サアカスが、雪山研究、特に日本アルプス調査に絶大なる興味を與へる所以は、第一萬年雪又は氷河を有する山嶽の特性を、最も顯著に示現するものは、サアカスに如くものなきこと、第二に萬年雪や氷河の生産物としては、前章に述べた、U字形の谷や、吊り懸け谷等は、肝要なるにもせよ、遠望して、一目瞭然たるものは、サアカスなるを以て、山形に變化を與へ、極めて印象的なること、第三にサアカスは、山脊を侵融して、狹長逼迫ならしめ、更に風化作用を借りて、之を分離截斷し、槍狀の峰を簇立させて、アルプス型の尖峰を與へること、第四にサアカスは、氷河の製作せる彫刻品として認められてゐるのであるから、日本アルプスに氷河既存の有無考究に、大なる便利を與へることは、古國の舊跡や廢墟が歷史家の、參考になると同じきこと、第五に歐洲アルプスの如きは、氷河があまり、活潑に發達したゝめに、サアカスの初期時代や、中年時代の狀態、又は經過は、却つて破壞せられ、研究の對照としては、「過ぎたるは却つて及ばざるが如し」の感あるに反して、日本アルプス、殊に飛驒山脈は、初期、壯期、老期ともに、その一線上に排列して、研究に頗る便利なること等である。

今日本でサアカスの痕跡顯著なものとして、知られてゐるのは、北アルプスで立山と藥師嶽と、南アルプスでは仙丈ケ嶽（信州の前嶽）のものを以て、標式的としても、恐らく異存の無いところであらうと思ふ、是等の記載に就いては、辻村太郎氏の論文に、讓るが、私は少しくサアカスが、山稜に及ぼす響影に就いて、述べて見たいと思ふ。

サアカスが、一鏈の山脊に幾つも出來て、絶壁を侵蝕するときの形狀を喩へて言へば、ビスケット製造の際、粉を捏ねて、引き展ばして、板のやうにして、さて錫の型を當て嵌め、ビスケットだけのものを刳り取ると、缺き取られた後の殘部は、サアカスの侵蝕を受けた後の、山脊に擬することが出來る、即ち第七圖のやうなもので（これは想像圖ではない Wyoming Bighorn 山の、サアカスの侵蝕

を受けた圖である）白地は山脊の殘壘、斜線はサアカス侵蝕の結果、山脊が彎入を受けた痕跡である、このやうにサアカスの多く侵蝕したところは、我がアルプスでは、恐らく薬師ヶ嶽であらう、薬師ヶ嶽には、サアカスが北に二個、南に二個、西に一個認められてゐる、北の方、岩井谷の頭から仰ぎ視て、薬師ヶ嶽の一角（最高點にあらず）が、三稜角狀に崛起して見えるのは、サアカス侵蝕の結果、平坦なる山頂を、案外に狹めて三角形に見せるからであらう。

第七圖



サアカス的浸蝕

さうして日本アルプスを通じて、サアカスが東面即ち信州方面に多いのは、そこが風下に當るからで、風上の雪を、或る程度まで拂拭して、風下に堆積し、そこは山脊に依つて、風を遮斷するからであらう、併し風下といつても、峽谷の間の兩山脈の結節點、V字狀をなせるところに、位する山は、最も多くその衝に當るのでは無いかと思はれる、北アルプスでは、薬師ヶ嶽から、黑部の五郎嶽、それから、鷲羽、黑嶽と對曲する邊は、立山々脈と後立山々脈とを合一する把手となつて、黑部川深谷の濫觴地に占據してゐるため、サアカスが殊に最も多いのではないかと思はれるし、南アルプスでは、白峰赤石兩山脈を結束する點の、仙丈嶽（前嶽）に、著くしく發達してゐる。

我がアルプスで、サアカスの分布を見ると、北アルプスに多いのは勿論ながら、その北アルプスでも、蓮華嶽（三俣嶽）までに、壯期もしくは老期のサアカスが認められるが、蓮華嶽より以南、則ち双六、笠、樅澤、穗高、及び槍等は僅かにサアカスの初期時代のものに屬する階級を、認め得るに過ぎない、サアカス初期時代の現象なる雪堤は、槍ヶ嶽山脈、及び常念山塊にも相應に多い。

◎日本アルプスと万年雪の關係　小島

さうして奇なることには、北アルプスの最高地點、槍穗高の一群、南アルプスの最高地點、白峰三山に、思ひの外萬年雪の作用を認めないのは、是等の山嶽が、南に偏してゐるためであるのは勿論であるとして、その他に重要なる原因は、是等の山嶽は、山脈中最高の地域を占め、附近の山より、二三百米突も拔いてゐるため、雪を風力で他に吹き飛ばすためではなからうか、換言すれば、雪を取次いで、他に供給をするが、自らは餘り多く、之を受用しないためではなからうか、歐洲アルプスの中央帝座、モンブランが最高に挺立してゐるにも拘はらず、他の槍狀、針狀、方針塔の山嶽が、森立する中に、圍繞せられ、自分だけは圓頂閣（ドーム）をして、氷河の切截を、比較的に受けないでゐるのは、この故であると信じられてゐる。

尤もそれにしては、槍、穗高、北嶽の如きが、他の山に比べて、最も鋭く尖つてゐるのは、何故であるかといふに、萬年雪よりの攻撃も、多く受けない代りに、保護をも亦多く受けないから、虛空に露出して、風霜の飽を被むることが、最も多い結果であらうと思はれる。

さうして日本北アルプスの最北部が、萬年雪のために、次第に銷磨切斷せられるとき、最後に萬年雪は、次第に南進して、槍穗高附近に集中し、此の頑強なる岩石の帝王は、山嶽滅亡史の最後を、夕陽の暗赤（ダークレッド）に彩られて、前後左右に散亂せる石の屍體、森の枯木を、冷やかに見ながら、美くしく、寂びしく、遂げるのでは無からうか。

## 第六章

さて日本アルプスで、謂ふところのサアカスに就いては、少なからぬ疑問が提出される、先づ歐洲アルプスなどのものと、果して同一であるか、同一であるとすれば、隨つて氷河既存といふ事實も、肯定せられる、之れを肯定しないとすれば、氷河以外に於て、同一の作用を呈するものが、他にもある

といふことを、説明しなければならぬ、又もし歐洲アルプスのものと、同一で無いとすれば、何ういふ點が、如何に違ふか、そして謂ふところの日本アルプスの、サアカスは、何に依つて構成されたといふことにも、及んで來る。

不幸にして、歐洲アルプスを實見したことのない私は、是等の問題を解釋するために、乏しいながら、私の所藏なる氷河に關した寫眞や著書を集めて、比較考究して見たが、サアカスの遠望、及び內部の光景に就いては、外觀上に於て、頗る類似したものである。

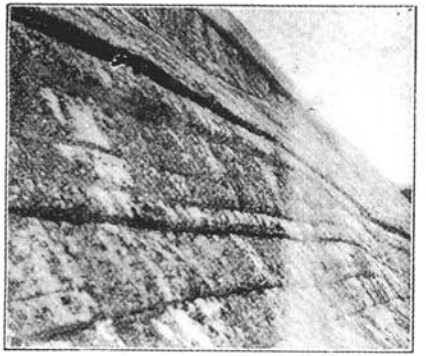
讀者は、本號に揭げた仙丈嶽サアカスと「歐洲アルプス山サアカスの群棄」とを比較して、その全然似てゐないのに、驚かれるであらう、がこれは歐洲アルプスの中でも、多數のサアカスが、一山に比隣集合して、蝕削を恣にし、既に原型破壞期に入つてゐるものであり、且つ岩石が蝕削を明白に受くる石灰岩であるため、仙丈嶽のやうな粘板岩の傷跡(?)の、不明瞭なものと違ふのは、素よりで、この歐洲アルプス山のは、圓形劇場(アムフィテアタア)風の構造を失つてゐる、之れ等の構造は、寧ろ仙丈嶽や、藥師嶽の方に於て、認知されるのである。

然らば歐洲アルプスと、全然同一なものであるかといふに、ジョンソンが、サアカスの爪崖に就いて、觀察したところに依ると、その岩石は、固くて衰頽しないものであつたにも拘はらず、破斷せられ、破斷面は鋭く三角形の嵩に輪廓されてゐると、記述されたが、日本アルプスの、サアカスは、私の見た一二のものに就いて言へば、未だその頃は、殘雪があつたためかも知らぬが、そのやうな鋭利な破斷面は、認められなかつたのである、さうして之れは恐らく、萬年雪が、歐洲アルプスのやうに、氷結したもので無いからで、削磨力が强くないので、切言すれば、日本アルプスの所謂サアカスは、萬年雪が侵蝕して、彫刻したもので、氷河の磨削所爲では無いのであらうと思ふ、その證としては、萬年雪が日本アルプス所謂サアカス型の凹崖を作らんとし、又は現に作りつゝあるとは、北アルプス

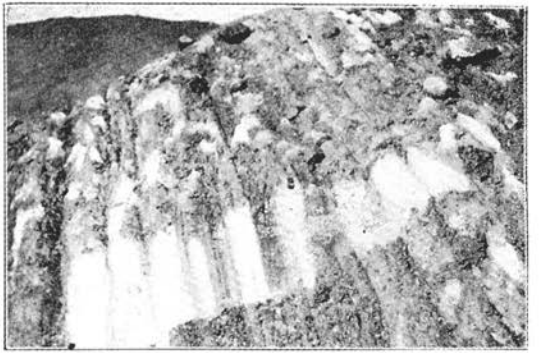
中、殆んど到るところに、類似を見るに難くは無いからである、私の畏敬する少壯地質學者O. E. 君が、友人H. H. 君に、仙丈嶽のサアカス寫眞に就いて、私信を與へられ、實見したのでないから、具體的の說明は出來ないが、所謂カアールなるものは、山崩れの跡でなからうかとの疑ひを抱かれて居ると記るされてあつたが、私は少くとも、あの圓形劇場型の凹崖は、萬年雪侵蝕から、直接に形成されたものであつて、その侵蝕の結果、山崩れを起すことがあつても、それは、サアカス型の、主因をなすものでは、無からうと信じたいのである。

然らば萬年雪は、氷河の樣に運動を起し得るものであるかといふと、もし氷に粘滑性を許してよければ、結氷にも、粘滑性を認めべきものである、然してサアカスは、多く崖側に形成せられて、多少の傾斜を有し、下底が融解して、流動に便を與へるから、萬年雪も、一定不動のものと言ふ事は出來ない、氷河が氷削（glaciate）する作用がある如く、萬年雪にも雪削（nivate）する作用が行はれる、萬年雪に、準氷河現象が認められる所以である。

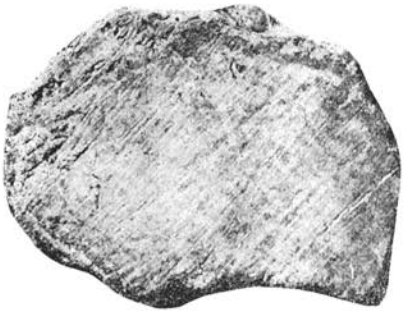
サアカスが、氷河に大なる關係を有することは、元來歐洲アルプスの氷河は、前にも述べたやうに、最も早くから研究せられ（と言つても、比較的の話に過ぎない、氷河學は、至つて近代の學問で、氷河學上、サアカスが、重要視されたのは、更に最近のことである）た爲め、注意は惹いて居るが、アラスカ、ヒマラヤ、ニユージーランドあたりの氷河から比べると、アルプスの氷河は、實に小規模なもので、僅に一種の體式しが、保有するに過ぎない、アルプス型の氷河といふのは、恰度扇の小骨が、要から輻射してゐるやうに、サアカスといふ要から、氷河といふ小骨が、放射されてゐるので、サアカスはアルプスでは、氷河の母胎である、さうして之れは谷まで進行するやうなことは、無くして、山腹の高原で行き停まつてしまつてゐる、日本アルプスの、準氷河現象が、白馬尻以下に及ばしてないのも、止むを得ないとである、さて氣候の温暖に連れて、氷河が漸次高處に退却すると、結局は、其の母胎



理層の河氷



氷河截斷面（含有岩片破碎の河氷を示す）



（二其）石岩るあ痕擦の河氷



（一其）石岩るあ痕擦の河氷

なるサアカスの、絶壁近くまで逆戻りをすることになる、そのときには、氷河は個々獨立した、若しくば小局の殘部が集合したやうになり、其の端は、凹緣（コンケーヴアジン）をして、勾玉形になる、氷河の盛期には、凡べて凸形に進行するのが、このやうな終期になると、凹形になり、又盛期には、特別の地形に煩はされない限り、幅よりも、長さの方が長いことは、勿論であるのに、衰期には長さより、幅の方が廣くなつて來てゐる、この最後の氷河を、崖氷河（Cliff glacier）又は懸氷河（Hanging glacier）と呼んで、氷河滅亡期の、最後の幕に出るものである、故に（Dying glacier）とも呼ばれてゐる、私たちは日本アルプスで、この滅亡期の殘骸を物色して、これすら獲られなかつたのである。

之を結論するに、日本には氷河がなかつたと、斷言することは許されない、しかし氷河ありたりき、と明言するには、其痕跡を明白に指摘しなくてはならない、已に指摘せられたる痕跡の中で、所謂サアカスは、萬年雪の構造したもので、これを準氷河現象と認めらるゝが、氷河として認めるには、躊躇せられる、そこで白馬尻の氷河擦痕や、堆石については、私は未だ實見しないのであるから、私自身の意見としては、具體的に述べることは出來ない、茲に歐洲アルプス氷河の擦痕ある、堆石二箇を諸君の眼前に提出して、日本アルプスにも、斯う云ふ堆石を、採集し得られるや否やを、登山家諸君に伺いたいものである。



# 雜錄

## 野呂、田代分水嶺問題

此問題には自分が描きました『白峰山脈臆測圖』が、數〻引合に出されましたから、自分が此兩川の分水嶺を、實地踏査して來る義務でもあるやうに考へられてなりませぬので、今年の登山期に、田代川を溯りまして、野呂川を下つて見ました。

扨て野呂、田代兩川分水嶺のことを申します以前に、便でありますから、此臆測圖の御咄しを鳥渡いたして置きましやう、此圖に就きましては『山岳』誌上では、一回も解說しました事がありませんから、毎度申します通り、自分は小學校を出たつきり、夫れ以上の學校へ足を入れた事もなく、毎日遊んでばつかり居りましたノラクラ者でありまして、地圖を描ひたり、紀行を書くといふガラではありません、先頃大阪の某新聞に、片目で跛者だといふ樣な記事が載つてゐましたのは、外見上の事を申しましたのではなく、畢竟滿足な人間でないといふ意味だらうと想ひました、無駄口は省きまして、白峰、赤石と申しますると、日本の水成岩の代表的大山脈のやうにも聽いて居りますし、高さも第一流でありますが、同じ位の火成

岩の槍、穗高、八ッヶ岳、御嶽、乘鞍、木曾駒、甲斐駒などに比較いたしますると、新領地に在る山でもあるやうに思はれまするので、井戸蛙の自分には、見當さへも付きませんでした、そこで備忘のために、セメテ道順だけでも書いた置かうと思ひまして、陸地測量部の『網圖』と『成果表』の閲覽を願ひまして、夫れに自分の手元にありまする材料を取捨いたしまして、『白峰赤石駒ヶ嶽附近臆測圖』を製作して見やうと企てましたが、調べて見ますと、ダン〳〵解らなくなりまして、自分のやうな粗笨な頭腦では、到底纏める事が出來ませぬので、中止してしまひました、處が小島兄に『日本アルプス』第一卷へ挿入するから、是非製圖して呉れと煽動てられまして、盲目蛇に怖ぢずとやら、遂其氣になりまして、白峰の部分を急細工いたしましたのが、此臆測圖であります、元來小島兄の御著作にだけ入れる積りでありましたが、他に事情がありまして、『山岳』にも挿入いたしました、相憎自分が非常に俗務に苦しんで居りまして、旅行をしたり、時間が少なかつたり致しまして、校正も人に依頼しましたので、杜撰なのが一層目立ちました、大籠（オホゴセリ）（農鳥山の南）邊の曲線を誤りましたり、大籠の南に露營しましたのを脫しましたり、『山岳』に解說を載せませぬのも、時間の不足なのが第二原因でありました、今日から見まするると、イクラ臆測圖でも餘り酷いものを、四色刷にまでして發表しました、自分の無鐵砲に呆れました、原圖は可なり訂正してありますから、陸地測量部の五萬分一圖が、出版になります迄の間に、御入用の御方が御申越し下さらば、寫して差上ても宜敷う御座います、併し御參考となるか、なりませんかは勿論不明であります、序に小島兄の『日本アルプス』第一卷に附しました、臆測圖の露宿地を訂正いたして置きます、第一オリットの小舍、第二ヒロカウチ、第三大籠の南、第四農鳥山、第五廣河原。

今年白峰へ出立しまする前日に、偶然の出來事から致しまして、辻本兄と名取運一氏を御訪問いたしました、氏は温厚の御方で、白峰、仙丈、駒ヶ嶽、地藏、鳳凰邊の地勢を親切に敎へて呉れら

◎雜錄　野呂、田代分水嶺問題

◎雜　錄　野呂、田代分水嶺問題

れました、夫れから氏の御秘藏の地圖を拜見いたしました、陸地測量部の網圖の寫しでありまして、前嶽から大籠までの部分でありました、國郡境と、三角點と、主要なる河、山脈などが、ザット描ひてありまして、所謂網が拔いてありました、測量部の役人を案內された返禮に、役人から氏に贈られたものださうであります、「野尻さんへ上げた圖は、野呂川が少し奥へ這入り過ぎました」と申して居られました、是れで分水嶺問題は鳧が着きましたやうなもので、自分は氣拔けが致しました、




穗高や、笠や、常念や、鹿島槍や、立山の劍ヶ峰へ登つて見ませぬ自分は、二度も三度も西山温泉へ行きまするのが、何んだか不經濟のやうに想はれました。

西山温泉から奈良田の白河內（シロカワナ）を溯りまして、先年小島兄と同行しました時に、野營いたしました、田代川の上流ヒロカウチに野營いたしまして、翌日は荒川嶽（赤石の間ノ嶽をいふ以下同じ）へ登りまして、ヒロカウチの上方池ノ澤に野營いたしました、此日は晴天でありまして、荒川嶽からは木曾駒の山脈、伊那平、天龍川、高遠町、惡澤、西河內、魚無河內、赤石の諸山、及び其谿谷、蝙蝠嶽、富士

山まで鮮明に見えました、殊に對岸の農鳥、間ノ嶽は、(白峰の間ノ嶽をいふ以下同じ)其溪谷の或る部分と、手に取るやうに分ります、此處で視ますると、農鳥山と赤石山系の主脈とは全く續いてをりません、三峰川の一支流が間ノ嶽の方から出てゐるのも事實であります、只問題の分水嶺が間ノ嶽自身でありまするか、又は其一支脈でありまするかゝ、自分には未だ斷定いたし兼ねました、翌日は雨のため滯在いたしました、次の日に愈々田代川を溯りまして、徒渉を五十回ばかり致しまして、間ノ嶽の一角、即ち農商務省の三角點が建てゝありまする、極めて小規模な一山頂に出でました、後で考へて見まするとこれが所謂三國山『山岳』第四年三百十頁第五年六百八頁)であります から、自分は此處を三國山と稱しまする、自分は三國山に攀ぢまして、明瞭に甲、駿、信三國の境界だと信じました、標高は目分量で二千九百米突位あるやうに想ひました、山脈の續き方を申しまするとと、北西の方は、五六百米突も降りまして、尾根が仙丈嶽(前嶽)へ蜿りまして、甲、信の國界をなして居ります、國界の山脈と其東の間ノ嶽との間が野呂川の水源でありまして、二條の源流が合流してゐます處に、殘雪と伐材が見えて居りまして、伐木の響と、人聲が微かに聞えました、南西の方は、二三百米突も降りまして、尾根が荒川嶽に連つて居りまして、是も駿、信の國界を劃して居ります、さうして間ノ嶽(三國山と間ノ嶽の間)から二條の溪水が出まして、合流しまして、荒川岳の山脈と農鳥山との間に沒して行きます、是が自分が登つて來ました、田代川の水源であります、扨て肝要な分水嶺は何うかと申しまするとと、三國山が東へ續いて居る處が夫でありまして、申さずとも絶巓の間ノ嶽であります、間ノ嶽が西に向ひまして、大きな、不規律な、鋸の刃を五六枚斜にしたやうな、尾根をなし居りまして、最後の一番低い鋸の刃が三國山に當る譯であります、此一列の鋸の刃が甲、駿國境でありまするのは勿論の筈であります、『山岳』第六年百五十四頁のスケッチに「間ノ嶽の一角」とありますものが、此鋸の刃の一つであります、三國山の形は近望しまするとと、

◎雜錄　野呂、田代分水嶺問題

◎雜　錄　野呂、田代分水嶺問題

署『山岳』第四年三百頁に載て居ります、「中腹より見たる北ヶ嶽大山塊」の圖に似て居たやうに想ひます、夫から此山から間ノ嶽の絶巓まで五十分許り費しました、此山を地圖に顯はしまするには、頗る困難だらうと想ひます、三國山を成して居ります鋸の刃と、他の鋸の刃をなして居りまする山の間の鞍部から、三國山の頂上まで、何程の高さがありますかは、自分には解りませぬが、是も目分量で申しまするど、陸地測量部の二萬分一地形圖が、慥十米突に一線を描いてあるやうでありまするが、夫れ以上の詳密圖を要するだらうと想像せられます、三國山の西方は蔭になつて見えませぬでした、此方面は明日北嶽と農鳥山の頂上から觀察する事に致しました、此日は晴陰定まりがありませぬで、雷にも雨にも逢ひましたが、自分が間ノ嶽の絶巓に立ちました頃は、快晴になりまして、富士山から赤石山まで眺望することが出來ました、併し疲勞して居りまするのと、風が強いのと、時刻が遲くなりまして光線が不充分なのと、翌日は快晴だと豫想して居りましたので、寫眞は見合せました、翌日は大風大雨になりましたので、寫眞どころの話しではありません、焚木もありませず、適當な野營地もありませぬから、北嶽登りは斷念いたしまして、間ノ嶽の尾根を北西に下りまして、非常に急峻な溪流に出でまして、三國山から瞰しました合流點を過ぎまして、野呂川最奥の伐材小舍に宿まりました、翌々日北澤の小屋から仙丈嶽(前嶽)へ登りまして、白峰の間ノ嶽を望みましたが、野呂川の水源が二條の瀑布のやうに見えて居りました、此日は曇天でありまして、夫以外には殆ど材料を得ることが出來ませんでした。

以上を總括して斷定を下しまするど、野呂、田代兩川の分水嶺は、間ノ嶽自身でありまして、田代川の水源を視まするには、間ノ嶽の絶巓から、農鳥山に向つて下りまするど、一時間半位で兩山の鞍部に達します、そこから少し農鳥山へ登つた處で、判然と見えます、野呂川の水源は、間ノ嶽絶巓の北西に出て居りまする、一角から瞰しますれば分明だと思ひます、(三峰川の一支流は、間ノ嶽の山脈が荒川嶽へ走つてゐまする、途中から北少し西

に向ふて出て居まして、此支山脈と、間ノ嶽から前嶽へ連つて居りまする、甲、信國界山脈との間から出て居ますやうでありまして、多分大横川だらうと想ひました)、それから嚴正に申しましたらば、三國の國境は、所謂三國山の少し下の尾根だらうと想ひます。

折角參ゐりましたから、少しは御土産になります物を持つて來ます筈でしたが、天候が不良なのと、晴雨計が用をなしませぬので、農鳥山にも北嶽にも一宿いたしまする豫定を變更いたしましたのは、頗る遺憾に耐へぬ次第でありまする、特に晴雨計は、自分の品は千米突以下の所は兎に角、夫以上になりまするし、無用の邪魔物となりますので、今回は慥なる所から借用いたして參ゐりまして、自分が大切に取拂つて居りましたが、自分の品と同樣な理由で、少しも用をなしませぬでした、自分はヨク〳〵空盒晴雨計に緣がないものと見えまする。

終りに一言して置きまするのは、此邊の陸地測量部の三角點が、昨年から不用になりまして、悉皆破壞せられましたので、自分等には、目標が無くなりまして、誠に心細い次第であります、自然切り明けもなくなりましやうし、夫れから富士製紙の伐材も、今年中とかに中止しますさうですから、今後一層幽邃寂寥の境となりましやうが、登攀を企てまするには、それだけ困難が增すことゝなりましやう、猶誤謬のところは御高敎を仰ぎます。(高頭式)

◎雜錄　野呂、田代分水嶺問題

地圖の說明を單簡に致して置きます、今年自分が分水嶺問題に就きまして、通行いたしました、主要の部分を、例の臆測圖に據りまして、國境、河、重なる山嶽と其山脈を、更に臆測しましたものでありまして、勿論正確どころではありません、田代川の上流に農鳥澤と記しましたのは、大村晃平が「農鳥山から農鳥澤が出てゐる」と申しましたのと、長谷川某の所藏して居られまする『井川山事業地地圖』に、農鳥嶽から農鳥澤が出てゐまするのに據りました、併し自分の所持して居りまする同圖には、農鳥を野島に誤寫してあります、中村宗義は此澤を白峰澤だと申しました、水源を問ひましたら農鳥山だと申しました、農鳥山から出てゐるのに白峰澤といふのは、他に農鳥澤がありません以上は、自分は宗義の說に贊成する譯には參ゐりません、其上流にシラネ澤と記しましたものは、澤と申しまするよりは、崩れと申した方が適當だと思ひました、宗義は「之を登ると農鳥山と間ノ岳間に出ます」

◎雜　錄　山岳語彙編纂に就て

と申しました、是れから上には、東から出まする大きな澤が二つありました、井川山事業地地圖には、農鳥澤の上は二分してをりまして、東の方の澤が白峰澤でありまして、此澤が野島嶽（農鳥山の誤寫）の北に當りまして、甲、駿、信三國の國境から、少し東に當りまする、白峰嶽から出て居りまする晃平も「白峰澤を登ると白峰岳（間ノ嶽）に出る」と申しましたから、東俣の幹流が農鳥澤と分れまして、間ノ嶽西嶺の南西から出てをりまするものを、白峰澤と申しまするのが當然の事であらうと自分は考へます、併し此崩れのやうな澤か、夫以上の二つの大きな澤の內の何れかゝ、白峰澤になるのかも知れません、シラネ澤と記しました崩れの處を少し行きますると、左に大きな澤がありまして、其處で東俣の幹流は瀑布をなしてをりまする、此瀑布までは普通の岩魚釣が這入り込むと申しまするから、愈々東俣の幹流が白峰澤となる譯でありまする。

晃平はじめ湯島邊の者は、間ノ嶽を白峰と呼んでゐたのでありまして、自分が小島兄と參ぬりましてから、やう〳〵北嶽、間ノ岳、農鳥山を知つた譯でありまする、自分が間ノ嶽の頂上へ近づきました時は、一面の濃霧でありましたが、其斷續いたしまする間から、左の一項に三角點を認めましたのと、比較的登り易く見えましたから、此方面を攀ぢまして、所謂三國山に出ました譯であります、本年は雨が多かつたためですか、全體を通じまして、殘雪が非常に少なくありました、野呂川方面は右俣と左俣が合しまする處に、伐材の事務所がありまして、人夫の小屋は事務所から上流の二水源が合しまする邊までに、數個所建てられて居りました、昨年までは事務所が小仙丈澤にありましたさうです、事務所から北澤の小屋までは、小仙丈澤の賽事務所をはじめと致しまして、澤山の廢屋がありまして、人の住居して居りまする所は、一二個所さへありませぬでした、事務所で澤の名を聽きましたが、事務所から大仙丈澤までに、ヤブ澤が分明に知れました外は、奥仙丈澤さへ解りませんでした、名取氏の申さるゝ上白根澤、下白根澤の一つは、ヤブ澤でしやう、兎に角水量の多いのは線を太くして置きました、崩れは省いて記しません。

## 山岳語彙編纂に就て

近頃の本誌に、山岳語彙編纂の希望を述べられた人があつたが、我山岳會に於て、これを編纂する事は、最も時宜に適した事と思ふ。山嶽語研究といふ事は、單に旅行家に便する以外、色々副産的の利益がある。就中山中の特種な地名——多くは地形によつて命名したもの——の意義を解し得るといふ事は、最も有益な事であらう。また山地には、古風俗がよく保存せられてゐると同じく、古い言葉が尠からず殘つてゐるから、古語の研究上にも、大に參考となるであらう。

さてその編纂の方法としては、各地の會員諸君から、多數の報告を得るにしくものはない。で予は篤學な會員諸兄が、各地の山岳語彙を編纂して、本誌上で發表せられん事を切望する。その上、本會の幹事諸兄あたりで、これを纏めて日本アルプス地方のを土臺として、標準山岳語を作られて、それに洋語の譯語を付して公表したらよからう。

歐洲の方でも、既に山岳語彙が作られてゐると思はれる。予の狹い智識で見ても、ベデカーの旅行案内記の The Eastern Alps 中には Vocabulary of Alpine Terms と題して、アルプス山中に用ゐる英獨佛伊諸語の山岳語五十ばかりを、アルファベットの順に列記して、各簡單な說明を附してある。我國でも、將來山地の案内記などを作る場合には、可成其地方の山岳語や、主なる方言などを、つけ加へられたい。（笠井藍水）

## 四國の山岳語彙

近頃山岳語彙編纂の必要が認められつゝあるやうだから、予の責任として、四國山地で用ゐられる山岳語——特に地形に關するもの——を紹介する。

明治卅年度の地學雜誌に「四國に行はるゝ地形名詞」と題して、今の理學博士小川琢治氏が、奇異に感せられた四五の山岳語を紹介せられ、且つ末文には『何れも地方的名稱なれども、地形を簡單に言ひ表はし、特にタヲ、ナル、サコの如き格段なる意義を有するものは、定義を一定し置きて用ゐば、地學上の術語として頗る便利なるものと思はるゝなり』と言はれてゐる。小川氏の此記事は、一片座談的のものに過ぎないが、我山岳會で近頃注意し始めた事を、十五年以前、既に先鞭をつけて置いたといふ事は、吾人の深く敬服する處である。

予は小川博士の、此記事を一讀した以來、此問題に就て尠からず趣味を持つてゐた。そして幸にも本年春期四國の大部分を、週遊する機會を得たから、大體の研究を遂げる事が出來た、で左に主要なる四國の山嶽語を列記して、說明する、また

其語原に就ても、愚考を加へてあるが、予は言語學の智識を缺いてゐるから、先輩の士の校閲を仰ぎたいと思うてゐる。

**ヒウラ**（日浦）山腰又は山の裙で、東或は南に面して朝日を受ける處を日浦（ヒウラ）と言ふ。ヒウラと言ふと大抵の人は日の裏、即ち日蔭の處と考へるのであるが、事實は全く反對である。併し浦（ウラ）の原義は、三面山で包まれたやうな場處を、意味するのであるから、ヒウラは朝日を受ける浦と言ふ意であらう。次に此日浦が小字の地名となつてゐる處が甚だ多い。中には大日浦、小日浦、北日浦、南日浦などと、色々の形容詞が冠せられてゐる。

**カゲ**（蔭）前説の日浦と、正反對の場處をカゲ（蔭）と言ふ。また伊豫の南部ではカゲチ（蔭地）と言ふ。單に蔭と言ふ地名も、尠なくはないが、多くは形容詞を附せられてゐる。例へば大蔭、下蔭等である。また蔭の方が形容詞となつて、影野、蔭山などの地名もある。次に面白いのは、山間の谿を挾んでゐる處で、日浦に當つてゐる處に、谷口と言ふ地名があると、其谷口の對岸の蔭の處を、谷口蔭と稱する。大合蔭、下名蔭などゝ言ふ地名も、此方法で出來たものである。

**テンコー**　一般に高く直立したものゝ頂を、テンコーと言ふので、山の絶頂をもテンコーと稱する。またテンゴーと濁る處もある。伊豫の南部ではテンコーの代りにテンゲツ、トンギヨー、テンジヨー等の語を用ゐてゐる。そして此語は山地よりも、却つて平原地方でよく用ゐられる。テンコーの語原に付いては、正確な事は言へぬが、古語で上（カミ）の事を、カウと訛つてゐるから、テンコーのコーは上の意、テンは天の意で、テンコーは單に、上方の事を指して、ゐるものと思はれる。

**ウネ、ヲ**（尾）尾根（ridge）の事をウネ又はヲ（尾）と言ふ。併しウネとヲとの意味を、嚴密に區別すると、ヲは尾の意味通りに、尾根の垂れてゐる處を、ウネは尾根の高い處を指す事が多い。ウネの語原は、隴から出たものと思はれる。尾根をウネと訛つたのでないかとの想像も起るが、尾根は尾のへ（尾の上の約、山の頂の意）から出たものと考へられる。それが又々訛つてウネとなるといふ事は、一寸一考を要する。かつ日本中部地方と、四國とは、言語上の連絡は甚だ乏しいし、四國地方には、より古い言葉が多く殘つてゐるらしいから、此想像は當つてゐないだらう。英語の ridge に、隴の意味がある處などは、前説に對して面白い參考となる。

**タヲ**　ウネの凹處、即ち英語で言ふ鞍部（サツドル）の事を、タヲと言ふ。此語は諸君も既に熟知されてゐる事と思ふが、四國山地に於ては、特によく用ゐられてゐる。單に田尾と言ふ地名もある。

**トー**　ウネの一部をトーと言ふ。それで峠の絶頂をも、またトーと稱する。即ち佛語の col に相當する。峠の絶頂は峠の要（カナメ）になるから、このトーを以て峠の名に用ゐて居る例も多い。例へば天（テン）ケ峠（トー）、瞽女（ゴゼ）ケ峠（トー）などである。尤もトーの宛字としては峠の外、嶺、屹の漢字を用ゐる。第三回山岳會大會の席上で述べられた與謝野寛氏の説によると、タヲが訛つてタウとなつたと言はれて居る。併し此説が果して正確であるか否かは、予の判斷し兼ねる處であ

ろが、他に名説のない限り、この訣に従うて置く。阿波と讃岐とでは、此語を全く用ゐない。

**ナル**　山腹又は山裾で、傾斜の特に緩い場處を、ナルと言ふ。四國地方の方言としてヌルイ(緩い)と言ふべきを、訛ってナルイと言ふ。ナルは即ちナルイの語根をとつたものである。此語も阿波と讃岐とでは用ゐない。次に此ナルは多くの地名となつてゐるが、大概は、其處に發達してゐる植物の名を冠してある。石槌山の菅ノ成(スガナル)、樒ケ成(ツガナル)等は其例である。また土佐の西部では此ナルをナロと訛つてゐる。それで竹ケ奈路(タケナロ)、柿奈路(カキナロ)等の地名が出來る。

**サコ**　山腹の谷間をサコと言ふ。此語は「山岳」第四年第三號、柳田國男氏の講演中にも、一寸説明せられてゐる。杉の造林などは多く、このサコの處を選ぶ。また此語が地名となつてゐる事は、比較的稀である。

**クボ**(窪)　普通凹處の地形を、窪(クボ)と云ふ事から、山地の谷底の、山の窩などもまたクボと稱する。山間には至る處、此クボと言ふべき地形の處がある。そして四國の山間では平(ダイラ)(獨 Boden)と稱すべき小沖積地は、殆ど見られないから、多數の山村は、此クボを選んで造られる。從つてクボと言ふ地名は、至る處の、山地に出來てゐるから、四國では一番多い地名となつてゐる。地名には久保の漢字を用ゐてある事が多い。また單に久保と言ふ地名も尠くはないが、過半は形容詞を附して、大久保、西ノ久保、切久保などゝ言ふ。

**タキ**　瀧の事をタキと言ふと同時に、山腹に露出した岩崖をもタキと言ふてゐる。このやうにタキの意味が二つあるから、始めて四國の山地に入る旅行者は、よく考へ違ひをするのである。併し岩崖の方をカラタキ(空崖)と稱して、瀧と區別する事もある。四國の晶質剥岩地には、此空崖(カラタキ)が頗る多い。平原地方では、空崖の事をダケと言ふ。ダケは崖(ガケ)を訛つたものである。予は此ダケが訛つてタキに轉じたものかとも思つてゐたが、タキと言ふ語は、比較的古くから用ゐられてゐる形跡があるから、此推測は當つて居らぬだらう。

**タル**　「山岳」第六年第一號の三一頁を見ると、日本北アルプス地方で瀑の意味にタルと言ふ語を用ゐるやうであるが、四國山地に於ても、比較的近代まで、瀧の事をタルと言つてゐたと思はれる、そして此語は垂水(タルミ)から出たものであらう。石槌山附近には高瀑(タカタル)、瀑の鼻(タルハナ)と言ふ瀧、及び瀧の岩頭に名づけた地名があるが、現今は瀧の事をタルとは言はない。また土佐には須崎(スサキ)の樽瀧(タルタキ)、今井(イマヰ)の樽瀧(タルタキ)など言ふ瀧があるが、これは恐らく須崎ノ瀑(タル)、今井ノ瀑(タル)と言つてゐたものを、近世タルの語が用ゐられなくなつたから、二重に瀧といふ語を附したものであらう。

**ザレクチ**　溪流の水源などで、山腹の大に崩壞してゐる處をザレクチと言ふ。荒れ果てた山にはこのザレクチが割合に多い、氷河の源に出來るカール(Kar)などゝ、よく似た地形をしてゐる。九州では砂利(ザリ)をザレと言ふさうであるが、四國では此ザレを動詞にして、岩石、土砂の崩れる事をザレルと言ふ。でザレクチはザレル口と言ふ意である。またザレルと同じ意味で、ドエルといふ方言がある。これは潰(ツエ)ルを訛つたものであらう。石槌山附近では、ザレクチと同じく、ドエクチと言つてゐる。

◎雑錄　雨飾山、燒山、赤倉山に關する資料

**ナベラ**　阿波の山地で、溪邊に露出した岩の上面平坦で、かつ滑らかな處をナベラと稱する。ナベラは滑らかから出た語であらう。處で讃岐と阿波の祖谷(イヤ)とでは、山地で破片岩(debris)の多い荒地(ruins)を、ナベラと稱してゐる。これが同一語原か、或は偶合か、予の未だ解し得ざる處である。

**ニヲ、ツブ、ノタ**　此三語は阿波國劍山地方で、使用してゐるのであるが、猶他の地方でゝも、用ゐてゐるかどうかは、調査してゐない。ニヲは高山の意である。土俗が高山的植物の名稱に、此ニヲを冠して、ニヲツヾジとか、ニヲモミヂなどゝ言ふ例が多い。此ニヲの語原に就て、予はよい考が、ついてゐないのである。ツブは山の絶頂を言ふ語である。此語はツブリ(頭)のリが省略せられたものであらう。「山岳」第六年第一號を見ると、日本北アルプス地方に於ても溪流の水源となる峯を頭(アタマ)と言ふさうである。またアルプスの山岳語の中には、山頂をKopf(獨語、頭の意)と言ふてゐる。此等の事は、勿論偶然の一致であるが、東西思想の共通點が窺はれる。

ノタは沼地の意である。これは古語のヌタ(沼田)を訛つた語であらう。「言海」を見ると「ぬたうつ」といふ語に、「猪、草を集めたる上にて轉(コロ)がり臥す」と註してある。處が劍山附近では、猪がヌタに入つて、自身に泥土を塗りつける(害虫を驅除する爲といふ)ことを、猪のノタウチと言つてゐる。予は言海の註に充分なる理由があるのか、どうかを知らぬけれども、劍山附近で用ゐてゐる意味の方が、合理的であると思ふ。

偖て最後に此等の言葉の分布に就て、一言して置かう。右に擧げた語中、過半は、四國の隣地に於ても、使用してゐる。一般に開化した土地程、及び四國の西南部に至る程、此等の山岳語が多く用ゐられてゐる。またテンコーとザレクチの二語に限つて、山岳地のみならず、平原地方でゝも、意義が分るが、其他は總て山地でないと通用しない。(笠井藍水)

## 雨飾山、燒山、赤倉山に關する資料

妙高火山彙に位する、此等諸山は、標高の高からざると、交通の不便よりして、登山者の見捨てゝ顧ざるの觀あり。登山の目的を以て、其地方の役場其他に問合せて得たる資料を記し、將來の登山者の參考に供さんとす。

○參考書

△震災豫防調査會報告第八號(明治三十二年二月發行)山崎直方氏——妙高火山彙地質調査報文

△信濃博物學雜誌第三十三號(明治四十二年五月

發行）

地圖に由りて按ずるに、燒山及び赤倉山（妙高山中の一角とは異る）は、新潟縣中頸城、西頸城の兩郡に在りて赤倉山は燒山の東南方に位するもの丶如く、前者は、鐵路信越線關川、新井驛附近より其頂き赤兀の山勢を望むを得べし、雨飾山は、長野縣北安曇郡及び新潟縣西頸城郡に及ぶ。

燒山普通の登路は、北方西頸城郡方面よりす、然れども、會員知野秀雄氏は南方、笹峰新田（御新田）方面より登山し、其記事は載せて、信濃博物學雜誌第三十三號にあり。

此等の山々は、高度少きを以て、樹木全山に生じ、到底一萬尺に近き高山に登山するが如き快味少なかるべきも、元一平原上に噴出せる、山塊なれば、其眺望等も敢て遜色なかるべしと信ず。

○中土村役場よりの回答。

（問）御地より信越國境にある雨飾山に至り得べきや。

右案内すべき獵師等有之候はゝ右者の氏名。

（答）右雨飾山へは本村字元湯（小谷溫泉所在の地）より約三里にして道路なしと雖一日の中に往復することを得而して案内者は右元湯居住太田岩吉最も適任ならん。

◎雜錄　雨飾山、燒山、赤倉山に關する資料

（問）越後國燒山に御地方より登り得るや。

右案内すべき獵師等の有無。

（答）右燒山は前項と同じく本村字元湯より本村天狗原山を經て約七里にして道路なしと雖往復することを得尤も途中に於て一泊するを可とす。

案内者は前記太田岩吉適任ならん。

右二山共七月中旬より八月中旬の間を以て登山の最好季と思考せらる。

（問）御地より山越にて中頸城郡關川入、笹峯新田を經て關川よりの山徑地圖に記入し有之候右は目下通路と相成居候哉。

（答）右山徑は本村字元湯より笹峯新田、杉ノ澤、關川を經て信越線田口驛に通じ此行程約七里人馬の通行自在なりとす、又前記杉ノ澤より分岐して南すれば信越線柏原驛に通ず此行程前記元湯より約六里半人馬の通行亦自在なりとす。

○智野秀雄氏よりの回答。

一、燒山より金山（カナヤマなり）を經て小谷街道に至る間は小徑と稱すべき程のもの御座なく候も十數年前本山脈を長野大林區署査定員が實測の爲め刈掃せしを以て多少の形跡有之候御經問の天狗原山は本塊に小生出張の際も疑あり人夫案内此等に聞きしも更に要領を得ず候然して金山は越後西頸城郡と同國中頸城郡と信濃國北安曇郡の三界線に立つ南北に細長き平面狀の山嶽にして西方の一部信濃、越後兩國界に於て山形俄然急斜に變するを以て之を北安曇郡小谷方面より望めば多少の異彩あるを以て多分本ヶ所を稱して天狗原山と名づけしもの丶如く要す

◎雑　錄　雨飾山、燒山、赤倉山に關する資料

るに此の說を眞とすれば同山は金山西方の一角にして地籍は全然信濃國北安曇郡に屬すべきものとす。

二、雨飾山よりの尾根傳ひに金山に出づるの間は處々に丈餘の熊笹繁茂する ヶ所あり且つ雜木密生するも岩石壘々たる危險ヶ所は御座なく同ヶ所も十數年前測量せし刈拂の形跡あるを以て多少の困難を豫期せば通行容易なり金山より燒山に至る間は通行容易なり。

三、燒山より赤倉山に至る間は不毛の岩石地多く歩行容易なり只火打山より赤倉山に近づく間に於て雜木類の繁茂せる ヶ所あり

四、赤倉山より笹峯新田に下山するには鍋倉澤よりは黒澤に下るを便とす黒澤は赤倉山より約二千五百間にして新川に下り之より笹峯新田（一名御新田と稱し牧場あり部落全く無く只牧場の番小屋あるのみ）迄約六町に過ぎざるを以て赤倉山より全所までは下り二時間半上り三時間半を要す然して黒澤は通行容易なり原流は赤倉山脈の南方約百間の ヶ所にて約二町歩位の濕地の間に數個の小池あり之より發す之を地圖上にしては高谷池と稱するも雪通坊間に販賣する地圖に記すが如く大なるものにあらず且つ位置異なるが如し右御參考迄に申添候尚ほ全所附近の峯通りには熊笹密生し歩行頗る難なるにかゝはらず澤は比較的通行容易なり御間合せの鍋澤（鍋倉澤の誤ならん）は火打山より發するものにして新川の上流に於て分岐するものなり。

五、赤倉山より直接妙高に到着するを得但し本 ヶ所は處々に溫泉湧出し危岩多く多少迂廻を要する ヶ所あり本分水嶺は大田切川と白田切川（共に下流は關川に合す）との分水嶺にして御承知の如く妙高は中央に突兀として外輪山より離るゝ如き觀あるは本分水嶺の至つて低きによる此間約五百間弱なるは一時間餘を要すべし。

六、案內者としては關川上流區域（即ち中頸城郡杉ノ澤村方面）は杉ノ澤方面の案內者によるべく又金山より以西雨飾山方面は小谷方面の案內者を可とし妙高山附近は杉ノ澤方面又は赤倉方面案內者によるも差支なし。

七、戸隱と越後糸魚川方面を連絡する道路は柏原村より戸隱山に通ずる黒姫山麓の道路が戸隱村に近づきたる所（大洞澤と鳥居川の合流點附近）より北に分岐するものにして黒姫山の南端までは長野大林區署開設の村道あり通行容易なり本林道終點より約千四五百間（此の間は昔時の小徑僅かに雜草の間に形跡を有す）にして杉ノ澤より小谷溫泉に通ずる小徑に一致しより笹峯新田を經て關川の一原流新川に添ふて燒山の南角を橫ぎり越後西頸城郡笹倉溫泉に下り早川谷に添ふて梶屋敷に下り糸魚川に到るものにして新川の分岐點より燒山を通過し笹倉溫泉に至る間は小徑殊更に悪所を有す（尚ほ小谷溫泉に至る小徑は關川の原流ニクロ川に添ふて進むものとす）

戸隱方面の說の雨花川流域は全く方面を異にし雨花川は鬼無里村にして上流は戸隱山系の北方に有之候本說は此の上流を通過して小谷溫泉に出づるの誤りに候はずや（然れども本上流より小谷溫泉に出でしを聞かず）

八、小生の全行せし山崎は名を紋治と呼び越後杉ノ澤の産にして當地方面調査の際使役せし人夫なるも赤倉山方面は精通致さず

候本方面に精通する人夫は杉ノ澤にて寅吉と稱す（姓を忘却す）るもの有之矢張り小生等の人夫として使役せしものに有之候尚ほ案内人に付きては杉ノ澤村山口屋旅舍に付き可然もの御連れの程得策と存じ候。

○小谷温泉大湯元山田旅館よりの回答。

雨飾山、天狗原山は、何れも當所より登山致すを以て最も便利と致し候、里程何れも三里内外にて當日中に往復相叶ひ申候。越後國燒山は當地より五里半位の距離を有し中候間中途に一泊すれば悠々たるものに有之候天狗原山脈を經て登山相叶ひ申候當地より此山へ登り降り道には越後田口驛方面へ出るを可と致し候笹峯新田を經て關川に至る道筋は、關川街道と稱し以前郡道なりしを以て多大の經費を以て改修致し交通安全に御座候田口驛迄七里半中途六里の處に杉ノ澤村と稱する戸數百餘戸の寒村有之候旅路は、該道便に最も近き道筋に御座候長野高田方面よりの浴客は多く此道より參り申候地勢上山坂なる事はまぬかれ申さず候。

前記登山方面の人夫は、澤山有之候時機により賃金の相違は有之候へ共一日約七八十錢以下に御座候。

田口迄の案内は一圓三四十錢位に御座候。

當温泉は八九の二ヶ月は最も混雜可致候間多数御登山の御計畫ならば乍失禮可成前御報知願上候。（たかの）

◎雜　錄　木曾山脈の風越山に就ての疑問

# 木曾山脈の風越山に就ての疑問

木曾山脈は東西に伊那平と木曾谷とを控へ、兩方共交通の便多く、且つ之を貫ぬく幾多の峠にて兩谷地を連絡するに拘らず、之に屬する山嶽が僅に主峰駒ヶ嶽（標高二九五六米）と恵那山（二二四〇米）との外は名稱、位置さへも判然せないのが多いのは、驚かるゝ許りである。今夏一寸木曾を通つて木曾八景の一なる「風越の晴嵐」と謳はるゝ風越山に就き、古來の記事と現在の實物山嶽とが、大に矛盾して居るのに呆れたわけである。即ち同山に對する記錄を順次に掲ぐれば、

先、吉田氏「大日本地名辭書」中卷二三五九頁伊那郡に

一、風越山、今權現山といふ、木曾山脈の一峰にして飯田の西に當り、清内路の上方とす。山中に白山權現を祭りたるを以て、後世舊名を唱へず。

上飯田村の部落に風越の名存す。

風越の峰をはるかに見る時は

◎雜　錄　木曾山脈の風越山に就ての疑問　一六〇

雲は麓のものにぞありける　詞花集　家經

松川は風越山中に出で飯田の南を過ぎ天龍に入る

とあり。次に同辭書二三四七頁木曾川の條に

二、「今も中木曾山、風越山といふは、讀書、大桑二村の山をさす」なる一文ありて、且

風越の峰越え來れば木曾川路

波も一つにうつせみの聲　夫　木

又高頭氏編「日本山嶽志」木曾山脈の中に

三、風越山（別稱、權現山）信濃國下伊那郡の西北方に在り。上飯田村大字上飯田より一里二十九町にして其山頂に達すとありて最後に

吹きみだる風越山の櫻花

麓の雲に色やまがはむ　後鳥羽院

白妙の雪吹きおろす風越の

峰より出る冬の夜の月　藤原清輔

降る雪に風越みねのあとたえて

越えぞわづらふ木曾の山人　源　兼昌

又同書六七一頁駒ヶ嶽の條下に。

四、木曾街道上松驛より東折し半里にして里宮に詣づ、こゝを駒ヶ嶽の一合目とす、西向すれば御嶽連山を仰ぐべく、東に駒ヶ嶽の前山を見、風越山の古道を右に望み得。とあり

次に今夏福島にて求めし「木曾案內」（四十三年十一月發行）の三六頁に

五、風越山　上松の南東に峙つ草山にして土俗之を「カザゴエ山」といふ。古の岐蘇路は此の山麓を通じ且山容の雪ならざるより古來旅客の目に留り、詩歌に謳はれし事多し。

風越の峰冴えわたる秋の夜は

いそぎうつなり木曾の麻衣　覺　延

以上五通の記錄は、之を伊那平方面と木曾谷方面との二つに分ち得るのである、即ち「一」及「三」は伊那平方面より觀察せしものにて、兩方の說明は略ぼ一致し、何しろ下伊那郡の山嶽で飯田より餘り遠くない事を證明して居る、又「二」「四」「五」の說明によれば、木曾谷方面の山嶽の如く殊に「五」によれば、この山全く西筑摩郡にありて、木曾山脈の主脈を離れ、木曾川にのり出したる支脈の一峰なる事を證して居るのがわかる。故に今これを地圖に求むるに「三」の說明の如く下伊那郡上

飯田村を中心として、一里二十九町許の半徑の弧を畫くに、到底西筑摩郡上松驛の南方には達せず、不完全なる參謀本部の輯製二十萬分の一飯田圖幅によるも、上飯田上松間は、直距離約八里ありて、上飯田村の西北一里二十九町に山頂を有せる山が、迚も上松驛の南に麓をあらはすわけには行かぬ事が見出される。又「四」によれば風越山の古道なるものが、略ぼ駒ヶ嶽登口に接近して居るのでもわかる、故にどうしても「一」及「三」にある風越山と「四」及「五」にある風越山とは、全く別山らしく考へられるのである、又「二」の說明の讀書大桑二村の山といへば、飯田と上松との中間位で、偶然他の二說の折衷說の如き觀あれども、至つて曖昧で、只木曾谷方面の山と言ふに過ぎないのである。

而して余の旅中携帶せし參謀本部二十萬分の一圖には、風越山なるものが下伊那西筑摩郡界の主脈中に屹立し、上飯田の北微西約三里にあり、上松川の源をなせる等、極めてよく第一の要件を滿足し居る樣に記入しあり、ために車窓よりは、前山に遮られて見えない事と想像し、意にも留めずして過ぎしに、圖上のものよりも、遙か北方なる須原上松間に於て、頭上を壓する、草多く樹少き一山嶽の麓を過ぎりし故、いづれこの邊での名山ならんと思ひ、スケッチなしをきしが、福島に着いて、例の「木曾案內」を求め、且其の附圖なるものを見るに至り初めてこれが、木曾方面でいふ風越山なる事を確め得たのである。

かく實物を見た以上、余が腦中「一」及「三」に記せる風越山は、何かの誤謬ならんと獨斷し居たるに、歸京後、信濃土性圖を見たるに驚くべし、茲に二ヶの風越山を明記せられんとは。即ち一つは確かに余の見たる木曾案內記中の草山にして、圖には薄綠色（中世層？）に塗られ、標高一七一八米と註せられてあるものである、之には一向疑もないが、不思議なのは今一つ主脈より南派せる支脈中に於て、大平峠（一二九六米）の東なる飯田峠（一一七一米）の更に東に、上飯田の北微西約一里許に、風越山と明記し、薄紅色に塗られてあるのを發見した事である、これは最よく「三」

◎雜　錄　木曾山脈の風越山に就ての疑問

の說明を滿足せるものといひて可なりであるが、もし「三」と「一」とが同山を意味すとすれば、一の說明に、わざ〳〵白山權現を祭りたるを以て、後世舊名を唱へずとあり乍ら、何故權現山と記さないかゞ疑問であるが、兎に角今の處、主脈を界として、僅か直距離六里許の間に、夫々相當の記錄を有する同名異山を生じて居るのは、甚だ滑稽な話ではないか。

然し余は、今この兩風越山に對し、次の如き考を懷いて居る、即ち以上記す如く、この山は位置さへも確かでないに拘らず、其れを詠み込んだ歌が、一寸集めても、六ッ七ッある所を以て見ても、又かの滑稽諧謔をのみ旨として、沿道の風物などに、一向氣を留めなかつた有名の紀行文、十返舍一九作「續膝栗毛」木曾路第八編の序文にさへ「諏訪の湖波しづかに、風越の嶺枝をならさず、往來の旅人が命をからむ蔦かづらと詠みしは昔にて云々」とある所を以てしても、風越なる名稱が、いかにも颯爽たる所から、古來木曾路を詠むには、必ず引合に出され、從つて實物よりも寧ろ名に於て、有名な山ではあるまいかと思ふのである。又藤原時代の歌が多い所を考へると、古代東山道は惠那山の北、神の御坂、今の神坂峠を越えて、伊那平に出で、天龍川に沿うて、北行したのであるから、或は飯田附近のが、古の眞の風越山であるかも知れぬ、後中仙道即ち木曾路の交通が、盛んになつて以來、古歌に有名なる山名を、新たに上松附近の、やゝ卓立せる、即ち旅客の目に、嘗ならず見える山に持つて行つて、被せたのかも知れぬ、こゝに於て本店つぶれ、支店が獨り其名を擅にして居るのかも知れぬのである。何しろ今の處風越山は二つあるわけである、日本アルプスの白馬大蓮華、及ひ甲斐駒白崩の同山異名を初めとし、數年前までは自分の名も知らなかつた後立山連嶺でさへ、鹿島槍、針木嶽、五龍嶽、蓮華嶽、其他何々澤嶽などゝ、長々しい有難い名を、各自頂戴して、いよ〳〵位地標高も固定したる今日、千年來立派な名を有し乍ら、未だ眞の居處も定らず、まご〳〵して居る此の風越山に對しては、誰か一掬の淚なからんやである。何卒愛山家諸君、木曾駒又

は、御嶽を跋跡せられ、天龍に從ひて下らるゝ序には、是非この風越に對し、一臂の力を分ちて、上松、飯田兩家の中、いづれが本家本元なるか、或は全く一方しかないか、研究して頂きたいのである。

序に信濃土性圖と二十萬分一圖（參）とに掲げし、木曾山脈中の山嶺名を列擧して見ると、次の如くなつてる土性圖によれば北より

一、牛首峠（一〇五〇米）
二、經ヶ嶽（二〇二〇米）
三、櫨平峠（一四七四米）
四、駒ヶ嶽（二七二二米）
五、風越山（一七一八米）
六、無名峰（二四八九米）
七、高森山（上下伊那郡界）（高森の東）
八、念上山（一五二八米）
九、南木曾嶽（ナキソ）（一二九六米）
十、大平峠（一一七一米）
十一、飯田峠（飯田峠の東）
十二、風越山（一五一七米）
十三、神坂峠（二四〇〇米）
十四、惠那山（二一九米）

右の内駒ヶ嶽には寶劍ヶ峰と、支峰東に二四三〇米と西に、二二二九米とを掲げて居る、惠那山の標高は、余の見たる諸地圖及地理書では、比較的古い方に、この二四〇〇米を用ひ、新しいのには二、二四〇米を用ひて居る、本誌六年第二號の鵜殿氏の御料局測定によるのと、比較しても二、二四〇米方が眞に近い事は明かである、之に反し駒ヶ嶽のは、余はこの二、七二二米位を眞に近いと考へ居りしが、其筋なるもの、調査以來、一躍して白馬や八ヶ嶽を凌駕し、甲斐駒に肉薄したのは、思ひ掛けない大出世である。

次に二十萬分の一圖には

一、櫨平峠　二、駒ヶ嶽　三、烏帽子嶽（上伊那にあり）四、越面山　五、浦川山　六、增ヶ澤山（以上三ツは西筑摩支脈）七、高森山　八、風越山　九、白山（以上二ツ主脈）十、南木曾山　十一、大平峠　十二、富士見臺　十三、神坂峠　十四、惠那山。

◎雜錄　木曾山脈の風越山に就ての疑問

◎雜錄　「錫杖ヶ岳に就て」を讀みて

とかやうに兩方違つて居るのである、其中に於て土性圖の無名峰（二、四八九米）と二十萬分の一圖の烏帽子嶽とが、甚だ位地に於てよく似て居るのである、で余が小學時代に用ひた三省堂發行帝國新地圖中には、丁度この二つを合併した如く烏帽子嶽（二、四八九米）なるものが入れてある、處で木曾山脈の主峰が二、九五六米なるに第二の高峰が恵那山（二、二四〇米）ではいかにも其の貧弱に驚かれる今日、烏帽子嶽なる名の實否は暫く措いて、こゝに二、四八九米の高峰がある事は、木曾山脈のために、やゝ意を強うするに足りるのである、孰れこれ等も、何とか近い内に片の附く事と思ふ。

次に注意すべきは、二十萬分一圖中の白山なる山名である、これは風越山の記錄第一なる白山權現を祀るとある事と、深い關係がある様に見える、これと同じ例は美濃越前國境なる「大日本地誌」に言ふ所の、屏風山脈第一の高山、權現山（一名白山又能郷山、標高一、八一一米、山岳二年第二號根尾谷紀行參照）である、この山も頂に白山權現を祀れる故、根尾の白山又權現山の稱ある事と、且二十萬分の一に記す風越山と白山とが、接近してゞちらも、飯田の西北に在る處を以てすると、この圖の風越山と白山なるものは、權現山なる名稱を媒介として、同一山嶽らしい氣がするのである、これは上松の草山に、果して白山權現を祀つてあるかないかを、調べないと、無論判然しないのであるが。話が横道に入るが、美越國境の權現山なるものは、其記されたる標高程、高くない様である、素人眼でも、大垣岐阜附近より、この屏風山脈を見るのに、大抵同高の山ばかりで、先一、五〇〇米以下らしい山ばかりである。兎に角一日も、早く比較的交通便利なる、木曾山脈の開發を望むのである。（永田盛三）

## 「錫杖ヶ岳に就て」を讀みて

本誌第六年二號雜錄中に「錫杖ヶ嶽に就て」なる題目の下に、鵜殿氏は、信州に屬する二峰と、

伊勢に屬する一山とを掲げられた、余はかゝる山名に就て、從來諸種の地理書、及び山嶽表を探ぐるのが好きであつたゝめ、尚他に三つの同名の山嶽を探り得たのである、而も其の一つが、亦北日本アルプス中に、鎮座するに至つては、益々面白いと思はれる。

余が小學時代より愛讀した地理書中に、中村五六氏著中等地理（明治廿四年四月發行）なるものがある、この書は、今の教科書に比し、誠に不完全ではあるが、其自然地理、殊に山川湖沼に詳しき事は、到底今の諸書の及ぶ所でない、其代り、人文地理、殊に都邑に冷淡な事は、驚く許である、例へば畿内の條に於て山嶽三十座を記するに反し、都邑は京都、大阪、神戸、奈良、堺、伏見、郡山、岸和田、尼ヶ崎、西ノ宮の十しか、擧げないのでもわかる。

其の東山道飛驒、及信濃の山嶽の處を見ると、次の文句がある。

「飛驒の東境に峙てる高峰を乘鞍ヶ嶽（一〇、四五〇）となす、鎗ヶ嶽、錫杖ヶ嶽等相連りて其北に聳ゆ。國の中央なる位山は其峰高からざれども、山中水松樹を産するを以て、其名却て他山より著はる。信濃は殊に嶮峻にして、中にも西境の御嶽（一〇、五一〇）最も高く、山頂常に雪を頂き、草木生長せず、其東方に駒ヶ嶽（九、五〇四）あり、兩山の峽間は有名なる木曾の谿谷にして長さ十八里に亘る。御嶽の北なる乘鞍ヶ嶽より高峰峻嶺重疊し、燒嶽、鎗ヶ嶽、霞ヶ嶽（九三八〇）蝶ヶ嶽（九七九〇）常念ヶ嶽（一〇三一〇）大天井山（一〇五一〇）有明山（八〇七〇）鏃ヶ嶽（九五〇〇）大蓮華山（一〇〇四〇）等あり」とあり。

この文句により、余は幼時より錫杖嶽とは、飛驒の東方信濃に近い所にある山嶽なる事を、深く腦裏に印し居たるなり。然るに山岳發刊に當り、其一卷第三號の日本アルプス山岳名を讀むに、信越境上に於て、鹿島槍ヶ嶽と上犬ヶ嶽なる二山の間に、錫杖嶽を見出し、二、五〇〇米と註せらるゝに至り、一時中村氏地理書の、いかにも古きに信用を落して、飛驒に錫杖ヶ嶽なしと獨斷し居たるに、又々本誌五年第三號硫黄嶽笠ヶ嶽登山記（古瀬

◎雜錄　「錫杖ヶ岳に就て」を讀みて

◎雜　錄　「錫杖ヶ岳に就て」を讀みて

氏）を見るに至り、亦錫杖ヶ嶽を飛驒に復活せしめたり、即ち四一頁に「露深き草莽を押し分け、進む里事餘、天漸く明く、硫黄嶽右後にあり、穗高嶽前に在り、槍ヶ嶽尙其奥にあり、忽ち右岸の谷間より錫杖ヶ嶽つと顏を出す、數本の杖を並べ樹てたる如く、草木生せず、全く奇石より成る、之れ笠ヶ嶽に連りて、西に聳ゆるものなれども、遠方より見えざれば、餘り高からざるべし」とあり。

百聞不如一見とか、これ有力なる飛驒の錫杖ヶ嶽存在の一證にして、中村五六氏の記事も、又決して誤りならざりしを證するに至りぬ、且つこれによれば、この山火山岩の削摩せられし、妙義式の岩山なる事、想像するに難からず、標高も二、〇〇〇米内外なるべし。又此程「飛驒國小地誌」（二十六年十二月發行）を見たるに、山嶽の部に

「今其著名なるものを北より順次に列擧すれば、北俣ノ嶽、中俣の嶽、抜戸嶽、鎗ヶ嶽、穗高嶽、燒嶽、硫黄嶽、乘鞍嶽、栃洞山等にして、其槍ヶ嶽の西に接して聳ゆるものを笠ヶ嶽とし、更に其西南に隣れるものを錫杖ヶ嶽とす」とあり、且附圖にも正しく笠ヶ嶽の西に錫杖ヶ嶽と入れたり。由て確に飛驒に錫杖ヶ嶽なる、第二流の山嶽ある事は判然したわけである。

今一つは錫杖山とある、これは地質調査所二十萬分の一、日光圖幅中に記しあるもので、鬼怒沼群峰に屬するのである、其附近には赤安山（岩代上野下野三國境にあり、二、一四四米）鬼怒沼山（赤安の直ぐ南四ケの池あり、二、一四三米）黒岩山（赤安の東、帝釋山脈の最高峰？二、一五五米）があり黒岩の南麓に錫杖山（一、七〇三米）なる山名を記してある。然るに此の錫杖山の存否も甚だ疑はしい、六年第二號の「栗山の秋」（須田正雄氏）の紀行によれば、氏が參謀本部地圖を持行かれたためか、この近邊の山嶽中只黒岩一つのみが一致して居る丈で、其他大有山、鬼怒沼毘沙門山なる初耳の二山を擧げて、比較的著名なる赤安山が揭げられてないようである。この大有、毘沙門及び赤安、錫杖の異同辯は、必ず今後起るべき

問題であらうと思はれる、然し、この錫杖山なるものは、地圖上では、誠につまらなさうな、黑岩山の南麓に記されてあつて、一の卓立した山ではないやうである。

今一も錫杖山（尺丈山ともかけり）とありて、阿武隈山系中の八溝山脈に屬する一低山である、常陸國久慈那賀、下野國鹽谷郡界にあり、標高は既刊の五萬分の一參謀本部地圖にある筈なれども、余は未だ知らぬ、但し「大日本名勝地誌」に一、四五〇尺とある所を以て見ても、極めてつまらない山らしい。

今こゝに錫杖を冠する山名を列擧すると

一、錫杖ヶ嶽　木曾山脈駒ヶ嶽の寶劍嶽の別名
二、錫杖ヶ嶽　下伊那郡　九二四〇尺
三、錫杖ヶ嶽　越中下新川、信濃北安曇郡界にあり、九〇〇〇尺（一に二五〇〇米）
四、錫杖ヶ嶽　伊勢安濃、鈴鹿二郡界（二二三五尺）
五、錫杖ヶ嶽　飛驒吉城郡笠ヶ嶽の西
六、錫杖山　下野鹽谷郡鬼怒沼山中（一七〇三米）
七、錫杖山　下野常陸國界、八溝山脈中の一山

以上七つある、其中余の存在を認むるは「一」「四」「五」「七」であつて「二」は或は「一」の誤、「三」は鵜殿氏の說の如く、杓子嶽の本名らしい事に贊成する、又伊勢の錫杖ヶ嶽を疑つて居られたが、これは慥に實在すると、余は斷言する、參謀本部二十萬分一名古屋（四色版）にも、明記されてある。

「山岳志」の奇拔な形も、この山の少し北なる、筆捨山の奇景ある以上、略ぼそれと類似の山形らしく考へられる。（永田）

記者いふ錫杖ヶ岳に就いては左の書信に接したればこゝに附記す。

拜啓仕候山岳第六年二號拔見候内に鵜殿氏所載の錫杖ヶ岳に就て氣付き候儘申入候信州の錫杖ヶ岳は駒ヶ岳の東南一千米突に在り海拔千六百十五間西筑摩郡と上伊那郡の界にして且つ上伊那郡の中宮田村赤穗村の村界に有之候駒ヶ岳より東南前岳の方向に向ひ右の方に奇形をなして聳立せる山に候登山は一寸困難なれ共空身なれば登攀し得られ候。（鈴木民作）

◎雜錄　「錫杖ヶ岳に就て」を讀みて

## 白馬岳の名

白馬岳はシロウマにして、ハクバに非ず、昔時は、大蓮華と稱したる由、頂上より北に當りて、八十八夜の頃黑く田の代を耕す如き馬の形現出す、故に代馬（シロウマ）と云ふとぞ、祖父嶽に、種蒔き親爺出ずる頃なりと云ふ、共に、農事の曆をなせりと。（蝶郎）

## 本年白馬岳の登山人數

信州北城村の丸山廣太郎よりの通信に依れば、同村より白馬に本年登山したる人員は、百五十四人なりしと、同山は九月二十九日、最終の登山を行ひ、雪に備ふるために、白馬尻の堀立小舍を解體し、來年再建の準備を濟ませ、下山したりといふ。（T生）

## 滑稽なる山名の轉化

（岩越國境、狸ヶ森山に就て）

一寸普通なる地圖（百萬乃至百五十萬分一）を見らるゝ、諸君は必、岩越國境、阿賀野川以南に於て、高陽山、御神樂嶽、猩々森山、八十里越、朝草嶽、六十里越等の諸山を見出さるゝならむ、この內、やゝ顯著なるは御神樂嶽及朝草嶽にして、共に古期の熄火山として、岩木山（陸奥）鳥海山（羽後）月山（羽前）を連る所謂鳥海火山脈（この脈は脈といふよりも、寧ろ火山線といふべきならむ）に屬し、少しは記錄もある樣なれど、他の諸山に就きては餘り、確說あるを聞かず、其內、猩々森なるものに就きては、山岳志にも明記せられ、「大日本地名辭書」にも左の記文あり。

三九六四頁、岩代大沼郡下に

「大鹽村に溫泉あり、咸鹹し、村西に瀧澤あり、其源は猩々森に發し、南に降る者也、猩々森山は村北四里十八町にあり、高さ二百九十五丈、一に

十二嶽と稱ふ、遠く望めば、群山の上に秀出し、積翠空に浮び、御神樂(ミカグラ)嶽と並び峙つ、又西に續きて馬尾瀧といふ山あり、共に奥越の二州に跨つて、峰を限り、蒲原郡に界す。」

とあり、何等一點の疑念を挟むべくもあらぬ樣なれども、偶々、余の家に召使へる下婢に、岩代河沼郡坂下町(バンゲ)より來れるものあり、余一日、地圖に據り鄉里附近の地名を尋ね、猩々森山に及びしに一向知らず、却つて其方面に當り、ムジナが森なる山嶽ありと答へたり。仍て山名の有無を糺さんため、過日大沼郡役所に宛て次の問を發せり、即ち、

一、貴郡と新潟縣東蒲原郡との境に猩々森山(ショージョーモリ)なる山嶽有之候哉

二、又貴郡内にムジナが森なる山嶽有之候哉、若し有らば其位置御示し被下度候

三、御神樂嶽頂上に、噴火口址又は池存在致候哉

なる三問に對し、返信あり曰く、

一、本郡と新潟縣東蒲原郡との境に猩々森と稱する山嶽なし、

二、狸(ムジナ)ケ森と稱する山嶽あり、之は本郡内本名村大瀧村境にて、新潟縣東蒲原郡との境にあり。

三、御神樂嶽の頂に噴火口址及池なし。

と報じ來れり、是に於てか、余は初めて、世間に流布せる普通の地圖並に「山岳志」「地名辭書」「風景論」等に麗々と明記せられたる、猩々森山なる山名は全く誤にして、狸(ムジナ)ケ森山なる、山名の誤傳なる事を確め得たり、動物學の知識なければ、余はムジナなる文字に對し、狸(タヌキ)を宛てゝ、果して可なるや否やを知らざれども、要するに、誤傳の筋道は類似文字上の轉化にして、狸が猩になり、ケが々に變じ爲に狸ケ森が猩々森に誤記せられし事、推察するに難からず。

一下婢との問答より起りて、一山名の誤註が解決せられしは、偶然とはいへ、誠に面白き事にて、日本全國の千山萬岳、この種の類例尚多かるべし、されど狸が猩々に轉化せし例に至りては、珍々無類といふべく、寧ろ滑稽千萬の事といふべし。

序に曰く、三、の問も下婢の言に、御神樂岳頂に大穴あり、といひしより質せしにて、只噴火口

◎雜錄　滑稽なる山名の轉化

◎雜錄　長野縣の高山植物保護

址及池なしなる。イエス、ノー、式の答にては、甚だ不得要領なるも、同嶽は「地名辭書」二〇八七頁、東滿原郡中に、

「土俗の說に、此山中に時々神樂の縹渺として聞ゆる事ありといふ、其何の故たるを詳にせず」

とありて、誠に神秘的なる說明なるが、或は火山に往々ある山鳴りのため、この山名を冠らすに至りしならんか、又下婢によれば山中に「神樂猪（カグラシヽ）」なる靈獸あり、この山の主（ヌシ）にして、時々姿をあらはせども、獵師等怖れて擊たずといへり、いづれも山國に有勝の傳說なれど、凡そ、岩越國境より南會津郡只見川上流にかけ、朝日嶽、駒ヶ嶽、燧嶽の山脈を中心とし、東は田代山、帝釋山等の帝釋山脈、西は越後の駒ヶ嶽、仲ノ嶽、八海山附近に亘る重疊たる群峰は、高距に於ては、かの日本アルプス諸峰に遠く及ばざれ、人烟稀薄にして深奥なる、眞に神韻縹渺たる靈域なれば、今後この方面の探究は、山岳會諸君に對し、決して等閑に附すべからざる事ならんと推察す。（永田）

## 長野縣の高山植物保護

一七〇

長野縣の或一部の人士に由りて、高山植物の亂採を防んとする主旨よりして、其筋に建議する所となり、遂に長野大林區署及び御料局の高山植物採集の取締となり、繁雜なる手續を經るに非れば一莖の草も一枝の花も採集するを得ざるに至れり、此取締法に由りて、直接の打擊を蒙りしは、高山植物の生品を賣買する一部の園藝家にして、學術研究の目的に非れば、絕對に採集を許可せざるべき由なり、此取締法に由りて、高山植物煙滅の壽命も多少延されたる觀あるも、高山植物の亂採は之を要するに採集者自身の德義に訴ふるより外なく、如何なる嚴重なる法令も手の下し樣なきものなり。

高山植物を採集し、或は單に山嶽に登らんとする者は、先ず、左記の如き形式の、採集願或は、入林届を、其地の監督區内の小林區署或は帝室林野管理局等に願出で、一定の許可書を携帶すべきなり。幸にして白馬嶽の如き、登山者多き地には、

便宜上、其地の巡視等に此願書を出せば、即時許可書を得べし。(白馬嶽採集願の形式を示す)

高山植物採集願

東京府東京市麹町區富士見町壹丁目壹番地
理科大學々生　高山登

明治十六年八月八日生

一採集期日　自明治四十四年七月廿五日
至明治四十四年八月十日

一採集ス可キ植物ノ種類
クモマキンポウゲ、ハクセンナヅナ、ウルツプサウ、ウラジロキンバイ、其他

三採集ス可キ箇所
長野縣北安曇郡北城村及北股入國有林小字白馬岳

右之通學術研究ノ爲メ採取致シ度候間御許可被成度此段御願候也

右　高山登㊞

大町小林區署長　林務技手　倉林清吉殿

入林屆

東京府北豐島郡高田村雜司ヶ谷千百五十番地
著述業　嶺創立
明治元年一月十五日生

右之者山岳研究ノ爲メ長野縣北安曇郡北城村字松川北股入國有林小字白馬岳へ入林仕候間此段及御屆候也

明治四十四年七月十五日

右　嶺創立㊞

大町小林區署長　林務技手　倉林清吉殿

高山植物の研究者及び登山家諸君は、此の如き繁雜なる手續あるに躊躇する勿れ、事は思ひし程面倒なるものに非ざるを記憶せられよ。(蝶郎)

◎雜錄　雲のアルプス

## 雲のアルプス

數年前の或夏の日、私は阿波の海岸で、海水浴をしてゐた事があつた。さうして其時の日記に、このやうな事を書いて置いた。『紀の海の水平線の上方には、一帶の積雲が浮んで、大山脈のやうに連つてゐる。私は此種の雲を見る度に、萬古不滅の氷雪に覆はれた、かの壯重雄偉なアルプスの大連嶂を思ひ浮かべずにはゐられない。その連雲の一部が特に高く、王冠や烏帽子の形をして、聳えてゐるのを仰いでは、モントローザや、マテルホルン

の雄姿に思を走らした。私は常にアルプスの實景に接したいと渇望してゐるから、かういふ想像を猛ましくするのであらう』。

今年の夏、私は阿波と讃岐との境界に峙つた大瀧山（九四三米）に登つた。さうして山頂から南の方を顧た時、私の小さな胸から『雲のアルプス！雲のアルプス！』といふ言葉が迸り出でた。

南方の連山は、圏々とした積雲の大山脈によつて、包まれてゐるのであつた。その雲の下底は、水平な線をなして、青い山々を取り巻いてゐるから、丁度雪線のやうに考へられた。やがてまたその雲が夕日を受けた時には、その壯麗な事、アルペングリューエン（Alpenglühen）の現象に劣るまいと思はれた。雲の海、雲の蜂といふ語に對して、私はこのやうな山脈狀の積雲を『雲のアルプス』と稱してゐる。自然界中で、最も崇高な景觀は、アルプス的の山嶽に於て見られる如く、雲の中で、最も崇高な景觀は、雲のアルプスによつて見られる。（笠井藍水）

◎雜　錄　墨西哥火山の傳說

# 墨西哥火山の傳說

新着の Sierra Club Bulletin に、墨西哥の大火山 Popocatepetl（一七五二〇呎）と、Ixtaccihuatl（一七三四〇呎）とに就き、次の面白き傳說あることを記せり。

Ixtaccihuatl とは「白衣の婦人」を意味し、山名其形に由りて起る、彼女は頭を北にして仰臥し、脚を南方に向く、彼女は確に白衣を纏へり、何んとなれば本山は墨西哥の他の、孰れの高山よりも多量の雪と、數多の氷河とを頂き居ればなり。印度古譚の傳ふる處に依れば、Ixtaccihuatl は富める酋長の娘なりき、彼女は或る貧しき青年と相戀の仲となりぬ、されど父は此戀に同意せずして、彼の青年を驅逐せり、娘は日々衰え行き、將に死せんとするや、化して此山となり、今に至る迄、猶ほ彼女の形を保ちぬ、彼女の戀人は Popocatepetl となり、彼女の足元に立ちて、眠れる彼女を、長えに打ちまもり居るなりとぞ。

因に墨西哥には右二山の外、猶はNevado de Toluca 別名 Xinteeatl（一五一七〇呎）及Pico de Orizaba 別名 Citlaltepetl（一八七〇〇呎、墨西哥第一の高峰）の二大火山あり。（由水生）

## アルプスの最高峰モンブラン高熱のために低うせらる

本年九月十日ジュネヴア發、通信。此夏の、高い、そして引き續いた熱と、六月以來、雨雪の缺乏とは、瑞西と、それから佛蘭西伊太利の或部分の、最高山嶽に、その結果を齎らした、是等の高地から歸つて來た案内者や、登山家の報知では、古い世紀の、恐らく從來何人にも見せなかつた氷は、今眼前に暴露され、アルプス史上に於ける、最初期のものとして、炎熱で透徹し、融解されてゐる、小さい氷河は沒落して、大きいのは縮皺する、谷に接觸する氷の「尾」の大部分は、失はれ、その「不滅の氷」に取つて代つたものは、巨大な移石であるといふ。

この現象は、特にサヴヲイ、ヴアライのアルプス、及びベルニース、オーバアランドの諸部分に看取せられる、モン、ブラン絶頂の高準が、數ヤード低くなつた、マテルホルンとか、モンブランの針峰とか、いふやうな岩山では、斷裂と罅穴との間の、舊い氷の融解が、石や移石の危險な崩落を起してゐる。

氷河に哺められた川は、頗る高くなつたが、併し他のそれは、非常に低い水位になつた。

## 昨年の歐洲アルプス登山者死亡數

歐洲アルプスにては、毎年少なからぬ登山中の死亡者を出だすことなるが、昨年中、瑞西及び伊太利方面のアルプス山だけにて、變死せるもの九十人、重傷その他の災厄に罹りたるもの、約八十人を算したりといふ、是等の原因は、導者を傭はざる單獨登山、地辷べり、登山用繩の不完全なりしため、及び霧のため路を失したる等に歸し得べし、

◎雜錄　アルプスの最高峰モンブラン高熱のため低うせらる。昨年の歐洲アルプス登山者死亡數　一七三

今まで毎年の變死者は、英人最も多かりしに、昨年は瑞西人最も多く、獨逸人、英人、墺人、伊太利人といふ順序なりと。(エヴニング、メイル)

## 登攀山岳最高點の競爭紛議

從來人間の踏破したる最高の山嶽として、記錄に殘れるは、ウォークマン博士夫人 (Mrs Fannie Bullock Workman) が、印度ヒマラヤ山中のヌンカム連峰 (Nunnkum Range) 七千二百米突の征服に在りしに、米國のアンニイ、ペック女史 (Miss Annie Peck) がペルー國ヒユアスカラン (Huascaran) 山に登り、七千三百米突の高點を極め歸られしより、ペック女史を最高登山者と見做すに至りたるが、此報を得たるウォークマン博士夫人は、躍起となり、謂ふところのヒユアスカラン山の標高を、確かむるため、一萬三千弗の巨費を投じ、デル、アルチナ教授 (Prof. Del Altina) を主任としたる探險隊を組織し、實地測量に從はしめたる結果、同山の標高は六千七百六十三米突に減じたりとして復命され、依然ウォークマン博士夫人を、最高座に置くに至れり。

かくと聞きたるペック女史は、再び南米中の最高岳に登攀する意氣込を以て、本年六月初め、出立したるが、目的はアンデス山にありと、ペック女史が、紐育トリビユーン記者に語りたるところに依れば「妾自身の山」なりとして信ずるヒユアスカラン山は、西方大陸中なる最高山なるが、その標高に就き、疑惑を挾むもの出で來りたれば、妾は更に改めて、論議を絕すべき眞の最高峰を發見、且つ登攀せんと欲す、妾を巾幗の登山者といふなかれ、妾は一三角測量師なるのみと。(紐育トリビユーン)

## 全世界最高の停車場

ペルーの中部鐵道チクリヲ (Ticlio) 停車場の標高は、海拔一萬五千六百六十五呎なるが、此鐵道の本線は、カルラヲ (Callao) に急斜をなして下り行き、その右方をモロコッチヤ (Morococha) 支線

が、山を超え旋回して通行することゝなれり、モロコッチャ停車場の所在地は、實に海抜一萬五千八百六十五呎にして、現今全世界に存在する、停車場中最高のものなりといふ。（紐育タイムス）

## 山物語り

### 赤城山　小沼姫

今夏、赤城山湖畔大洞に一夏を送る。霧卷く日の徒然に爐火に取燬つ、宿の老人に聽きにし、此山に傳はる小沼姫の物語り、面白ければ、聽きたるまゝを記さん。

昔し赤城山々麓。赤堀なる地に道玄と稱れし村大盡の住へり。其が一人のまな娘に姿美しき、數へて十六歳になるがありき。何れは一人惱みの戀故か。或日突然家を逃れ出で淋しき山路を踏み越えて、赤城山頂の一湖小沼の畔に辿り來て、明鏡の如く四圍の樹影を寫せる湖心に、時ならぬ蒼波を躍して身を深く沈めたり。時へて赤堀の人々は娘の失踪に心付き、不安の胸を抱きつゝ、後を追ひて湖畔に辿り着けば、早手後れの、せめては娘の死骸なりとも求めんものと、湖水の落ち口を拓きて水を落せしに、怪しや娘は一頭の大蛇に身を化へて、湖上に浮び出でぬ。此有樣に人々は恐怖と驚嘆に襲はれて、取るものも取りあへず山を逃げ下りぬ。其後赤堀の人々は、赤城山靈に參拜せんと思ひ立ち、一同打ちつれて、登山を企てたるに、皆山、未中途にして或は病を得、或は疲勞に打ち倒れて、遂に目的を達し得ざりき。かくて赤堀の人々は、赤城登山は不可能の事となれり。時たま攀ぢ來るも、決して赤堀住人なる事を人々に語らざりき。強ひて問はるれば、赤城下の者と告げにき。今尙赤城神社祭禮の日、赤堀の人は赤飯を折り詰めとなし、小沼の湖心に其を投げ込みて、馳せ下るを常となせりと。不思議なる事には時たま。湖畔より八つ花形の神鏡を、拾ふ者の有る事なり。尙月明の夜は、必ず湖上に小沼姫は、淸姿を表して、月を見入るを常とすれども、若し少したりとも、男子の聲聽ゆる時は、急ち湖心深く身を潛め去るとか。

## 庚申山物語り

同夏、庚申山に辿り來て、社務所に泊る折り柄、徒然のあまり、庚申山記錄なる書を借りて讀む、物語りの記されたるが有りければ、序ながらに語らん。

元祿の昔、山麓古足尾村に齋藤某とて岩茸を探し採りて里に出すを業となす者住ひき、折々此山に登り來て、稼げる折、或日腰に纏ひし命の綱は、フツト斷ち切れ、哀れ千仞の谷底に陷ち入りぬ。幸い命に異狀はなかりしも。四方屏風を立てし如き岩間にて攀る事も得ならず。最早死を心定めたる折柄。山猿の來て覗き見るあり。斯る場合なれば頼み難き事にはあれど、其山猿に向ひ。吾を援け得させよ。若し助けたらんには、望の品を得さす可きにとかこちぬ。山猿は忽ち行方知れず成りしと思ひしに。暫して大猿數千、藤蔓の如き物を持來り、其を繋ぎ繋ぎて下しける。かくて其に縋り依り、援からぬ命を拾ひて我家に歸りぬ。然るに翌日白猿は數多の猿を供ひ來り。其家に到り、娘の袖を獲へて連れ行かんと爲すに、主は怒り、追ひ掃はんとすれども、多勢に敵し難く、遂に娘は猿共に誘はれ去りぬ。其後主は可愛しき娘に遇はんものと、庚申山に登り來り、姿を求めたれども、なかなかに探し得ず、遂に千丈ヶ岩戸迄で辿り來りしに、惣身毛を生じて面體のみ娘と知れるに出合い、誘ひ歸らんとすれども、早娘は此山の神となりしに、何にとて麓に歸らんやと、再び姿をかくしにきと。

尚何日の頃にや、山麓の人。庚申山見晴山に網を張り、渡鳥を捕へんと、小屋掛て山籠して居たる折柄。夜な夜な山奥に、光明輝くに依り、尋來りて心當りの所を登らんと爲す折、白髪の老翁出で、爰は庚申山の淨土にて、凡夫の來る處に非ず、早く下山して、重て來る事勿れと示し給ふと、村老申傳へたり、依て人々こぞりて、庚申山三光の岩屋と崇、祭通を求めて拜禮したりとかや。(山內淳一)

# 机上談山

○山の高さと云ふものは、元來どの位の程度まで、信用するに足るものかと云ふ事は、其測量方法、用具等の外に、測量した人の技倆や、當日の大氣の有樣などをよく調べずには、輕々に斷じがたいものであらうが、素人――自分が素人と云ふものは、充分信用をおくに足りるだけ測量に熟達して居る人を除いた以外の人を指すので、實際に測量をした經驗のある人であつても、誤謬だらけの結果を得て居る人や、測量の理論的方法だけを知て居ても、實際に事に當つた經驗のない樣な連中、などは測量と云ふ事に何等の智識もない人と同樣に、一束にして取扱ふのであつて、假令測量を業とせずとも黑人でありうるのである――がやつたのは、全然信用をおくべからずであると云ふ外はない、測量と云ふ樣な技術は、理論ばかりで行くものではない、と云て器械の使ひ方を知て居るだけの徒にも、決してうまく行くものではないのである、うまく行かない仕事の結果は、信用出來ないのは、當然な事だ、それで素人がよく信用したがるのは、空盒晴雨計を用ふるものであるが、器械と云ふものは、總て狂を生ずる事のあるもので、それは銳敏な精密なもの程狂い易いのが多い樣である、且晴雨計と云ふものは、決して天候の變化を豫現するものではないが、氣壓の變化に應じて指針を變ずるもので、その一箇所の氣壓は常に變化するもので、それに對する補正法は無いではないが、決して當を得て居るものではないのである、それ故たとへ檢定付のものでも、それを以て百米突以下の細かい部分を判定するには何の役にも立たぬと云ふ外にあるまいと思ふ。

○前號に寒暖計を用ゐて標高を測定する方法を提出されてあるが、この方法は要するにその處の氣壓を測定してそれによりて算出するものなのであるから、氣壓變化に對する補正があやしい以上、隨分信用するに足らないものと云はねばならぬ、且その用ひた水の不純の度合と、寒暖計の精密さを大に考へねばならぬ、相應に良い寒暖計について自分が調べて見た事があるが、一度の十分の三

位までの狂ひは大して珍らしくない様である、鵜殿氏の説によれば二百米突毎に一度の差がある割合ひであると云うから六十米突は當にならないわけにならうと思ふ、且檢定と云ふ事が甚あやしいもので、分銅等は百兎の分銅に一兎位の狂があるものさへ、檢定に合格して居る事から考へると、檢定を經たと云ふ事に毫も信用をおくに足らないし、檢定は正しいとしてもその後に狂を生じない限りでないから、尚更信じるに足りないと云はねばならぬ、精しく云へば尚澤山誤りを引おこすべき原因は澤山あるが、要するにこの方法も決して百米突以下を判定するには足りないと云はねばなるまい。

○その他の測量法は、素人の出來る事ではなく、素人以外の人がやつても、込入た山では決してうまく行くべきものではないので、米突より以下の程度の如きは庭の築山でさへも、測る事は不可能だと云て決して差支へはないと思ふ。

○山脈がどの山から、どつちへ行つて居ると云ふ様な事を扱うのに際して、一つの山の範圍はどこまでを指すのかは、大に考うべき問題だと思ふ、ある山の絶頂から出て居る脈でなくては、その山の支配でないと云ふ様な度量の狹い事は、自分に採用したくないと思ふ、大きな山にあつてはこれは決して輕々に親過し得ない問題であると云はねばならぬ。

○前號の例にならつて、茲まで書いたがもう書く材料はあつても、筆がつかれたから、次の時に讓つて、山の大さと、高さとの事を不得要領に書て、これでとめる事とする。(洋怪生)

## 本號挿圖「白馬岳の展望」に就て

本號卷頭に挿入せる「白馬岳の展望」なる一印畫は、本年七月廿六日午前八時頃撮影せるものにして、當時の天候は、快晴にして、一點の雲さへなく、空氣の透明にして、清烈なる事、比するに難く、遙に白馬山頂に立つて展望すれば、殆んど、北日本アルプスの全容を望むを得べく、其壯大な

る事筆紙の盡し得る所に非ず、本印畫は、余が撮影せる幀畫觀的寫眞の一部にして、西北より北及び東北面の印畫は再び、口繪として挿入する事あるべし、本印畫は、全く說明的のものにして、鮮細銳利なる畫像なるを要すれど印刷上、多少其細微の點を失ひたるは止むを得ざるなり圖中活字の說明は印刷の際誤つて右方につめたるため眞の位置を狂ひたり余の最も遺憾とする所なり、本印畫に顯れたる山岳を觀る時は、殆んど北日本アルプスの大部分を包含せるを知るべし、只、鹿島槍ヶ嶽、の鑓ヶ嶽の影となれるは遺憾なり。本印畫は、眞の山頂に立ちたるに非ずして數丁下方なる小屋前より撮影せるものなり、眞の絶頂より、撮影せるものを見るに、本圖に現れざる、鹿島槍ヶ嶽、及び遠く常念嶽、大天井嶽等現れるを知る、肉眼にては、遠く富士も望むべく、天候さへ都合よくば、遙に南アルプスも望み得べき筈なり。

圖の右方朝日嶽の斜面に沿て白帶をなせるは、黑部川にして、其右方の平原は、黑部川のなせる三角洲なりとす、平原の終る所即ち日本海にして、

◎雜　錄　本號挿圖「白馬岳の展望」に就て

肉眼にては、村々の木立も望むべく、日本海を帆走する漁舟も望むべし、朝日嶽と、瀧倉嶽との間遙に富山平原を望むべく、富山市の邊神通川の屈曲せるを見るべく、新になれる富山の兵營を望むべし、瀧倉嶽と赤兀白兀山との間の鞍部は雪溪の有樣を遙に展望するに、乘越し得べきか、然れども十分の考察を要す、白兀山より一躍して劍嶽となる、劍嶽は白馬方面より望む時は、最も聳立せりと雖も、尙ほ南方に至るに從ひ峻險なる形狀を失ふの觀あり、劍嶽の後方、越中平原に派出せる山脈は、立山の大日嶽及び早乙女嶽なりとす、立山の下方黑部溪谷中に、一大山塊あり、此れ即ち黑部別山にして、立山との間に、內藏之助平なる地あり。立山と鑓ヶ嶽との間遙に數座の峻峯を見る、曰く黑部五郎嶽、赤牛嶽、黑嶽、鷲羽嶽、野口五郎嶽、針ノ木嶽、槍ヶ嶽、及び穗高嶽の一角を望むべし。

本印畫は印刷せる爲め多少調子に差異を生じて、十分滿足する能ずと雖も、白馬嶽山上の偉觀は其萬分一を表示し得れば、幸甚極れりと云ふべし。（たかの）

◎雜錄　日本北アルプス一部臆測圖正誤。旅日記より　一八〇

# 日本北アルプス一部臆測圖正誤

其後會員諸氏の踏査により、該圖の誤謬脱漏等の判明せるものを左に記す。

一、籠川の支流大澤を鳴澤の下流に出る如く記せるは誤まりにて、赤澤の猶上流にて本流に合するものなること。

一、黒部川の一支流佐良峠より出づるものは中ノ谷を正しとす、温谷を正名として記せるは誤まりなり、而して温谷は其南なる越中澤と異名同物なること。

以上は三枝威之介、加賀正太郎兩氏の本夏登山中の實査によりて判明せるものなり。

一、鹿島川畔の一村大ノ窪とあるは犬ノ窪の誤まりなること。

一、鹿島川の支流にて祖父ヶ嶽の一角、一七六七米の三角點の南方より出る澤は矢澤(當字)の名を有すること。

一、籠川の支流黒澤は上流二岐して一九五一米なる三角點を包む如き位置にあり、其の蓮華嶽頂上に近き方を「北タキ」遠き方を「南タキ」と稱すること。

一、中ノ谷(圖に誤まりて温谷を正名として記せるもの)は其の下流圖よりも更に平に近く「元ザクボ」の南に出づるものなること。

右は辻村伊助氏の實査により判明せるものなり。

夫れ々々諸氏の敎を賜ひたる好意は、小生の深く感謝する所なり、而かも斯くして不完全なる該圖が幾分宛正確に近づくは獨り小生の喜びのみに非ざるべきを信ず。

此の外、猶、黒部川の源流附近には幾多の誤脱や疑問あり、逐て判明次第訂正する所あらむ。(中村)

# 旅日記より

辻村伊助

我はたゞ荒山を戀ふ兒等はみな、ありのすさびに人ばかり戀ふ。

なにしかも少さき心の國にゐて山河知らず人の

さゝめく
　泣として胸を抑へて山越しの雲のゆくへにあこがるゝ朝
　大赤城雲あらゝかに入日しぬ二百の駒に月を殘して
　見かへれば穗すゝき幾里高丘の上ゆく雲に秋の日淚き
　山の朝瑠璃澄む空をいくむれの小鳥にまじり來しや秋風
　旅人のむねよさながら風吹けば靑き草木の搖うちて泣く
　秋の雨窓の戸くれば霧白ろし君が微吟の山の湯の宿
　我に似る旅人（タビト）かあはれ木枯はいも寢ず宿の窓叩きゆく
　いと暗き小さき心を荒山の雪解の澤にみそぎしにゆく
　みそらゆくこは我が影か秋の野に柴雨含みうなたれし雲
　ぬかふせて何のさとしと物思ふ暗き心に瀑みぞれする
　あな尊もろ聲あげて山うたふわが身すらだに人ごゝろなく
　初秋の山の小雨にぬれて來し夜の客人に椎の實まゐる
　君はなれよらむすべなき胸のごと赤城平に雲たち迷ふ
　誰が秋の恨みつたへてゆく鐘ぞ雨の花野にわがこゝろひく
　明けゆけど赤城よいづこ北都賀は草の香高し雨さわに降る
　雨二日歌にあきては山の湯に柴栗ゆでゝ白湯汲むゆふべ
　六月の氷の上を朝わたる月にさめゆく寥しき心

◎雜錄　山岳圖書批評

## ◎山岳圖書批評

### 早田博士の英文『富士植物帶論』を讀む

東京帝國大學理科大學教授理學博士早田文藏氏は、曾て臺灣新高山の植物を考査せられ今又遠く踏査せられた富士山植物帶に就

いて、研究の結果を發表せられたことは、吾人同好者の深く謝する所である。富士植物帶論は、緒言、地文、氣候、植物概觀、植物帶の輪層、富士山フロラの概觀、現在植物に於ける火の影響、富士山に優秀の無き理由、要領等に分れ、索引を添えてある、圖版は博士自筆の三色版水彩畫、着色植物分布圖を始めとして、卷中に數十圖が挿入されてゐるが三好理學博士の植物景觀でおなじみの寫眞や、富士山下で賣げる繪ハガキからの複製も交つてゐて、著者自撮のものに少しく見るべきものがあるばかりに、思はれたのは遺憾である。

このやうな貴實で且つ有益な論文が、何故自在な邦語で書かれなくて、あまり巧妙とは申し難き英文で綴られたかは、私の解されぬところではあるが、英語は汎く世界に行はれてゐるから、智識普及の便宜にはなるし又世界の學者の多くに誤まれる機會が多いからかも知れぬ、併しもし本邦人はかういふ書物を多く讀まないからといふ遠慮が萬一にも加はつて、讀者を海外に求めるの餘儀なきに至つたものとすれば、私は我が讀書社會の浮薄なる傾向を哀しまねばならぬ、緒言を見ると、明治四十年となつてゐる、それが足掛け五年後の今年となつて漸く出版されたのでも、そんな消息が伺はれぬであらうか。

地文の部で、著者は先づ富士山の位置、境界、生成等に就いて、簡約に述べてあるが、此章は私には、多くの疑點なしに通過することが出來なかつた、著者は富士山を以て、洪積層時代に生成されたものと思考せらるゝ由であるが、私はもう少し古い時代、即ち沖積洪積層より前、地質學者の所謂第三紀層の終り頃に、富士山を始め、所謂富士帶の火山が、噴起したといふ方の說に與みするものである、其理由は今こゝに述べることを略すが、博士が根據とせられたらしい平林理學士の「富士愛鷹火山地質調査報文」第七二頁を見ても、富士山は必ずしも、洪積世に至つて始めて形成されないのである。博士は富士山下の愛鷹山を、アタカと訓されてゐるが（誤植で無いことは、博士のスケッチ圖にも、アタカと彫られてある）愛鷹は昔から薄高、又は足高と書かれ、謠曲羽衣にも、なほ古くは曾我物語などにも、見えてゐる山名であるのに、どうしてこんな下らない間違ひをされたものであらう、これに就けても、一切の基本智識なる文學を、今の科學者諸君が、多く尊重せられないことを哀しむものである、伊豆七島に附註して「伊豆國に近き七島」とあるが、これも「日本國に近き北海道」といふ句法と同じく、文字と意義が錯誤してゐる「伊豆の本土に近き七島」とでも言ふべきであらう。

誤だしき誤認は、富士の地形を叙して、山麓に愛鷹（博士の所謂アタカ）南に天城北に金峰、北西に八ヶ嶽、駒ヶ嶽、西に赤石山を擧げ

凡べて是等の山嶽は既に死火山となれるもの（to have been alive extinct）と思はれど、富士山のみは猶ほ活動せり。

と言はれてゐることである、凡そ活動（Active）死（Extinct）などいふのは、火山の動靜を述べる言葉としては豫じめその對照の本質を限られてゐることは、言を俟たないのであるが、前記の諸山中の火山は、天城、愛鷹、八ヶ嶽だけで、金峰及び駒ヶ嶽は、迸發火成岩なる花崗岩、赤石山は純然たる水成岩なる粘板岩、又は

砂岩の累層より成つて居る、決して火山ではない、隨つて死火山の中に、概括するを許されない性質のものである、「富士が猶ほ赤裸であつたとき、是等近隣の諸高山は、植物豐富に冠らされてゐたらう」といふ想像は何を根據とせられたか不明であるが、もし富士山が、他の諸火山よりも、最近に形成された故にといふ理由からならば、それは速斷であると言ひたい、次手に青木が原に「アカギガハラ」と濁らしたのも、私には飲み込めない。

博士が此山に就いて與へられた諸表の中に、筑波山百米突毎の空氣溫度表を擧げ（富士の氣溫表が備はらないため）それを土臺として、富士山を併論されてゐるが、兩方とも太平洋岸に孤立してゐる山にせよ、平原中に特立してゐる筑波山と、その筑波山より遙かに高い千五百餘米突の愛鷹山を以て、南面を塞ぎ、他の三方も山を繞らして、高原中に卓立してゐる富士山の氣候とは、富士山臺地の考究に、融通の出來得べきものであらうか、私は幾分の割引なしには、受け取れないのである。

博士は本書第二〇頁に於て「富士山が死期（Extinct Stage）に入るまでは、此山は全然植物には、赤裸々であつたと言はなければならぬ」と言はれたのは、前の現在の富士が猶活動（Still active）と言はれたのと、聊か矛盾する嫌ひはあるが、それはどうでも可いとして、富士山が今のやうに歿死になるまでは、果して植物が皆無であつたらうか、萬葉集時代に於て、富士山は、山邊赤人の歌にも知られてゐる通り、熾烈に噴煙してゐたのであるが、歌人の富士を詠ずるものに「富士のしば山」なる句は、往々見られてゐる（例「天の原、富士のしば山」萬葉集、高橋蟲麿、「富士のみ雪の消える日も、燃ゆる氷室の山の下しば」續古今、順德院）「しば」とは樹林のことで、今でも信州邊の獵師は「あの山は柴があつて行かれぬ」など言ふてゐる、富士山が今のやうに、死期に入らない前と雖も、中腹以下、樹木が相應に繁茂してゐたことは、想像に難くは無いと思ふ、現に熾に噴烟中の淺間山にすら、湯の平、附近には、高山植物もあり、山の或部分には、森林もあるではないか、富士山ひとり活動期に於て、全然赤裸々（Entirely bare）と言へやうか。

日本中部諸高山に、通有な偃松が、此山に缺てゐる理由として、博士の述られたところに依ると、空氣の中層で、恒久風（コンスタントウインド）は、南西から來る、富士山に於ても二千五百米突の高度では、南西風が吹く、もし富士山が、死火山期に入つて、高山植物の種子を受くるとすれば、やはり南西方面からであるのに、富士山の南には、高山が無い、これが此山に高山植物に貧しく、又南西には偃松を支持する程の高山が無いから、富士にも偃松が皆無な次第だと說かれてゐる（第二一頁及び一〇九頁）併し高山植物に豐富なること、日本第二の稱ある八ヶ嶽（第一は白馬嶽）は如何、南方の山は富士山のみで、この富士山に偃松が無いのに、八ヶ嶽は、如何にして偃松が多いだらうか、それは南に無くとも、南西には甲斐駒ヶ嶽、又は白峰山脈があるからだと言へるが如く、富士山の南西にも、赤石山脈の聖嶽以下、二千八九百米突の高山があつて、偃松も相應にある、もし富士山が絕對に南西の高山より、高山植物種子の供給を受けぬものとすれば、今日富士山頂に生ずる、オンタデ。イハツメクサ。シラガゴケ。ハナゴケのやうな高山植物

◎雜　錄　山岳圖書批評

の生産は、奇蹟である、もし風の吹き廻し具合で、稀には高山植物の種子を受得ることがあるとすれば、それは特に僥倖だけを除外する理由とはならないことになる、私は大體に於て、博士の意見に頷づくものであるが、これだけの理由では、未だ訊いて盡くせぬものがありはしまひかと躊躇せられる。

博士の列擧せられた植物目錄に就いても私には、高教を仰ぎたいところがあるが長くなるから今は暫らく言はない、第一〇一頁の圖版に、富士北面の草帶（Grass Region）として、說明されてゐるのは恐らく博士の所謂高草帶（High grass Region）の書損であらうと思はれる、何となれば博士に依れば弱野帶（プレイリイレジョン）を草帶（Grass Region）の意義で用ゐられる（第三八頁）にも拘はらず、件の寫眞は、山麓どころか、山腹を拔いてゐるからである。

本稿を擱いて、偶ま第二九頁に、愛藏を正しくアシタカと訓せるを見る、さればこの山に關する小生の前言は、撤回するに吝かならないのである。（烏水生）（丸善株式會社發行）

## 高山植物圖譜

歐洲に於ける高山植物に關する著述は實に枚擧に遑あらず、科學的なるあり、通俗的なるあり、美術的なるあり、發賣者の衣嚢底に藏められたる乾腊標品の識別に便せんとせるあり、栽培法を說けるあり、中には半錢の値をも有せざる繪草紙的なるありて、各自其の特長を發揮せるが如し。

今左に紹介せんとするは、最近の企圖に係るもの一にして、題して Icones Florae Alpinae Plantarum と云ひ Loon Marret 氏の監修するところ、佛國巴里にて（3, Rue Michelet, Paris 6e,）一年五回發行せられ、一ヶ年分の豫約金四十「フラン」（約我が十六圓）とす。本書は先づ歐洲に產する高山植物より始め、漸次他洲の者に及すべき計畫にて、各號は二十葉の圖版と說明書とよりなる。圖版は四六二倍版大にして、一葉に一種の植物を收む、圖は何れも乾腊せる標本を寫眞したるものにして、實物大の全形に、添ふるに麼大せる花、葉、果實の解剖圖を以てし、冗長なる記載なくして、一目瞭然たらしめんとす。說明書（英文）には植物の學名、產地、分布を擧げ、附するに地圖を以てし、且つ圖版の解說を揭げたり、其の用意の周到なると、圖版の鮮明なるとは類似刊行書中の第一位に置くを得べく、美術的と學術的とを兼ねたるものにして、完結の曉には、頗る有用なる著書の一たるべし。

強いて本書の瑕瑾を擧ぐれば、各圖標本の陰影を伴ふこと多きに失するを、說明の英文の餘りに奇拔を極むるとにあり、寧ろ之に代ふるに流麗なる佛文を以てせば、讀者をして添削の勞を省かしむること大ならんも、そは發行者の權利に屬することなれば、敢て云々することをなさゞるべし。（笹魚生）

# 水彩寫生旅行

（故大下藤次郎氏著　嵩山房發行　定價貳圓五拾錢）

風景畫家は、多く旅行するものである、併しその風景畫家の中でも、大下藤次郎氏ぐらゐ、多く旅行する人も少ないであらう、さうして同氏の旅行は、都會よりも、多く山岳地に向はれてゐる、幾枚の水彩畫と一編の紀行は、必ず齎らされて歸る、畫の方は本職であるから、當然だと言へば言はれる、文章の方に至つては、所謂文士と雖も、この勵精はあるまいと思はれるほどに、筆まめで、そして忠實であるのに敬服される。その紀行文なり、日記なりは、取材が山岳地に多いだけ、我々畫に素人な山岳會員が、讀んでも、實におもしろい、況してその忠實にして、苟くもしない寫生畫、それは自然に柔順なる服從者として、謙虛の心を以て、受け入られ、作製された藝術品である、私は繪に素人ではあるが、氏の作畫を見ると、ウマイと思ふ念よりも、正直であるといふ念の方が、先に立つ、氏は巧にコスリ、うまく拵へ上げる人では無い、否さういふことを屑しとせぬ人である、「水彩寫生旅行」は、人間が自然から色彩を借用した證券（ドキユウメント）である、今まで世に知られない山水の、立派な畫卷物である。

試に取材を拾ふと、十和田湖、日光裏見、尾瀨沼、磐梯山、白峰山麓、富士山下、榛名湖、木曾駒ヶ嶽、山中の湖、甲山信水、猪苗代湖、赤城山、穗高山、上高地、秩父等が重なるもので、插畫はプレートとして原色版二十九枚、寫眞版十一枚、木版二枚といふ大冊で、この外、文中に木版や寫眞版が嵌め込んである。就中私の好む繪は、十和田湖畔の秋葉、會津の燧岳（これは文部省展覽會に出たもの）甲州鰍澤、同春米、落葉松の秋、甲州初鹿野、榛名、木曾駒ヶ岳、ミツ川の谿、甲州の春（文部省展覽會出品）冬の山、穗高山の殘雪（文部省展覽會出品）等で、木曾駒の殘雪の精緻なる、冬の山の草色と碧空の對映の鮮やかなる、又谿谷の水には河原の石の岩脈（ダイク）の寫生の綿密なる、古い言葉であるが、坐がら山水の中に臥遊してゐるやうな、感じがせられる。

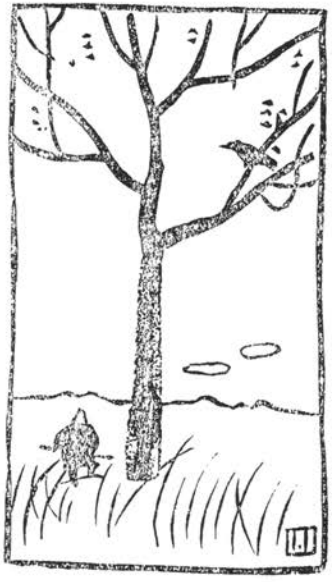
この畫だけを見てゐると、寫生旅行といふものは、美くしい錦繡の中に包まれてゐて、出來るやうに思はれるが、さて本文を讀んで見ると、旅舍の不潔、食物の粗惡、客扱ひの不親切、交通の不便の中を、辛抱する力といふものは、ちつとや、そつとのことでは無いらしい、畫家もかうなると、一種の從軍記者である、實に生やさしいことでは無い、文中旅舍に對する皮肉が、どうかすると、私にはお弟子を叱るときの、口調もかうでは無いかと微笑せられる、著者自らは『紀行は平凡だ、文字の數を多く知らないから、アテ字もあらう、情景を寫し出すためには、私の文章はあまりに拙ない、勿論觀察も淺薄だが、併し嘘は書いてない』と言はれてゐる『嘘は書いてない』の一句は、著者の藝術的性格を、躍如ならしめるものである、そしてそれは、如何なる時代の大藝術にも、備はつてゐるものである（勿論眞といふことが凡べてゞは無いが）左の一節の如きは、文字にも、畫致の泌み込んだものである。

手拭さげて門前の流れに顏洗ひに出た、東から西へと、雲の走

◎雜　錄　山岳圖書批評

ると急に、わづかに淡くコバルトの空が見えるかと思ふと、忽ち白くなり、鼠色に變はつてしまう、いま家鴨の上つて來た、小さな池には、いくつかの輪が畫かれて、襟元から吹入る風は寒い、と見るまに、雲が切れて、薄日がさす、蒼空も濃くなる、握り飯を賴んで、水筒に水を入れてゐると、いつの間にか、庭の捨石は濡れてゐる、斑犬は土間へ入つて來て、身慄ひしてゐる。秋の空のあわたゞしさが美くしく描かれてゐる、「白峰の麓」「さつきの旅」は、文章としてもおもしろい、赤城山のはふざけ過ぎたやうだ、本人たちは面白さうでも、讀む方では少し迷惑な氣味がある、藝術的感興が稀薄だと、かういふ結果になつて來る。（烏水生）





# 雜報

## 淺間山噴火大慘事

○第一報　淺間山は十五日朝五時噴火し折しも一月遲れの盂蘭盆のことゝて登山者頗る多かりしが輕井澤口より登山したる西洋人二十名の內五六名は行衛不明となり輕井澤警察署長等は捜索の爲め出張せり。○第二報　淺間山の噴火にて右足を折り逃げ歸りたる小山藤五郎の談に依れば前日自分が案內して登山したる越後の某青年が噴火口に飛込みたるを捜索せんと小諸警察署巡査富田藤次郎氏を案內者として登山し山頂に至りて望遠鏡にて噴火口中を覗き見たるに噴火口に挾まれ居る前記青年の死體が明かに見えたるより交る〳〵覗き込み居たる折柄突然噴火し前報の西洋人の外富田巡査、白田町青年十四名行衛不明となりしかば大騒ぎとなりて目下其行衛を捜索中なるが尙ほ其他に逃げ歸りたるものは三名なり。○第三報　十五日午前四時半頃淺間山突然噴火し折柄噴火口の附近に居合せたる二十餘名の登山者行衛不明となりたる大椿事ありたり十四日は同地方盆前の事とて同山への登山者非常に多かりしが同日午後二時頃噴火口に投身したる者ありしと小諸分署へ訴へ出でたる者ありしより同署にては取敢へず巡査富田要助を現場に派出することゝなり富田巡査は該青年を案內したりと稱する小山金五郎を伴ひて登山し十五日午前四時頃山頂に登し望遠鏡を以て噴火口を俯瞰し居たるに同四時半と思しき頃忽然たる一大音響と共に噴火口より噴出する石灰は雨霰の如く落下し來り濛々たる黑烟は山頂を包みて四顧暗憺として物凄き光景を呈し折柄山頂に居合せたる北佐久郡川邊村青年團二十四名外に輕井澤口より登山せる外人七八名は行衛不明となり富田巡査及び小山金五郎の兩人も均しく其の場に打倒れたるも小山金五郎のみは幸に右足を挫折せしのみなりしかば勇を鼓して下山の途に就き二合目邊まで逃げ延び同所の觀測所建築に從事し居たる大工職荻原新助に出合ひたるより息も絶え絶えに有りし次第を物語りたるまゝ其場に昏倒したるより荻原新助は

◎雜　報　淺間山噴火大慘事

素破こそ一大事と急き其旨を小諸分署へ訴へ出でしより同署の狼狽一方ならず署長は取敢へず總員を指揮して現場に急行し同村役場よりは人夫數十名繰出し共に行衛不明者の捜索に從事せしむるなど同地は目下非常の混雜を極め居れり。○第四報　輕井澤より登山したる外人七八名が行衛不明となりたる事に就き輕井澤警察署にては語りて曰く本署員は目下同山に出張調査中なるが行衛不明の外人等の氏名は未だ知るを得ざれど其内に輕井澤に避暑中なりし英人宣教師ヒュルと云へる人が登山したるは事實なりと云へり尤も右のヒュル氏が今回の遭難者中に在るや否やは尚ほ不明にて其住居地の何れなるやも亦不詳なりと。（八月十六日時事）

○死傷者　輕井澤方面より登山せる西洋人は男女合計十五名にして内佛國宣教師シール氏は足に負傷し他にも輕傷者二名あり又横川機關庫員十八名の登山者は内二名の重傷者と三名の輕傷者とを出し群馬縣人猿谷眞三郎（二十一）は即死を遂げ横濱商業學校生徒四名は十四日夜登山十五日朝頂上に達したる筈なれども未だ下山せず又何等の情報なきを以て其安否を氣遣ひ長野縣廳より學務課佐藤縣視學等急行せり南佐久郡田口村なる有名の製絲家河村清四郎氏等十四名の團體の登山者中には七名の輕傷者を出したり。

○救護班　只今道案内として登山したる池田勇次郎なるもの負傷して下山し其談に依れば西洋人一名は遖に慘死したるを見たるも僅かに命拾ひしたる程の大事變の際とて其他の事は全く知らず只同日登山したるものは三四十名ありて内八名は外國人なりし事だけは知れり又小諸より登山したる巡査富田要次助氏も大負傷したり此慘事の報に接したる赤十字社長野支部は直ちに救護班を出し第一班は昨掛に向ひ第二班は小諸停車場登山口より登山中なり尚ほ小諸町岩村田町其他附近の二三警察署は巡査消防夫にて救護班を組織し午後二時山上に向へり。○淺間山又々噴火　十五日拂曉噴火して多くの人を死傷せしめて人心を動搖せしめ爲に其後山麓に於て其前後策に忙殺せしめ居れる淺間の大火山は十六日午後七時十五分ごいふに何等の音響も鳴動も無くして突然噴火し折柄の夕空に火焰を噴出し濛々たる黑煙は天をおほひ凄まじきこと云はん方なし譯てより恐怖を拂ける山麓の人々は一方ならず狼狽し居りたるが噴煙には勿論灰を混じたるなる可く其降下方向は前日と同じく小諸方面なるが如し（小諸十六日電話）。○噴火慘事の公報　淺間噴火當時の登山者數及び死傷者の氏名等は別項特派員の報ずる如くなるが尚ほ長野縣知事の公電を得たれば左に掲ぐ（十七日午前内務省着電）淺間山爆發被害に付ては引續き救護中の處十六日輕井澤分署長は濛霧を冒し噴火口を距る約五町の處まで進行取調べをなし其他小諸御代田等の方面をも調査の結果判明せし登山者は外國人十一名（行衛不明者なし）日本人約六十一名にして其死傷者は左の如し。▲外人死者米國宣教師ヘール氏（三重縣津市在住、三十五歳）▲同重傷者米人宣教師ヘットワイラー氏（左足打撲傷、三重縣宇治山田市在住、三十歳）▲同輕傷者米國宣教師、ホックチー氏（三十五歳）米人ロイド氏、（住所不明）ヒヤフマミ氏（年齢不明）米國婦人宣教師バックラー氏（横濱市根岸町ヨルクルニテー氏方在住）（横濱市根岸町在住米國宣教師ウルバウン（英領香港在住）▲内國人死者群馬縣碓氷町勝谷要三郎▲同重傷者男五名、小諸警察署在住、巡査富田眞太郎外四名

▲同輕傷者女一名。以上の通りにして登山者中米人醫師モフレフ氏は應急手當に盡力し避暑外人八名（内醫師三名）救護の爲め登山し一面に於ては縣より派遣せし警察官警察醫及び赤十字救護班等は夫れ〳〵協力して死者を始め負傷者を擔架其他の方法に依り各人の居宅若くは沓掛に於ける臨時救護所に收容救護する等充分救護行き屆きたる模樣なり尚其他の登山者ありて死傷者無きは保せざるも以て降雨中にも拘らず人夫を出し警察官引率の下に登山捜索中第二噴烟附近に於て廿四五歳位の女の死體を發見したり該死體は異して遺囘の者なるか否かは判明せず而して此の附近に男の死體らしきもの土砂に埋沒され居るも濃霧と暴風との爲め危險甚しきを以て目下尚ほ近寄ることを得ず。○淺間觀測所成る淺間山湯平に工事中の地動觀測所は長野測候所よりは西澤所長、震災豫防調査委員會よりは加藤技手等登山工事を督勵し又今村博士も廿四五兩日中に登山したる筈にて後くも廿六日迄には器械全部の据付を了すれば參觀希望の者は廿七日に登山すべく同日は詳細の説明をも公開すべしと因に云ふ昨今は同山頂は非常に危險の虞あれば此參觀の序に火口を見んなど無謀者は全然お斷りする旨西澤所長は物語れり。○淺間噴烟の程度　十五日の淺間山噴烟は時々觀らるべき通常事にして殊更に大爆發など云ふ大したものに非らず唯不幸にして登山者が偶然に此の噴出に遭遇し其上風位の關係もありたらんが狼狽の餘り尤も危險なる方面に避難したるより彼の慘劇を描出したるなり同山の狀況に通ぜぬものよりは大爆發の如くに誤解され居るも尚ほ佐久の人々は殆んど噴出を知らずに終りし程度なりしと右に就き目下登山中の西澤長野測候所長

◎雜　報

## 淺間山噴火大慘事

は詳細なる報告書を本縣へ送附し來りしが其内參考となるべき部分を摘記せば左の如し。十五日午前四時三十分淺岳噴火（中略）四十人以上同山頂上より東南に距る二三丁の所に集合し居りたるに更に鳴響も爆聲もなく突然噴出せしことて衆人は周章狼狽一齊に東に向つて逃出したりと仍て噴出物の爲めに負傷せし者よりは磊々たる熔岩につまづき倒れて負傷せしもの〻方多きが如し而して世間流布の風説の如く大なるものなく即死者の如きは一人も無之候（中略）微動計を取調べ候處器械には更らに不工合の處なく午前四時半同六時後の噴火何れも微動を過ぎ居りたるのみならず十四日午後八時四十分頃も微動あるを以て前々より徹候を昱したるものに有之候而して此回の如き小噴火は時々あるべきものにして噴火としては更らに驚く程のものには無之噴出は頂上二三丁周圍にて岩滓所謂浮石の豆大乃至源氏豆大位に留りたるもののみ火山灰の如き登山者の放置したる草鞋に些少降り居りたるに止まりたるのみ但遺置したる風呂敷夏帽子等の燒跡あるを見れば其狀態察せられて悲劇なりし（下略）○淺間山の派出所　信州輕井澤の避暑客の便を圖り七月一日より九月末日迄で臨時巡査派出所を沓掛及淺間山四合目なる湯の平に設くる由なるが湯の平は專ら淺間噴火口投身者の取締を爲す由。○淺間噴火孔測定　（理學博士大森房吉氏談）正確に孔深を測定す孔底に五個の同心輪、既記の如く長野縣の囑託により淺間山噴火孔を實測せる大森理學博士は往訪の社員に左の如く語られたり。○圓形の赤熱個所　淺間山噴火孔の深さに關しては嘗ても述ぶる所ありしが本月一日午前七時半西澤長野測候所長、牛山同所技手、加藤本會囑託員等

と共に淺間山頂に登り正確に孔深を測定するの機會を得たり、當時天氣快晴無風にして噴煙も少なかりしを以て孔内を判明に視察したるが、去る五月八日の強き爆發後の孔底に從前（本年始め頃）とは頗る趣を異にしたり、即ち孔底は全體に於て平なれども中央より少しく北方に偏して直徑約五十メートルもあらんと思はるゝ圓形の赤熱個所あり其れを中心として五個の同心輪あり、以て孔底の殆ど全面積を占むること宛も石を池上に投じて波紋を起せるが如き形狀を呈したり。○孔壁東西南北　而して孔壁内側が其北、西、南三方に於て内部に崩壞せること甚しく、北方壁の如きは著しく上部を減却したり、從つて噴孔内側が直立の絕壁をなすは北々西の一小局部に限り、其他の部分に於ては内側の下部は崩壞せる土石よりして三四十度の角を有する斜坂を成し擂鉢の如き形となれり、南東方の如きは孔壁の頂上より僅かに十二三間の間のみ絕壁にして其れより下部は斜面の土砂に覆はれたり、故に孔口の廣さを增すと同時に孔底の面積は著しく縮少せられたり。○孔底に噴烟なし　而して孔底の周圍よりは一個所たりとも噴煙せるを見ず、蓋し孔側の土石が夥しく内部に落下して前時噴煙しつゝありし孔庭の周圍を埋めたるを以て噴煙は一時其の流出を妨げられたるが爲めに去る五月八日の爆發は孔底の中央より發せるものなるべく、結局明治四十二年五月三十一日の强爆發後の狀況と相等しく、只だ孔底が面積を縮小せるを異なれりとす、今後數ヶ月を經て孔底の中央が幾分かの凸起を來たすと共に熔岩が固まるに及べば爰に再び孔底の周圍より噴烟爆發すべく、斯くて次第に噴孔内側を弱め、次て其の崩壞を來たして孔底の周邊を覆ふに至れば更に中央より爆發を發し順次に變化を繰り返すべきなり。○重錘と麻繩　噴孔の深さを測定せんが爲めに重錘と麻繩とを用意し行けり、重錘の重量は七百四十二匁にして真鍮圓筒に鉛を充てたるものなり、又た麻繩（使用せる分だけ）の重量は二百六十四匁にして重錘に比して頗る輕かりしを以て重錘落下の具合は判然と知られたるも尚ほ人をして噴口の對側より重錘の落下を注視せしめ、下底に達したるや否を合圖せしむることゝなせり。○孔深の測定　始め噴口の北々西部に於て重錘を垂下したるに九十八メートルの深さに於て直立絕壁の上端に達したるも其根本の斜面に支へられて停止したり尤も此の個所にては孔壁は殆ど全然絕壁をなし、單に下部に於て僅かに土石が斜坂をなすものなりとす、次に約二十間北に偏りて再び重錘を以て試みたるに百十メートル迄で達したるも絕壁の下部に於ける斜坂の中途に於て停止せり、故に噴孔北西部の深さは百十メートルよりは少しく大にして、下部斜坂の高さを加入し、約百二十メートルなるべし同時に西澤、牛山兩技手は孔壁南部より經緯儀を以て噴孔中央附近の深さを測定せられたるが概略百十一メートルなる結果を得られたり。而して去る五月十日に西澤技手が登山せる際に氏は噴口南側より牛山技手に石を投ぜしめて其孔底に達せる時間を計れるに五秒を要したりと云ふ、此觀測に依るも孔深は百二十五メートルとなる。○百二十メートル　昨年九月及び本年二月に登山せる際に比すれば孔壁上部が崩壞せること決して少々ならず從つて前時に比すれば縱令孔底の隆起なしとするも、孔口壁の幾分が落下して高さを減じたるの結果として、孔も減じたる

べければ昨年秋乃至本年冬に於ける噴孔南部（西北部及び東北部と大差なし）の深さは約百三四十メートルなりしならんと考へらる。現時（五月十日乃至六月一日）に於ける淺間噴孔の深さは百二十メートルとして大差なかるべし。○**淺間山降雪**　十八日午後三時半頃小諸地方は雷鳴共に驟雨あり、淺間山は同時に非常の降雪ありて一時白皚々の奇觀を呈したりしが霽れ上ると同時に消へ失せたり夕景氣溫著しく低く降霜の慮ありたり（十九日小諸發）○**小縣東部の降灰**　淺間山は十八日夜頻々小噴煙あり折々坑口に火光を認めしが十一時四十分頃小縣郡東部各村落には夥しき降灰あり桑葉の如き翌朝眞白に見ゆる程なりき。○**平凡化せんとする淺間**　淺間山は時々大爆發、大鳴動して縣内は勿論遠く縣外迄も砂を飛ばせる灰を降らせる物騒なこと夥しい今や避暑の期節は近づいて信州の天地は内外客の來往滯留多からんとする時鳴動や爆發や時を擇はず起られては溜つたものにあらず大山本縣知事は主務省に乞うて將に歐洲へ差遣はされやうとして居る帝國大學地震教室から大森博士の實地踏査を得た、博士は震災豫防調査會の加藤技手を同行し西澤長野測候所長小諸署の巡査一名を同行し一日登山二日午前大山知事を縣廳に訪うて顚末を報告した其の要領は次ぎの如くである。○**十八ケ月に四十五回**　淺間山の大噴火とか大鳴動とかは讀者諸君は屢な程見られたらう今大森博士の語る所に依れば四十二年の十二月から今月迄に四十五回の噴火と鳴動とがあつたのだ即ち僅々十八ケ月間に四十五回といふ淺山の噴火である内○**大噴火大鳴動**　四十二年の十二月七日、四十三年十二月二日四十四年五月八日、此の外四十二年五月三十一日といふのがある即ち大噴火大鳴動は偶然にも五月と十二月とにあるといつてこの二月は危險月と恐がるにも及ばない○**噴火の時限は一定**　して居るといつてもよい位即ち從來の經驗に徴するに噴火の時間は、午前七時、八時、九時、午後一時二時、三時七時、九時午前一時、二時、三時といふ樣に氣壓の高いときと低い時といづれも其の極の時に噴火してる故に○**登山者は此時間**　を注意して避ける樣にしたならば先づ以つて危險を免れるだらう換言すれば夜登山し拂曉頂上に達する樣にしたなら宜いことになる、けれども隨分時間を計つて登つた今度博士の一行が頂上に達した時一寸した噴火があつて流石の猛人をも喫驚させた程であるから登山者は餘程注意を要する。○**五月八日の噴火**　は近年の大噴火として傳へられたが之を四十二年五月廿一日のに比べると遙に小さいものだといふのは吹き上げた石に知られるので四十二年の時には五間位の岩がゴロ〳〵澤山あつたが今度のは其れ程でない○**博士一行の觀測法**　一日は近年稀に見る快晴で是迄疑問を以て充たされてた噴火孔を明瞭に觀測することが出來た大森博士は重錘繩法に依つて西澤長野測候所長はトランシット測量機によつて二氏相對して各方面から測量もし觀測もした其の結果孔の深さが明瞭した即ち○**深さ百廿米突**　間數に換算すると六十六間あることを確知し而して今日の狀況を以て按すれば假令噴火口の面積は以前に比して變じ且つ擴大したとは云ふものゝ彼の輕井澤方面に大被害を與へた天明年間の樣な急劇なる大噴火を起す兆候は○**斷じて之を認めず**　數十年後はイザ知らず今日の狀態を以てすれば上述の

◎雜　淺間山　噴火大　慘事

◎雜　報　淺間山噴火大慘事

如き大噴火の兆候は斷じて認めることが出來ない博士の云ふ所はかくの如くである避暑客も住民も博士を信ずる限り安堵して可ありである而して茲に○地震計の不備を唱へねばならぬ長野測候所の地震計には噴火に伴ふ地震は表はれるが噴火に伴はぬ地震は感應しない故に現在測候所のよりもモット大なる精密のを備付ければなるまい因に噴火に伴ふ地震は緩漫であるがさうでないのは頗る急劇に來ると以上大森博士の實査談の要領であるが其の詳細はいづれ印刷に付して要所々々に配布されるとのことである。○淺間山は平凡化して了つたが滝車で往來する人も避暑客も附近の人々も先以て安堵出來るといふものだ、かう保證した大森博士は本月中旬渡歐の途に就く筈で二時の滝車で歸京された（一記者）○巧妙なる器械今度淺間湯の平へ設置された淺間火山觀測所は間口五間、奥行が四間で二十坪の建物で頗る丈夫に、高穆つたもの、宿直室、事務室、觀測室、小使室、湯殿の設備があつて中々振つたものだ、晴れた日には事務室から前掛及び噴烟を見ることが出來る建築物の工費が約千二百圓夫れで這度据付けた大森式微動計は別として備品が百圓もかゝるさうだがそれは小諸町有志者で寄附するとの事、備觀測臺の構造を讀者に一寸紹介しやう、這度据付けられた微動計の下部は、大きな杭を打込んで其の上を七尺に八尺の廣さと四尺程の厚さにコンクリートでよく築き地動の感じる樣に造られて居る此の上へ器械が乘せられるのだ、据付けられた微動計には百五十倍に表はれるやうになつて居るから極々の微動でも知る事が出來る、機械は支柱、重錘（復式振子とも云ふ）自揮圓筒（俗に大鼓）時示機の四部から成立つて支柱は重錘を二本の細い鋼鐵の針金で釣り下部の方は尖形の凹面になつて居る處て支えて居る、重錘即ち復式振子は實に巧妙に出來た物で支柱や臺が搖れても此の重錘の中心は少しも動かぬから重錘の中心が基點になつて支柱への長さと示針即ち重錘より接續して其の先に微動を讀く針迄の長さが五倍あるとし今地動が假にあつたとすれば五の微動を讀く割合になる、所で這度のは復式になつて居るから百五十倍位に讀く事が出來る、人の歩く響き位でも感じるさうな、今後は淺間山もうつかり慣れまい、少しでも慣れば直ぐ知れる、それから自揮紙圓筒は大鼓なりになつて居てそれへ洋紙へ煤を塗付けた物を捲き付けてあるのでそれが漸々と廻轉する、それへ時示機があつて時間を記錄して行く、又前に述べた復式振子の尖端にある針が地動のあつた時は讀がく樣になつて居るから、何時何分には如何計りの地動があつたかと云ふ事が知れる、巧妙の器械だ、それから微動計を据付けた位置が淺間山の中心點へ觀測室から直線を引いて其の直線へ直角になつて居るから平行の震動を讀く事が出來るさうだ、二十七日から加藤助手が專心觀測するから近々淺間山に就ての研究も遂むであらう（碧）○噴火の前知法淺間山地動觀測所の完成と共に今後は登山者の危險を讓防する爲め噴火の讓報を山麓町村に爲し掲示及び目標を立つる筈にて目下警察部と山麓たる輕井澤、岩村田、小諸の各警察署との間に研究されつゝあるが其の掲示目標は登山口たる輕井澤、沓掛、追分、御代田、小諸の五ヶ所に設置し之が經費は所屬町村にて負擔せしむる方針にて警察側は各町村役場に經費支出を協議中なり。○淺間山は斷言出來ず一行の

**登山**　理科大學教授今村博士は特に淺間山研究として來信廿五日午前騎馬にて登山の途に上れり斯て博士一行は午後二時八合目の火山舘附近に着直に地動計據付工事の指揮をなしつゝあるが記者は博士を追ふて登山前を通じて淺間山に關する學術上の判斷を乞ひしに同行は前年來屢々登山せる齋藤震災調査會助手高橋職工長及び西澤長野測候所長岡村技手等にして此他博士の令息文雄氏として今年十二歳の頬紅花の如き可憐の少年が學校制服凛々しく加はり勇ましく見受けられたり大要左の如き結論を聞くを得たり。○**火口の東漸**　博士曰く教科書其の他にも記載しある如く淺間山は現に三代の大々的噴出を經たるものなり現今に於て知り得らるゝ最古のものは此地動計據付けの個處あたり即ち火山舘附近が火口たりしにて第二回のは前掛山第三回のが現在の火口なり斯く語り來らば登山したるものには考へ付かんが火口は漸次東方に移りつゝある也但し此移ると云ふことも其時間は非常の長き間を費したるにて此三代とも地質年代の事として歴史年代に入りてに非ず以て其如何に悠久の昔なるかを推知すべし。○**大森説と山崎説**　偖現在の淺間山が如何に成り行くかに就き學者間の二説あり大森博士は火山の噴火坑底、急に隆起するが如き事を認めずと云ひ隨つて天明年度大災害再演などは近き將來にあるまじと斷言し是に對して山崎理學士は絶對反對には非れど理論に所謂小反對とも云ふ可き程度の意見にて曰く火口底は比較的短時間に隆起しつゝある摸樣なり昨今の狀態によりて考ふれば比較的長からざる日月の間に天明度の如き事なしとも云はれず云々と云ふにあり是は大爆發に就ての兩意見の差なるが更に近時類回する小爆發に就きても兩氏の説に大差あり。○**誘導的の有無**　大森博士は小爆發の原因を(一)内部の爆發力即ち水蒸氣の醸成したる張力是を主要的原因と假りに名けん(二)誘導的原因即ち火口壁等の土砂が崩壞して外部より坑底を塞ぐ爲め一時平素の噴出を遮り若干時を經て小爆發をなす。此大森説に對し山崎學士、第一の根本的主要的原因は認むるも第二の誘導的原因は認めずと云ふにあり更に又理論の上でなく事實問題として　○**坑底の淺深**　も二氏互に其觀察を異にし山崎學士は六十メートルと測定し大森博士は百二十五メートルと測定せり斯くの如く論々、説々、二學者間其説を異にし余も目下研究中にて何れとも明言し難く且山崎氏の坑底の比較的早く隆起すと云ふに對し大森博士は隆起の時間も徐々である上、よし小隆起はありても時々是を爆去し去る故に心配なしと云へるなど其間の斷定は大研究の後ならざるべからず併し現今の如き小爆發は時々繰り返さるゝものとしても天明年度のやうなことはあるか、なきか、今の塲合余には斷言出來ず唯夫れ出來すと雖も五六十年位の近き將來に斯る大變なかるべき一點は寧ろ大森博士説を可なりと思ふ也、又深さに就きても自分は未だ實驗せざるも西澤所長其他實測者の言に徴し判斷するに百廿メートル位が本當ならん。○**氣壓と噴火**　屢々繰返されたる言なるが地震にすら氣壓が關係する如く噴火と氣壓とは密接の關係あり氣壓の低き時は決して登山せぬ方よからん。○**豫言の可能**　偖て余の言は總て斷言せぬを怪しむものあらんが斷言出來ぬ位故、今回の微動計を據付けたる也即ち大森式微動計を據付け其他百般の設備につきたれば是より眞研究に取りかゝるにて此微動計に表れ

◎雜　報　淺間山噴火大慘事

來る記錄と、噴火、地震等の關係を精査し研究を重ねなば淺間の將來を判斷することは勿論大中小の噴火を豫報し得るに至るやも知れず、諸君は其機を待たざる可からず、要するに今後の研究に待つの他今は爆發の有るか無きかなど自分は云ひ得ざるなり。○**博士は廿七日下山**　して廿八日下り二番にて長野に向はるゝ筈なり、但し北安へ行かるゝか否かは明言せられず因に云ふ博士の登山は微動計据付指揮の他、同所、命名の要件もあり博士は淺間山觀測所と命名されたり（小諸にて碧川生電話）○**平常の噴火耳**　此程の淺間噴火に際し登山したる西澤長野測候所長が下山しての報告には十四日の午後八時四十分頃同山に設置の微動計に微振動を生じたるより見れば既に前々より噴火の徵候ありたるものにて常にこの位の噴火はあれど幸に登山人なき爲め知られざりしものにて今回の負傷者の多くは遽てゝ逃げ下り脚下の石に躓きて受けたる負傷の多かりしなりと云へり。

**燒岳噴煙記**　○**穗高地方に降灰**　去月二十九日午前九時半頃南安穗高村には遠雷の如きかすかな轟きを聞き多分燒岳の鳴動ならんと噂し居りしが十一時近き頃に至りて空はドンヨリとして恰も花曇りの如くなり遠くの森又は林は模糊として約二時間餘の粉雪の降るか如く降灰ありたり。○**松代地方へ降灰**　▲燒ヶ岳の噴烟十日午後二時より松代地方に降灰あり屋上に積ること二分位未だ歇ず燒ヶ岳噴烟の結果なるべし（十日午後三時松代電話）○**麻績へも降灰**　八日午後八時半頃麻績附近の各村に渉りて降灰あり屋根及び木の葉等一面に眞白となりたり尙當日は西風ありしより察するに南安燒岳の噴火によるものならん。○**北安へも降灰**　別項記載燒ヶ岳噴煙の爲め北安曇一帶の地へ多量の降灰ありたり（十日午後大町電話）○**上伊那の降灰**　上伊那郡小野川島兩村及び伊那富、朝日兩村の一部には去る二十二日降灰あり無論燒岳より噴出せしものにて養蠶家は桑葉に附着せしを深く心配せしが幸ひ其桑葉を給して蠶兒に何等の影響なかりしと。○**燒嶽の大噴火**　燒岳は近來益々噴火して人心を騷がしめつゝあるが又々前電の如く十日午前十時二十分頃大噴火あり一團の黑煙凄まじき勢ひを以て天に冲したり此の時恰かも一天拭ふが如く晴れ渡りたる時とて安筑の平原より手に取るが如く望見し得たるが是れと同時に各方面に降灰ありたるものゝ如く尙ほ同日夕刻までに三回の噴煙ありたるが或は又々新火坑を生じたるにはあらざるかと傳へ居れり何れにしても近來の如く活動せるは同山活動以來珍らしき事なり（十日夕豐科發）○**池田方面の降灰**　既報の如く十日午後一時頃より四時頃迄池田以南會染七貴方面に降灰あり積りし灰は新聞紙一枚の上に三勺南七貴村字押野地方は五勺もありし爲め桑葉等は眞白となり居れり養蠶家は降灰の桑に害ありや否を心痛し居れりと。○**小縣へも降灰**　上田地方にても一昨十日午後二時より三時三十分に渉り燒岳の降灰あり西風に吹煽られし事とて殆んど小縣全部に及べるが六月十三日の降灰に比すれば其分量少なく新聞紙一枚に約一瓦桑葉其他農作物には差したる被害なきものゝ如し。○**筑北の降灰狀況**　十日十一時二十分頃より怪雲西空に漲ると見えしが軈て四十分頃西南方より灰を降らし始めたり目下の處被害の摸樣は分明せざれども本城坂北兩村は特に多量の降灰を見たり日向村より望見すれ

ば宛然夕立の如く立峠連峰は全く灰の爲めに望見し得ざる程なり。○屋代の降灰狀況　十日午前十時より午後四時頃に至る間埴科郡屋代町には濛塵濛々として一時暗黑を呈したるが机上に積れる塵埃より察すれば多分燒岳の降灰なるべし。○更級は桑葉白色　十日午後二時頃より三時頃迄での間更級郡鹽崎村以南に降灰あり桑葉其他稍々白色を呈したり尙同郡中津村以東にも一體に降灰ありたるが孰れも燒岳噴煙の結果なるべし。○燒嶽大爆發　十八日午前四時頃一大鳴動と共に燒岳の大爆發あり南安南部、梓、儀、明盛の各村は暗憺たる光景を呈し四時間半に亘る降灰あり一面白色となり之が爲め同地方養蠶家は皆蠶兒の飼育に窮しつゝあり（十八日豐科電話）○燒嶽噴火降灰　十八日朝燒岳噴煙し安曇郡及び松本市にも降灰ありたり安曇地方は度々の降灰の爲め秋蠶飼育家は困難し居れり（十八日午後松本電話）○降灰目に入り往來困難　十八日午前六時半頃より松本市に降灰あり一時は降灰眼中に入り往來困難なる程なりしが九時半頃に至り小止みとなりし（十八日午後松本電話）○燒嶽噴煙の影響　松本地方の夏蠶は昨年は收繭三萬五六千石に達せしが本年は燒岳降灰の爲め桑葉を害し從つて收繭小く少量にして品質劣りしを昨年に比すれば約三割の減收なりと云ふ（十八日午後松本電話）○燒嶽爆發の影響　十八日朝四時爆發したる燒岳の降灰に關し調査として安筑地方へ出張したる齋藤本縣技手の談によれば爆發當時の降灰は約十二三丁の幅員を以て一直線に東へ東へと進行し先づ上高地溫泉より小倉の大官林を中心として南安溫村の字長尾野澤の兩區梓村の中堵、小室、下角陰、明盛村の一

◎雜報　赤石登山は危險

日市場、七日市場、儀村の氷室、北大妻、高家村の眞々部より東筑に移り波多、和田、島内、島立、本鄉の各村、松本市等直徑十里位の處迄及び一方尺一夕目弱東筑方面は五分位の降灰ありたるも同日夕激しき降雨ありたる故桑葉には殆んど被害無き程度に洗ひ落され同技手出張の際は僅に痕跡を止めたる程なりしと又降灰の含有物試驗の爲松本夏秋蠶講習所及び小縣蠶業學校等へ送付せりと云ふ。○燒嶽噴灰と蠶兒　燒嶽噴煙の爲めの降灰が桑葉に附着し養蠶家が心配したる趣き及び其の降灰が蠶兒に多少の惡影響ある由は屢々報ぜしが農事試驗場松本分場にては目下之れが試驗中にあり稚蠶一齡の三日目より態々降灰を桑葉に撒布附着せしめて與へたるに眠起に於て脫皮の遲れたるあり東筑摩郡塚田技手の語る處に依れば兎角食桑不足にて結繭は小形となり又た熟蠶となりて食桑するが如き奇現象もあり上簇間際に多少の斃蠶無きを保し難しとなり松本夏秋蠶部にても一部に試驗せしに斃蠶を生じたりと云ふ又た營業者の談に依れば或は蠶兒遲れて不揃ひと成りしのみとも云ひ中には斃蠶を出したりと云ふ者あり何れにしても壯蠶期に少し位ゐ給桑するは差支え無しとするも稚蠶より降灰附着の桑を與ふれば面白からぬ結果を見るは疑ひ無きもの>如し左れば一號口の秋蠶種原蠶は降灰前の上簇なるを以て安心なれども二號口三號口に對しては懸念する向きあり爲めに蠶種家は原蠶飼育に多大の注意を拂ひ何れも桑葉洗滌に苦心しつゝありと云ふ。

## 赤石登山は危險

▲高遠生徒も、飯田中學生徒も中途にて引返す　上伊那郡高遠小學校訓導藤澤正三郎氏外五名の一行

◎雜報　武石嶺に雪降る。諸高山の晩雪と融雪。日本アルプス研究。諸高山の初雪　一九六

は八月十四日赤石山に冒險的登山を企て山麓なる下伊那郡大鹿村字釜澤に宿泊し翌十五日釜澤湯場より登山せんとしたるにこゝは名にし負ふ深山幽谷のことゝて陰晴常に定まらず其夜より急に暴風雨と化し加ふるに谷川の水激増せる爲め空しく下山し天候の回復を待ち居たりしが如何せん水は容易に減退すべくもあらず且つ三十有餘個所も谷川を渡渉するは極めて困難なることなれば止むなく再擧を期して引き返したるが土民の言によればこの山に登山を企て成功したる者は稀れにて本月初旬も飯田中學校生徒三十二名登山したるが同じく中途にて暴風雨に遭ひ遂に其目的を達する能はず命からゞ〳〵にて下山し其中二名は遂に落伍するの止むなきに至り村民よりの救助隊によりて其夜の十一時頃やうやく大河原まで到着したりとなり本山に登らむとするものは豫め十分なる用意をなし天候の擾擾と谷水の減退せる時期とを待つて登山せざる可からざるを以て少なくとも十數日を費して登山する覺悟をなさざれば普通富士山や御嶽に登るが如き考へを以てすれば到底其目的を遂行する能はずと云へり。

**武石嶺に雪降る**　十四日の雨は午後四時頃に至り雪と變り寒氣甚しく前日の五十八九度は俄に四十五度に下降し十五日朝一面の銀世界と變じ木々には時ならぬむつの花を見るに至りたり同嶺の風穴に從事するものは別天地の感をなせり、本嶺の全く融雪せしは五月廿四日なり。

**諸高山の晩雪と融雪**　○淺間山　五月十八日午後一時淺間山鳴動噴煙す、折柄曇天煙頭の仙明瞭に之を認むる事を得ざりしも同三時頃に至り雲霧全く晴れたる時は白妙の肩衣を纏ひ平常に復せる灰白色の噴煙を南方に靡かせ側面を夕陽に向け頗ぶる美觀を呈し居たり、融解速き晩雪日暮の比には殆んど一點の白斑だも止めざりき（望點西方）因に記す昨四十三年に於ける同山の晩雪は五月二十九日にして夫れより早き事十一日融雪は十二日早かりし。○四阿山　別項武石峠に降雪ありし時と同時に四阿山にも降雪ありし如し、五月十五日朝同山白皚々たり本山の融雪は六月五日にして淺間山より晩るゝ事十八日武石峠よりも猶十二日晩し（望點四南方）○烏帽子、三尾根、籠ノ塔　五月一日淺間、四阿、千曲連山大降雪あり、中につき烏帽子、三尾根、籠の塔等の諸山は今回の降雪は同日中に融解せしものゝ如し、而して烏帽子の淺雪は五月五日に三尾根籠ノ塔は五月十日全く融雪す。（望點西方）

**日本アルプス研究**　松本市東筑摩郡聯合教育會にては來る明治五十年の大博覽會までに日本アルプス山脈全部を各方面より研究して出品せんものと過般來委員を擧げて其の實行方法に付き講究中なるが之れが研究調査費は如何に縮少主義に見積るも約五千圓を要するを以て其の出所に苦しむ次第なるが場所に依りては南北安曇の兩教育會にも交渉し尚ほ補助支給の途も講じてなりと是非遂行せんと目下豫算編成中なりと云ふ。

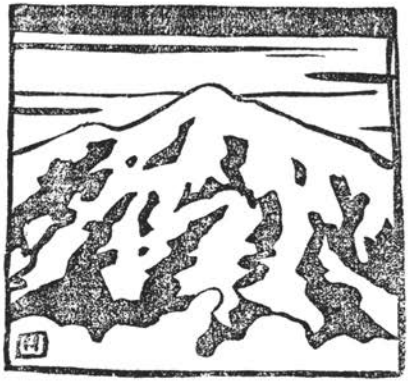
**諸高山の初雪**　○富士山初雪　富士北麓御殿場地方は十月四日朝來寒氣激しく氣溫五十五度に下降し終日雨天なりしが五日早朝天候回復し富士八合目附近迄降雪ありこれ本年の初雪なり。○月山の初雪（山形）十月六日山形地方は近來稀なる寒氣にて氣溫四十七度六六に低下し月山に初雪降る。○初

**雪廿九日早し**　（岩代福島）十月五日夜寒氣甚だしく最低温度五十度に下りたるが六日朝に至り吾妻山に白雪皚々たるを見る是本年の初雪なるが昨年に比し二十九日早き初雪なり尚山麓水穂村に六日朝降雹あり。○**岩手山初雪**（盛岡）數日來冷氣頓に加はり岩手山頂七合目まで降雪あり。○**初雪**（盛岡）十月五日夜岩手山に初雪降る昨年より二日遲し氣温は非常に低下せり。

**御岳及淺間山頂の兩局**　○淺間は噴火の影響を被れり　七月二十五日開始の御嶽山郵便局は愈よ來る九月二十日限閉鎖の筈なるが郵便物取扱は前年に比し頗る增加し七月分通常引受二千六百九十六個八月分七千六百十六個に達したり又淺間山郵便局は本月三十日限りの筈なるが本年は大噴火のありし爲めにや取扱數至つて夥く七月の通常引受三百七十三個八月三百五十六個なりと。







# 會報

## 名譽會員ウオルタア、ウエストン氏來る

本會名譽會員にして、日本アルプスを、率先して世界に紹介せられたる、日本山岳の恩人、ウオルタア、ウエストン氏より、本會の一幹事に宛てたる私信に依れば、同氏は再び日本の敎會を牧することゝなり、三ヶ年の任期を以て、横濱に赴任せらるべく、十二月二十五日のクリスマスまでには、大概到着の豫定なりとありたり。

## 名譽會員ウオルタア、ウエストン氏講演會豫告

本會名譽會員、ウオルタア、ウエストン氏の來朝は、吾人の等しく喜悦を以て迎ふる所にして、吾人は同氏の來着と共に、ウエストン氏講演會を開き、最新の山岳談を聽んとす、詳細なる事項は、ウエストン氏に交渉の上、夫々會員諸君に御通報申すべく、吾人は茲にウオルタア、ウエストン氏講演會開會の豫告を發する事を喜ぶ者なり。

尙ほ此會には入場券御持參なき方々は、入場を謝絶すべく、會員諸君には、案內狀と同封郵送すべし本誌の讀者諸君にして來會御希望の諸君は、豫め返信料封入の上、事務所へ要求あらば、確定次第御郵送致すべし。但し豫定人員に超過せる場合には、謝絶する事あるべし。（但し明年一月中旬開會したき希望なり）。

## 來年開會のオリムピア競技會よりの招待

九月五日付を以て、瑞典オリムピア委員會より、一、九一二年（明治四十五年）ストツクホルムに開かるべき第五回オリムピア競技會に就き、我が日本山岳會に、書信に添えて英文規則書一通を送付し來れり。右の書狀に依れば、瑞典オリムピア會の委員は、登山及び狩獵等に就き、一、九〇八年（四十一年）より本年に至るまで四年間に於て、爲されたる狩獵及び登山の最も美事なる成績を遂げたるものに、オリムピア金牌を贈與すべきに依り、候補者の申込みは、遲くも來年三月一日までに、委員會の手許に到着するやう、取計らはれたしとあり、規則書を一覽するに、該競技會は、世界的のものにして、番組の中には、競走、競馬、フートボール、ローンテニス、競漕、競泳、角力、及び其他の各部門に分れ、各國の重なる山岳會は、登山者の候補者を選定して、受賞方を申し入るゝ權利を與へらるゝと同時に、この候補者の功績の詳細を具申すべく、審判は、同委員會に於て選定したる、特別審判官二人に依りて行はれ、その報告書は、晩くも來年六月一日迄に、委員會に提出さるゝ筈なりと云へり。

◎會報　來年開會のオリムピア競技會よりの招待　大下藤次郎氏逝く

## 大下藤次郎氏逝く

本會々員大下藤次郎氏は、十月十日、午後四時長逝せられたり、氏は日本に於ける水彩畫の先達にして、斯道に貢獻したる功績の大なることは、等しく世の認むる所なり、氏は溯沼殊に山溯を愛せられ、止水を描くことは、最もその長技とせら

れたるところなりき、作品の數量亦多かりしが、最後に世に公にせられたるは、今秋の文部省美術展覽會に入選したる「やなぎ」なり、著書亦多く、美術家としては第一なるべし。本會々員としては、盡くされたるところ頗る多く、本誌第三卷の表紙は、氏の揮毫に成る、又志賀氏の四松庵に開會されたる山岳會有志晩餐會には、氏は實に幹事の一人にして、令夫人と共に、幹旋頗る力められたりき、本會の大會には、毎會殆んど氏の水彩畫に依りて、光彩を添えられざること無く、畫題は甲信の山岳畫最も多かりき、享年四十二、十二日雜司ヶ谷墓地に葬る、本會よりは幹事、高野鷹藏、小島久太二人、及び會員諸氏も、少なからず會葬せられたり。

別紙は氏が二年前の寫眞にして、繪ハガキは氏の肉筆なり。

新聞紙の傳ふるところに依れば、氏の生涯は略ぼ左の如し。

氏は東京の人にして故中丸精十郎、原田直次郎の兩氏に就きて水彩畫を專攻し現に太平洋畫會、日本水彩畫會に理事たりし傍ら雜誌みづゑに主幹として其の才筆を揮ひ常に眞く後進の指導に留意せり四十年河合新藏、丸山晩霞氏等と創設せる日本水彩畫會の如きは現に生徒六十五名、會友百六十四名を有し漸次隆盛に向ひつゝあり。

氏が初めて畫門に入りしは既に二十二歳の時にて本郷湯香町にて下宿生活を營みつゝ赤門前の原田氏の許に通ひつゝありしが原田氏沒後は獨り野外の景色を寫生しつゝ筆力を鍊り其後金剛艦が濠洲に航するに當つて入方奔走の結果漸く便乘するを得約五ヶ月にして歸朝し三十五年には三宅氏と共に米英佛に遊び三十六年印度を經て歸朝せり畫家として氏の事業を始めたるは此の再度の洋行後なりき。

一面に於て氏は非常に文學を好み常に文學書を精讀し又た旅行等の際には自ら紀行文を草しては樂みとせり、然し酒と煙草とは些しも嗜まず頗る眞面目にて畫家には珍らしき肌合の人なりき、筆は非常に早く小さき筆にて細く描くを特色としたる樣なり、遺族は夫人春子との間に長男正男(十二)あるのみ。

## 日本山岳會山岳寫眞展覽會

明春、本會大會と同時に、山岳寫眞展覽會を開くべし、登山家のカメラを携帶するの士多し、然ども未だ此れを一堂に集めて、趣味の普及と技術の向上を計りたるなし、本會茲に見る所あり、明春第一回を開かんとす、本會の眞意は、山岳寫眞の



故大下藤次郎氏

優劣を競ふものに非らず、只山岳寫眞趣味の普及と、山岳寫眞家の參考に供せんとするものなり、去れば本會は何等競技的條件、又何等の擬賞等を設けず、山を愛する人、山岳寫眞を樂しむ人、幸にして、本會の微意を賛し、多數の出品を敢てせられん事を祈る。

日本山岳會山岳寫眞展覽會規定

一本會は日本山岳會主催となり、日本山岳會第五回大會と同期に開催す。

一本會は何等競技的意味を含まず、從て何等の擬賞等なし。

一本會は何人と雖も、日本山岳會の承認を得て出品するを得べし。

一本會に出品し得べき寫眞は、山岳、及び山岳に關する一切、例ば、森林、溪流、瀑布、湖沼、天象、登山の狀態、動物、植物、岩石、地質、其他山岳に關する建築物、人物等、又撮影地の內外、時の如何を問ず。

一印畫の大きさ、印畫紙の種類等は隨意とす。

一印畫は臺紙に糊付し、裏面に次の事項を記入すべし。

表題、撮影地、撮影者、出品者

(其他天候、月日、等參考となるべき條件記入されば最も可なり)

一印畫は額緣の有無を問ず。

一出品物は、本會にて複製又は製版の上「山岳」に挿入する事あるべし。

一山岳に關する寫眞、繪畫の印刷物は、參考品として出品するを得。

一陳列品は本會に於て監理すべしと雖も、天變地異、其他不可抗力に由りて生じたる損害に對しては、本會其責に任ぜず。

一出品希望者は、願名、印畫の大さ、枚數、額緣の有無、及び出品者の住所氏名を明記し、來る明治四十五年三月末日迄に事務所へ申込べし。

一開會期日及び出品期限等は未定につき、夫々出品者に通知すべし。

(會期は、五月上旬の豫定)

◎會　報　高山深谷第三輯發行の計劃

## 高山深谷第三輯發行の計劃

本輯、第一輯、第二輯共に意外の賞賛を受けしは、吾人の心窃に喜ぶ所なり、山岳寫眞の進歩は駸々として停止する所なく、昨夏の印畫は既に、代表的作畫に非ず、本會をして多大の勞力と費用を提供して、本輯の頒布を敢てせしむるものは、實に清新なる趣味を普く同好者に頒んとするに在り、本輯十二葉の印畫は前輯に比して優ると雖も劣る

事なし、裝釘の粹、印書の美、前輯に優る事數等ならしめんとは、擔當者の抱負なり、一本を備へて、山岳ライブラリーを飾るを忘れ賜ふ勿れ。詳細は本誌廣告欄を見られたし。

## 會員諸君に御通知

○本會々費は、從來其前納と云ふ規定に有之候間其年度に於て御前納下されたく候、御送金の場合には、振替貯金口座へ御拂込下され度、途中紛失の憂もなく、後日の取調にも萬事都合宜しく候尚ほ本年十月一日より實施され、「集金郵便」の方法は、甚だ輕便なるものにして、此方法に由る時は、會員諸君は、居ながらにして會費を拂ひ込むを得べく候、此方法は、特に委托者の請求に由り郵便局より、支拂人の居宅に就て、現金受領書引換に現金受領すべきものにて、支拂人は、少しの費用も要せず候。

本會に於ても、適宜此方法に由りて會費頂戴に上の事之れ有るやも計り難く、然る時は前以て其由御案內申上ぐべく候。

然れども手數と費用を省略し得べく候間なるべく、振替貯金口座へ御拂込下されたく候從來共本會よりは別段集金人等一切差向け申さず候尚ほ金錢の領收に就ては一々受領書差上げ申すべく候間、若し不着の節は御請求相願上候。

○會員諸君にして、御轉居等の場合には、成る可く速に御通知下されたく、御移轉の御通知なき爲め、雜誌の發送、其他に非常の手數を要し、延ては會務の澁滯を來す次第にて、雜誌の如きは、轉々して、遂に配達不能を以て返戻さるゝもの毎回十部を下らず、後日に至りて雜誌不着の故を以て御照會せらるゝに及び初めて御轉居の事を知り、再び發送する等の事多く候、右の次第につき御轉居等の場合には至急御通知願上候。

## 會員登山報

○高野鷹藏、辻村伊助二氏は六月二十四日より上野赤城山に登り、新緑の景を撮影せられたり。

○辻村伊助氏は七月十二日より針木峠に登りて蓮華岳を尾根づた

ひに大出に下り。冷澤を溯りて鹿島鎗ヶ岳を極め、祖父岳、扇澤岳、岩小屋澤岳を經て鳴澤を下り島々より更に神河内に遊び霞ヶ岳に登られ八月十二日歸京せられたり。

○關口泰氏は石谷譲二氏と共に八月一日東京を出發し信州上高地に至り燒岳、穗高山、槍ヶ岳に登り、蒲田、船津を經て、十日越中高岡に出で、此處にて石谷氏と別れ、直江津に至り、十七日赤倉より妙高山に登り、佐渡に遊び、新潟に歸航し、岩越街道に依りて岩代喜多方に至り、檜原峠を越ゆて米澤に達し、二十六日妻山(ニシダイテン)靈の西大嶽に登山し、路を誤りたる爲め再び檜原峠を越え、三十一日檜原湖方面より磐梯山に登り、若松より田島、山口を經て會津の南境、檜枝岐を過ぎ尾瀬沼畔に出で九月三日同地より鬚ヶ岳を窮め、戸倉、東小川等を過ぎて赤城山に登り、十五日間、山上に滯在し、廿日歸京せられたり。

○岩村圓氏は七月下旬、白馬岳に登り、折からの不良なる天候の爲めに、頂上小屋にて五泊を費され、朝日岳、鑓ヶ岳を窮め、山稜を南方に縱走して、大黑鑛山に至り、五龍岳に登山せらる。

○星忠芳、辻本滿丸二氏は七月十八日甲州釜ヶ原を出發し、日向山より駒岩、鞍掛山に登り、前後大岩を過ぎて、尾白川北澤の八丁尾根に沿ひ、烏帽子岳を窮め—星氏は此附近より鋸岳の第二最高點に登攀し(本誌本欄參照)—二十日駒ヶ岳の絕頂に達し、夫より南方に下りて仙水峠(センスイトウゲ)より野呂川上流の北澤に出で、仙丈岳に登り、再び仙水峠に戻りて、朝興(アサヨ)岳、早川尾根を縱走し、廣河原峠より廣河原に下り、廿五日白峰北岳に向ひしも、降雨の爲め中途にて引き返し、廿六日は河水甚だしく增量し且つ橋落ちたるに因り滯在、廿七日伐木の架橋にて川を渡り、再び廣河原峠を登り、赤薙の頭、ゴーロ澤頭(高嶺)、鳳凰山、地藏ヶ岳を經て南御室より青木湯に下山し、廿八日青木峠を越えて韮崎に出でられたり。

○須田正雄氏は、富山より八月十五日立山に登られ途中彌陀の原にて激烈なる暴風雨に遭遇したれど、無事目的を達せられたり。

○忽滑谷安美氏は八月廿日より信州駒ヶ岳及び御岳に登せられ廿八日歸鄉せらる。

○吉澤庄作氏は八月廿五日より越中小川溫泉に趣き、小川を溯り、横山嶺に遊び、北又、柳又方面を展望し、夫れより黑薙溫泉に至り、上流を溯られたり。

○岡野金次郎氏は八月十八日御岳頂上に達せられ、次で信州駒ヶ岳に登らる。

○大槻禎郎氏は七月下旬上高地に遊ばる。

○德永幸助氏は、越後妙高山に登られたり。

○黑木三次氏は同行數氏と白馬岳へ登り、次で中房溫泉より燕岳、大天井岳、常念岳に登り二股に下り、赤澤より槍ヶ岳に登山、上高地に出で、尙ほ八ヶ岳に登山せられたり。

○丸山晩霞氏は、洋畫研究の爲め第二回の渡歐を決行せられ、英國より八月十四日巴里を經て西瑞ベルンに着十七日シャモニーよりモンブランに登られしも、事故の爲め七合目邊り迄登りて、止められ次で、二十日ザルマットよりマッタホーンとモントロザ大氷河をスケッチせられ、同廿五日シャイデッガにて氷河を研究せられたり。

○岩村圓氏は九月十八日大雨を冒して蒲田より、上高地に入られ

◎會報　會員登山報

十九日穗高岳へ第二回登山を成功せられたり。

○田邊信太郎氏は七月廿四日大宮口より富士山に登山廿五日吉田口に下山、次で廿八日明科より中房に至り、翌日有明山に登られ、卅日類藏の案内にて燕岳に露宿途中大雨あり困憊を極め、翌三十一日雨の爲め二俣に一泊八月一日直ちに落合小舍に至り槍ヶ岳に登られ其日落合の小屋に一泊翌日上高地に出でられたり。

○橋本欽四郎氏は、戸隱久山氏方に寄寓され、戸隱山に三回黑姫飯繩に登山せられたり。

○大北聰彦氏は戸隱山に二回及び黑姫山に登らる。

○泉茂家氏は八月十四日森吉山に登山せらる。

○松田舒氏は七月上旬上高地に赴かる。

○高野鷹藏氏は北澤基幸氏と仝行七月廿二日より白馬岳より祖母溫泉に下られ、次で戸隱山に遊ぶ、尙ほ高野氏は松本に開催せられたる、信濃山岳研究會に臨まれ、「登山の準備」なる演題にて、講演せられ、八月十二日歸京せらる。

○小島烏水氏は、七月二十日信州上高地に入り、二十一日岳川を踰えて、穗高山に登り、奥穗高より穗高の山稜を縱走して、空澤の石窟に夜營し、翌二十二日、穗高山北方の障壁を槍ヶ岳まで縱走し、飛驒方面右俣谷の頭に露營し、それより笠が岳へ尾根傳ひに走らんとしたるも、雨のため果さず、右俣谷へ第二回目の下降を行ひて、蒲田に出で、溫泉に一泊、二十三日燒岳噴火孔を一見して、上高地に一泊、二十四日宮川の小屋三の池附近より、嘉門次父子の外、前人未踏の新路に沿ひて、再び穗高岳に登り、前日の登攀以外なりし三本槍狀の前穗高（御幣岳又は明神岳）を縱走し、前日の登路と合し、上宮川谷（ウエストン氏が始めて穗高山に登りしとき、取りたる路にして、今廢せり）を取りて、梓川に下り、上高地に戻り、二十五日德本峠を踰えて歸られたり。



○小島烏水氏は、八月二十七日、御殿場口より富士山に登らる。

○三枝威之介、加賀正太郎氏兩氏は七月中旬信州大町より針木峠に登り針木岳頂を極め平の小舍に下り御山澤より一ノ越を經て立山室堂に至り雄山別山に登り續いて劔ヶ岳を極めんとせられしも天候の不良は素志を達せしめず三枝氏は室堂より富山を經て歸京せらる加賀氏は室堂より立山溫泉に至り更に南進を續けて佐良峠に上り五色ヶ原を過ぎて北方より藥師連嶺を縱斷し上ノ岳黑部五郎岳蓮華岳双六岳を乘越して双六平に至られしが連日の荒天始めて恢復するに逢ひ更に戻りて鷲羽黑岳赤牛の諸峯を一擧に極められ順路鎌尾根より槍ヶ岳を經て八月初旬信州上河内に下られたり、

○服部鍈太郎、鞍田金之助兩氏は八月中旬より信州大町より籠川を溯り黃耆澤を上りて梓小屋乘越に達し祖父ヶ岳を經て鹿島槍ヶ岳を極められ戻りて遙かに南を指して進まれしも風雨の爲め種池平に阻止せらるゝこと三日遂に前路を大町に歸られたり。

○榎谷徹藏氏は國境脊梁縱斷の目的を以て八月三日大町より籠川峽谷に入り、豪雨の爲め白澤附近に於て滯在全二日半。六日扇澤本谷を溯りて祖父岳の種池に出で、附近の山梁に露宿。七日祖父岳の南北兩峯、布引ノ頭、鹿島槍岳を窮めて、再び前夜の地點に露宿。八日岩小屋澤岳に登りて新越乘越に露宿。九日は風雨の爲め蟄居。十日鳴澤岳、赤澤岳、大スバリ岳、小スバリ岳を亘りてマ

ヤクボのベースに露宿。十一日針木岳、蓮華岳に登り、北葛乗越より針木本谷の源に下りて露宿。十二日再び北葛乗越に逆行し、七倉岳、不動堀澤岳、東澤の頭の背梁を傳ひて、舟窪乗越に露宿。十三日舟窪岳、不動岳、南澤岳を越して、その南方肩部に露宿。十四日烏帽子岳を南方より迂廻して登り、三ツ岳、野口五郎岳を亘りて、その南方肩部の窪地に露宿。十五日再び野口五郎岳の絶嶺に登り、眞砂岳、火打岳の嶺邊を掠め、赤岳の肩よりその西北方なる山梁に出でゝ露宿。十六日は暴風雨の爲めに蟄居。十七日黒岳を往還し、赤岳、劒物澤岳、鷲羽岳、蓮華岳（三叉岳）双六岳、樅澤岳。前樅澤岳を踏破して、硫黄澤源頭に露宿。十八日左俣岳、槍岳（第二回）を越えて梓川を上高地に下らる。此行、北は鹿島槍岳より南は槍岳に至る迄、國境脊梁に沿ひて、殆ど完全なる縦断を遂げ、三十餘座の峯頭を窮められたるものにして、水彩畫、風觀寫生畫、スケッチ等繪畫に關するもの七十三個の外、尚若干獲物ありたる由。

## ○各地の登山通信

△赤城山（山内淳一氏）……小生も幸い健在にて今夏は去る七月廿三日より赤城湖畔の人となり、廿五日間をしんみりと山の味を味ひ申候、那須暗大兄とも湖畔にて御面會致し、毎日の様那須さんの水泳を拜見するの光榮を有し申候、八月十七日赤城山を下り庚申山に登り、去る八月廿一日歸京致し候……。

△上松より（岩村圓氏）……拜啓白馬より祖母谷下りに御逢過の御困難は北澤氏より承知仕り候其後の尸曜も天候如何かと御案じ申上候小生も大黒鑛山にて北澤氏と分袂の日四本願寺新法主と五龍の頂上に逢しいざ鹿島槍への縦走に移らんとして人夫一同は眼前に横はる鋸齒の如き峯續きを見て前進を肯ぜず案内者嘉吉も辭を盡し小生等も或は訓し或は叱すれ共命ありての物種と許り前進をするよりは寧ろ荷物を棄てゝ歸らんとのみ申張り雨中一時間の訣得も其効なく遂に到底此等烏合の人夫を率て前進は不可能とあきらめ憾み呑んで大黒鑛山に引返し翌日八方を經て四ツ谷に引返し申候新法主は憤然として即夜車を賃して明科驛二時の滊車に投じ歸西致され候は氣の毒千萬に御座候。

△別子より（日高信六郎氏）……拜啓炎暑の候益々御清榮奉賀候近來天候險惡にて會員諸氏の活動に一方ならぬ差支有之可しと存じ候。扨小生儀數日前より當地方に參り本日新居濱より住友の滊車にて別子登山いたし。かのアルプの登山鐵道にも似て絶壁の上を少さき滊車に蛇行し、トンネル中を手押車に乘り等して夕刻當別子山村に着仕候當地は海面上數千尺の高所にて雲霧來往し冬シャツを重ねても寒き程に候。明日は銅山を見物し西條方面より石槌山に登山する筈に候結晶片岩の地貌彼の寫眞にて見たるアルプスの其れにも比す可く候。委細後便。

△新居濱より（仝上）……拜啓去る十一日別子見物の後西條に下り山又山の奥深く分けて海拔三千六百尺の西ノ川鑛山に參り一泊昨十二日同所出發石槌山頂を極め申候、本日西ノ川より當地へ參り更に豐後に渡り祖母岳、阿蘇山を訪ふ心組に候。

△嫗嶽より（仝上）……小生四國旅行を終へ去る十七日別府に渡り數日滞在の上九重山麓海拔三五〇〇尺餘の寒地獄と申す冷泉に浴

し、滞留二日今廿五日早朝より九重登山を企てしも天候惡遂に最高點を極めず下山竹田町を經て本日午後九時祖母山下の麓村に參り明日祖母山に登山明後阿蘇に登る筈にて候。

△上熊本より(仝上)……拜啓昨廿六日早朝神原を登り祖母登山仕り候日向の五ヶ所へ下りそれより高森(阿蘇外輪山を越えて)に宿し本日高森より阿蘇登山し最高點高岳を極めて熊本驛へ下り數日の登山行を一まづ終り候、これより汽車にて歸宅仕る可く候。

以上

△木澤温泉より(小高秀一氏)……拜啓先般種々御配慮を蒙り有難御禮申上候辻本氏より御返信にて委細承り鳳凰山下眺望至難の趣きて一昨日當温泉へ參り候昨日朝來の好天氣に候に付赤岳登山致し候處他の山岳にも當八ヶ岳にも一點の雲も之無く丁度上野パノラマの如くにて非常の壯快を覺へ申し候本澤より駒草採集の人も此樣の天氣は年二三回しかなき由申居り候右富士山より富士川七面山方面藥師嶽地藏鳳凰山(ことに地藏嶽はつきり見へ候)後に地藏のかたと藥師嶽に赤石山脈の惡澤らしきも見へ候も果して赤石山脈なるや審かならず小生の觀測に候)白峯三山殊に北岳實に南アルプスの雄姿に御座候下の甲斐駒仙丈嶽鋸嶽、木曾大嶽實ケン岳殊に高く見へ候御嶽の雄大なる姿を仰ぎ乘鞍岳霞澤山霞澤と穗高の間より噴煙見候も小生望遠鏡にてはつきりと燒岳らしきもの見止め申さず候穗高連峯ことに高く鎗ヶ岳こと天にそびへ下て常念は山容によりて明かに見止申し候ヤリより先の連峯小生よくしらず候も越中立山に至りて針木岳鹿島鎗の杓子岳遙にケンがミネらしきものを見上申し候も赤岳より見ゆる者に候や否不明白馬岳飯綱山戸隱妙高ことに高く近く立科を見て淺間附近に至り赤城山はるかに天空にそびへ候邊て金峰連脈ことに五丈石は人の峯にたちたるが如くまことに奇かしく御座候白馬嶽の高くして大なる山容秩父連脈を過て再び富士に戻る有樣にて實に爽快極りなく候當地三四日滞在致し居り描畫三四葉認め來年大會には笑覽に供す考へに御座候植物採集致し候も別に珍らしきものとては之無く暖き爲め開花後にて大に失望致し候が先づは一寸御通知迄。

△上京地より(槇谷徹藏氏)……拜啓大兄之白馬御登山中に於ける御困難之模樣は、岩村氏より、大町にて聞き及び申候、小生は本月三日、同地を發し、鹿島槍より專ら國境背梁のみを辿り縱くして、槍に及び申候十六日間の山岳生活中、雨に遇ひしは三日。幸にして、可なりの好成績を得申候、唯殘り惜しきは赤牛岳を、雨の爲めに斷念したる事に候、いづれとも、旅行記の一部や、スケッチの斷片などを「山岳」へ御送り申上げ度き心意に有之候。草々

## 第八回有志晩餐會記事

九月二十四日午後三時から玉川の對岸二子村の龜屋に有志晩餐會が催された。

初秋の川風に日に燒けた顏を吹かせて二子の渡しに舟を待つた時、秋の香の何となく身に泌むと覺えたが、空も長閑に澄んで眼のさめるやうな雲のいくつが輕く泛ぶ水上に、武甲、雲取、大岳、

三頭と、秩父の連嶺を明らかに數へ得たとき狹い小さな都會の中から放たれたと云ふ心持を充分に味ふ事が出來た。

會員が集つた時、高野君の好意によつて一同、門前で紀念の寫眞を撮つてそれからいよ〳〵晩餐會が開かれた、山の話、山の書、山の寫眞に時の移つたのは云ふまでも無い。日は次第に暮れて灯は高樓にともされた、そして集つた人々は山の思ひ出にほゝえんだ。

夜八時散會したが興は未だ盡きない。渡し守を呼んで川舟に乘つたときも、灯を對岸に遠く眺めて玉川電車に搖られた間も、古驛が盡きて急がしさうな都會が近づいても、一行の山嶽談はとても終らうとはしなかつた。

出席者は左の二十三名である。

高野鷹藏　中村清太郎　南日重治
北澤基幸　大槻禎郎　小島久太
山內淳一　幸尾隆太郎　黑木三次
冠松次郎　岡埜德之助　酒井忠一
住廣造　濱名增雄　松田舒
高島北海　大橋良一　山岡超舟
岡野金次郎　那須皓　（以上出席順）
今村巳之助　近藤茂吉　辻村伊助
（以上當番幹事）

次回の當番幹事には冠松次郎、服部鎭太郎、加山龍之助の三氏が指命された。（あづさ）

## 大阪の有志晩餐會

創立以來既に六閱年。京濱方面に於ける會合の漸次隆盛を致すに反し、阪地の狀況依然寥々たるを慨し、岩村圓、榎谷徹藏の兩氏發起となりて十月七日午後六時より東區道修町鳥菊に第一回有志晩餐會を開催せり。二十八通の案內狀に對して、出席せられし會員は、發起人以外左の六名なりき。

（イロハ順）

奥村藤吉氏　山口竹次郎氏　藤野磯次郎氏
小林清藏氏　青木忠次郎氏　芝川又之助氏

壯快なる山岳談は間斷なく交換せられ、秋の夜の更くるにつれて興愈深し。殊に岩村氏が携帶せ

られたる數十枚の山嶽寫眞は、一入會員一同の心を動かしつ。十一時を過ぐるも興趣盡きず。斯くて解散したるは正に十一時二十分なりき。

## 御斷はり

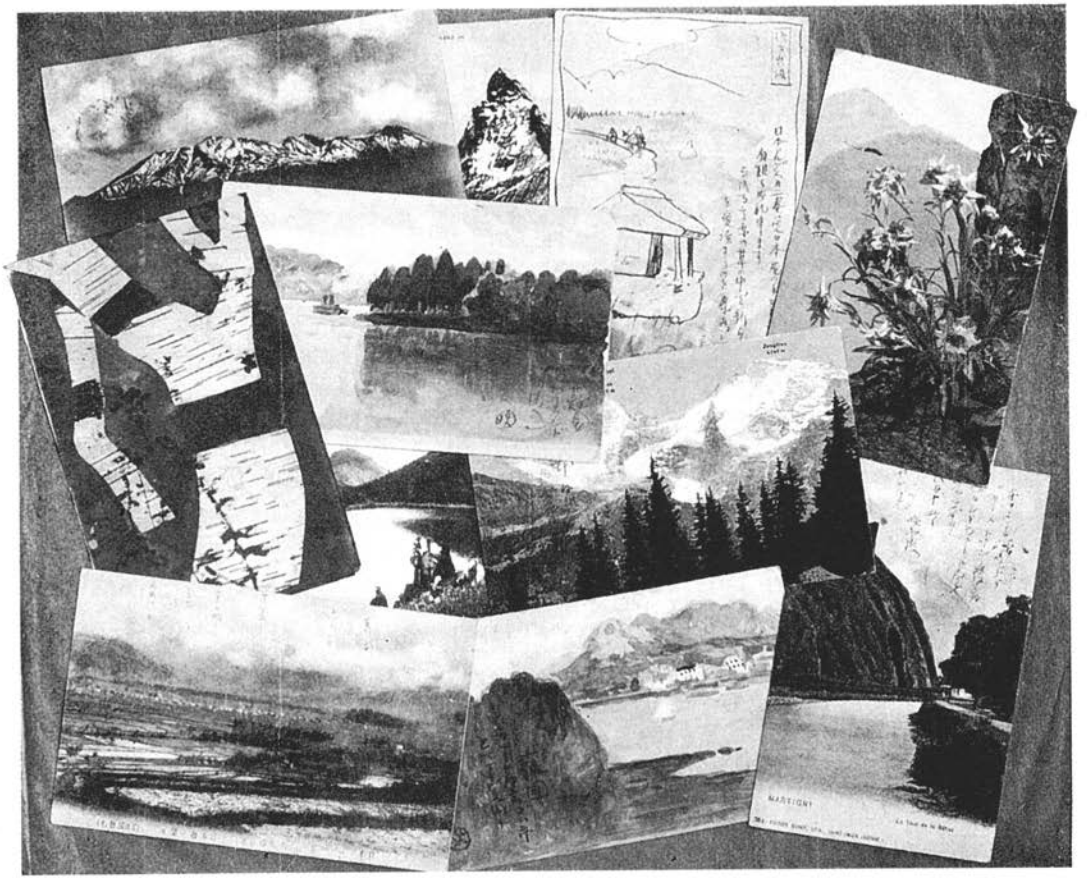
本號には、長文の原稿多かりしため、當然本號に掲載すべくして、次號に廻はすことを、餘儀なくしたるもの、數篇あり、寄稿家諸君、之を諒せられよ。

次號よりは、卷を改むべく、例に依り、面目を新たにして、愛讀者諸君に見ゆべし。

## 信濃山岳研究會の記

初夏の頃、松本の河野氏から、今年の八月松本に「信濃山嶽研究會」を開いて、大に信州人士の爲め、日本アルプスの高山秀嶺を紹介する筈である、且つ其爲めに矢澤氏が上京すべしと云ふ手紙を受取つた、自分は、此手紙を受取つて、第一番に嬉しかつた事は、會場が松本で、丁度壁に掛けられた、スケッチを指す如く、日本アルプスの大山脈を指して、彼處は常念である、あれは、乘鞍であると、語り得る事であつた、實を云ふと此會の開かるゝ事は、今少し早くあつても欲しかつたのである、所謂日本アルプスなる飛騨山脈の大部分は、信州に面接して居るのである、自分は、自分等の住居の位置よりしても、又交通の點よりしても此等大山脈の信州側が常に表の樣な氣がして、ならぬのである、つまり、信州方面よりするのが順路である樣な氣がするのである、此順路の第一關門である、信州に、山嶽を愛好する、研究する一團體さへなかつた事は、吾々同人の等しく、怪まざるを得ない次第であつた、然して漸くにして、吾人の希望の曙光は顯れたのである、然かも、自分の好きな松本で。

自分と小島君とは本會を代表して特に此會に列すべき使命を持つて居つたので、旅行の序目の最後の頁は、松本に滯在する事であつた、八月七日午夏の空は、青く沈んだ色をして居る、會場なる



各地の登山報

松本女子師範學校に腕車を飛した時、明日から開かるべき陳列場の整理に、忙しく見受けた、中々陳列品も集つてる樣であつた。

越て八日より三日間、幸にして、雨も降らず、來會者も多く盛會であつた事は、獨り幹部諸君のみならず、吾々も愉快な次第である、小島君は、職務上來松見合となつた事は、殘念であつた、辻村伊助君が二日目から來られた、終に矢澤校長、河野氏其他好意を寄せられた諸君に深謝する次第である。（蝶郎）

第一日　八月八日午前八時開場九時二十五分開會、先づ矢澤師範學校長司會者となりて、開會の主旨を述べる、尙ほ明年を期して、白馬岳、槍ヶ岳、常念岳等に登山隊を組織し實際的研究をなすべしとて。講演者の第一席、細木工學博士（松之助）を紹介さる、同博士の講演「天地の經營に於ける火山の効用」なる題目のもとに火山の破壞作用よりして人生に及ぼす、影響に就て、極めて懇切に、平易に講述せられ、次で、陸地測量部後藤技師（饒男）は、「地形圖に現れたる、山岳」なる演題にて、二日間に渡りて、地形圖の意義、地形圖の讀み方（觀方）、地形圖は如何にして作らるゝか、三角測量、水準測量等地形圖、製作上萬般の技術に渡つて通俗的に成るべく平易に講演されたり、元來此測量なる事は全く、專門的で、數理的なるにも係らず、此れを、通俗的に、理論を云ふ事なしに、聽者の耳底に達せしめんとせられし演者の苦心は、等しく座にある、吾人をして、同情と感謝の念に耐へざらしめたり、蓋し演者の努力は大なりと云ふべし。

演者は、地球の大きさを計り、密度を知る事は、地圖一枚の根本事業なりと、說き起し、經緯度の事より、基本水準面の事、基線測量の事、水準點の事等に就て講述せられて休會。

午後一時再び開會、矢澤米三郎氏「高山植物の分布上日本アルプスの位置」なる講演あり、先づ高山植物の意義を述べ、（一）莖の短小なる事、（二）堵地性ある事、（三）落葉のもの少く常綠性多く、草本と雖も一年生よりは、二年性或は多年生多く、（四）葉肉は肥厚多漿にして形小なる事、卽ち葉が肥漿なるが爲めに同化作用は活潑なる事、同化作用の活潑なる事は、又高山植物の特徵にして又發生期の短少なる爲めなり、（五）葉の面に於ける氣孔の位置は、低地性のものなれば99％迄は葉の片面主として裏面にあれど、高山植物に於ては、84—86％迄は必ず兩面にあり、斯く氣孔の多き事は、空氣の稀薄なる爲め、酸化作用、不活潑又、炭酸瓦斯の分量少きより、成る可く多量の空氣に接すべき必要より生じたるものなり、今二八〇〇米突の地と五八〇米突の地とを比較する時は、一立方米突中に含む炭酸瓦斯の量〇、一一五瓦の差違あり、然るに氣孔の多きは一方蒸散作用を過度ならしめ、枯死を招くが如き觀あれど、高山に於ては、常に雲霧多く、過度の蒸散作用を防ぐの必要なきなり、（六）根は長大にして草質少く肉質又は木質多し、草質なれば、冬芽をなして殘る（ムシトリスミレ）（七）花は大にして美なり、開花期瞬時的なり、高山は低地に比して、受精の媒

◎會　報　信濃山岳研究の記

◎會報　信濃山岳研究の記

介をなすべき昆蟲類少く、爲めに成る可く昆蟲を誘引すべき爲め、美にして大形の花を着く、(八)果實は成熟速かにして、形大なり、肉質なれば、多く赤又は黑色なり、風散性のもの多しと、次で高山植物の分布學上の意見を述べ、長野縣下に於て、高山植物の最も豐富なる地は白馬岳、八ヶ岳の兩地にして、高山植物を研究せんとする士は、此等の地に登るべきなりと述べて、終壇さる。

第二日　五藤技師は、前日の講演に續て、分水線、合水線の意義に說き起し、地形圖の圖式、縮尺、模形圖の製法、地形圖の應用等に及して講演を終らる、次で綱木博士は前日の講演に次で、種々地球の火山作用を說明し、歐洲アルプスの地質構造に及んで壇を下る。

午後一時開會女子高等師範學校の西村學士(眞壽)は地學協會を代表して、特に來松し「我國の山岳」なる表題によりて、日本の地質に就て講演されたり、山岳を研究する者は先づ地質學の素要なかるべからずと說破し、山の意義、山の分類を述べ、丘陵、中山、高山となし、構造上よりして地殼の收縮よりなるもの、火山作用よりなるもの、風の運搬作用よりなるもの等に就て說明し、日本の山を地質的に見る時は、日本の高山と稱するもの〻多くは、古生層より成れる山多く、(赤石山系、臺灣山系)中生層の地層は中山性丘陵となるもの〻如し、中國各地に分布する丘陵其例なり、第三期層は丘陵をなす、房總、三浦半島の丘陵即ち其れなり、原成的の山岳(褶曲、斷層火山等の作用に由りて出來し山脈)にして褶曲に由りて出來し山脈は四國の四國山系、南部九州、紀州山系、赤石山系の如し、斷層に由りて出來しものは、北上山脈、阿武隈山脈とす後成的の山、即ち水の運搬作用に由りて殘留し、山脈を構成せるものは實に中國山系其代表者にして、北日本にも斷層の山多く、南日本には褶曲山脈多く、原成的の噴火山は南日本、北日本に比して少し、次で、九州、中國四國の地質構造に及ぼして、降壇さる。

長野中學校教諭志村鳥嶺氏登壇、「日本アルプス橫斷」なる講演を、氏の快辯を以て、縷々數萬言、聽者の心神をして、日本アルプスの山中にあらしめたり。

第三日　西村學士前日の續きを述べられ、本州中部より、北部、及び北海道の地質構造に就て言及し、最後に「日本アルプス」なる意義を簡明に說明してアルプスとは、高き土地、即ち、山と云ふ、普通名詞にして、歐洲の褶曲山脈なるアルプスを指示せる固有名詞に非れば、日本アルプスの名必ずしも、不可なしと說る、次で

牧量雅氏は、隱れたる山岳研究者なる標題に由りて、各方面よりの史實を提供して述べらる。

此れより先き、本會幹事小島烏水氏は職務上、差支へを生じ、急に來松見合せとなりしは甚だ遺憾なる事にて、特に來會者諸君に謝さゞるを得ざる次第なり、次で余も亦、「登山に要する準備」なる表題に由りて、約一時間述べたり、次で、河野齋藏氏は、「白馬連山の偉觀及其生物」に就て講述さる、白馬山の大雪溪の偉觀を說く事詳密にして、多少の科學的見解を、白馬山に試みられたり、尙ほ同山の生物に就て、即ち高山植物及び動物の內かもしからいてうに就て、說れたり。此れにて豫定の講演を了り、矢澤校

長の閉會の辭に由りて、無事會を了れり。

此三日間の講演及び展覽は、其時や僅かなりと雖も、信州人士に山岳なる印象を刻印したる事計り知るべからず聽講者の大部分が育英を司る人なれば、將來の山岳愛好者の爲め其成果や大なるべし。

此三日間に渡りて、山岳に關する、圖書標本、繪畫の展覽を併て公開せり。

女子師範學校の樓上第一室には、繪畫を陳列せり、主として日本畫及び書にして、洋畫の皆無なるも物珍しく、果亭、象山等の書畫のみなりき。

第二室、寫眞を羅列せり、河野齡藏氏の白馬岳より見たる劍、硫黃岳の全紙大の寫眞は、大幅にして美事なる出來なり、其他保里氏の御岳、河野氏の高山植物寫眞等見るべきもの多し、武井眞澄氏の印畫の內「朝の有明山」、「大黑鑛山」「大天井より槍岳を見る」「有明山の森林」等は、小なりと雖も、感じのよく現れたる印畫にして、山岳寫眞として上乘のものと云ふべく、少しく After treatment を加ふるに於ては、得易からざる印畫となるべし、山岳寫眞家として、將來の大作を望む、此他井上地質調査所長のスピッベルゲンの寫眞、地學協會の樺太境界測定事業の寫眞等、地方人士の爲め目新しきものなり。

第三室、高山植物數十鉢を陳列せり、惜むらくは花期既に去りて、着花せる少しと雖も、河野齡藏氏のハヒマツ、ヒメクモマグサ、シコタンサウ等は其發育の狀態、美事にして、栽培の妙技知るべきなり、特に此會の爲めに採集して植鉢せるものは、殆んど全部生氣なきは遺憾なり。

第四室、各種の標本、器械を列ぶ、矢澤氏の信濃特有植物、高山植物帖、女子師範學校生徒作の長野縣一部模型圖、河野氏の蔽石の大なる假昌標本、女子師範學校の雷鳥の印及び其食餌、全年に通して雷鳥の羽毛の變化、エゾイタチの夏毛、冬毛の標本等見るべきもの多し、同室に陸地測量部より、三等經緯儀、二等水準儀、回照器、タケオメートル、標尺等多數出陳されしは人目を引けり、尙ほ、地質調査所及び陸地測量部より、各種地圖製版順序を示せるもの出品されたるは、專門以外の人士の爲め興味多き樣なり。

第五室、圖書此部の大部分は本會出品の圖書にして、地學協會より出品の伊能忠敬自記の懷帳白井博士出品の須川長之助採集の腊藥、同乾燥用鐵板、故矢田部博士の信濃植物採集目錄等、珍品の內の珍品なり。

此他地質調査所より明治十八年農商務技師坂氏が、越中有峯より信州南安曇島々に至る間の野稿圖出品されたり、同圖によると梓川の溪谷より槍ヶ岳を越へ、鎌尾根を經て、蓮華岳より黑部北部より、藥師峠に至り有峯に出でられしものにして、明治十八年の頃、既に此地を通過されしは、其努力や大なるものありしならん、余輩此徑を通過せる事あるものには、此數枚のスケッチに無量の感興を起さゞるを得ざるなり。

## 名古屋の愛山會

名古屋の愛山會は、四十二年十月、北尾鐐之助、

## ◎會報　新入會員氏名

三輪伊六、安立玉樹、牧田清次郎、早川鉄三諸氏に依りて發起せられ、當初は會員の登山に、全力を注ぎたりしが、後に至り、自然藝術方面にも、力を致すことになり、繪畫部、圖書部、文藝部等を開き、繪畫部は昨年三月春季大會を同市に開き、八千人の入場者を得、文藝部は雜誌「印象」を發行するに至り、時に講演會をも開き、登山旅行は、既に十三回の多きに及べり、本年八月の會員は、百餘人にして、十三回旅行は、左の如くなりしといふ。

一第一回旅行　金華山縱斷　（四二、二月）
一第二回旅行　伊勢御在所嶽　（四三、六月）一泊
一第三回旅行　富士登山　（仝　八月）二泊
一第四回旅行　飛騨白川越　白山登山　（仝　仝月）十泊
一第五回旅行　燕那登山　（仝　九月）三泊
一富士山展覽會　（仝　十月）
一第六回旅行　養老山脈縱走　（四四、二月）一泊
一第七回旅行　玉野川沿岸　（仝　二月）
一第八回旅行　伊吹登山　（仝　二月）一泊
一第九回旅行　猿投登山　（仝　三月）終日
一第十回旅行　猿野温泉　（仝　五月）一泊
一第十一回旅行　八事南山寮　（仝　六月）終日
一第十二回旅行　御嶽登山　（仝　七月）四泊
一第十三回旅行　飛騨山脈　（仝　八月）七泊



## 新入會員氏名

# 寄贈書目

郎

Oesterreichisher Alpenzeitung. 832—841.

Mittelungen des Deutscher und Oesterreichisher Alpenvereins. No. 6. 7. 8. 9.

La Montague. No. 4, 5, 6, 7

Alpine Journal. No. 192.

Scotish Mountenerring Club Journal. Vol. 11, 65

Jahrbugh des Schweizer Alpenclub. 1910.

地質學雜誌　十卷二百十二號—二百十六號

歷史地理　十八卷一號—

旅行　一ノ一

水彩畫寫生紀行　大下藤次郎氏

寫生畫の研究　同　氏

校正者　初校　梅澤親光　再校　辻本滿丸

明治四十四年十一月廿三日印刷
明治四十四年十一月廿六日發行

著作權所有

定價六拾五錢

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　橫濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　橫濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

發行者　橫濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話最長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂